# 女人藝術




昭和五年三月十五日印刷納本第三卷第四號
昭和五年四月一日發行（毎月一回一日發行）

昭和五年四月一日發行（毎月一回一日發行） 女人藝術 第三巻 第四號 附録

# 世界プロレタリア傑作選集

## 思想文學の最尖端！

プロレタリヤ文學の勝利の鐘は今や全世界に鳴り渡つて居る。古き文壇の外殼を突き破つた清烈な新興の意氣と生活戰線に生産された藝術の奔騰は今や新しき全世界の讀書階級を完全に把握した。本選集の如き時代的出版の洪水の如き氾濫を讀者諸兄と共に切望する。

| 著者 | 書名 | 譯者 |
|---|---|---|
| グラトコフ | 醉ひどれの太陽 | 井田孝平譯 |
| リベヂンスキイ | 一週間 | 小宮山明敏譯 |
| セミヨノフ | 飢 | 黒田辰男譯 |
| ゴリキイ | 番人 | 藤原惟人譯 |
| ベッヘル | 銀行家が戰場を馳驅する | 辻恒彦譯 |
| マルチネ | 夜 | 佐々木孝丸譯 |
| トラア | どつこい生きてる | 黒田禮二譯 |
| ハルップ | インタナショナル | 川口浩譯 |
| ウイットフオーゲル | 誰が一番馬鹿だ | 辻恒彦譯 |
| ラッコ | 戰の人々 | 千葉龜雄譯 |
| バルビュス | クラルテ（上） | 佐々木孝丸譯 |
| バルビュス | クラルテ（下） | 佐々木孝丸譯 |

第一期刊行 十二冊

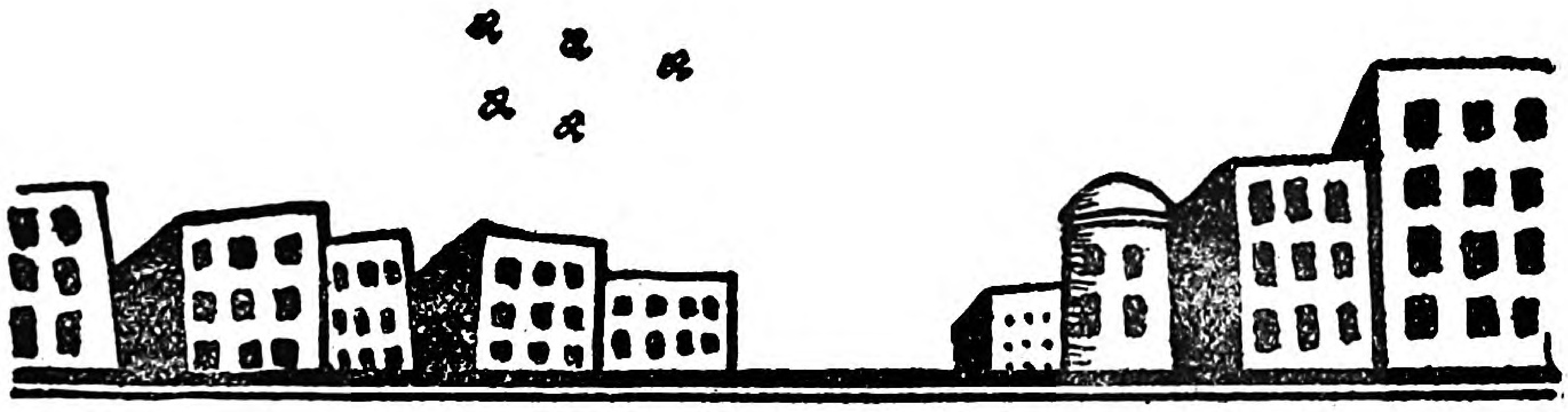
一冊三十錢

選擇自由

東京麹町 振替東京二九六三九 平凡社

# 女人藝術第三巻四月號目次

―禁轉載―



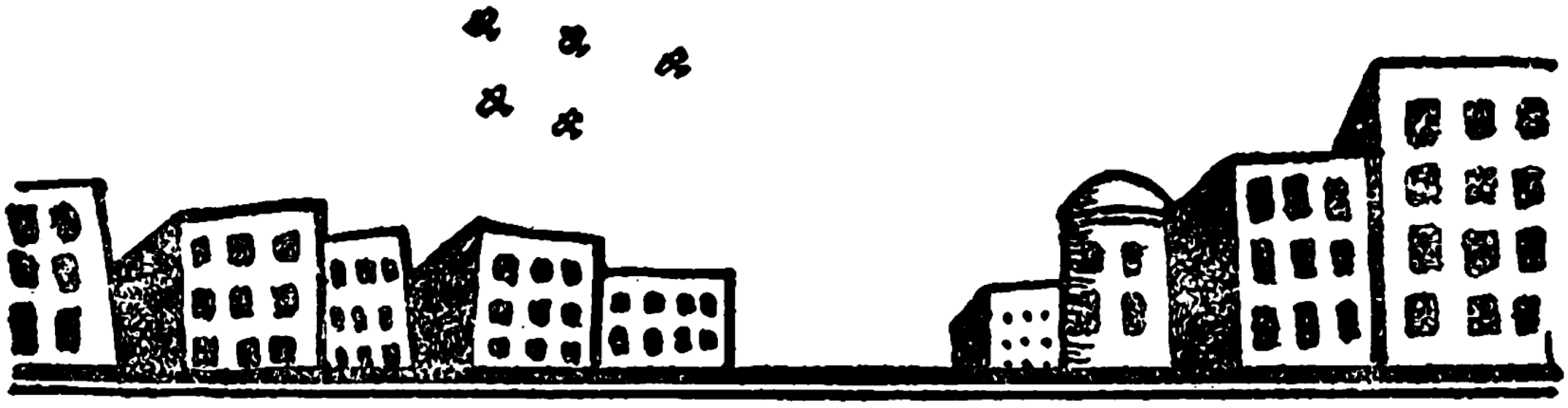
## 論文



## 小說



## 實話





## 街頭フイルム



カット　甲斐仁代・深澤紅子・熱田優子・橋本花子・西村菊子



## 女人大衆


天下一品
日本一
キッコーマン醤油
マンジョウ味淋
うまいお料理
たらふく食ふて
踊りませうぞ
日暮れまで
資本金三千萬圓・醸造高五十萬石
宮内省御用達
野田醤油株式會社
30C17



クリミ・ヤルタ地方の勞働者休息所で日向ぼつこしてゐる勞働者達——元ロシヤ皇室の美しい離宮だつた所





せち辛い就職難は可憐な少年少女の上にまで迫つて來た。少年職業紹介所に殺倒する彼等の眞劍な顏。（右）

**東洋モスリンの爭議畫報**

右　元氣な女工さん達の俄か音樂隊

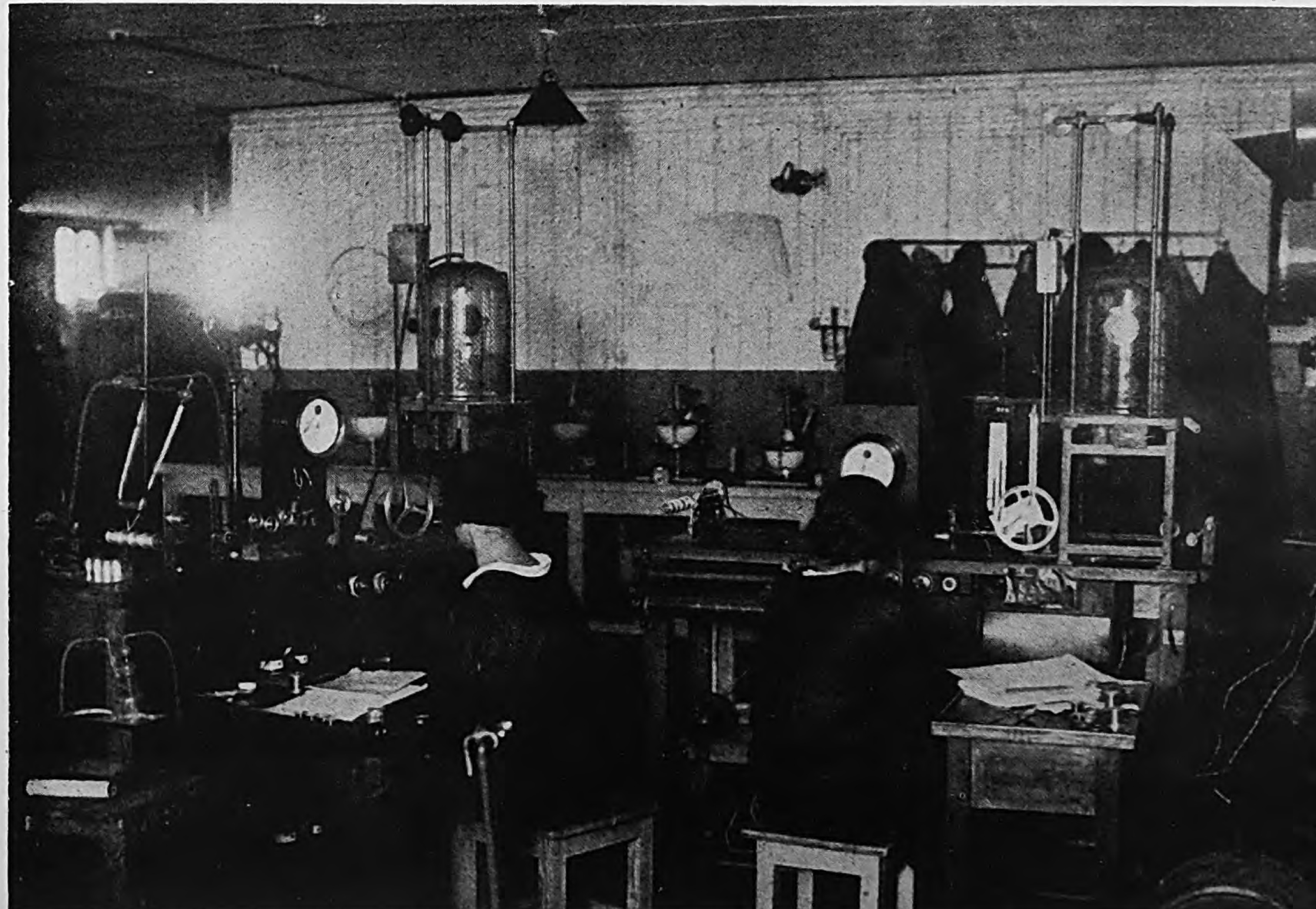
下　氣勢を上げる爭議團本部

楕圓形　堂々勢揃ひした女工さん達

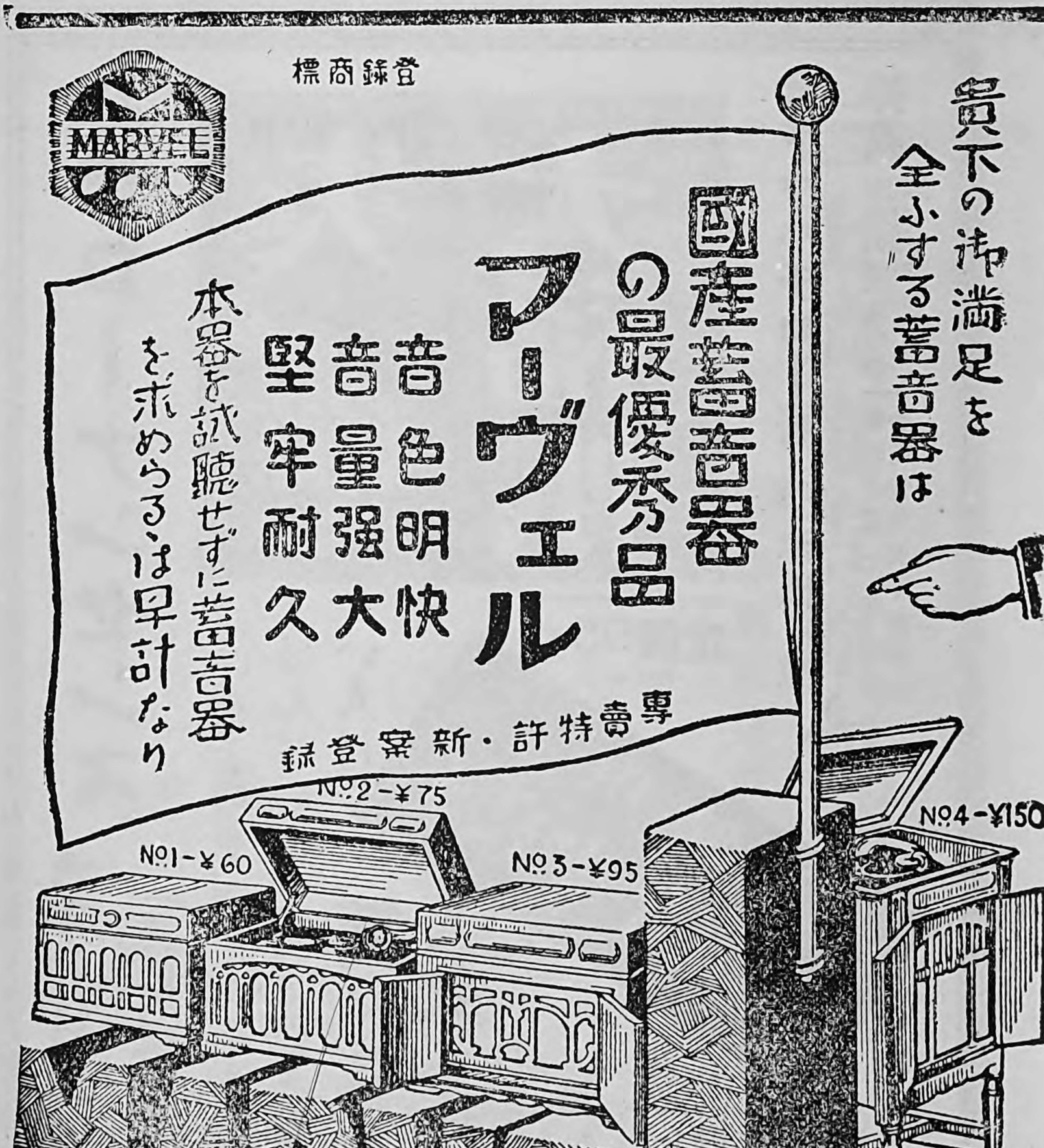








男子と同等に生活戰線に立つロシヤ婦人――化學研究所


貴下の御満足を
全ふする蓄音器は
登録商標
MARVEL
國産蓄音器
の最優秀品
マーヴェル
音色明快
音量强大
堅牢耐久
本器を試聴せずに蓄音器
を求めらるゝは早計なり
專賣特許・新案登録
No.1-¥60
No.2-¥75
No.3-¥95
No.4-¥150
銀座三丁目
十字屋樂器店

# ハチロー・ナンセンス

・讀むは一時の耻！
・讀まぬは一生の耻!!

ほんとのナンセンスを知りたい人は、ほんとの街と女と灯と油の匂ひを知りたい人は

**男**ならばサルマタを、
**女**ならばスカートをぬぎすててこの物語をおよみ下さい。

# 失戀大福帳

定價95セン 税8セン

附録 不良少年覺書

サトウハチロー著

裝幀 津田堯

挿畫 村山知義、津田堯一 武井武雄

◆四六判二五〇頁
◆紙裝美本挿畫澤山

一冊毎に著者の書いたあぶり出しがついてゐます。退くつなときに火にあぶつてごらんなさい

元版 **素人社**
東京市本郷區曙町二番地
振替東京一五九九四番
電話小石川六二三一番

日活超特作

三上於菟吉原作

（雑誌朝日連載）

# 見果てぬ夢

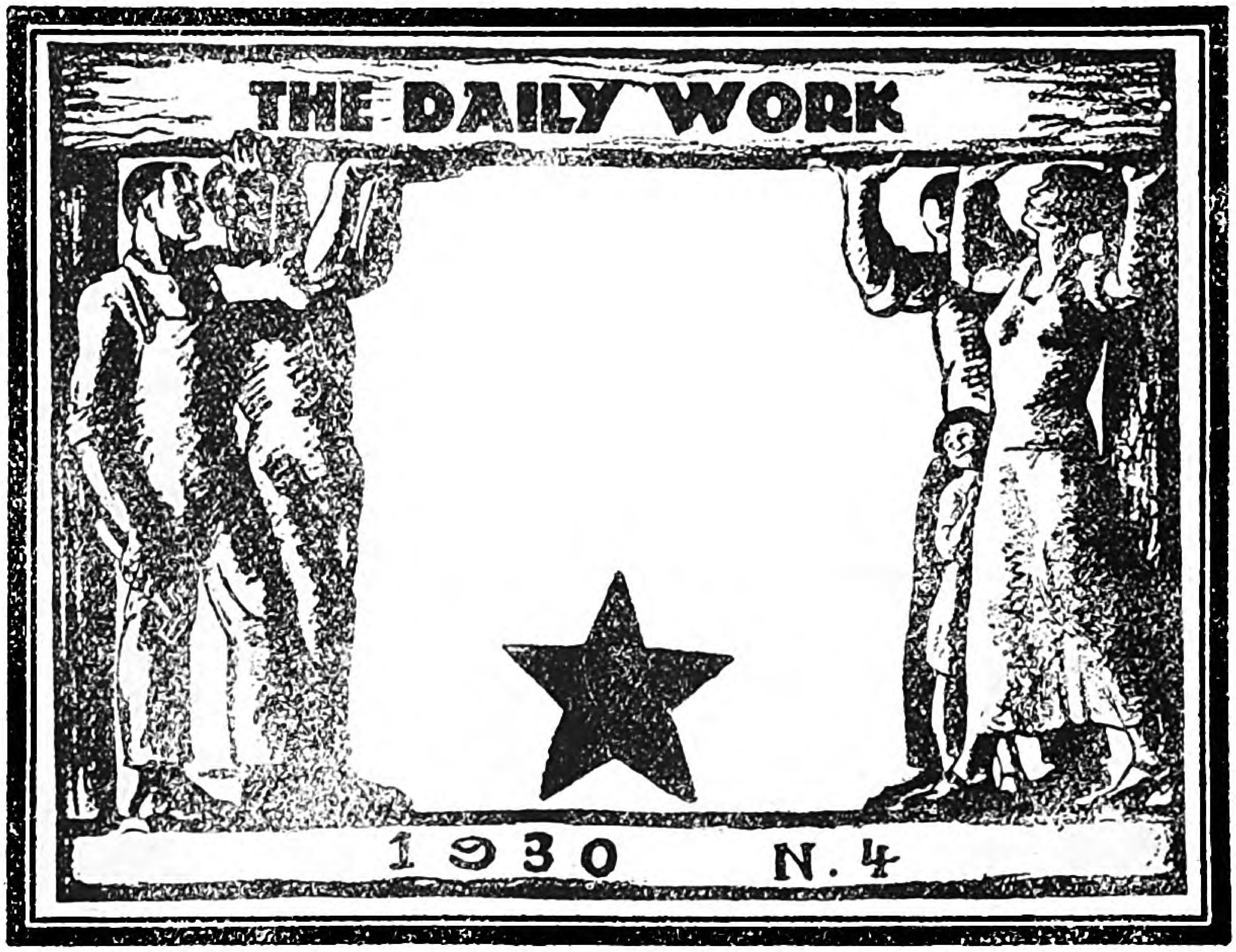
オール・スター・キャスト

木村千疋男脚色

東坊城恭長監督


白粉は御自由に
おえらび下さい
——けれども——
白粉下には是非
どなたもこれを!
ヘチマクリーム
肌あれを止め
粉おしろい下に最適!
定價
大瓶・七五
中瓶・五〇
小瓶・三〇
本舗
東京日本橋横山町
天野源七
REAM
HECHIMA
FACE CREAM
ヘチマクリーム
TOKYO

# 女人藝術




附錄

## 女人大衆

# 嵐は喬木を作る

白川克子



もの〱し
十幾人でお召し捕り
女故？
裸、調べの威赫（おどし）哉
この室（へや）は
私、一人を裸かな
毆つたつて
舌、三寸は私（わし）のもの
うつつなし縛（いまし）められて

---

秋風に、
牢やの粥も、物の味。
曉や、——
暗から續づく峠道
星あかり
まつすぐ行けよ　茨道
多籠り。我世の春に
あはんため



春の月
牢の壁。知り人の名の
あちこちに。

血を喀いて、
生死解脱の牢舎(ひとや)哉

とにかくも、醒めて
死ぬ身の、果報かな

此上は、
痩(や)せられもせず蚊蜻蛉(とんぼう)

病んで三月
生死惑はず靜心




待つ春や。
雪割草の辛苦かな。

其日――まで
捨てた命の冬籠り。

もう一度――
生きて死なんず冬籠り。

# 朝鮮の婦人運動

京山あい子

數字的に詳しい具體的なものを擧げたいと思つてゐたのであるが、現在の×××では當分材料が手に入らないので抽象的なものとなつてしまつたが、日本の無産婦人運動者達にとつて何等かの參考になれば幸甚の至りです。（京山）

## 一

全南光州に於ける內鮮學生の衝突事件に端を發した京城に於ける學生事件は、朝鮮に於ては大正八年の『萬才』事件以來の大事件であり、昨年末からの學生の檢擧數は、恐らく七百名以上に達してゐるであらう。そしてその內には百名近くのうら若き女學生が交つてゐると云ふことである。いたいけな下げ髮の女學生の示威運動、こうしたことは內地等では一寸想像し難いことなのであるが、日々の新聞の論說に目を通すことを忘れない朝鮮の女學生を知つてゐる者は悲壯な氣持に打たれるだらう。新聞紙の報ずる處に據れば、この學生運動の指導は新幹會及び槿友會の幹部によつてなされたものの如く報ぜられてある。その眞僞如何はともかくとして、現在に於ける朝鮮の婦人運動を語ることは、即ち槿友會を語ることになるのである、槿友會は現在の朝鮮に於ける唯一の婦人團體にして、朝鮮に於ける婦人運動のバロメーターとなつてゐるのである。而して現在の朝鮮の婦人運動は、日本內地に於ける無産婦人運動に比してなほ進步的であると云ひ得る程度にまで進んでゐるのである。

## 二

朝鮮に於ける婦人の解放運動は、民族運動を起點として發達したものであり、日本の婦人解放運動史の第一頁が、個人的自由主義に始まつたに反し、朝鮮の婦人運動は、より徹底的な封建的家族制度の壓制の下にあつたに不拘、對內的に封建的諸制度に反抗する機會少なく直に民族運動の渦中に投じたのである、然して民族運動に參加すると同時に進步的女性達によつて封建的家族制度及び風習等に對する解放運動が叫ばれつゝあつたのである。

# 世界各國活動婦人の近状

その後ロシヤの勞農革命及び歐洲大戰後の世界的思想の變動によつて、朝鮮の全運動が社會主義化せしめられたる爲、その一部たる婦人運動の大勢もまた階級的運動の一部として、その運動が展開されるに至つたのである、その當時、女性同盟、女子靑年同盟等その他各種の婦人團體が結成されて運動を開始したのであつた。然るに小數なる婦人運動の分野に於ける分劃的鬪爭の困難が、各婦人團體に痛感されるに至り、婦人運動の戰線統一が各所から叫ばれ、玆に於て各婦人運動者達が集つて戰線を統一した大きな婦人團體を結成したのである、これが卽ち槿友會であり、現在に於て槿友會は、全鮮的婦人運動の第一線に立つてゐるのである。然し槿友會內にもキリスト敎的人道主義者、單なる民族主義者等もないではないが、日常の鬪爭に積極的に參加し、活動するものは、眞に階級的自覺を持つた婦人が大部分を占めてゐるのである。

## 三

現在槿友會は會員數約四千名を數へ、日本の婦人團體等では一寸見當らない程內容の充實した機關紙を五千部も發行して、朝鮮社會運動の一大勢力たる新幹會と伍してその活動を續けてゐるのである。

言論の自由に對して徹底的な彈壓を蒙つてゐるので「かゆい所に手の屆かない」の感あるも、ともかくも左の宣言によつて槿友會の發生及びその大體の運動方針丈は窺ひ知ることが出來るであらう。

槿友會宣言（一九二七年七月一日）（朝鮮文譯）

有史以來今に至る迄で人類社會には、多種、多樣の矛盾と對立の關係が成立して來た、流動無常なる人間關係は各時日に從ひ、或階級には有利に、ある階級には不利になつたのである。故に不利なる階級に屬する民衆は其時代の社會的苦痛を限りなく受けざるを得なくなつたのである。而して我等女性は各時代を通じて最も不利なる地位に置かれるのである。社會の矛盾は現代に至り大規模化されその絕頂に達し、人間と人間との間には人情と義理の情熱は最後の殘渣をも殘さず、物質的利慾が全人類をして相伐の修羅場に至らしめた、戰爭の害禍はます／＼慘憺を極め、貧窮と罪惡はその極に達した、この時代に於て女性の地位が一部分的に向上したとは云へ、それは九牛の一毛の向上に過ぎなかつた。

朝鮮に於ける女性の地位は一層低劣で、淸算され難き舊時代の遺物が有力に殘つて居る上に、更に二重、三重の現代的苦痛が加へられてゐる。而して朝鮮の女性を不利にする各種の不合理は、その本質に於て、朝鮮社會全體を苦しめるそれと連結されたものであり、一步を進んでは全世界の不合理と依存合流されたものである。故に總べての問題の解決は、或る一部の解決では不可能にして、苦痛を受くる全階級の共同鬪爭でなければならないのである。見よ、歷史は此の階級の鬪爭による必然的勝利を立證するものではないか。

朝鮮女性運動の眞正なる意義は、如斯、歷史的社會的背景に依つてのみ把握されるものであり、我等の役割は決して偏狹

# 世界各國活動婦人の近状

に局限されるものではない。我等が我等自身の解放を爲す爲の努力は、同時に朝鮮社會全體の爲の、進んでは世界の全被支配、被壓迫人類全體の爲めの努力でなければならないのである。

然し、一般的を高調するのみにして、その特殊性を忘却してはならないのである、故に吾等は朝鮮の女性運動を展開するに當つて、朝鮮女性のあらゆる特殊性を顧慮して女性のみの統一的機關を持ち、その組織によつて、朝鮮の女性運動を有利に指導することを看破したのである。現在に於ける朝鮮の女性運動は、世界の情勢及朝鮮の情勢により、また朝鮮女性の一般的進歩の程度に依り、既に重大なる段階に進展したのである。過去に於て部分的、分散的であつた運動が今や統一的共同戰線に組織され、女性の各層に共同なる當面の運動目標が發見され、運動方針が決定されたのである。而して我等の運動は全體的に、有利に發展されるに至つたのである、此の段階にあつてはあらゆる分裂的傾向を克服して、我等の共同戰線をして益々鞏固ならしめることが朝鮮女性の使命である。

朝鮮女性に加へられて居る各種の不合理を一般的に要約するならば、封建的なあらゆる遺物と現代的矛盾であり、此の時代的不合理に對して鬪爭する上に於て、朝鮮の女性運動の間には大なる不一致がある理由がないのである、たゞ反動層に屬する女性のみが此の鬪爭に於て回避落伍するのである。

槿友會は如斯見地に於て事業を展開することを宣言する。我等の前に如何なる彈壓と壓迫が加へられやうと、我等は一千萬の姉妹の力を以て我等の歴史的任務を果さなければならないのである。

女性は弱者ではない。

女性が解放される時世界が解放される。

朝鮮の姉妹よ團結せよ。

## 四

法律上政治的運動の否定されてゐる朝鮮の婦人運動は、如何なる方面に最も主力を注ぎつゝあるかと云へば、それは勿論經濟的方面と教育的の二方面である。而してその彈壓はます／＼徹底的となるに不拘鬪爭はます／＼戰鬪的となりつゝあるのである、年一回の大會さへも、許可される場合とされない場合があると云ふのだからその運動の困難さは想像に餘りあるのである。工場に働らいて居ても槿友會員だと云ふことが判れば直ちに馘首されるし、そうした方面へ入り込むことは非常に困難なことである。地方支部等に於て、夜學校を開いて文盲者退治の計畫をしても、直ち彈壓の爲に閉校の止むなきに至ると云ふ。單なる文盲者退治と云ふ文化運動さへこんな状態であるのである。その最も極端な例としてこんな事件がある、滿洲の或る地方で大水害の爲に、非常な慘状を極めた、處がその地方には朝鮮から移民したものが多數あつたので、槿友會では各支部に命じて救助金を募集して、之を送らうとした所が、××から直接送つてはならん、若し送り度いのなら××の方に依頼しなければいかんと云ふ、交渉してみたが埒が明かない、槿友會の幹部

も開いた口がふさがらずの狀態で、切角の救助金、宙に迷つてしまつたと云ふ。

朝鮮に於ては單に婦人運動に限らず、總べての運動が比較的工場や農村に根を張つた運動よりも、學生運動、單なる思想家團の運動となり勝ちであるのは一般的に文化程度の低い關係もあるが、極端な××の結果であることも一つの大きな原因である。槿友會の運動方針もまた急進的婦人の單なる思想家團としての運動ではなく、無産階級的全婦人の實際的鬪爭機關たらしめる爲に、その運動は展開されつゝある樣であるが、極端な封建的家族制度の下に、長い間抑壓されきつた婦人、大多數の文盲婦人を控へて、政治的自由は剝奪され、五千部の機關紙（月刊）を全部沒收されるなど、極端な經濟的不如意を蒙りつゝ勇敢に戰ひを續けてゐるのであるが、未だ工場や農村に根據を置く運びには至つて居ない。だが勇敢な朝鮮の婦人運動者達の努力によつて、槿友會が工場の姉妹、農村の姉妹達の眞の運動團體となる日も遠くはないであらう。私は何等確固たる運動方針も樹て得ず、單に政黨の應援團としての團體に過ぎず、無産政黨の分裂線戰に添つて分裂し、その和合集散をともにしてゐる日本の無産婦人運動者達は、朝鮮の婦人運動に倣ふ可き點がありはしないかと思ふ。

# 婦人よ××主義戰爭に抗せ

北見好子

昨年、大阪地方に大規模の防空演習の行はれたのを手初めに、名古屋、岡崎地方、八幡製鐵所を中心とする北九州の一部、佐世保等々、南日本の重要な地方には相續いで防空演習が行はれるなど一層戰爭準備の示威が積極的になつて來た。

なほ且つ、六月二十四日から七月三日まで日本商工業の心臟阪神地方に於て、國家總動員演習――民間に於ける各軍需品の生產能力、ガソリン外十數種の軍需品の調達、自動車その他運輸機關の輸送能力、在鄕軍人、警官、青年訓練所員の動員等々を實際に試みる――が行はれたのであつた。

これは、各國の軍備擴張競爭と共に、日英米佛等世界帝國主義列强を中心に、各國が參加調印したところの、かの勞働者農民に、資本主義下に於ても國際信義や妥協で平和を保ち得るか

# 戰争と婦人

の如き幻想を抱かせるための、不戰條約やお定りの軍縮會議も、實は何等戰爭をなくするための彼等帝國主義者共のせめてもの努力ではなくて、却つて差迫つた戰爭の危機を國民の前に隠蔽せんとするためのみのそれであることを、おぞましくも彼等自ら暴露したものでなくて何であらう！

まことに第一次帝國主義世界戰爭に數倍する規模と慘鼻――歐洲大戰の經驗の結果、各帝國主義諸國家では新兵器の發明、毒ガスの發見、尖鋭なる各戰艦武器の建造に寧日ないことよりして――とを豫想させる第二次帝國主義世界戰爭は目睫に迫つて來た。

この時私達は、文明の大量的破壞者、歐洲大戰の犧牲を思ひ出してみよう。

**一九一四年――一八年の動員數**

| | 召集人員 | 全人口との百分率 |
|---|---|---|
| フランス(本國) | 八、九六〇、〇〇〇 | 二〇・四 |
| 大英國(本國) | 四、九七一、〇〇〇 | 一〇・七 |
| イギリスの植民地 自治領、印度 | 四、五二五、〇〇〇 | ― |
| ロシア | 一五、一二三、〇〇〇 | 八・五 |
| イタリー | 五、六一五、〇〇〇 | 一五・三 |
| 合衆國 | 三、八〇〇、〇〇〇 | 三・八 |
| ルーマニア | 一、〇〇〇、〇〇〇 | 一三・三 |
| ドイツ | 一三、二六〇、〇〇〇 | 二〇・〇 |
| オーストリー・ハンガリー | 九、〇〇〇、〇〇〇 | 一七・五 |
| **總計** | 七〇、〇〇〇、〇〇〇 | |

國民中の最も健全な働き手約七千萬人が生産から引離されて、死の脅威と塹壕内の苦痛とに曝されたのであつた。

**世界戰爭に於ける軍隊の損害**

| 軍隊 | 戰死者 | 負傷者 | 捕虜 |
|---|---|---|---|
| フランス | 一、三五〇、〇〇〇 | 三、一〇〇、〇〇〇 | 八〇〇、〇〇〇 |
| イギリス | 七三五、〇〇〇 | 二、〇五〇、〇〇〇 | 三五〇、〇〇〇 |
| ドイツ | 一、八三五、〇〇〇 | 四、二二五、〇〇〇 | 六六五、〇〇〇 |
| ロシア | 七〇〇、〇〇〇 | 二、七五〇、〇〇〇 | 四一〇、〇〇〇 |
| 交戰國全體の損害 | 九、〇〇〇、〇〇〇 | 一九、〇〇〇、〇〇〇 | 五、五〇〇、〇〇〇 |

負傷のため戰死したものを含む

直接には以上の數字の示す丈であるが間接に、即ち、幾百萬の人々が戰時中の不自由のために、窮乏と飢餓のために、色々な流行病の犧牲となつて斃れた數は夥しいものである。なほ健全な男子を奪はれた結果、主要交戰國、特にフランス等に於ては出産率は低下し、幼兒の死亡率は増加してゐる。

戰時中ドイツの軍隊は總計二億八千六百萬個の砲彈を消費し、その額は現在の價格で二百四十億マルク以上に達してゐる。

この二百四十億マルクは文字通り煙に消えてしまつたのである。而かもこの二億八千六百萬個の砲彈は幾百萬の人間を殺し、測り知れない程の損害を與へた。たとへば北部フランスだけでも二九〇、〇〇〇の住宅、五〇〇、〇〇〇の建物、六五、〇〇〇キロメートルの交通路(鐵道、街道、水路)、九七、〇〇〇の鐵橋、二二、一六〇の工場を破壞した。

# 戰爭と婦人

更に十一の主要交戰國の國富力、五六七、〇（單位百萬マルク、一マルク約五十錢）の中直接の戰事費として二四九、四を消耗し盡したのである。

翻つてわが國は、日清、日露、と所謂國運を賭しての戰爭に勝つて來た。そしてこの再度の戰爭の勝利によつて臺灣、膨湖島、樺太の南半、南滿洲鐵道等を得、更に朝鮮を合併し、稚かつたわが日本の資本主義は、かうして世界三大强國の一と稱ばれる程の飛躍的な發展を遂げた。けれども國民はこの戰爭のために次表のやうな犧牲を拂つてゐる。

日清戰爭（明治二十七八年度）

一、戰　費　二二五、二三〇、一二七圓

二、動員數　一七八、二九二

三、死傷者　戰死　九七七　傷者　三、九七三 ｝四、九五〇

日露戰爭（明治三十七八年度）

一、戰費　十七億二千百二十一萬二千二百五十六圓

內譯
- 國庫債券募集金一時借入金　十四億一千八百七十三萬一千二百二十九圓
- 戰時特別稅　一億三千六百三十三萬六千六百六十八圓
- 其他　一億六千六百十五萬三百四十九圓

二、動員數　一、〇八八、九六六

三、死傷者　戰死　四六、四二二　傷者　一五三、六二三　合計　二〇〇、〇四六

この厖大な負擔は二十餘年を閲した今日までも國民——勞農無産市民階級の上にかゝつてゐる。そして勝利による莫大な植民地的利潤は、皆ブルジョアジーの懐に轉げ込んでしまつたのである。これぱかりではなく、幸福な日本國民は、無理な算段をして發展した日本資本主義のために生れたての時から百圓づつの借金を負はされてゐるのである。

さて婦人は、かゝる戰爭に愛する夫を、兄弟を、大切な息子を奪はれるのを「御國のため」と喜ばなければならないのであらうか。

働き手をとられ、物價は途方もなく騰り、常でさへ過重な負擔の上になほ戰時特別稅を課され、農村の婦人は荒れた田畑に牛馬のやうに働かねばならない……

かつてモスコーの姉妹は、夫と兄弟を殺し、不具にして歸す戰爭に反對だと一九一七年の三月八日デモンストレーションを行つた。

それはかの光輝ある、世界唯一のプロレタリアートの勝利に導いたロシア××革命の口火を切つたのである。そしてそれは彼女達自身を解放した。

迫り來る第二次世界大戰を前にして、私達はモスコーの姉妹の輝ける××を××なければならぬ。



# 總選擧の結果を見る

## ——社會時評——

永島暢子

### 一、勞働大衆の××化

相變らずの叩頭と買收僞瞞とを以て、所謂民衆の淸き一票をかち取らうとした、普選第二次總選擧は、三旬の戰ひを經て二月二十日終了した。民政黨は絕對多數を得て滿悅に雀躍し、政友會はあまりにも凋落した自分の姿に暗然としてゐる。「濱口か犬養か」の標語より見れば、正に民衆は、濱口に双手をあげたかの樣に見えやうが、現在直接的に支配權を握る政府與黨が勝つのは、いつの總選擧にも見られた所だ。僞瞞と彈壓によつてのみ支配權を確立する同じ穴のムヂナ、ブルヂョア政黨の勝敗は、それこそ時の運である。けれど勞働者農民並に小市民層の選擧權の行使、無產黨の進出こそは、僞瞞と彈壓の猛火をくぐつて民衆の力を强大ならしめ、解放に向つて突貫するうなりなのだ。この總選擧に於て、これ等有權者は、如何に權利を行使し、無產黨はいかなる事を爲したか。

普選第一次總選擧は、一氣にして無產議員八名をかち得た。社民四名、大衆二名、勞農二名は、いかに勞農大衆の待望の下に議會にのり込んだか。安部社民黨首の如きは、議會に於けるキヤスチング・ヴオートを握るものなりとして、大いに氣焰をあげたものだ。故に第二次には、必ず十名以上當選し得るとの豫想あり、普選第八次總選擧には、勞働黨内閣が出現する事を、やはり安部氏は、ふれ廻した。しかし開票の結果は豫期に反して、その當選率は、前回よりも惡く、僅に社民二、大衆二、勞農一を選出したにすぎない。これに對して支配階級は元より無產黨まで、無產政黨戰線の分裂にその責を負はしてゐる。だがそれは理由にはならない。

所謂穩健着實を誇り、最も民衆の初步的要求に訴へ易い要求を揭げたのは社民である。支配階級と步調を合はせ、「階級鬪爭はタメになりませんよ、なんでも議會で言つて賴み込む事ですよ」と民衆を眠り込ませる事で勝たうとした。成程民衆も一度はそれを信じたかも知れない。しかしその信賴に對してどんな事をしたか？無產運動の絞殺法たる「治安維持法」の通過に際し、或は十七億の軍備豫算

の採擇に際し、どんな態度をとり、また勞農大衆の生活の直接的利害に關してはどんな事を支配階級に向つて要求したか？單に禮服で議席に納り込み、歳費にありついたにすぎないではないか。それを民衆は知つたればこそ、安部、鈴木のお歴々が見事に落選し、新顔が辛うじて當選した理由もそこにある。範を極度に英國勞働黨に採り、完全にブルヂョア第三黨になりきつた社民に對して、無産階級が信頼し得なくなつたのも當然ではないか。

それは日本大衆黨に於ても變りがない事だ。金權政治の撲滅や、政界の淨化を叫んだとて民衆がこの生活の困苦から逃れ得るものではない。それ等が民衆の反目の的になりつゝある事を知つたブルヂョア階級は、彼等自身その淨化の要求をなしつゝあるではないか。それ等は、尾崎行雄等に任せておけばよいのに、自ら彼等のキ尾に附して吠えたてるのは、鬪爭をさぼり、支配階級に媚び、さうして尙無産黨の看板を掲げてゐたい爲なのだ。そんな胡麻化しは、旣に大衆はあきてゐる。それは長年の地盤を以て戰ひを宣した東京第五區に於ける社民の松岡、大衆の加藤に配し、勞農の大山がとび入りしながら、奇勝を博したのにもその一例を見る事が出來やう。だが早合點してはいけない。勞農黨が、かくも異常の支持をうけたについて、さも勞農黨が、眞に革命的であるからとの幻影をふりまいてゐるが、實に笑止千萬な事だ。勞農黨の一枚看板は、山宣の行動並にその革命的死を以て、或は舊勞農黨の後光で、大衆の革命的心情に訴ふる事であつた。大山は例の感傷を以て「山宣の如く生き、山宣の如く戰ひ、山宣の如く死ぬ事」を大まじめで誓つて步いた。（何も死ぬ事まで眞似なくともよいではないか）

勞農大衆は、迫り來る生活の極度の困窮化に、火の如き不平不滿を持つてゐる。眞實に勞働者農民の要求を捕へて苛責なく戰ふ唯一のプロレタリヤ黨は、絕大の彈壓下に潜行的運動を續けざるを得ない狀態に置れてゐる。かゝる狀勢は折角得た所の血の一票を、言葉丈でも革命的である勞農黨に對して投票せしめた原因を作つたのだ。

だが左翼的組合に組織せられた、或は戰鬪的勞働者農民並に無産者は、最も大膽に勇敢に率直に、自身の端初的要求を行動に示した。普選第一次總選擧に於ては、獨自的には、×の存在を知らしめたに過ぎなかつた日本×××は、今次に於ては、この猛烈な彈壓下に選擧鬪爭のカンパニヤを起し、サヴエートの萌芽形態としての選擧鬪爭同盟を以て、獄中の佐××、ロシヤに居る山×懸×、その他を公認とし、黨の擴大强化、赤色勞働組合の擴大强化のために執拗なる鬪爭を續けたのであつた。新宿投票所の如きは、開票最初より佐××の投票が續々と表はれ、爲に悲鳴をあげた立會人は、警察にその處置方を相談したといふ噂さもあり、ブルヂョア新聞に傳へられる東京の票數だけでも五六百票、全國的に見たならば、有に五千票は突破したであらうと言はれてゐる。前總選擧には無産黨への票數四十四萬だつたのが、今次には五十七萬に飛躍したのを見ても、如何に勞農大衆が自覺し××化しつ、あるかを知るであらう。勞農大衆は單なるおしやべりは自身の利益を計るものではなくて、かへつて解消せしむるものである事を知つたのだ。議會は、おしやべり會に過ぎないものだと知る者には無産議員の當選數は如何に少なくとも、この勞農大衆の××化を勞農大衆のやがての解放の爲に喜ぶ者である。

## 二、無産黨合同問題の再燃

勞農大衆の××化を見るよりも、當選者を多く出したい議會主義

者共は、今次の選擧を失敗とし、盛んに悲鳴をあげてゐる。曰く。無産黨がいくつにも分裂してゐるので、折角の得票が死票となつたのだ。だから前以て地盤を協定しておく必要があつたのだ。曰く、無産黨の戰線統一！無産黨の戰線統一、これこそは、無産階級解放の唯一の道である。だがまた、この表看板だけの戰線統一位勞農大衆の利益を裏切るものはない。近い例は、昨年、日本大衆黨は如何に合同し、如何に分裂したか。このあつものに懲りる事もなく、またく寄つてたからうとする青バイ根生の社會民主々義者の行動こそ、無産階級への裏切り的行爲ではないか。

社民黨の社會民主々義を中心とする合同を要求するも、日本大衆黨、全國民衆黨の無條件合同も亦、勞農黨の「黨内に於ける社會民主義々の批判」を前提としての合同も、一切は幹部と幹部との取引であり、議會亡者の地盤を作るだけのものだ。戰線統一は、勞農大衆の自覺的要求の、闘爭の熾烈化によつて、その戰線統一の要求は必然的に起り、その要求を的確に捕へた所のスローガンに統一されて戰つてこそ、初めて實現し得るのである。

けれど、無産黨は、この嚴格なる要求を、實に遊戯的に弄んでゐる。常には右だ、左だと排擠し合つてゐながら、取引によつて成立し得るものだらうか。一時は、口惜しい昂奮によつて、或は形だけでも成立するかもしれない。しかし日常的行動に於て、又は今次の如き選擧に際して、その地盤、名譽の爭ひから、再び分裂するであらう事は、今までの行動によつても、容易に推察する事が出來る。殊に笑止なのは、勞農黨が、舊勞働農民黨を眞似て、「社會民主々義批判の自由」を持ち出した事である。勞働農民黨は、曾ての合同問題にこの條件を持ち出したのは、多少の挿雜物があつたとは云へ、不變の××的行動によつて、大衆の闘爭を强化せしめんとしたからであつた。現に××的黨と切り離れ、改良主義的、議會主義的行動によつて、活動しつゝある勞農黨が、この條件を持ち出す必要がどこにあらうか。目クソ鼻クソを笑ふ類は、この態度を許すために準備されてゐたものであらう。この一時的昂奮によつて持ち出された、無産黨合同は、お茶番的にうまく行つて、日本大衆、全國民衆、東京無産黨の合同位で後はウヤムヤに終るであらう。

どうせ羊頭を掲げて狗肉を賣る無産黨幹部諸君、人助けの爲にも戰線統一などゝ、ありもしない腹藝を見せやうとしない事だ。そのうちに、勞農大衆は、實戰によつて自らの戰線を統一し、支配權力に抗爭するであらうし、その時こそ地盤の欲しい幹部諸君は、支配階級の配下にあつて完全にブルヂョア戰線に統一され、合閣の椅子の一つ、或は無産黨内閣でも作る事が出來るであらうから…。

## お役人の視察

「不景氣、失業が深刻化し、勞働者階級の慘めさが思ひやられる今日、井上藏相が、少額金融の必要を說いてゐる手前、且資金を融通してゐる關係から、大藏省理財局長等が、下谷龍泉寺町の社會事業協會の經營する公設質屋に見聞に出かけた。所が驚いた事には、何處の質屋も倉が一杯で資金があつても融通に應じられないから、無産市民の利用をよくする爲には、資金を充實せしむるより倉を擴げるにあり」と沈痛な面持ちで語つた、と時事新報は報じてゐる。

昔、配所にある公卿の子が、雨洩りのするあばら屋を嘆き、お金が欲しいと侍者に訴へたさうな。そして言ふ事には、お金があれば大きな盥を作る事が出來る。盥さへあれば雨が洩つても大丈夫だ、

といつた話がある。流石傳統を尊ぶ日本の國だけあつて、昔の公卿の子の處世觀も今のお役人の觀察も、敢て徑程がないとは、誠に結構な事と笑ふ氣にもなれはしない。

民政黨内閣の緊縮政策は、物價が實質的に低下する前に、賃銀の低價、失業の增大化を現出せしめ、生活が極度に逼迫して來た。營利質屋に於ても、貸出しに於て、今までより値下げする事を申し合はせてゐる。ましてや通常でも、利子の廉いを口實に三割方廉價に融通をしてゐる、公設質屋の狀態であれば、どんな慘めな貸借關係を民衆は質屋となしつゝあるかを、想像する事が出來るであらう。故に質屋の倉が充滿する程に、無產者は、その機關を利用出來ない事はわかりきつた事實だ。

子供にすりを働かせ、一家七人の生活を辛ふじて支へてゐた新聞記事は、非常なる衝動を讀者に與へた。昨今一般民衆の如實にうくる實感は、生活の困苦である。この困苦に對して、支配階級は、どういふ事をなしつゝあるか。濱口内閣は、國家の窮乏を說く、彼等は數字的羅列を以て、無理にもそれを納得せしめやうとする。或は窮乏してはゐるだらう。だが日々起る現象は、どう民衆をして解釋せしめやうとするかだ。半夜の行樂に十數圓も費消する歌舞伎帝劇がいつも滿員を稱へ、三越、白木屋等の百貨店は、年々その株主配當を增して行くではないか。ある所には有るといふ理由は、その社會制度の立て直しによつては、一般無產大衆が正道に働き正道に生活し得るといふ理由にもなる。卽ち現制度下に於ては、日本の富の總和の或一部分のみしか、どんな事があらうとも、一般民衆の手に落ちて來ず、少數の資本家地主が握つてゐる證據ともなるのだ。支配階級のいふ所の社會政策なるものは、つまり今まで握りしめてゐた富の一部分を分け與へて、貧困より起る階級的反抗を押へつけやうとする爲のものではないか。だから、財政困難に名を藉りて、打ち捨ておく諸種の施設も、民衆がその不平不滿を××にまで高揚せしめた曉には難なく實現せしめる事が出來る。公設質屋も公設市場も、富山市に端を發した、米騷動を楔機としたものであり、日本の社會政策史は、また一面、民衆の不平不滿の直接行動史とも見る事の所以はこゝにある。けれど社會政策は、畢竟社會政策にすぎない事は、その實蹟に於て充分證明せられてゐる。民衆の要求を民衆の力で實現するのではなく、一度支配權力に任して、その實施を見るために、實に甘酒にサッカリンを入れた程にも値打ちがないのだ。

一時が萬事、この質屋の例についても分る事、また口先きだけで、母子扶助法を制定するの、いや救貧法が大切だ、いや失業保險の實施が急務だと、人氣の動きにつれて、いろんな見せびらかしはしても、眞實に民衆が、これこそは！と思ふものを實施した例があらうか。彼等はこのおあづけによつて、より民衆を搾取し、奴隸化せしめやうとするのだ。

そして無產者はか速度的に飢餓線上に追ひやられてゐる。食ふ爲には、どんな事でもせねばならないのだ。子供にすりを働かせるはおろかな事、家族の飢ゑを見るが辛さに街上に於て、自殺を企てたり西瓜一つを拾はふとして、自動車にひかれて、死ぬ哀話を頻りと生んで行く。事實社會政策に幻を持ち、支配階級のお情けを待つてゐた日には、明日の命のわからない無產階級の狀態だ。生殺與奪の權利を握る支配階級より、まづその權利を奪ひ返す事だ。食ふ爲にこそ、盜みもし、屈從もし、奴隸的待遇に甘んじて來た無產階級は、その食ふ爲にこそ、資本家地主その番頭と決定的に戰ふのだ。鬪爭

のうちにのみ、一般無產階級の幸福が握られてゐる事を、無產階級は判然と知らねばならない。

## 圓滿解決の正體

最近爭議の最も著しい傾向は、その解決を一切といつてもよい程、官犬の手にゆだね所謂爭議調停なるものによつて、解決せしめる事である。二月中に東京新聞の一二に散見したる十數の爭議も亦爭議調停によつて、大部分は解決してゐる。殊にそれは大爭議であり、且重大性を持つと見られる程、積極的に官犬は乘り出して來る。爭議調停法は、既に勞働者のストライキ、團結權の自由を奪ふものだ。それなのに何故總同盟その他の勞働組合は、暗にそれを許容し、否むしろ、歡迎的態度に出るのであらうか。

かの京都郵便局の從業員が、單に×××宣言を買つた、或は、文書をポストに投入したといふ事實乃至は疑ひによつて、首になつた時に於てゞある。讀書の自由であれ、組合の確立運動であれ勞働者の利益獲得には、缺くべからざる必要性を持つてゐる。それで京都郵便局の從業員は、同志の復職を要求して一齊に立つた。東京の從業員も亦相呼應した。この狀勢にあはてふためいたのは、官犬と總同盟である。總選擧を前に控へて、騷ぎを初められては大變だ。だが總同盟は、曲りなりにも、遞友同志會なるものを組織してゐる上は、この不平不滿に高まつた從業員の鬪爭慾求を採み消す譯にはいかない。で同志會長赤松克麿は、再度遞信當局を訪問して、復職を乞ひ、若し、その要求の入れられぬ時は、ストライキに入る事を宣告した。しかし、心底より爭議決行の意志なき事は、速刻に警視廳調停課に赴いて調停を懇請し、頻りに圓滿解決を强調してゐたのでもわかるし、十六日に火蓋を切るべき爭議を二日前に發表し、敵に戰ひの用意、或は切りくづしの餘裕を與へたのを見てもわかる。(これを彼等は、紳士的態度といふのだ)勞働組合に戰ひの意志なき事は、相手をしてどんな態度にも出させるものだ。だから全國協議會の指導があつたといふ池上電鐵の爭議に際しては、幹部の檢束アヂトの襲擊指導者の收容等お手の物の彈壓を以て强制的に調停に立ちながら、警視總監丸山は大阪遞信局管內に起つた問題だから警視廳の差し出る幕では無いなんて態度を見せたものだ。それを亦赤松はお百度を踏み拜み倒して漸く二人を復職せしめ、以て事前に爭議を解決した。支配階級並に總同盟は之は「圓滿解決」だといふのである。

一體こんなストライキがあるものだらうか。勿論こんなストライキなんてない。それなら何故ストライキと稱して、從業員を一時にでも氣負はせたか。それは總選擧を控へてゐた爲である。卽ち爭議は望ましく無いが人氣は落したくないのである。どうしても勞働者の待望を繫いでおく必要があつた。遞信從業員は賃銀の惡いのと勤務時の長い事勞働條件の惡いので通つてゐる。それに加へて選擧時に於ける勞務過重の負擔だ。或は選擧時には手當が出るといふかもしれない。が其選擧手當なるものが、一二ヶ月後に十圓か十五圓でしかなく(取締りは唯監督するといふ名目で四五十圓の手當をとる)まかり間違へば芝白金局の集配手金大基の如く過激な勞務から過失を犯しても選擧違反に問はれねばならないのだ。更に遞信省の緊縮豫算は、電報配達夫の整理を掲げて來てゐるし、いつ大量馘首が初まるか解りはしない。若し總同盟にして眞に戰ふ意氣があるならば、此選擧といふ一大楔機を捕へて戰つてこそ有利なのだ。

だから、これ等の絶好の楔機も總同盟にとつては豚に眞珠であ

る。總選擧の人氣ほしさにストライに氣負はしたものゝ、常に支配階級の忠實なる御用係りであつて見れば、今度だけ戰ふ譯にもいかない。かくして遞信從業員のストライキは、支配階級と總同盟の取り引きによつて、空しく龍頭蛇尾に終つたのである。かゝる爭議は、社會民主々義的組合には共通の事である。それは龜戸の東洋モスリン株式會社第二工場閉鎖にからむ爭議にも見る事が出來やう。

モスリン會社の勞働者は、總同盟及組合同盟に組織されてゐるのだが、この工場閉鎖、大量的解雇に當つても、共同鬪爭をしやうとせず、それ〲陣營を別にして戰つてゐる。常に組合の鬪爭を甘く見てかゝつてゐる會社は案外腰が強く、なか〲に組合の要求を入れ樣とはしないのだ。幹部の弱腰と會社のガンバリに、交渉がはかばかしくいかぬ時は、爭議團員はしびれをきらし、直接行動に鬪志を發散せしめやうとする。東洋モスも時に騷擾あり、時に突貫あり非常なる氣勢をあげた。しかし、その騷擾、その突貫は少しも計畫的でなく自然發生的であり、且その自然發生的行動を××的暴動にまで高揚し得ない、乃至は意志のない幹部は、かへつてその爲に爭議團の意氣をにぶらせ、支配權力につけ込ませ、やがていつもの献立通り、官犬の調停から臆面もなく、反動の親分にまでのさばらせ、慘敗に終らせてゐるではないか。これをさへ彼等は圓滿解決といふのだ。あまりに馬鹿〲しいので、その解決條件を附して見やう。

組合同盟側　一、今後會社は組合の立場を認め組合は會社整理の實狀に鑑み、相協調して工場の立て直しに努力する事、二、日給者の時間短縮及年功手當撤廢に對する要求は、之を酒井氏（日本正義團長なるに注意せよ）に一任し、第二工場に關する解決は別に定むる事、三、爭議による犧牲者は出さゞる事、但し工場閉鎖による解雇は別。

總同盟側　一、總同盟系の解雇者八十四名中十七名を復職せしむ。但し當分の間特に低給者の他、俸給一割減の事、二、今回の解雇者は會社に於て、今後職工の採用の際は、事情の許す限り、優先的に採用する事、三、轉勤女工に對し、左の條件を附する事、イ、日給を下げぬ事、ロ、差別對遇をせぬ事、ハ、轉勤者を解雇せぬ事、ニ、第二作業場を復活する時は、必ず復歸せしむる事、四、解雇者に對しては、會社は先に發表せし他に、別に金一封を贈る事、

これではなんの爲に爭議を決行したのかわからない。だが例はこれだけには止まらない。ジエネラル・モータースの大量馘首反對の爭議に於ても、指導の立場におかれた勞農黨は、徒に官犬の取引きにのみ奔走し、且國際的資本關係にあるからとて、米國大使にこの爭議の調停を頼み込むなど、ベラボーな事をしてゐるうちに、四十日を經過した。そして遂に解雇者爭議團は、組合の手をはなれ、會社警官立ち合ひの上で、復職者は一人もなく、且現業員は、組合の關係を斷ちて入場し、能率增進を誓はせられるなど、實に屈辱的解決を告げねばならぬ狀勢に立ち至つたのだ。

自然發生的經濟的要求の限度にのみ、要求を阻止しやうとするその鬪爭は、遂に些少なる利益をも獲得する事が出來ないといふ事實を、社會民主々義的組合は把握する事が出來ない。それ故にこそ、支配階級も亦安心してその取引を利用してゐるのだが、「圓滿解決」の正體は常にかうである。この正體とこそ勞働者は決定的に戰はねばならぬ事を、勞働者は知らねばならないのだ。（三〇・三・五）

# 黎明期に於ける勞働婦人

## 東洋モスリンの爭議

織本貞代

一

『皆さん！私達は長い間資本家や地主に欺されて來たのです。』

或る一人の女工さんが演壇に立つて熱辯を振つてゐる。

『私達の兩親はづつと昔から地主に高い年貢を納める爲に眞黑になつて朝から夜中まで働かねばなりませんでした。私達は赤ン坊の時から田の畔に寢かされたり、暗い母家の柱に帶で繫がれたりして不自由に育つて來ました。小學校へ行く樣になつてからだつてなんて慘めな思ひをした事でせう。着物が汚いといつては金持の子供から虐められ、貧乏人の子だといつては辱しめられましたそれでも學校は私達にいろ／＼な事を敎へて與れる所でした。學校を止め度くはなかつたのです。けれども私達は四年にもなるともう學校へは行つて居られなかつたのです。會社の募集に欺されて、遊びなれた故郷に別れ、慈愛深い兩親に別れて、金を儲けに會社へ連れて來られたのです、が聞いて極樂見て地獄です募集人から極樂の樣に聞かされて來た會社はまるで地獄だつたではありませんか』

（『そうです』…拍手――）

『私達は高い塀に圍まれた工場で見廻りや組頭に怒られながら働きました。がいくら働いても思ふ樣に金はとれません。原料が惡くても機械が惡くても機が織れなければ一日七厘にもならない事もあつたのです、おまけに寄宿舍では豚扱ひではありませんか。皆さん！會社の賄ひが菜つ葉を洗つて食はせた事があるでせうか？――『そうだ』拍手――菜つ葉を砂や蟲と一諸に漬けたり、煮たりしたのは私達は會社へ來るまで牛や豚だけが食うものだと固く信じてゐたのです――拍手――皆さん！私達はまだそれでも欺されてゐたのです、私達は小さい時から敎はつて來た樣に主人の命令には絕對に從はなくてはならないものだと思つてゐました。私達はよく小學校の時敎つたお小夜の話を思ひ出して自分を慰めたものです、お小夜は子守りにやられて、主人の子供が誤つて池に落

らた時にそれを救はうとして自分が死んで了つたのです、會社の爲には血を吐いて倒れる迄働け！といふ主任の言葉を惨いと思ひながら忠實に守つて、どんな辛いことでも忍んで働いて來たのです、ところが今度の工場閉鎖です、資本家は何等の予告もなしに私達の仕事場を奪はうとするのです、私達を首にしようとするのです〜――『そうだ』拍手――皆さん私達はよく奴隷の話を聞かされてゐます。奴隷は鎖に繋がれて酷い搾取を受けてゐたのですけれど馘られる事だけはなかつたのです。終生パンだけは與へられてゐたのです、牛や馬だつてそうではありませんか、牛や馬は主人の爲に酷き使はれても情深い主人は自らは食ふものを食はなくても牛に飼料をくれるのです。馬に飼料を與へるのです。しかるに今度の閉鎖は資本家がより利潤を擧げよう爲の閉鎖なのです、成る程××モスリン會社は今整理中であるといはれて居りますがそれも之を質せば××常務の不正行爲やその他經營の舊式なことなどが原因だといはれてるではありませんか？

皆さん！資本家といふものは奴等が儲かる間私達を欺して使つておきながら少し儲けが少くなれば私達何百人何千人が飢に泣こうが恬として顧みる所がないのです。

私達は眼が覺めたのです、此横暴な資本家に對して從來の様に絶對服從を守つてゐたら、私達は只暗から暗へ死んで行くより外道がありません、私は私達自身の團結によつて私達自身を護らなければなりません。私達の中から一人の裏切りも出さないで下さい。私達の武器は只團結の外にはないのです。私達の腕は細いかも知れない、けれど「女の黑髪巨像も繋ぐ」といふではありませんか、しつかりと手を握つて下さい、そして最後まで戰つて下さい、同じ犠牲を拂ふにも瞞されて資本家の犠牲になるより、勞働者は勞働者らしくお互ひの爲に最後まで鬪はうではありませんか。我々の血で我々の身を護つて下さい』

彼女は嵐の様な拍手を浴びて降壇する。

『皆さん！私達の住み馴れた職場は、なつかしい××工場は今日限り永久に閉ぢられて終つたのです、會社は××や××の工場へ轉勤しろといひますがこれは體のいゝ首切りでなくて何でせう、私達は……』

『皆さん！我々勞働者は……』

次から次へ女工さん達は目前に降つて湧いた死活の問題に對し一言でも叫ばすには居られないと言つた調子で演壇にかけ上る。

時は昭和五年二月十五日、大日本紡績聯合會操短實施の夜、場所は龜戸の××モスリン爭議團である。友誼團體から續々と旗と代表者が送られて來る。割れ返る様な拍手を以つて友誼に輝く赤旗を迎へる度毎に小さな團員の胸に最後まで戰ひ拔こうとする祈りと誓ひが深められて行くのであつた。

## 二

閉鎖された××工場の爭議はやがて同じ會社のA工場に飛火したモスリン會社は日に三千圓の費用をかけて××正義團といふ白襷隊を雇入れた。或者は棍棒を携へ、或者は木刀を携へた之等の正義團員四百八十名の間に百名に近い正服が伍して物々しい警戒振りである。前日に外の爭議團と呼應して塀破りをやつた女工さん達も今日はおとなしく隊伍を組んで庭に出ると只一つ勞働者の歌として許されてゐるメーデー歌を歌ひ始めた。『聞け！萬國の勞

働者』『轟きわたるメーデーの』…急拵らへの赤旗――これについては警備の正服があまり見つともないから止せと忠告？したが若い娘子軍は『そんな法律があるなら見せて貰ひませう』とはね返した――が翩翻として空に翻る。一定の示威を終ると再び隊伍を組んで寄宿舍の中へ消えて行くのだつた。

意外におとなしかつた罷業團の態度に安心したせいか、彼女達が翌朝々食を終へた頃には白襷もサーベルも其處いらに見當らなかつた。彼等の或ものは食事に行き、或る者は焚火を圍んで雜談に耽つた。會社の待遇が惡いのに憤慨して續いて雇はれる事を拒んで歸つた正義團員もあつた、殊にそれには工場にも飛火しそうな形勢に見えたので警戒の主力はそちらに注がれてゐた關係もあつた。七八人の女工さんが走り出て前夜探り當てゝおいた腐りかけた塀の一ヶ所に寄り添ふと、力を併せて塗炭塀を剝がし始めた、赤錆びて耐久力のなくなつた釘のお蔭で塗炭板はわけもなく取れて一間位の空間が出來た、三人が寄宿舍へ走り込むとやがて四百名の女工さん達が拔き足、差し足いとも靜肅に腕を組んで出て來た。『靜かに！靜かに…』お互ひに警しめ合ひながらしかも押し切れぬ歡喜に震へて卽製の通用門を潜るのだつた。三分の二も出た頃にサーベルの一人が發見した。呼び笛が高らかに鳴つて、慌てふためいて馳せつける白襷隊を尻目にかけて用意の泥圍子を投げつけては危ふく檢束を免れながら全員爭議團に引上げて行くのだつた。

## 三

昭和四年四月、××モス吾嬬工場に於ける爭議は勞働婦人の鬪爭史に特記さるべきものであつた。聞く所に依れば爭議數日にして古い塀は全部新しく取りかへられ、剩へ從來よりは更に一間高くされて手紙に石を結びつけて聯絡を取るといふ藝當も出來なくなつた、外部との交渉は一切斷たれて了つたのである、が彼女達の間には平素一つの組織があつた―隊長と傳令とからなる簡單な組織ではあつたが――その爲に爭議團は手を換へ品をかへて隊長の中の誰れか一人に命令なり情勢なりを傳へればよかつた、傳令たる雀は隊長から隊長へ、そして二千名の罷業全員へ爭議團の命令を傳へる事が出來たのである。感情的である、崩れ易いと云はれる婦人勞働者の爭議が月餘に亘つて繼續せられた事はたしかに特記さるべきである、此の爭議に於いては男子爭議團員を忸怩たらしめる幾多の挿話を伴つた、長い期間彼女達が食堂に通ふ時は行きも歸りも必ず四列縦隊に腕を組んで靜肅に行動した。或る時には部屋々々で演說會をやり、研究會を開いた。或る時又腕を組んで運動場に出で、メーデー歌を高唱して鬱憤を晴した。裏切りが出ると隊伍を組んで押しかけては機械を止めさせた、或る時には胴上げ、布團蒸しの私刑に處した。解決條件に不服を稱へて解決後も暫くは殆んど運轉がつかなかつた、勞働組合としてはともかく十年の歴史を持つ吾嬬工場にして始めて見得る現象であらうがたしかに勞働婦人の黎明を思はせる姿である。

## 四

婦人勞働者の場合、爭議の切り崩しに資本家側が用ふる常套手段は田舍から父兄を電報で呼び寄せて娘の赤化を楯に頭から脅か

しつけ無理矢理に連れ歸らせる事である。大ていの氣の弱い父兄は會社の大げさな脅かしに魂消て、なんでもかんでも退職屆に印を捺して終ふ、こうした人々に泣きつかれるのや頑固な父兄に矢鱈と親權を履行されるのが一番痛手である。時に見知らぬ父兄がお互ひに寄り集つて隱然應援團の形を取る事もあるがこれはまだく稀だ。中には『勞働者が勞働者の味方するのに何の遠慮がある?』と啖呵を切つて歸る父兄もある、がかゝる時會社の取る手段は××と××しての拘留、檢束である『理由はなんとでもつく』と彼等は放言するが玆にも新しい傾向は見える××モスリンの×さんは御多分に洩れず一週間の拘留を食つた、會社は例によつて電報を打つたが應じない、そこで娘の赤化を細々と認めて引取りに來る樣にと云つたが手應へがない、其處で今度は退社願を送つて――馘首は組合の手前出來なかつた――捺印を求めた、とやつと返事が來た、曰く『勞働者が勞働運動をやるのは當り前だ、勞働者は勞働運動をやる權利があると思ふから退職願に印は捺せない』と、泡を食つた會社は今更ながら×さんを一ヶ年の外出止めにして監視をつけた。

私は併し玆に、旣に明日を意識し始めた輝しい婦人の姿を畫くのが目的ではない、これ　の婦人は未だ極めて少數である。これ等の百倍、いな千倍もの勞働婦人が如何に搾取の重壓の下に、我れと我が蝕食まれ行く生命を見瞶めながら呻いてゐるか、かゝる勞働婦人の爲に何がなさるべきであるかについてやゝ詳細に書いて行き度いと思ふ(つゞく)

## 暦のうらに

東おさむ

わがこゝろこほりてさむし死にもえで夕ぐれくれば空をながむる
空に鳴る鐘の音きゝて涙するこゝろ濡れつつ笑ひもぞする
春の風なにを告げんと耳をふくいづこより來てこの胸を吹く
草の芽の髭ほどのびて春は來ぬことしも生きて何をせよとか
夜の風よ草葉折りしきねるうちにわがたましひも誘ひもてゆけ

# 鼠色の廢館

## ――長崎風景の一つ――

富本一枝

橋の上であいの兒が桃色の花瓣(はなびら)を捲つて川に流して遊んでゐる。淺い流れで、川底の小石にもこつちの顔がうつるやうに思へる。種のよさそうな小犬が、さかんに尻尾を振つてその兒に絡みついてゐる。港を見ると赤と黒の船腹を露出した巨船が大きく呼吸をしてゐた。山の手の居留地に登る石疊の坂道から二つの乳母車を押した年とつた宣教師風の、といふことは色氣のない格好をした婦人が二人、大きなレンズのはまつた眼鏡をキラキラさせて、ひどく饒舌りながら降りてくる。車のなかで桃色の小さな頭がかはるがはる揺れて――

商館の露臺にアネモネの鉢が一つ、どうかしたはづみに建物と建物の間にアメリカの旗が見えた。

三菱造船所の午後三時のサイレンが、どかんと背後で唸つた。私は大浦川岸を、梅ケ枝橋を渡つたところで左に歩く。

英字でホテル何々とかゝれた看板を屋根に取付したまゝ死人の如く枯萎した木造の西洋館の多いこと――これではまるで外人墓地である。深く垂れ下した鎧戸はいづれも腐朽して灰色の沈黙をつめたい歩道に投げてゐる。



ある鼠色の廢館の前で私は彼の墓標を讀む。

アメリカンホテル下り松四拾番地。かつて生活力のあつた生き物。

ゆきすぎた中年の男が、ちよつと立ち止まつて懐中時計のゼンマイを巻いた。

ここにも鼠色の鎧戸(よろいど)があつたこれはもはや、骨が幾本かはづれてゐる。灰色の面貌に雨水の白條が木目(もくめ)の如く垂れてゐる。瓦斯燈の冠が歪んで一本の繩がひつかゝつたまゝ嘆いてゐる。私の落す私の影まで――氣がついてみると實に冷たく薄いではないか。



水色の硝子戸が大きな溜息をついて、鋭い神經が光線のやうに飛散してゐる。綠色の窓、灰色のバルコニー、鼠色の鎧戸。物音のない世界の隅から、腹の太い牝猫が、のそ

りとあらはれて無氣味な聲で唸る。猫も灰色である猫の影も灰色である。

IMPERIAL HOTEL
No. 37 MATSUGAEMACHI

石垣から赤い着物をきた女の兒が、いきなり私の方にかけよつてきた、と思ふまなしであつた。鼠色の墓標にむかつて湯氣だつた小便をとばす。私は生きものゝ匂ひを嗅いで、おかしなことではあるが、これで助かつた、といふ氣が強くした。この兒は髪が非常に綺麗なまき髪で、眼も非常に青く澄んで、皮膚も透き透きとして、百パーセントの外國種であるのに、赤いモスリンのきものに赤いちやんちやんをきてゐる。

小便をしながら私を見上げてしきりに笑つてみせる。——私は別に理けなどあつたのではないが無遠慮にもその傍に立つてゐた——で、私も微笑んでみせた。

かつて、日本唯一の海外文化輸入の大玄關であつたこの長崎のすさまじい文化の發達の結果をこの子が喰べたやうで——長崎の歴史——そう言ふ感情で私もながめて微笑したのであらう。旅人とは屢々こんな風にロマンチックに考へてみて、薄つぺらな哀愁に溺れたがる

MONEY EXCHANGE
兩替

「この女の兒こそ、長崎盛衰の歴史である。」私は、神父の如く虔謙な態度をとつて、かくつぶやいた。鼠色の廢館の背後に、まつすぐに大空をさして輝く天主堂の十字架を仰ぎながら——

殉教者の心臓のやうに嵌めこまれたステーンドグラスを目映ゆくみあげながら——

鳩が數羽、十字架の頭上で、羽ばたくのをみながら——

BAR

再びふりかへつて港を眺める——

大資本三菱造船所——長崎の死活は一つに大三菱造船所の一に係る、といはれてゐるその三菱造船所の飽の浦埠頭の偉觀を。すばらしいジアイアント、ハンマーヘッド、クレーン、立神のガントリー、クレーン、無數のジッガーポスト、巨船淺間丸を碇繋する第三船渠、電氣熔接作業工場から渦巻く白熱の強いさかんな焔。モーターボートの激しい往來、石炭船の黑い塊。荷船に密集する日傭人夫。すべてが生きて、すべてが活氣づいて、すべてがしつかりと生活力を把握し展開してゐるではないか。すばらしい生活力だ。すばらしい大資本の呼吸だ。すばらしいエネルギーの間斷ない燃燒作業だ。

だが、あばら骨を露出した鼠色の低い木造洋館の墓場と、一五〇噸の重量を扛げ得る自轉自在の大起重機、ジアイアント、ハンマーヘッド、クレーンと、相寄るものはないであらうか——。

私はこの二つの風景にむかつて、明確に相近よつてくるものを或る波動をしかも間近かに感じた。——一九三〇年、三月一日長崎に於て——

# 裸になつて

## ―放浪記―

林芙美子



四月×日

今日はメリヤス屋の安さんの案内で、親分のところへ酒を入れる。

道玄坂の漬物屋の露路口に、土木請負の看板をくゞつて、奇麗ではないが、ふきこんだ格子を開けると、いつも晝間場所割りをしてくれるお爺さんが、火鉢のそばで茶をすゝつてゐた。

「今晩から夜店をしなさるつて、晝も夜も出しやあ、今に銀行が建ちませうよ。」

お爺さんは人のいゝ高笑ひをして、私の持つて行つた一升の酒を受取つた。

誰も知人のない東京だ。恥づかしいも糞もあつたもんぢやない。ピンからキリまである東京だ。裸になり大手に、うんと働いてやらう。私は辛かつた菓子工場の事を思ふと、氣が晴れ晴れとした。

夜。

私は女の萬年筆屋さんと、當のない門札を書いてゐるお爺さんの間に、店を出した。

麥蕎屋で借りた雨戸に私はメリヤスの猿股を並べて「貳拾錢均一」の札をさげると萬年筆屋さんの電氣に透して、ランデの死を讀む。大きく息を吸ふともう春だ。この風には、遠い遠い思ひ出がある舗道は灯だ。人の洪水だ。

瀬戸物屋の前には、うらぶれた大學生が、計算器を賣つてゐる。

「諸君！何萬何千何百に、何千何百何十加へればいくらになる。皆判らんか、よくもこんなに馬鹿がそろつたものだ。」

高飛車に出る、こんな商賣も面白いものだな。

お上品な奥樣が、猿股を貳拾分も捻つて、たつた一ッ買つて行く。

お母さんが辨當持つて來る。

暖かになると、妙に汚れが目にたつ、お母さんの着物も、さゝくれて來た。木綿を一反買つてあげやう。

「私が少し變るから、お前　飯お上り。」
お新香に竹輪の煮つけが、瀬戸の重ね鉢にはいつてゐる。舗道に脊をむけて食べてゐると、萬年筆屋の姉さんが、
「そこにもある、こゝにもあると云ふ品物ではござりません。お手に取つて御覽下さいまし。」
私はふつと鹽ばい涙がこぼれた。
母はやつと一息ついた今の生活が嬉しいのか、小聲で時代色のついた昔の唄をうたつてゐる。
たつたつたつ田の中で‥‥
九州へ行つてゐる父さんさえこれでよくなつたら、當分はお母さんの唄でないが、たつたかたのただ。

四月×日
水の流れのやうな、薄いショールを街を歩く娘さん達がしてゐる。一ツ欲しいな。洋品店の四月の窓飾りは、金と銀と櫻の花だ。

空に擴つた櫻の枝に
うつすらと血の色が染まると
ほら枝の先から花色の 糸がさがつて
情熱のくじびき

食へなくてボードビルに飛び込んで
裸で踊つた踊り子があつ たとしても
それは櫻の罪ではない。

ひとすじの情
ふたすじの義理
ランマンと咲いた青空の櫻に
生きとし生ける
あらゆる女の
裸の唇を
するする奇妙な糸がたぐつて行きます。

花が咲きたいんぢやなく
强權者が花を咲かせるのです

貧しい娘さん達は
夜になると
果實のやうに唇を
大空へ投げてやるのですつてさ

青空を色どる桃色櫻は
かうしたカレンな女の

仕方のないくちづけなのですよ
そつぽをむいた
唇の跡なんですよ。

ショールを買ふ金を貯める事を考へたら、ゼントリヨウエンなので割引きの活動見に行く。フイルムは鐵路の白バラ。

途中雨が降り出したので、活動から飛び出すと店に行く。

お母さんは茣蓙をまるめてゐた。

いつものやうに、二人で荷物を脊負つて、驛へ行くと、花見歸へりの金魚のやうなお孃さんや、紳士達が、夜の驛にあふれて、藻のやうにくねつてゐた。

二人は人を押しわけて電車へ乘る。

雨が土砂降りだ。いゝ氣味だ。もつと降れもつと降れ。花がみんな散つてしまふといゝ。暗い窓に頬をよせて外を見ると、お母さんがしよんぼりと子供のやうに、フラフラしてゐるのが寫つてゐる。

電車の中まで意地悪がそろつてゐるものだ。

九州からの音信なし。

四月×日

雨にあたつて、お母さんが風を引いたので一人で店を出しに行く。

本屋には新らしい本がプンプン匂つてゐる買いたいな。

泥濘にて道悪し、道玄坂はアンコを流したやうな舗道だ。一日休むと、雨の續いた日が困るので、我慢して店を出す。

色のベタベタにじんでゐる街路に、私と護謨靴屋さんきりだ。

女達が私の顏を見てクスクス笑つて通る。頬紅が澤山ついてゐるのか知ら、それとも髮がおかしいのか知ら、私は女達を睨み返へしてやつた。

女ほど同情のないものはない。

ポカポカお天氣なのに道が悪い。晝から隣にかもじ屋さん店を出す。湯錢が貳錢上つたとこぼしてゐた。

晝はうどん二杯たべるの――拾六錢也――

學生が、一人で五ツも買つて行つてくれた。今日は早くしまつて芝へ仕入れに行つて來やう。

歸へり鯛燒きを拾錢買ふ。

「安さんがお前、電車にしかれて、あぶないちゆうが……。」

歸へると、母は寢床の中から叫んだ。

私は荷を脊負つたまゝ呆然としてしまつた。

晝過ぎ、安さんの家の者が知らせに來たと母は書きつけた病院の紙をさがしてゐた。

夜芝の安さんの家へ行く。

若いお上さんが、眼を泣き腫らして、病院から歸へつて來た。

少しばかり出來上つてゐる品物をもらつてお金を置いて歸へる。

世の中は、よくもよくもこんなにひゞだらけになるものだ。昨日まで、元氣にミシンのペタルを押してゐた安さん夫婦を思ひ出す。

春だと云ふのに、梅が咲いたと云ふのに、私は電車の窓に凭れて、赤坂のお濠の灯をいつまでも眺めてゐた。

四月×日

父より長い音信來る。

長雨で、飢えにひとしい生活をしてゐると云ふ。花壺へ貯めてゐた十四圓の金を、お母さんが皆送つてくれと云ふ。明日は明日だ。

安さんが死んでから、あんな輕便な猿股も出來なくなつてしまつた。

もう疲れきつた私達は、何もかもがメンドくさくなつてしまつた。

「死んだ方がましだ。」

十參圓九州へ送る。

「わし達や三疊でよかけん、六疊ば誰ぞに貸さんかい。」

かしま、かしま、かしま、私はとても嬉しくなつて、子供のやうに書き散らすと、鳴子坂の通りへ張りに出た。

寢ても覺めても、結局死んでしまいたい事に落ちるが、なにくそ！たまには米の五升も買いたいものだ。お母さんは近所の洗ひ張りでもしやうかと云ふし、私は女給と藝者の廣告がめにつく。

緣側に腰かけて、日向ぼつこしてゐると、黑い土から、モヤモヤ湯氣がたつてゐる。

五月だ、私の生れた五月だ。歪んだガラス戸に洗つた小切れをベタベタ張つてゐたお母さんは、フッと思ひ出した樣に云つた。

「來年はお前の運勢はよかぞな、今年はお前も、お父さんも八方塞りぢやで….。」

明日から、此八方塞りはどうしてゆくつもりか！運勢もへつたくれもあつたものぢやない、次から次から惡運のつながりだ。

腰卷きも買ひたし。

五月×日

かしまはあんまり汚ない家なので、まだ誰も來ない。

お母さんは八百屋が借してくれたと云つて大きなキャベツを買つて來た。キャベツを見ると、フクフクと湯氣の立つ豚カツでもかぶりつきたいな。

がらんとした部屋の中で、寢ころんで天井を見てゐると、鼠のやうに、小さくなつて、色んなものを食ひ破つて步いたらユカイだらうと思つた。

夜の風呂屋で、母が聞いて來たと云つて、派出婦になつたらと相談した。いゝかも知れない。だが生れつき野性の私である。金滿家の家風にペコペコする事は、腹を切るより切ない事だ。だが、お母さんの佗し氣な顏を見てゐたら、涙がダボダボあふれた。

腹がへつても、ひもじゆうないとかぶりを振つてゐる時ぢやない

んだ、明日から、今から飢えて行く私達なのだ。
　あゝあの拾參圓はとゞいたか知ら、東京が厭になつた。早くお父さんがゆとりをつけゝくれるといゝ。九州もいゝな四國もいゝな。
　夜更け、母が鉛筆をなめなめお父さんにたよりを書いてゐるのを見て、誰かこんな體でも買つてくれる人はないかと思つたりした。

五月×日

朝起きたらもう下駄が洗つてあつた。
いとしいお母さん!
大久保百人町のゆりのやと云ふ派出婦會に行く。
中年の女の人が二人店の間で縫ひものをしてゐた。
人がたりなかつたので、そこの主人は、デンピョウのやうなものと地圖を私にくれた。行く先は、藥學生の助手だと云ふ。

　道を歩いてゐる時が、一番ゆかいだ。五月の埃をあびて、新宿の陸橋をわたつて、市電に乗ると、街の風景が、眞に天下タイヘイにござ候と旗をたてゝゐるやうだ。此街を見てゐると、何も事件がないやうだ。買いたいものがぶらさがつてゐる。
　私は桃割の髪をかしげて、電車のガラス窓でなほした。
　本村町で降りると、邸町になつた露路の奥にそのうちがあつた。
「御めん下さい。」
　大きな家だな、こんなでかい家の助手になれるか知ら……、何度もかへろうかと思ひながら、ぼんやり立ちつくした。
「貴女派出婦さん!派出婦會から、何時に出たつて電話がかゝつて來たのに、おそいので、坊ちやん怒つてらつしやるわ。」
　私が通されたのは、洋風なせまい應接室。
　壁には、色の退せたミレーの晩鐘の口繪のやうなのが張つてあつた。面白くもない部屋だ。腰掛けは得たいが知れない程ブクブクしてゐた。
「お待たせしました。」
　何でも此男の父親は日本橋で藥屋をしてゐるとかで、私の仕事は藥の見本の整理で、わけのない事だつた。
「でもそのうち、僕の方の仕事が急がしくなると、清書してもらひたいのですがね、それに一週間程したら、三浦三崎の方へ研究に行くんですが來てくれますか。」
　此男は廿四五かな、私は若い男の年が、ちつとも判らないので、ちつと脊の高いその人の顔を見てゐた。
「いつそ派出婦の方を止して、毎日來ませんか。」
　私も、派出婦つて、いかにも品物みたいな感じのするところよりその方がいゝと思つたので、一ヶ月三十五圓で、約束してしまつた。紅茶と、洋菓子が日曜の教會に行つたやうに少女の日を思ひ出させた。
「君はいくつですか?」
「廿一です。」
「もう肩上げをおろした方がいゝな。」
私は顔が熱くなつた。

　卅五圓毎月つゞくといゝな。だがこれも當分信じられはしない。
　母は、岡山の祖母がキトクだと云ふ電報を手にしてゐた。私にも母にも縁のない祖母さんだが、たつた一人の義父のお母さんだし、

これも田舍で、しよんぼりと、さなだ帶の工場に、通つてゐる一人の祖母さんが、キトクだと云ふ。どんなにしても行かなくてはいけない。九州の父へは、四五日前に金を送つたばかりだし、今日行つたところへ金を借りに行くのも厚かましいし。

私は母と一緒に、四月もためてゐるのに家主のとこへ行く。拾圓かりて來る。澤山利子をつけて返へそうと思ふ。

殘りの御飯を辨當にして風呂敷に包んだ。

一人旅の夜汽車は佗しいものだ。まして年をとつてるし、さゝくれた身なりのまゝで、父の國へやりたくはないが、二人共絶體絶命のどんづまり故、沈默つて汽車に乘るより仕方がない。

岡山までの切符を買つてやる。

薄い灯の下に、下ノ關行きの急行列車が澤山の見送り人を吸ひつけてゐた。

「四五日內には、前借りをしますから、そしたら、送りますよ。しつかりして行つていらつしやい。しよぼしよぼしたら馬鹿よ。」

母はくツくツ涙をこぼしてゐた。

「馬鹿ね、汽車賃は、どんな事しても送りますからね。安心して、お祖母さんのお世話してゐらつしやい。」

汽車が出てしまふと、何でもなかつた事が悲しく切なく、目がぐるぐるまひそうだつた。省線を止めて東京驛の前に出る。

長い事クリームを塗らないので、顔が、ヒリヒリする。涙が止度なく馬鹿みたいに流れる。

信ずる者よ來れ主のみもと‥‥

遠くで救世軍の樂隊が聞える。何が信ずるものでござんすかだ。自分の事が信じられなくて、たとえイエスであらうと、お釋迦さんであらうと、貧しい者は信じるヨユウがない、宗教なんて何だ。食ふ事に困らないものだから、街にジンタまで流してゐる。

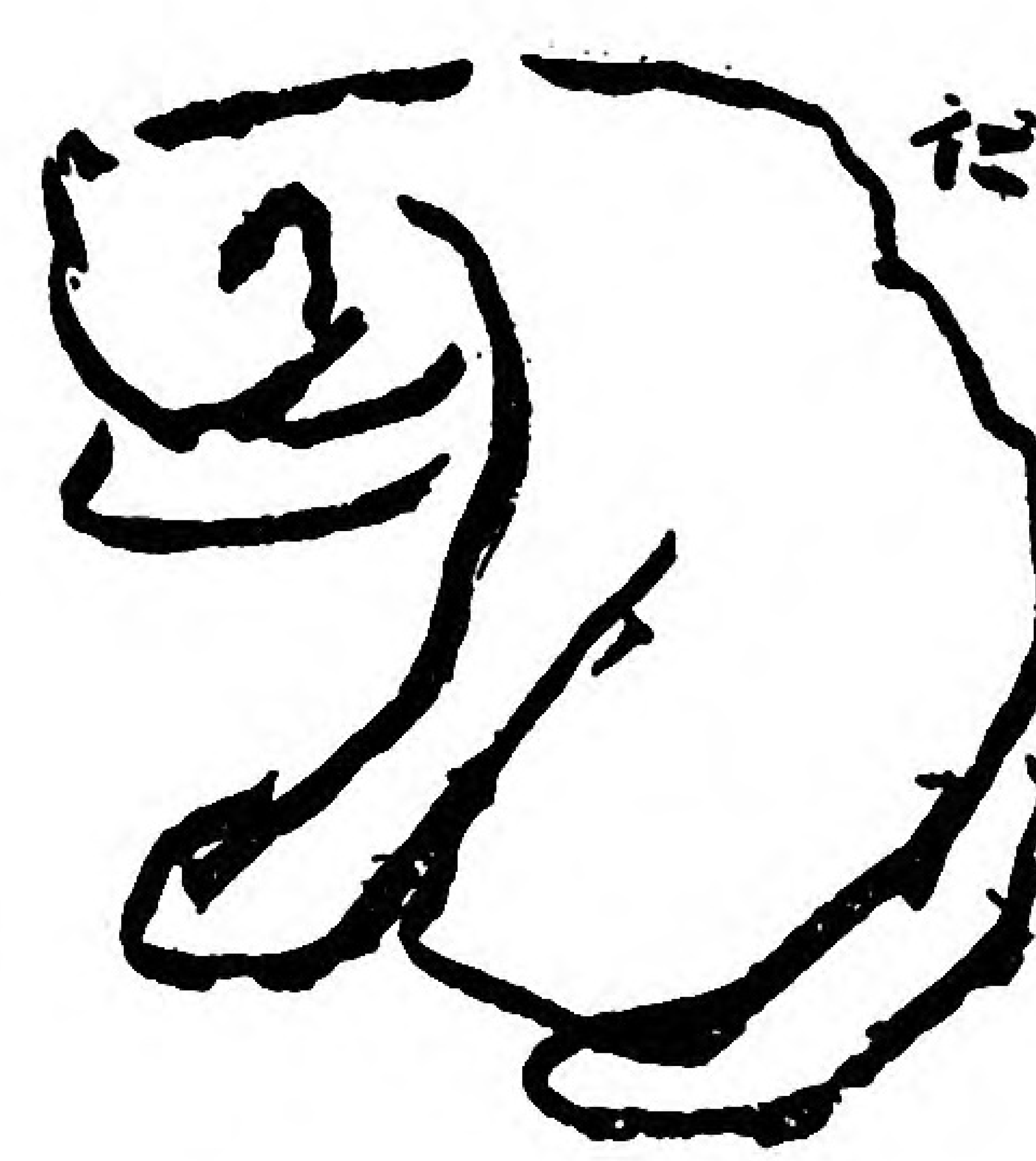
信ずる者よ來れ‥‥。まだ氣のきいた春の唄がある。

いつそ、銀座あたりの美しい街で、こなごなに血へどを吐いて、××さんの自動車にでもしかれてやろうか。

いとしいお母さん、今貴女は戸塚、藤澤あたり、三等車の隅つこで何を考へてゐます、どの邊を通つてゐます‥‥。

卅五圓が續くといゝな。

お濠には、帝劇の灯がキラキラしてゐる。私は汽車の走つて行く線路を空想した。何もかも何もかもぢつとしてゐる。天下タイヘイで御座候か――。



# 母性は狂ふ

池邊まさ子

一

稲は箒のやうにつゝ立つた。地上の水分を舐め盡した太陽は今日も焔のやうに燃えてゐる。もう一月も雨らしい雨は降らない。それでゐて一日中照りつけるのかといふにさうではない、定つたやうに小晝時になると豊後富士の中腹に氣取つた雲が出て、思はせ振な遠雷さへ呼んでゐるのだつた。

あと五日で舊のお盆といふのに百姓達はたゞ手を拱ぬいて龜裂した田に嘆息を吹きかけてゐる、何しろ今の雨は彼等に取つては死活の問題なのだ。

水神様の拜殿で難し立てゝゐる雨乞の太鼓の音が、張り詰めた空と乾き切つた大地との間を、神經質に燥いでゐる。

K部落を靜脈のやうに通つてゐる縣道の白ちやけた途を自動車が狂人染みて疾走してゐる。これはO市からY温泉に通ふ定期の自動車で、その乘客は殺風景なこの部落に取つては曾つては瞬間的な花であつたのだが、今はその水色と白と紅との花の色彩は、焦立つた村人の僅かに殘された水分まで吸收して逃げ去つた。

「あん畜生奴、俺達は死物狂ひで雨乞をやつてゐるのに凉しい顏して湯治とは何事だ。米ばつかり喰つてゐる癖に、米作りの苦勞も知らずに。」

こうした罵詈を痰と一緒に吐きかける百姓の唇に、自動車はガソリンと馬糞との砂煙を投げつけて去つた。

# アラスカ娘の戀

## 結婚、お産



「シャトルから北へ雪の曠野を進むと、チャップリンのゴールドラッシュでおなじみの人跡まれなアラスカの地へ出ます。かつては一攫千金の夢を持つた金鑛採掘の人達で賑はつた此地方も、今は氷と雪に閉されて齒の拔けた様に小さな部落が散在してゐるだけです。

アラスカ、インディアンの女性達の結婚期は十六七です、十三四の頃から戀をしますけれども同じ部落の若者達とは戀をしません。若者が娘に戀をした時はその戀を双方の兩親に打明けたのしい交際を始めます。しかし娘が若者を思

## 二

中風で片足蹇へた與平は朝から水神樣の雨乞に出掛けた。太作は商賣用の椅子に腰掛けて、前を通る人毎に愛嬌を振りまいてゐるが誰一人足を止めるものはない。華氏九十三度の炎天下に、微笑筋を强張らした人達は、かへつて太作の愛嬌を苦々しく見返るのであつた。その度に彼は言ひやうのない不快さに襲はれた。

「だから田舍者は話せぬといふのだ。自分の顏を置き忘れたやうに、てんで構つてもやらない。ど奴もこ奴も鬼熊の樣な面しやがつてさ。少し手を入れりや、さつぱりする事を知らねえんだからな。」

太作は理髮師だ。門司の工場町で鍛へた彼は、こうした田舍に燻つてゐなければならぬのが情なかつた。

「今時の若い者が、こんな山のなかに縮こんでゐるなんて、つまらない事だ。故郷に居る若い者は餘程の意氣地無しか、でなければ俺のやうな、馬鹿正直な親孝行者ばかりだ。」

太作は、體の不自由な父親や、苦勞性の母親を脊負つて、開業してゐる事に最初は、大きな張合を感じてゐたのであつたが、此の頃ではもう、伜の厄介になる父が親らしくなく、又いつも自分に氣兼ねする母が卑怯者に思へた。そして親の事を考へるのがひどく臆劫になつた時は、いつでも

「せめておせきが力になつて吳れたら、俺も自由に手足を伸ばすことが出來るのだが。」と嘆息した。縹緻のいゝ妹を收入の多い別府の旅館奉公に出し澁つて、町の紡績工場の女工に入れてしまつた親のやり口までが、彼は癪に障つてきた。

## 三

お盆が明後日に迫つてもまだ、夕立の一降りも惠まれなかつた。だが矢張りお盆はお盆で村は何となくざわめき出した。その日は朝からお客が混合つたので、太作は口笛吹いたりして上機嫌であつた。來客の顏を見ふけると、母親のおうのは室中燻らして七輪に火を熾し、そして髭剃りのお湯を沸す役目であつたが、その日は朝から湯釜に威勢のいゝ水蒸氣が渦卷いてゐた。

おうのは救はれたやうにホッとした。あゝして太作が怠屈で欠伸ばかりしてゐるのを見ると、彼の心がはつきり讀めるだけに、堪らなくつらいのであつた。

普段無口で、碌に挨拶も得言はない性質の彼女には、今日に限つて柄にもなく愛嬌を言つたり、饒舌つたりする自分自身が可笑しく思はれた。そしてどうかすると小娘のやうに燥いで見たくさへなる心理を、箸で抓み上げる氣持ちで味つてみた。

---

ひはじめた時に娘は男に自分のこころを打明ける事をためらつて彼女の神に祈ります。神それは七色の圓光となつて地平線の彼方に美しく現はれるオーロラなのです。

戀の炎に胸をもやしながら、娘はすべての身につけてゐるものをとりさり、裸になつて白い淸い雪の上に膝まづきます。素裸かの姿、土人の信念はこれこそ一番尊い、神聖な女性の姿であると考へてゐます。崇高な自然と信念の中で神に捧げられた娘の祈りは必ず戀人の胸にひびくと彼女たちは信じてゐます。

そして娘のおもひが若者の心にしのびこみ、しあはせがその頭上で舞ひその若者こそ未來の良人よと定められた時に娘は一室に監禁されます。それからは異性といふ名を持つもの、例へそれが彼女の父親であらうとも、彼女に逢ふ事は許されません。三ケ月から一ケ年位の間彼女は誰にも會はずただ母親のみに世話をされて暮らすのです。

母親はこの期間を利用して娘に結婚に必要なすべての知識を授けます。性教育がその主なものであることは云ふまでもありません。〇〇の仕方、分娩の仕方、育兒、そ

「そうだおせきだ、あの娘のことで一杯なのだ。」お盆には歸るおせきのことが、腹の底からぎつちり詰つてゐて、太作の上機嫌が、その嬉しさを操り出して呉れるのだ。

おうのはまたしてもお正月に歸つた時の我娘のことを思ひ出してみた。

おせきの働いてゐる××紡績工場は部落から廿里離れたS町にあるのだが、一年に盆暮れの二度しか歸宅を許されなかつた。その半年見ぬ間に見違へるほど娘らしくなつてゐた。この正月に、桃割れに結はして、時代後れではあつたが、自分の娘の頃欲しがつて得られなかつた淡紅色のくゝしを一杯にふくまして、矢がすり銘仙を着せた時は、我娘ながら容易く寄りつけないほど美しかつた。風呂に這入つて、あの兩手で揉み上げたやうな格好のいゝ腰の邊や、すんなり伸びた肩から脊を流してやる時には、胸が一杯で何故といふことなしに涙が流れて仕様がなかつた。

おうの追憶は、こうした微笑ましいものばかりであつた。

そうだ、おせきはもう十八になつたのだ。母として言つておかねばならぬ大事なことが澤山ある筈だ。今までも歸る毎にその事を思はぬでもなかつたが、どうしても觸れる勇氣がなかつたが、今度こそ、何もかも話してやらう。

「あの娘も厭がつてゐたから、工場の方はもう止めさして、何處ぞ、こう固い家庭でも見習ひに出してやりませうかなあ、もう年頃だし少しは縫物や手習ひをさせておきたいもの。」

おうのは縫物の手を休めて、側の土間で莫蓙を打つてゐる與平にそう話しかけて見た。

四

空氣は益々乾燥して屋根の麥藁がピシ〳〵鳴り、稻の葉先きは黃色くよれて、白い塵がたまつた。明日からお盆といふので、男衆は皆鎌や鍬を擔いで墓場の掃除に行つたり屋敷廻りの雜草を引き拔いたりした。流石に今日は閑人がないと見えて水神樣の囃は聞えなかつたが、どの家からもコッ〳〵と懈い餅の音が響き渡つた。

午後三時、小晝時で此の地方の習慣として皆午睡した。午後の店先きでも二三人のお客が將棊盤を間に挾んで眠入つてゐた。太作が喉を鳴らして居眠りしてゐるお客の顋にシャボンの泡を浮かしてゐる時、二臺の俥が彼の家の前に止つた。二人の嚴めしいお客が店の用でない事を見て取るとおうのは慌てゝ二枚の木綿縞の座蒲團を竝べた。

店の土間續きの六疊が唯一の客室でもあつた。そこに眠つてゐた先刻のお客は吃驚して目を醒すとこそ〳〵と逃げ出した。

の他あらゆる主婦となつてからの仕事の敎育をするのです。お產は宗敎上の信仰から母親にすら見せません。勿論お產婆さんなどといふものが居るわけもありません。お產は完全に母親になるところの彼女一人によつて取り片付けられます。彼女はお產のすぐ前まで働いてゐます。產氣づいて、お腹がいたくなると彼女は爐の傍へ來て素裸かになります——彼女達の最も神聖な姿——そして火の燃へてゐる二本の棒を口にくわへて戶外に走り出ます。寒風の吹きすさぶ、どこまでもどこまでも眞白な雪の床、深い無限の大空の下、それが彼女の產室なのです。裸の姙婦は、自分の手で積つてゐる雪をかきのけ自分がしやがんだ時丁度その頭がのぞく位の、大きな穴を作ります。口にくわへた二本の棒は赤ん坊の臍の緖を切る爲の物です。

お產がすむと產婦は赤兒を抱いて家に入ります。そして氷を溶かした冷たい水にザブンと赤兒をつけます。赤兒は鋭くギヤアと泣きます。こうすることによつて赤兒の體內に持つてゐる汚物を一度にはき出させて仕舞ふのです。

この一寸慘酷に見える方法がい

來客といふのは、六十格好のでつぷり肥つた老紳士と、三十代のこれもりゆうとした風采の男であつた。彼等は閾を跨ぐと先づ高速度に視線を四邊に走らした。

芒のやうに白ぼけた大鏡、赤土の練かまど煤けた湯釜、薄暗い隅の板の流しには、剝げた瀬戸引きの鍋が置いてあつた。彼等は世にも汚らはしい物を見せつけられた不快さに眉を顰めたが、牛のやうに默々と蠢動いてゐる理髮師を見た時、ふゝんと冷笑が鼻の先きに突き上つた。そして甚だ張合ひが拔けたやうに、坐り込むと、無遠慮に絽の紋付羽織を取り、着物も襦袢もかなぐり棄てゝ、ガーゼのシャツ一枚になつて、汗を拭き始めると香水の匂ひがプンときた。

おうのはおづ〱と缺けた茶碗に澁茶を入れて勸めたが、彼等はそれには目もくれず、痛い足を屈げて四角張つて坐つてゐる與平に話しかけた。

「實は我々は××紡績會社の者ですが。」

肥つた方が横柄に口を切ると、勿體振つてもう一人が語句を繼いだ。

「このお方は社長代理で湯澤と仰言います。僕は森といふ會社に關係ある辯護士ですがね。」

社長、辯護士、この名詞が與平夫婦に働く効果をじつと看守りながら。

「その、實は、」

と言ひかけた時、おうのは堪へ兼たといふ風に、

「あの、おせきの事で何か。」

彼女は××紡績といふ言葉を聞いた瞬間に、さつと冷たいものが中樞神經を筒拔けるのを感じたのだつた。

湯澤と森とは視線を合はして寸時暗い表情になりかけたが、やがて森は廣い額にしやく〱たる餘裕を見せて、

「はあ、その娘さんの事に就きまして、ちつと複雜した話がありまして。」

そして彼は顋で土間のお客を指したのでおうのは立つて太作に耳打ちした。お客が慌てゝ出て行つた後で太作は父親と竝んで彼等に相對した。

## 五

森は、その事を朗讀するやうな滑らかさで饒舌り出した。

「この事に就いては、會社側には少しも責任はないのです。責任どころか甚だ迷惑を感じてゐる次第ですが、御存じの通り社長さんが大變な人格者だもんですから、大いに憂慮されて」

と言ひかけて、憂慮を心配に言ひかへてから、またくど〱しい前提が續いた。

「つまり、會社は破格の同情をもつて、事に當つてゐる次第でありますから、その點をようくおふ

かに健康に利益があるか、之は最近科學にピッタリと合つてゐるそうです。

産婦を温い部室におく事は分娩時の運動が激しいために熱を出してそれが原因となつて風邪をひく樣なことが多いのですが、寒い場所だとそんなことのおそれがなく又分娩のすぐ前まで働く事は産婦の健康のためにもいいことだそうです。

それから二本の棒で臍の緒を切りとるといふ事は出血を防いで、鋭利な鋏で切つた時の樣な角がのこらないので非常にいいと云はれます。（讀賣三月三日宮武氏談話より）

## 小花瓶

### 蛸の同志食ひ

九州箱崎水族館では水槽に入れて、十何匹といふ蛸坊主を觀覽させた。ところが食べものが足りないので蛸が蛸同志の足の喰ひあひをはじめ最初は一寸二寸と喰ひきつてゐたが、一ケ月もたつと足をみんな食べてしまつて足なし蛸坊主ばかりがコロリ〱と轉がつてゐる（九日ヨリ）

落首

くみ下さらんければ困りますので」

おゝじれつたい、おうのはそう叫びたいのをじつと抑へて、

「娘がどうかしたと仰言るのですかな、どんな大それたことを仕でかしましたな」

このおうのの一言は萬貫の重力で彼等の脳頂にぐわんときた。流石の森もたぢ／＼の態であつたが、然も尚ひん狂つた餘裕を唇に載せて、

「つまり、娘さんは自殺したんです」

そして追ひ被せるやうに

「その爲會社は飛んだ災難を被りましたが然し」

「そ、それはまた何とした事でございまする、その譯を聞かして下され」

與平は男だけに、言葉扱ひだけは亂さなかつたが、おうのは血の氣のない顔を強張らして、喉だけヒク／＼させてゐた。太作は太作で、今にも掴みかゝりそうな形相で彼等を視すえた。

森は、こうした鋭い襲撃を手の平で受け止めるやうな格好をして

「まあ／＼お氣を沈めてお聞きを願ひたいものです。事の起りといふのは、えエと、露骨に申しますれば、娘さんが仲間のものを盗まれたといふ嫌疑で、女工監督の原口君が、一應の取り調べをやつたんです。ところがそれが餘程口惜しかつたと見えて、昨夜原口君が宿直でしたので、そこに辯明に行つたらしいのです。そしてすぐ寄宿舍の方へ歸つたものと思つてゐましたら、今朝宿直室の側の物置きで、舌を嚙み切つて自殺されてゐるのを發見いたしまして」

「いや、お愕きになられるのも御道理です。原因は兎も角として、親御としてお悲嘆なさるのも、十二分御同情いたします。然し今森君が話されたやうな次第でありまして、何ともいや、致方がございませんでね」

今まで、押し默つてゐた湯澤は、従み／＼これだけ言ふと、額の汗と一緒に瞼に滋つた涙を拭うた。彼にもおせきと同年輩の娘があるのだつた。

「いや御無理もありません。御同情しますよ。」

この親子の樣子を正視しておれないといふやうに、湯澤がこうした言葉を繰返してゐるのを、森は苦々しく思つた。人のいゝ彼がこの上何を言ひ出すか知れないと思ふと森は、一時も早く此處を引上げるべく話を進行させた。

「兎も角此の上は、事件の解決を急ぎませう。」

その白々しい事務的な澤を持つた森の言葉に、おうのの萎み切つた神經がぐいと頭を擡げた。

「娘が、おせきがどうして死ぬもんか、あの娘は自殺などする娘ぢやねえ。」

そう言つたおうのの顔が前に伸びたかと思ふとそのまゝ前のめりに昏倒してしまつた。

京わらんべはいつも口がわるい總選擧の落首。

「東京一區」活き死にの堺に立つた利彦さん、さても無産な最後なりけり。

「東京二區」歌舞伎ぢや左團次民政ぢや彌團次、さても千兩役者なり。

當選が安部こべとなり礒雄外。

「東京四區」幸運は儀十に眞鍋と意氣を揚げ。

龍介も雲を起さず白蓮の池に潜みしうたてさよ。

「東京五區」誰も加藤と思つてゐたが、勘十逢ひでまたも次點者。

「東京六區」大澤ぎ近藤も淺賀犠牲なり（日日ヨリ）

**田舍なりけり千葉の船橋**

若い看護婦さんが日本國の新紙幣をもつて吳服店へ買ひものにいつたら店員は僞札と思ひこんで警察署へ密告した。署員さん取るものも取敢ず駈つけて——さてくだんの紙幣を銀行へ返し鑑定を求めると「三月一日發行正に日本帝國ホンモノの新紙幣なり」警官恐縮

**釘抜きて命の根を拔く**

いかに[illegible]頑痛な男だとて、六十歳にちかひ分別男が釘拔きでむし歯をぬいてコロリと往生。而倒く

# 六

おうのの意識は、あのO市からY温泉に通ふ乗合自動車の爆音によつて覺された。

目を開くと、簞笥の上の佛壇に明々と燈明がはいつて、百日草の紅い花が挿してあり、お佛飯からは湯氣が立ち昇つてゐた。

無論その室には湯澤も森も居なかつた。近所の女衆が枕元に顔を竝べ、彼女達の浴衣から腐つた飯糊の匂と、汗とが一緒になつてむせ返してゐた。開け放つた窓からは夕靄が覗いて、そのなかをハラ〳〵蝙蝠が泳いでゐるのが見えた。

「おつ母が目を開けた。」

太作は子供のやうに叫んだ。

「氣をしつかりして呉れよ。」

與平は泣聲であつた。

その晩、近所の者が歸つた後で、與平はおうのに話しかけた。

「おせきは不憫な奴ぢや、あれも、あれだけの壽命といふもんぢやろ。だがなおうの、あのお方達もそう仰言つたが、自殺の原因がようないから、皆にそう言ふと、佛の恥を曝すやうなもんだから、急性肺炎といふ病氣で死んだ事にしてあるのぢやよ。死體はな、夏分で時季が惡いから火葬にして下さると言ひなされた。役所の手續きもなにもみな向ふ持でして下さつてな」

「父あんは迚ても行けないから、俺が行つて一目でもおせきの死顔に逢ひたい　言ふたんぢやが、おつ母が心配だから介抱が大事だといふて止めなさるので。そしてなO市からわざ〳〵いゝ醫者を呼んで下されたのぢやよ」

「いや人間といふものは、老少不常とはよう言つたもんぢや、あの娘の壽命も生れた時からちやあんと決つてゐたといふもんぢやろ」

そして與平は脣だけで念佛を稱へた。

「おつ母もう諦めて呉れな。出來たことは仕樣がねえからな。まあ、おせきも家で死んだんなら、金かけて手は盡せなかつたらうが何しろ、金の多い會社ぢやけに、あらゆることはして呉れたそうぢや、それに」

太作は與平の顔をちらと見て、また續けた。

「なあおつ母、先刻の人が、金置いて行つたんぢやよ」

「金を？金を？」

今まで、無氣味なほど押し默つてゐたおうのが金と聞いた時、サッと目の色を變へた。與平はその貰つた金額を言つたらどれだけ彼女が安心するだらうかと思つたので、

「勿體ない事ぢやよ。おうのの五百兩だ」

「馬鹿！」

---

さくなつていいと死者はいふかもしれないが檢視の係官が「よくもこんな大きな齒を拔いたものだとあきれた位の大きなもの。この爲職さん細君が、孫が生れたおめでたに出かけた留守齒が痛んできたので、五寸釘をぬく手際でやつちやつたのだ。

**三種の三ツ兒**

南米に住む白人の夫婦の間に三ツ兒が生れたら、その一人は白人一人がインデアン、一人が黑人といふ皮膚の色、悟つた旦那さん欣然と聖書の「三聖人」の名をとつて、ガスパー、メルヒオール、パルタザーと名づけた。

**いまロビンソンの三青年**

無名の島に一月間海賊と一緒に暮した三青年は支那ジャンク船の乗組員となり東支那海を航海中、●今年一月五日夜暴風雨にあつて船は沈沒、十日朝汕頭沖合の無名島に漂着したが、島は有名な海賊島だつたが可愛がつてくれたので心ならずも働いてゐた。徵兵檢查の適齡の事情を海賊の頭目に事情を述べたら上海まで送り歸してくれたのだ。小學生用キネオラマにでもなりさうなおはなし。

**原始少年**

山男の少年時代――千葉醫科大

爆彈のやうなその聲であつた。
「五百兩が千兩でも娘の生命が賣れるか。あゝ口惜しい、金の前には親も兄弟もあつたもんぢやねえ、父あん、太作よ、そんな金貰つて嬉しいかえ。私は、私はおせきが欲しい、何もいらない、この體も不用ない、おせきを歸して吳れ、おせきや」
「な、なにを言ふのぢや、こら、おうの」
　刎ね起きようとするおうのを與平と太作は力一杯制した。彼女は氣が狂うたと思つたのだ。
　氣が狂ふどころか、この場合自分の心が一番正當だと、おうのは思つた。他の者はみな金の爲に歪められてゐる、あれほど娘を可愛がつてゐた與平も、太作も、今になつてみれば頼りないものであつた事が分つた。腹を痛め血肉を分けた母親でなければ、本當の慈悲はないのだとも思つた。
　おうのは目を閉ぢると、おせぎの自殺の刹那の痛々しい心情が、判然と心ぞうに響いたがその自殺の原因は漠然として摑めなかつた。
　母と子の不可思議な心靈作用は、おうのに大きな謎を投げたのだ。
「あの娘は一時の逆上で死ぬ様な娘ぢやない。あれが、死ぬ原因と言ふものがあればたつた一つだ」
　あの娘は赤ん坊の頃から、確りこの兩腕に抱いて育てたのだが、それはただ體だけではなかつたあれの心が成長して行けば行くほど自分も心の埒を擴げて來たのだ。
　おうのは不圖、いつかおせきの言つた事を思ひ出した。
「標緻のいゝ女工には監督さんが着物を買つてやるのよ」
　と。そしてまたいつか新聞に出てゐたといつて太作が話して吳れた、監督が片端から美しい女工に手をつけて、姙娠させては手切金で濟ましてゐたといふことも考へ出した。
　そう考へ合はして見れば、會社から來たあの男達の言葉に疑ふ餘地がいくらでもあるやうな氣がした。そして何故あの時もつと突詰めて糺さなかつたか後悔した。
「矢張りそうだ、自殺がほんとなら、彼奴らが×したに決つてゐる」
　おうのはそう思ひながらも、今はもう誰一人話し相手になつて吳れるものゝないのが悲しかつた。良人とも伜とも融け合へない物が橫つてゐることを感じて、言ひやうもなく淋しかつた。

七

　おうのは神經に異常を呈したのか、昏々と眠つてゐるかと思ふと、急に興奮して色々な事を口走つた。その夜が白々と明け初めた頃用達に立つた

學精神科教室に備えられてゐる十五歳になる少年。言語は「ウン、うまい」といふ一言だけ知つてゐる。それも一年餘りも醫員がならした結果で、食物を與へておいて强く合圖をしなければ發しられない。聽覺、觸覺、視覺の三神經を集中させてやつと吐ける一語だ。あまり類のない高度の白痴全然教化不可能の患者に屬してゐる。父も母も精神病者で、人里離れた山林の中にすみ一切村人との交渉を絶つて草根、木皮鳥獸を常食としてゐたが死んだ。だからこの少年は火食を知らない、兎鷄雀、魚類を捕へて生食して生きてきたのだ。この原始少年がつかまつたのは、更科村といふ村で毎夜のやうに鷄や兎が盗まれだしたので搜査すると、ある日、村人が山路を歩いてゐるとふと山影に、バタバタ羽ばたきをしてゐる鷄をうまさうに食べてゐる少年を發見した。あはてると幽靈も枯尾花のやうなもので人食人種があらはれたといふ騒ぎになつて、あはれや彼は山野から捕へられ、人家の檻の中へつながれた。

**アトランチダ大都市**

　アマゾンの神秘の原野をさぐつてゐたブラジル第一流の探檢家ポ

と思つたおうのは、突然佛前に供へてあつた熨斗包みの金を摑んで外に出やうとした。與平も太作も顏色變へて後から抱き止めるとおうのは、意外にも穏やかな調子で、

「兎も角、私はおせきの死顏を見に行くよ。いくら何でも、我娘のゆくわんを他人にさせるなんてなるもんかよ。それに、若しおせきが不心得で自殺したんなら、なほのこと、會社に一文の迷惑もかけては濟まんし、こんな金なんか貰ふどころの話ぢやないよ。な、さうぢやろ」

與平も太作もむんずりとだまつてゐた。

「それでいゝではないかな。あんた達が何と言はうと、本當におせきの心が判つてゐるのは、私一人ぢやからな。私は、私のいゝやうにするよ」

そしておうのは黄ろい笑ひで二人を白眼むやうにして、

「ついでに私は寄るところがあるのだよ。新聞書いてゐるところだ。新聞は何でも本當の事を書いて下さるからな、屹度おせきのことも知つてゐるよ」

いよ〳〵氣が狂うたと思つたので、與平と太作は有無を言はせず、おうのの手から金包みをもぎ取つて、彼女を蒲團のなかに押し込めた。

やがておうのがまた昏々と眠に陷ちた頃、父と子は話した。

「そうだ、矢張りおうのの言つた通りぢや、この金は返すことにしやう。こんなものがある間はおせきの事が思ひ切れないからの」

「……」

「これからはお前に一倍迷惑をかけるけんど、許して吳れよ」

暫時して太作は

「父あん。折角先方でも厚意で下さつたお金だから、有効に使つた方が、佛のためにもなることだが。それにおつ母もこんな風だとなか〳〵舊の體には戻るまいしするから、その金で當分家の生活を立てゝ吳れたら、俺はまた暫時稼ぎに行つて來ます。そして今度こそ月々仕送りをすることにすれば皆が都合がいゝ」

「うん、それも理屈が通つてゐるな」

與平は、太作の言ふ方法が賢い樣にも思へた。

「おせきも可哀さうだが、死んだものはもう歸らんし……」

與平がボソ〳〵つぶやくと蒲團の中から飛上つて、おうのは怒鳴つた。

「お前ら、おせきを殺した金で食ふ氣か？うぬ、餓死して祟つてくれるぞ。」

---

ルドン將軍はバルボザ博士の一行を護衛しながら此程その流域の奥五百哩の地點に巨大な岩を發見しそれにしるした象形文字に依つて今から四千年以前に、フエニキヤ人がはる〴〵大西洋を越えて此地に來て、その名もアトランチダといふ大都市を建設した事が明瞭になつた。コロンブス以前の米大陸發見者の遺跡である。

### 親の命令

現金に引替へてこい、と親父から言ひつけられ酒樽四十樽と一緒に酒庫生活、パンをかぢつて一ケ月、ところが酒庫の持主に金をかした者がトラックで押かけ二十樽を運び出したから大悲劇になりかけた。關係者一同引致、その結果酒四十樽の代金この孝子に拂ひませえ！　笑へぬ喜劇です。

### 夫婦喧嘩服

嬶天下と空つ風の上州は館林町松の湯裏の大五郎サン、おかみさんは髮結さん。御多分にもれず大さんは遊んで暮す身分だが、お尻に敷かれて威張られては男のコケンにかかはるから毎日一度は定例で大立廻り。そこで大さん世間むきは柔道二段とガンペルがいつも女房に負かされて血だらけ、双方着物はズタズタに破れるから時節



# 生活の遊戯

矢野二三

一郎の瘠癪は、火山の爆發の様なすさまじさで破裂した。

「何つも一度言つて見ろつ」言ふより早く空になつた銚子をちやぶ臺の上に發止と投げつけた。次に盃を。醤油の入つた醤油入れを。それでも民子が默つて居るので、足を揚げてちやぶ臺をいきなり蹴飛した。四疊半一杯、瀬戸物の破片が散亂し、茶簞笥や襖迄醤油のとばちりを受けた。絽刺しの枠を片手に、部屋の隅迄飛び退いた民子は、突立つた儘、非難と、輕蔑と、憎悪とに燃える目で、一郎を見据えて居た。

「言ひますとも」民子は唇を慄はせ乍らも、わざと落付いて憎々しく言ひ放つた。

「私はいつ迄たつても貴方を幸福にする事は出來ないんです。私達は性格的に一致しないんですから」

「よし。分つた。君は少しも反省しようとはしないんだな。俺はやる處までやつつけるぞ」彼は振り上げた拳で襖を一つどしんと突いてから荒々しく出口の障子を開けて、もう戸締りのしてあつた玄關を開けて外へ飛び出した。

「ふん、夜通し飲んで廻つたらいゝ」妻の毒口が後からから浴せかけた時、彼はぐつと肩をそびやかしたが、そのまゝ歩き出した。だが彼は家を離れるともう淋しくなり初めて居た。

「あんなに亂暴するんぢやなかつたなあ。俺はあの大事な盃を壞さなかつたかしらん。だが何て氣の強い女だらう。理屈ぢや負けないんだから。何だつて？『貴方との戀は初めつから強られた戀なんです。私の眞實の戀人はやつぱり順吉さんなん

---

がら大經濟と心附き、話し合の上柔道着の古着二枚買入れ、いざと口喧嘩のうちに手早く着用、武者ぶるひして裏の廣場へ飛出し、いざこい來れと晴れの大立廻り。

**墓掘り天職**

墓掘りを天職とする事二十年、他人の掘つた穴にはひるは一生の恥辱と意地を張つたドイツ人ジョハン君とう／＼村から姿を消したが、その行方不明の本人から村へ手紙をよこして「私はもはや死期が近いと思ふからかねての主張通り他人の掘つた穴へなど入るは金輪際いや、だから自分で墓を掘つてはひる――」

## 讀者通信

福島縣　××子

昨夜雨催しのある不安な空をながめ／＼女人藝術の三月號を求めに町に出てゆきました。いろいろな家庭の事情で雜誌も思ふやうに買はれない、そして又讀む事も出來ない私です。本屋に行つて喰ひつくやうに女人藝術をさがし求めなければなりません、なぜなら「女人藝術は何處にあるの」などとうつかりきかれません。此町で『改造』と『女人藝術』を買つてゐる

です。貴方とは性が合はないんだから何處まで行つたつて融け合ふ日の來る筈はないぢやないの』と奴はぬかした。大體順吉を忘れずに思つてるからいけないんだもう子供迄ある男ぢやないか馬鹿な奴だ彼はぐど／＼と口の中で呟やき乍ら、馴染の洋食屋の前へ來るとその中に吸込まれた。「あらあんた又醉つてらつしやるの？」疳高い聲でがや／＼言ひ乍ら、唇を眞赤に塗つた白い顔が二つ三つまはりに集つた。

「ウヰスキーだ。ウヰスキーを呉れ」妻を怒鳴りつけて出て來た彼には、無智低級な他の女の存在は餘計に心をいら／＼させるだけだつた。只彼には酒だけが必要だつた。彼は頭をかへして卓の上に目を落した。女給を遠ざけてちび／＼と呑む酒は、心が晴々して居ない時だけにそれ程うまいとも思はなかつたが、自分では醉つて居ないつもりでも彼が外へ出た時は、赤い交番のあかりがぼーと霞んで二つにも三つにも見えたりした。もう四邊の店は皆ねてしまつた、白毛の野良犬が、電車にでもひかれたか三本になつた足を抱く樣にして道の片隅にねて居る丈で人一人通らなかつた。

彼は家の前迄辿りついた時、ウヰツーとおくびをし乍ら板塀に寄りかゝつて、たるんだ目ぶたを無理に開けようとして額にいくつも皺を寄せた。彼の妻に對する憤懣は最早朦朧とした影のうすいものになつて居たが、妻がどんな機嫌で迎へて呉れるかゞ一寸氣になるのであつた。だか彼は又にやりとした。

「なあに構ふもんか。うふゝへべれけだい。へべれけで身體の利かない風してごろりとねてやるんだ。さうすりやあ民子が、寢床に引ずつて行かあ。奴案外あつさりした女だからな。だがと、又腕を一つ二つつねられる位の事はあるぞだが滿更でもないや」

彼はがらりと戸を開けて、それでも戸締りだけはちやんとすますと障子を開けた

「おーい歸つたぞ！出て來ないかあ」と醉聲を張り上げるなり、ぐたりとそこへねてしまはうとした。が、ふと見ると電燈の笠から何か字の書いた紙片がぶら下つて居る。

「はてな」彼はそつと次の部屋を覗いて見た。布團の中が空つぽである。彼はふと不安におそはれて伸び上ると紙片を握んで讀み初めたが見る／＼顔が緊張して手にした紙をばつたりと落した。

「私は貴方のよき妻となる事は永久に不可能なのです。私は有の儘の私を受け入れて呉れる世界を求める迄の事です。何卒私の行方をお探し下さいますな　一郎様　民子」

彼の醉が一時にさめ果てゝ、唇がピク／＼と痙攣した。彼は飛び上る樣にして臺所と便所とを覗

---

者は誰と誰だ。この二つの本は今もつとも危險な『赤い本』である。そして本屋を稱して『女人藝術、改造』の讀者は危險人物として臺帳に載せておく。私のこの小さな町の田舍××には、自分の頭で自分の探偵で危險人物やマルクス研究者をさがす事が出來ないので雜誌の讀者によつてその赤白を勝手にきめて扱つてゐるやり方です。

全く彼等の×鈍な理窟から出た厭制です。それで女人藝術一册買ふにさへ小さくなつてゐなければなりません。悲しいことです。なんとかならんものでせうか。そして早速手に入れた本の頁をめくるのももどかしい程でしたが目次に女人大衆の目錄が出てゐるにもかゝはらず實際はこの女人大衆が入つてません。どうした事でせう、本屋に聞けば解らないといふ。どの本をめくつても入つてゐないのです。これはどう云ふわけなのでせうか？　女人大衆はほんとに私共貧しい知識のものにとつては得がたい立派な一卷の書です。私は毎月／＼のを保存しておいて、いつか一まとめにして製本でもしようなどと樂しんでゐましたのに。どうした事でせう、脱落したのでせうか、それから各地の女人聯盟

いた。だが妻は居ない。

「しまつた」彼は再び紙片を手にして呆然とした。そしてふと裏返して見た。

「でもどうしても私のありかをお探しになるのでしたらお座敷の押入れをお開けなさいまし。そこには實に驚くべき事實が、總てを貴方に説明するでせうから 彼は血相かへて次の間に走つた。血みどろになつて息のたへた愛妻の姿が、彼の眞暗になつた目の先きにひろがつた。押入を開けた。

おゝ彼の極度に大きく見開いた目の前に、髪を振り亂した民子が白い腕を力無く伸して積み重ねた夜具の上に突伏して居るではないか。彼は息をつめて彼女の肩に手をかけて抱き起さうとした。

「民ちやん！」叫ばうとしたが舌が硬ばつて聲が出なかつた。と、其時である。

「おほ……おほ……」民子はこらへて居た笑ひを吹き出し乍ら顔を上げて一郎の大すきな可愛いゝ顔を夫の前ににゆうつとつき出した。

「どう！驚いて？」

「わあつ」と一郎はつきつめた感情が急にゆるんで聲が上げて疊の上に泣き伏した。民子は一瞬間笑ひをとめたが、押入から疊の上にぴよこんと身輕く飛び下りるや彼の脊中の上に被さる様にして又笑ひ崩れた。

「おほゝ……ね！驚くべき事實、分つたでしよ」

やつと涙を納めた一郎は彼女の手をぎゆつと握つた。あゝこの可愛い、暖たかい手を又握る事が出來たのかと思ふと又一しきり涙があふれおちた。彼はどもり〳〵言ふのだつた。

「君に限つて、無分別な事は、すまいと思つたんだ。でも、でも僕は、心配したんだよ、よかつた。僕うれしい。」酒は一郎を理も非も分らぬ、氣狂ひの様にもし、意地も張りも見榮もない子供の様にもするのだつた。彼女は三時間前とはまるきり違つた人のいゝ素直な一郎を目の前に見た。

「私に戀を打明けた頃の一郎さんは、こういふ風だつたのよ。こういふ風だつたのよ」と彼女は自分の胸に囁いて甘い記憶を呼び醒した。

二人が結婚したのは二年前であつた。民子は一郎を知る前に、順吉といふ青年にやるせない片戀をして居た。だが彼女には、自ら戀を打明けようなどゝいふ事は思ひもよらぬ事だつた。誇りの强い意地の勝つた女にとつて、自分の胸を明してその戀をはねつけられる程慘めな屈辱はないからだつた。そしてそこへ丁度現れたのが一郎だつた。一郎の、眞劍なる純情を捧げきつた戀に、彼女は次第にひきつけられて行つた。奔放な熱情家である彼女は、たとへ死ぬ程の戀であらうとも、響かぬ鐘を打ち續けなければならない様な絶望的な片戀の中に、彼女の青春を、否一生を閉ぢ込めてし

---

の發達を私共北國の聯盟員は羨やましく存じます。東北といふと、何事にもおくれてゐるやうです。勿論聯盟支部もないからでもありませうが、一回位でもいい本部の皆様の講演を拜聽し度いと望んでをりますが。支部若しくは研究會を組織するにも誰方が女人藝術を讀み聯盟員になつてゐられるのかさへ知らない有樣ですから。

**福島縣　×川　陽子**

創刊の廣告を見て初めて、此處の本屋に頼んだ私が、直接讀者になるため先達てことわりにまゐりましたら、あなたがとらなきや他に毎月とる様な人がない、偶に買ふ人があつても、男の人達で、東京あたりから來た學生さんが主です、とそんな事で、私は少からず悲カンして居ます。それからもつと自分の弱さを悲カンしてることが澤山あります。

第一に、令陽製絲の女工さん達に、讀書が盛んなので、女人藝術及び女人大衆を、近くから通つてる娘さんに頼んで、皆に讀んでもらう様にして居たのですが、私が暫らく病氣して居ます中に、すつかり取りにも來なくなりました、なぜかと思つたら此の本には、口繪がない、美人の寫眞がない、戀愛

まふ事は出來なかつたのである。さうして一郎と民子とは結婚した。一郎は民子の息づまる程の愛慾の炎の中に、民子は一郎の純情の搖籃の中に、陶酔の春は一年餘りも夢の様に續いた。だが、子供のない平和すぎる新婚者が、必ず陥る結婚生活の倦怠は、漸く二人の間にも蝕んで來た。二人の間にいつしか愛の囁きが影をひそめ、接吻の數が減つて行く頃一郎は結婚以來忘れて居た酒の匂ひに又ふつと親しむ様になつた。しかも長い獨身生活の放縦な癖で、何かと理屈をつけては近所のカフエーや洋食屋を飲み歩くのであつた。家庭以外に求める樂しみを持たぬ民子の隱れ家は心の底の底に潜んで居た。順吉への戀であつた。

「私は何故順吉さんに戀を打明けて見なかつたかしら。順吉さんと結婚すればもつと幸福になれたのぢやないかしら」彼女は夫がカフエーで醉ひしれて居る時獨り遠く他國へ去つた順吉を偲び乍ら、過ぎし秋多摩川の邊りで合せたニーナの死や椿姫の歌をそつと歌つて見たり、ある夏の夜の螢狩りにどうしたはづみか彼女の首筋に逃げ込んだ螢を、順吉が捕へ様とした時の彼の移り香や肌にふれた彼の手の溫か味などを思ひ起して民ちやんと呼ぶ時の彼特有のアクセントをせつなく思つて見たりした。だがその順吉ももう結婚してしまつたーやつぱりあの人は私を妹の様に愛して與れたゞけだつたのかしら」さう思ふ時寂寥が彼女の胸にこみ上げて來た。絶えず官能の刺激を求めてやまない彼女には、少しも技巧を弄さない單純な愛しようをする一郎は常に性的に物足らなさを感じさせもした。そして彼女が無意識に覺えた事は、一郎がどれ程自分を愛して居るかといふ證據を、はつきりと見て味はふ時の滿足の快感であつた。

「とも角も一郎さんは私を愛して居るのよ。私がなければ生きられない程に」さう思ふ時彼女はせめてもの誇りに昂揚する自分を見た。今夜のいたづらもさうだつた。

「きつと驚くに違ひない。一本氣であわて者のあの人がどんな顏をするだらう」此の突飛な計畫が、豫想以上に效を奏したのを見て、彼女は一郎の脊中の上でゴム鞠の様にはづむ心で笑つた。彼女の笑ひがやゝ靜まつた時、一郎は涙に濡れた目を光らせ乍らかきくどくのだつた。民子は默つて肯くと一郎の髮の毛を優しく撫でた。

「この人はこんなにこんなに私を愛して居るのだわ」さう思ふともう堪らなく彼がいとしかつた。

ちぎれ相な激しさでお互の唇をむさぼり合つて民子の腕が一郎の肩を痺れる程〆つけると民子の大きな二つの目にたゝえられた露を一郎は夢中になつて吸ひ取た。二人は抱擁の手をゆるめずに何とはなしに泣き合つた。接吻の嵐の中に――

---

小說がない（プルジョア的のらしい）と云ふのです。私は、馬鹿！つて怒鳴つてやり度い程、腹が立ちました。あなた達の味方だつてことを何度も聞かせて上げたのに。

その原因は、此處の工場に働く大半の娘達が、本當の勞働階級の家庭に育つて居ないことです。嫁入り道具を揃へる爲めとか、遊んでるよりはとか云つた連中が多くて本氣に、パンの爲めに稼いでる人達はほんの僅からしいのです。私が賴んだ籠屋の娘も、近頃、眞黒い首へお面の様に化粧して新しい着物も幾枚か製へて、令孃氣取に、憧れて、眞實、稼いでる人達とは、殆んど附合ひをしないらしいのです。先月の末近く二週間も、賃銀支拂困難とかの理由で、休んだ折りにも、彼女等はお祭り氣分で遊び暮して居た様でした。

支配人は、お妾を三人も持つてるのに先日また、此の町一の美妓だとかいふのをうけ出して、郡山市にスバラシク粋な家を建てゝやつたとか、彼女達はそれを見聞きし、話題にしてゐながら、フンガイ一つしないで、全で自分達の自慢見たいに思つてるらしいです。

# 映畫漫想

尾崎翠



## 畫面への漫想家の心理

水曜・木曜あたりの夕刊をながめ、見たいと思ふ一握の役者の名前に逢ひ、しかし、見たいと思ふほどのものをすぐにも見に行くにはポケットの不便な境涯だし、その道の系統だつた知識には眞暗だし、時評か批評のやうなものをといふお話をうかうか承はり、紙に向ふ今となつて思ふ。映畫時評乃至批評は、その道の科學者の受持ちで、一人の隅つこの觀客には、後めたくて出來ないことだ。パラマウントとウファの區別に殆んど關心を持たず、監督の好みとか特色を知らず、一監督と一俳優の有機的關係を知らず、殊に畫面の何處までが監督の手腕で、何處からが役者の持味なのかをも解らないほどな、こんな一人の素人觀客に出來ることは、ばらばらな漫想でしかない。

漫想とは、丁度幕の上の場景のやうに、浮び、消え、移つてゆくそぞろな想ひのことで、だから雲とか、朝日のけむりとか、霧・影・泡・靄なんかには似てゐても、一定の視點を持つた、透明な批評などからは遠いものだと思ふ。つまり畫面への科學者ならぬ漫想家といふ人種は、畫面に向つた時の心のはたらき方までも映畫化されられてゐるのかも知れまい。莫迦！幕の上にちらちらする影の世界に、心臓までも呑まれてしまつたのだ。たいせつな意識の流れの形式までをちらちらする影からもらひ、（プラアグの大學生の！）もうひつ込みがつかないのだ。だから丁度登場してしまつた漫想家を捕へ、もうすこしその心理を映してみようと思ふ。

幕に向つた漫想家は、畫面を、もう出來てしまつてる一つの世界と見るおめでたさを持ち、そぞろ心でその中を彷徨するだけで、その世界の成りたちには無神經だ。彼は映畫がいろんな人人の合作藝術であることを忘れ勝ちだし、たまにそれを思ひ出さなければならない場景に出つかして何か疑問が浮んでも、それを解く能力を持つてゐない。まことにだらしのないことで、どつかその邊の女優——マツチでも、ヴイルマでも、ビイブでも、ベテイ・アアマンでも好

いが、そんな一摑みの女たちにも似たおめでたさだと思ふ。だからこの漫想家は監督と役者の領土を知らず、必要な場合に逢つても、畫面を監督の好みを役者の持味に分析する術が解らないのだ。こんな彼だから、從つて次のやうな心理を持つてゐる。

漫想家の視野は、だから、シナリオ・ライタアがどんな夢を思ひついたか。笑ひと泪がどう配置されたか。沙漠のライオンがどんな欠伸をしたか。窓の外にどんな月夜があるか。やきもちと純愛がどう交錯したか。カメラがどの視角から向けられたか。そして、監督がどう役者を踊らせてゐるか、等よりは、役者に向つて向けられる。彼の興味はただ役者に懸り、彼のみる役者は、一人で自由に踊り、接吻してゐるものだ。そう言つて好いくらゐ彼の視野は狹い。このことは、彼の心理を更に發展させる。

視野の狹さは、視野に入るものの細かい穿鑿に陥りがちだ。だから彼は眼だけでなく、他の全感官を役者の全身に向つて働らかし始める。此處に一個の感覺的觀客が生まれる。そこで、彼の各感官と役者の體軀の部分部分との交錯が始まるのだ。これを表現派の手法で撮つたら、いくらかおもしろい畫面になると思ふ。この觀客の咽喉が、餓えたチヤアリイの齧つてゐる蠟燭の味を味はひ、彼の手がピツクフオドのむきだしの踵を撫でてゐるのはまだいい。彼はニタ・ナルデイの三角な爪の音を鼻で感じ、ギルバアトの四半身に漂ひでた蠻性を耳で感じないとは言へないのだ。役者の體軀は彼の中でばらばらに解きほごされ、集められる。肩・笑ひ・腕・齒・怒り・脚・横向きの肩・胸・スカアトの襞・垢の濃淡。――坂東妻三郎は、どうも、すこし、きたなづくりの方が美しいな。薄よごれして、衿垢でもついてた方が――チヤアルス・フアレルの頭は、ぼさついてた方が好いやうだ――などのことを彼は考へる。動きと靜止。陸と日向。餓えと飽食。激情と嘲笑。彼はすべてこれに類したことを考へる。――顔の荒けづりな女優の腕は、大抵寛やかに、廣く動くな。彼女の四角い顔はそれで救はれるのだ。ヴアレンチノのやうな色男は、いつも正面向いてじつとしてればたくさんだ。動いて好いのは接吻の時だけだ、大根め！チヤアリイはやはり餓えて、寒くて、待ちぼけしてる男だ――などと考へ、そしてこの漫想家は、この狹い中でだけ、役者の體軀の世界でだけ、始めて觀察者になることができる。

しかし、この觀察者は、どうかすると偏執に陥り易い癖を持つてゐる。何といつても漫想出身の彼は、常に靜かな觀察を押し通すわけに行かないらしい。ちよつとした罠にでもはめられ易いのだ。たとへば、彼がひとかどの觀察者面をして眺めてゐる幕の上に、ズボンに包まれた脚が天降る。靴下でなくズボンに包まれた一本の脚。こんな風に天降らせるのも監督の領土の一つかも知れないと、彼にしても時時は思はされるやうな登場をし、この脚が上衣のポケツトから靴の外側まで思ひきり伸びてゐたりすると、忽ち彼の偏執は始まるのだ。彼の感官は一本の脚に跳いて行き、幕の他の部分を觀ることを忘れ、ついにこの脚に續いた上半身が何をしてゐるのかを見えない始末に陥つたりする。彼の視野はこれだけ窄められることが出來るのだ。ヴアレンチノが接吻役しか勤めることの出來なかつた程のだらしなさだと思ふ。そして、幅を持たない考へといふものは、どうかすると一人合點に終り、錯感を起し、すべてそんなことを重ねてゆくらしい。

畫面への漫想家の心は、ざつとこんな風か知らと思ふ。

## 影への隱遁

隱遁などけちでだらしがないと思ふ。中世紀あたりの徒輩のおなぐさみでたくさんだ。だから今では「驀進」があり、しかし同時に、おなぐさみでない、すこし血色の變つた隱遁が出來てしまつたのではないかと思ふ。驀進と隱遁、何もかもが二つに割れてゐるのだ。割れてゐる二つが、また妙な交錯も起すのだ。だから驀進の中にだつて隱遁が匿され、隱遁の中にだつて驀進が潛んでゐるかもしれないのだ。

聲畫は隱遁を許さないだけでなく、その反對のものさへ働きかけるので、いろいろ後廻しにして。

靜畫。

世界一面を白と黑の影に作りあげ、ブロンドの髪をいちばん白く、かざり黑子をいちばん黑く、他は髪と黑子のあひだの色でしかない。閃白・微白・仄白・銀・灰・濡羽。數へてみれば乏しい色彩。しかし——

ジョン・ギルバアトの一つの姿態が美しいからといつて、まばたき二つで次の姿態に移り、ブリギッテ・ヘルムの胴體が蛇のやうに蜿つてゐても、せいぜい二分の後には枯木のやうに突つ立つてゐる。なんしろ儚ないあぶくなのだ。

——しかし、乏しい故に豐かな色彩。儚ない世界だから確かだと考へても、それはあながち考へるやつだけの罪ではないと思ふ。罪の大半は地球から發散してゐると言つていいくらゐだ。中世紀の天降りではないのだ。地球がこんなしかめ面をしてゐなかつたその頃では、人人は何も影を追つかけることはないし、わざわざ武藏野館の三階へ出かけて描かれた世界から恍惚をもらふこともないのだ。

ここまで馬齢を重ねてしまつた地球のしかめ面は、人間に木蔭を欲しくさせる。木蔭——影——あぶく——儚——仄——微——なるたけそんなのが好い、しかめ面に遠いのが。そこで、いくらかボケツトの便利な時は武藏野館の三階でなければ猫の額のやうに可愛い駒込館で眼を射ないほどに疲れた畫面を。でなければ、落合の火葬場から遠くない公樂キネマで、草臥れきつたゴオルド・ラッシユに他で味はへない風情もあるのだ。この風情は、まあいろんなもののシムフオニイだといへる。魚ごんの店さきにつるされた割引券の束が風に吹かれてゐるのをみると佐藤氏ならぬ身も、あはれ秋かぜよと言ひたくなり、秋ならばさんまも買ひたくなるのだ。黄ろい紙の一枚に「一枚御一人限り」が二つ刷り込んである。その一つを破りとり、要らない一つを原つぱに捨て、これでもう、捨てたやつの心になつてみれば、チヤアリイの肩を半分見たくらゐの哀愁なのだ。窓口で最後の二十錢にも等しいやつをはたき、坊やの鹽せんべいと便所の香の中に坐り、そして……チヤアリイ！知つてるかい。雪を浴びた君の肩に、また雨が降つてるんだ。草臥れきつたフイルムが降らせる雨の効果は……しかし君は知つてるに違ひない。

### 聲畫

何彼と忙がしく、なまで、騷がしく、いろいろ肩の凝る存在。說明・せりふ・雜音で耳が何重にも忙がしい。こんな音を耳に叩きこんでもらはなくても、聽くだけは聽いてるんだ。靜畫の言葉の方が耳に滲みるのだ。

せりふの中味は日本人の特權として遠い處に上げておき、殘るも

のは聲の美味だけれど、みんな大差のない罐づめ。ジャンヌ・イイグルスの二つにきれた短い笑ひだけが心に殘り、あとは說明の邪魔にすぎない。夢聲の聲を罐づめで妨げられたくないのだ。たださへ言葉を惜しむ夢聲に、この上惜しまれたくないのだ。

　せりふに時間を取られ、テムポがのろく、役者がいつまでも椅子にかけたなり同じ姿態に留まり、そして聲を吐く。—あの「形」は動物園の隣に越してしまつた。だから伊達男の吐く戀の吐息は象の食後のやうだ。



ジャンヌ・イイグルスの「嫉妬」

ただアメリカの役者の聲は、男も女も幅があり、廣廣と低く、尖つてゐないことは感じられる。聞いてて咽喉を締められないで濟む。

## 武藏野館第四階

武藏野館のてつぺん（まだ聲畫で騷がしくなかつた頃の）は、ポケットの不便な時かへつて誘惑を感じさせるところ。人間の心はポケットの不便なほど影を欲しいもの。前に言つた隱遁ごころは、ポケットの不便な時よけい濃くなるものだ。そしてここに武藏野館の三階から生れた第四天國への憧憬がある。最後のゲル銀貨二つ。電車賃と、三階の椅子一つは買へる。（沈んで靜かな想ひなのだ）ゲル二つをはだかでポケットに入れ、新宿の人ごみはすこし眩しいけれど日頃の運動不足から救はれ、影を追ひ、夢聲の聲を聽き、歸りは寒く、しかし電車を出て步く頃は頭が澄んでゐる。夢聲の聲・一本の脚・一つの嘲笑などのきれはしと共に思ふことは、武藏野館の三階はどうもすこし高すぎる。位置ではなく椅子一個代のことだ。銀貨一つで一つ半くらゐの椅子は買へる氣輕さを欲しいものだ。それが出來ないなら三階の上に第四階を設けるのだ。同時に德川夢聲の椅子を一階か二階へせり上げ、新興第四階の屋根裏にゐても彼の聲に不自由しないこと。この階の椅子一個は銀貨一つで電車賃をもこめて二回買へるなど。聲畫は無くていいこと——どうしても加へなければならないなら三つの中一つでたくさんだ。夢聲は靜畫に限り擔當すること。

## 「アスフルアト」「嫉妬」など

「アスファルト」

獨逸人の好きな象徵癖。最も好い意味のお伽ばなし化。人造人間。群集。叫喚。そして神にも惡魔にもなりきれるブリギッテ・ヘルム。――「メトロポリス」はすばらしかつた。この歎きは「アスフアルト」を見た後に一しほ深い。

「アスフアルト」の名は「メトロポリス」以上のすばらしさを思はせ、大都會・より以上のお伽ばなし・より太い叫喚に導いてしまふ。しかしこの「アスフアルト」はその聯想に背負ひなげをくれ、ただの人情劇なのだ。冒頭の大都會の描寫は美しく、その中に獨逸男グスタアフ・フレエリヒの交通巡査が立つてゐる帽子を被つたところはいくらかアメリカの伊達男たちに似て獨逸男らしい影が薄らいでゐるので（獨逸男とアメリカ男の比較は改めてしよう）假にあつぱれの美男子にしておき、續いて獨逸の交通巡査の帽子の効果はチヤアリイの帽子に亞ぐ尊いものだと思ふ。しかしこのフレエリヒといふ役者は、いつたいにいくらか美しく見える時と、ただ獨逸癖（外貌上の）の塊に見える時がある。こんな獨逸癖はやはり「メトロポリス」の中で、神になつても惡魔になつても常に辛いブリギッテ・ヘルムによつて映えるもので、ベテイ・アアマンの對手では惜しい。

ベテイ・アアマンの身についてゐる甘い町娘ぶりは、總てをぼやけた人情劇風に塗りつぶしてしまふらしい。彼女は空氣のある限りは何處にでも棲息してゐる町娘の一人で、街を走つてる自動車の中でおまわりさんを籠絡する女ではなく、況して女掏賊ではなく、浴槽で肩を曝らしながら煙草を吹いていても、毒のないところに毒は生れないのだ。監督もお骨折りなことだと思ふ。

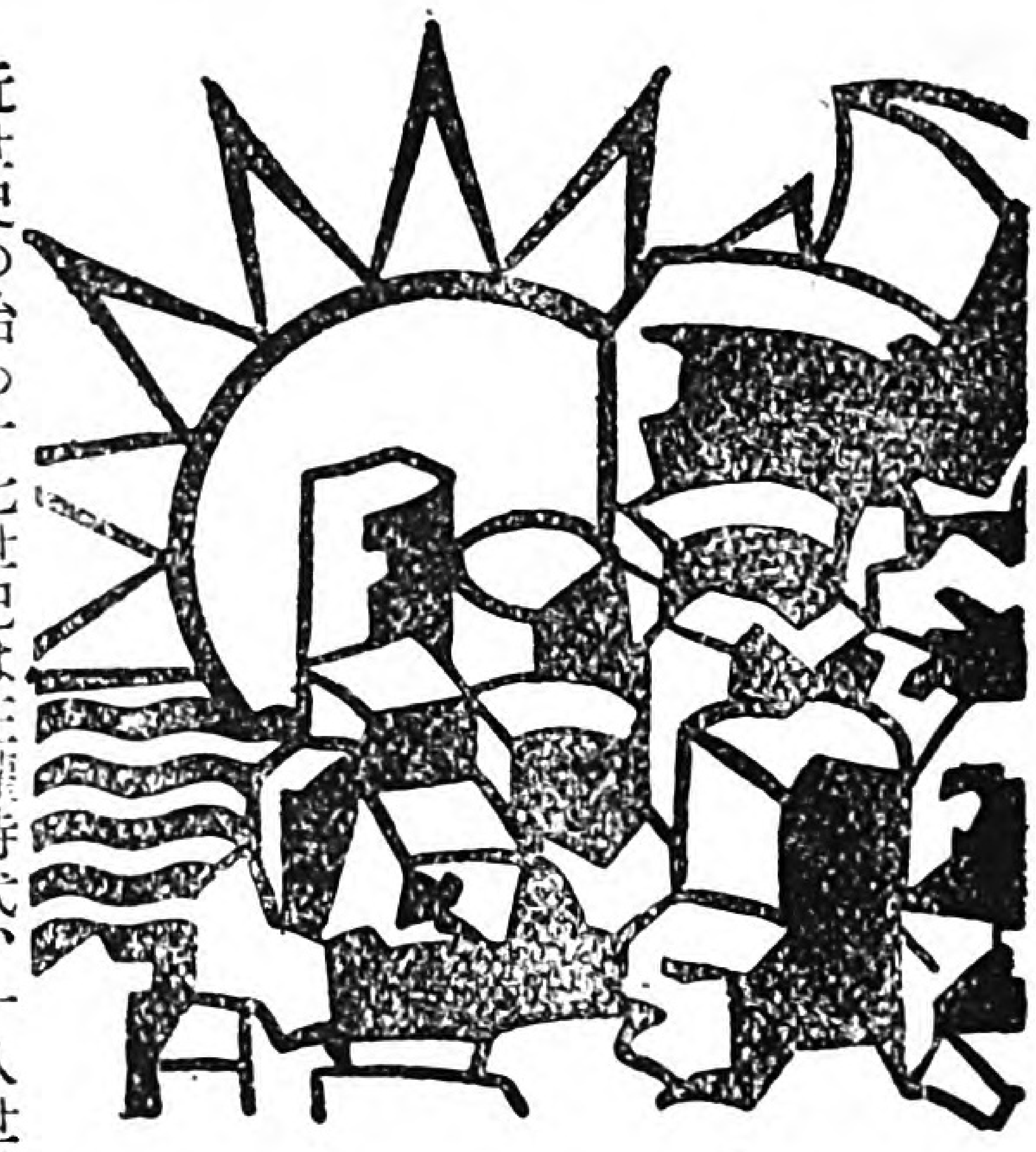
「嫉妬」

醉書が好んで扱つてきた殺人は、何か醉書を作る上に離せない必要を持つてゐるのか。見る側になつてみれば、から殺人がはやつては安心してゐられないのだ。無論自分が殺されるなどの被害妄想は起さないけれど、三面記事調の反覆で靜書を犯されたくないのだ。しかし、多くの味を持ち、多くのひびきを殘すジヤンヌ・イイグルス。四角い顏と幅のある肩と、そのくせ細い體軀とその動きとが、美女ならぬ美感を持ち、鑵づめでなかつたら醉も美しいと思ふ。光澤をつけない低い醉や大きく動く腕の美は、この型の女のみの持つ特權かも知れない。五六人子供のあるお母さんも好いし、孤獨な彷徨者も演れるだらうし、もしイイグルスが生きてゐたら、そんなのをいろいろ見たかつたと思ふ。

「奈翁精神異狀なし」

原名ワン・ヒステリカル・ナイト。特殊な持物のないレヂナルド・デニイなのだが‥‥」しかし一つのお手柄は――「レヂナルド・デニイ氏の原作より。何某氏並びにデニイ氏共同脚色」

このヒステリカルナイトの中でサロメが蒼ざめ、ロビンフッドは風に吹かれる旗のやうに疲れ、そして氣ちがひ病院の患者でないナポレオンの背中の肉が彼の服裝を破つてとび出す機會を窺つてゐる。氣ちがひ共と健康者との對照と交錯が好い。



# 小林多喜二氏の作品

板垣直子

近世史の始め十七世紀は王權時代、十八世紀は貴族の時代、十九世紀はブルジョアの時代であつた。然るに現今は、プロレタリア擡頭の時代である。藝術の中でも特に文學が、新時代を導く先驅的力である事は、從來みなれて來た現象である。プロレタリア苦鬪時代の現今は、文學に於てはプロレタリア文學を生んだ。そして現今のプロレタリア文學は、あらゆる啓蒙期の藝術の例に洩れず、濃厚に政治的意味を含んでゐる。甚しい事には、政治的意味丈からの創作さへ行はれてゐる。が現今のプロレタリヤ文學も文學である限り、藝術的價値を問題としないわけにゆかない（一九二九年の日本の文壇で論議された問題）。こゝに小林氏の作品が問題とされるのも、氏の作品が藝術的價値の上で優れてゐるからである。現在の日本のプロレタリア作家の中で、イデオロギーの確乎としてゐる事と、描寫の形式の優れてゐる點との故に、氏の作品は廣く注目を受けてゐる。プロレタリア文學は、何れの形式かで階級の對立を描くのが常である。がそれ丈ではない。作者の堅固なイデオロギーが作品を貫ぬく事が必要である。我々は先づ、十九世紀の文學の中で、形式題材の上から最も現今のプロレタリア文學に接近した作品の一つ、ハウプトマンの「織匠」“Die Weber”（1892）を取つてみやう。此作品の終りで、キリスト教の信仰に生きるヒルゼ爺が、暴動の中でも機織機を去らないので、飛んで來た彈丸に當つて死ぬ。作者はこれ丈の作品を作つても、尙十九世紀流の舞臺効果に捕はれて、作者の感傷とロマンテイシズムとを暴露した。作者のイデオロギーが確立してゐないのである。然るにロシヤからマルキシズムの藝術觀――藝術の長い傳統に就いて學的訓練を經た頭には肯定出來難い藝術論――を受けた日本のプロレタリア文壇は、イデオロギーは確立してゐるが、藝術品として粗末な作品を澤山だしてゐる。その中にあつて小林氏は、旣に述べた如く、確乎たる信念と題材に對する充分な把握と優れた表現力とを持つて、大作を發表しつゝある。昨年末「共同製作説」が唱へられたが（階級鬪爭の事實を作者自身が知らないので、他から智識を與へられて作品を纏め上げると云ふ）、小林氏が

自ら小樽にゐられて、材料を集める便利を與へられてゐる爲に、特に氏の作品は、多くのプロ作家の間で、非常な强みと力とを持つてゐる。

「一九二八年三月一五日」は、一人の作家の處女作と考へられぬ様な、落付いた、筆力に圓熟さを示す作品である。作者の意圖するとしないとに拘らず、形式は「ノイエ・ザハリヒカイト」を採つてゐる。龍吉の家の家宅捜索のところ、娘が眼を覺して、小さな心を痛め乍ら隣室の話聲を聞く當りなど、實に描寫が冴えて、しんとしてゐる。獄舍に於ける檢束された主義者、殘された家庭もよく描かれたが、最後の拷門の部分も、實に筆がしつかりしてゐる。人道を超へた殘忍な拷門の描寫が讀者に惹起さす戰慄と恐怖と憤りとは、此作品を非常な劇的張りの中に終らせて、結構の平坦な緩みを救つてゐる。此地味な作品はそれ丈しつかりした出來榮を示してゐる。小林氏の作品の中では、これは「蟹工船」の華やかな成功や、「不在地主」に見る大作の感じはないが、全體として最も缺點の少ない作である。かの三・一五事件は或人々に取つて忘れ難い――「三月十五日を忘るな」であらふが、現實の事件に無關心なあらゆる人々に此作品は永久にその藝術的な光りを失はないであらふ。

一九二九年春の作「蟹工船」は、凄い荒削りな効果のある作品で、表現の至難な對象を描き通した點でも、豐富な作家的素質を立證してゐる。文體結構共に前作と同じ傾向を取つてゐるが、此作では文章にブキ〱した未熟な感じがある。文章の調子から見て、「蟹工船には處女作らしい未熟さがある。結構も小林氏らしく、纒め方の上に工夫がない。前作に見た様な、筋の拙劣さを補ふ何物もないので、結構は龍頭蛇尾的に終つてゐる。然し文章と結構との上の、上にあげた不細工さと、記錄的な様式とが、却つて此題材には適してゐる事、此作品の荒削りな感じと煽動的な力とは專らそこから生れてゐる事を認めねばならぬ。前田河氏の「セムガ」(一九三〇年)の文章は、才が勝つて、綾があり、幾分くどい感じを與へる。かゝる文體と巧妙に纒めあげられた結構とは、寧ろ勞働者の苦しい生活の印象を薄く與へて、作品の宣傳力を弱めてゐる。同一題材の上で、スタイルの相違が如何に効果の差を生ずるものであるかを、我々はこゝに最もよく眺める事が出來る。政治的價値を引離す事の出來ないプロレタリア文學の赴くべき表現形式の問題に、此二作は多くの考ふべき暗示を提供してゐる。我々は最近の文化史上に共通な新傾向が、日本に於ては小林氏のプロレタリア文學に最も生々と誕生してゐる事を認める。また形式の問題とは別に、此作品が遠く人跡をも隔てた極地で、人間を機械の如く虐使する資本主義の手を、非常に潑溂と示した點でも、プロレタリア文學として極めて意味がある。此作品には蟹が鑵詰にされる作業の描寫がないので物足らない感じを與へるが、「セムガ」には鮭が食料品になる過程の描寫が入つてゐて、作品の感じが一層完成してゐる。「生ける人形」(片岡氏作)の瀨木と同じ轍を踏む、資本家の傀儡の淺川を、作者は監督としては徹底的に生かし切つた。これは作者にプロレタリア作家としての信念の强さがあるからである。淺川に就いても議論があつたが、作者には迷惑な事であつたらふ。

第三作「不在地主」(一九二九年九月)で、作者は少數の資本家に共大富源を獨占されてゐる北海道の小作達が、如何にドン底の貧しい生活をしてゐるか、又取巻き社會が如何に彼等を壓迫してゐるか、かくて百姓達は如何に階級的自覺に達つし、反抗に導かれねばなら

ないかを示した。働らき過ぎて貧と病との他何物も報いられなかつた父親に代つて、一家五人の生活を肩に負ふ青年健の一家に作者の描寫が始まり、温和しい健が百姓に課された無限の搾取と、社會の合理とを自覺し、實に確乎たる鬪士と化してゆく事情に展開する。至る所に百姓側の無力と、地主側の無反省と壓迫とが描かれてゐる。民衆を保護すべき役にある警察官や、神聖なるべき義務教育者までが、地主側に買收されてゐる。村の青年訓練所も、農民を地主に盲從させる手段として存在する。小作調定裁判を申請した百姓達は、クライストの有名な（プロレタリヤ文學の先驅）、「ミヒヤエル・コールハース」の主人公と同じ怒りに泣いた。作者はS村を通じて、資本主義末期の現代と云ふ大舞臺の農村に於ける種々相を描き出した。——北海道を開拓する爲の資本家の甘誘と、それに欺むかれた移民の悲慘な狀態、農村の腐敗と墮落とを深刻化させる資本主義の爪牙、惡管理人の下におかれた農民の生活、農民の自然な覺醒と、彼等を反抗に導く地主側の無智無謀、尙村に流れる從來の事大主義の考と墮性、自覺した者達の團結してゆく過程と爭議が都會の組合と連絡する必要、就中地主對小作の猛烈な階級的對立等。模範青年の健を、主義者の間に投じさせる外的な雰圍氣を渾然と描き出した作者の手際は成功した。貧しい健の家の暮らしも、非常によく描かれた。小さな由三は中でもよく描かれた。作者は此少年の動きを隨所に描いてゐるが、成功した試である。いろ〱な人物が現はれ、その中の若干は實によく描かれてゐる。描寫化の優劣とは別に、今主なる人物を拔いて見やう——惡辣な農場管理人の吉本、村の顏役で、貧しい小作達に「樹賣り」して暴利をとる。司の主人、いゝ顏をして青年團で働らく僞善者の武田、だうでも酒が飮めればよい（百姓の間の二つの典型的な人物の）佐々爺と「のつぽののべ源」四十過の温和しい村の世話役で最もしつかりした主義者の「阿部さん」、阿部の同志で阿部と反對にはきれよく何んでも云つてのける「伴さん」、百姓を止めて小樽の工場に入り、健に爭議に就いての方向轉換を敎へる「七之助」、食へないので操を賣つて暮らす「やもめの勝」、時代の可哀相な犧牲者「キヌ」、健の決心を知つて健を離れた「節」、鬪士健の片腕と成るかも知れない「キヌの妹」。組合の「荒川」の出現は全く意味を持つてゐない。こゝに特に其描寫化に就いて問題を起すのは、岸野一家である。作者が岸野一家に負はせやうとした役割は、充分正當として理解される。然し作者が彼等を取扱ふ際に、純粹な客觀的な態度を失つた事を明らかに認められる。特に「令孃」の描寫は、餘りに幼稚で讀者を不愉快にする。「奧樣」の描寫も成つてゐない。岸野自身も極く皮相的に扱はれ、明治文學以來のありきたりな一人のブルジョアに止まつてゐる。一般にプロレタリア作家が、プロレタリアを眞劍に取扱ふと同樣な眞面目な心持ちで資本家を描かない——善く描かれる事を望むのではない——傾向があるが、それが作品の上に大きな缺陷と成る事を如何に考へるのであらうか。此作品の終りの方の小樽での爭議は、描寫と成らずに「情報」化してゐる。此部分を恐らく作者は輕視したのであらふ。或は急がれた爲かも知れない。然し何れであるにせよ、かゝる取扱は作品の出來榮の統一を破つた。唯其缺陷が、作品の有機的な破綻でない事は救はれる。又此作品の藝術的價値及そこから湧き出てゐる政治的價値も、全く爭議以前の描寫が負ふてゐるので、爭議の部分の出來榮が餘り注意を呼ばない事も事實である。然し此部分がより成功したならば作品がより完成したのは疑ない。一體に小林氏の作

品は、結構の上で（特に終りの方で）工夫が足らない。元來小林氏は或特定の事件よりも、生活の描寫に秀でた作家であるが、「不在地主に於ける農民の生活の描寫は、實によく出來てゐる。これ程凝集された、强い力を持つたリアリズムの調子を、從來の何處の農民文學に探す事が出來やう。時代は既に非常に進んでゐる事を思はせる。特に此作には短い項目に分けて、描寫を片付けてゆく新らしい手法、正に一九三〇年型の手法が採用されてゐる。

尙此作品を立入つて理解する者に、日本の二つの優れた農民文學長塚氏の「土」（一九一〇年）と有島氏の「カインの末裔」（一九一七年）とを取つて見やう。長塚氏の顯微鏡的な自然と人事との描寫と、有島氏のロマンテイックな絢爛な文章（有島氏の文章の中では比較的濃厚さの少ない）と「不在地主」の樣式とは何と云ふ著しい、殆ど隔世的な相違を示してゐる事であらう。然しそれは作者の素質の相違よりも多く時代の相違を示してゐるのである。作者の狙も非常に違つてゐる。百姓に就いても長塚氏は土にかぢりついて生きる者のみぢめな生活と心持とを示した丈に過ぎぬ。有島氏も小林氏の如くに北海道の小作のみぢめな狀態を描いたが、テーマは自ら分れて、仁右衞門と云ふ特殊な破産的な性格の運命をロマンテイックに見送る事である。そこには有島氏らしい人道主義者の深い憐れみの心持がにじみ出てゐるが、プロレタリア作家流の心持からは遙かに遠い。かくて「土」が詩人の地味な田園文學と成り「カインの末裔」が餘韻の深い一つのロマンスにされてゐるのに、「不在地主」は最も透徹したリアリズムの上に築かれた眞摯な階級鬪爭の文學として現はれた。長塚氏の如くに一つの家族でもなく有島氏の如くに一人の個人（小林氏の作で云へば「のつぽののべ源」）でもなくS村と云ふ社會を捕へて、テーマは（文學的形式を借りて）政治的意味に到達してゐる。更に作者の態度を見ても長塚氏も有島氏も、農民をブルジョワ的な心持で觀てゐる（兩者とも深い憐愍を持つて農民の生活を觀てゐる。立場は寧ろ親切な地主の立場から）が小林氏は全く働らく者の味方と成つてゐる。三つの作品はかく歷然とブルヂョワ文學とプロレタリア文學とに分れる。かくて作者の百姓觀も、作品の中で地主對百姓の關係も異つてゐる。仁右衞門夫婦と勘次とは非常な勞働を課され、彼等は一生懸命働らくが中々生活にゆとりが出來ない。然しつひに餘裕が出來る。そして生活に勵みがでて來る。仁右衞門が農場を追はれる樣になつたのは、持つて生れた性格の故である。（因みに有島氏の描いた農場はS村とよい對立をしてゐる。然し我々はこゝで農場の實際問題に就いて云ふ必要がない）。生活の立直しを望んだ仁右衞門は、彼の小作生活に生々とした希望をつないでゐた。かくて長塚氏と有島氏とは百姓の生活を樂觀してゐる。然し「不在地主」になると、百姓の生活は全く絕望的なものと考へられてゐる。既に不合理な搾取が重ねられてゐる上に、尙百姓達は無限に勞働を强ひられる。それ以上働らけば肉體の死を報いられる許りである。然しそれでも百姓は働らけと命ぜられる。そして働らかなければ食へない。時として最少限度の報酬すら受けないで、而も常に最大限度に働らかなければならぬ百姓生活の眞相を、百姓が認識しないと云ふ時代は既に過ぎた。「カイン」や「土」の時代は過ぎた。仁右衞門や勘次を取扱つた時代は過ぎた。S村の百姓達は、單に小作料輕減の爭議よりも、社會制度の上の變革に迄心を飛躍させてゐる。「土」の地主（女であるが）は陰に陽に百姓になさけをかけ保護してやり、百姓の方でも地主を唯一の恩人と考へてゐる。いぢ

けたさもしい勘文も、「東隣りのおかみさん」に對して丈は人間らしい心持を開く。有島氏の地主も小作に小作料を嚴重に取上げるが、岸野の如くに堪へ難い者には描かれてゐない。又百姓からも一種の尊敬を持つて對されてゐる（「不在地主」の中の描寫と非常な相違！）函館に出て行つた仁右衛門は地主の威風に「引摺られ、」一喝されておとなしく引下がつた（從來の地主對小作關係の典型的な一つの場面！）「不在地主」では地主と百姓との關係は全く惡化してゐる。特に管理人が其間に重要な役割を演じてゐる。一人づゝ岸野に引會はされるのを知つた百姓達は憎惡に充たされてゐたが、岸野に會ひ乍ら目的を達しなかつた健は、爭鬪への決心を固める許りであつた。

何時の時代でも、藝術上の大作が、作家や批評家達からは、中々認められない。却つて作品の眞價を率直に認めるのは、純新なる享樂心を持つて作品にのぞむ民衆である。如何なる大作もきずを含まぬものがなからふ。「不在地主」の事に就いても既に述べた。然し此作品の様な大作は、容易に得られない。近頃或作家は、「不在地主」が特殊性に乏しいと云つたが、「不在地主」一篇はすべて全く北海道的なものである。農民の貧窮さも、爭議の事情も、自然の描寫も自然に就いては作者はよく北海道特有の特徴を捕へて、而も適度に觸れてゐる。あれ以上描くとすれば古い様式に陷る。

此頃現はれた「暴風警戒報」（一九二九年十一月）は作品として纒つたものではない。唯此作家らしくソーニャが非常によく出來てゐる。

（一九三〇年二月）

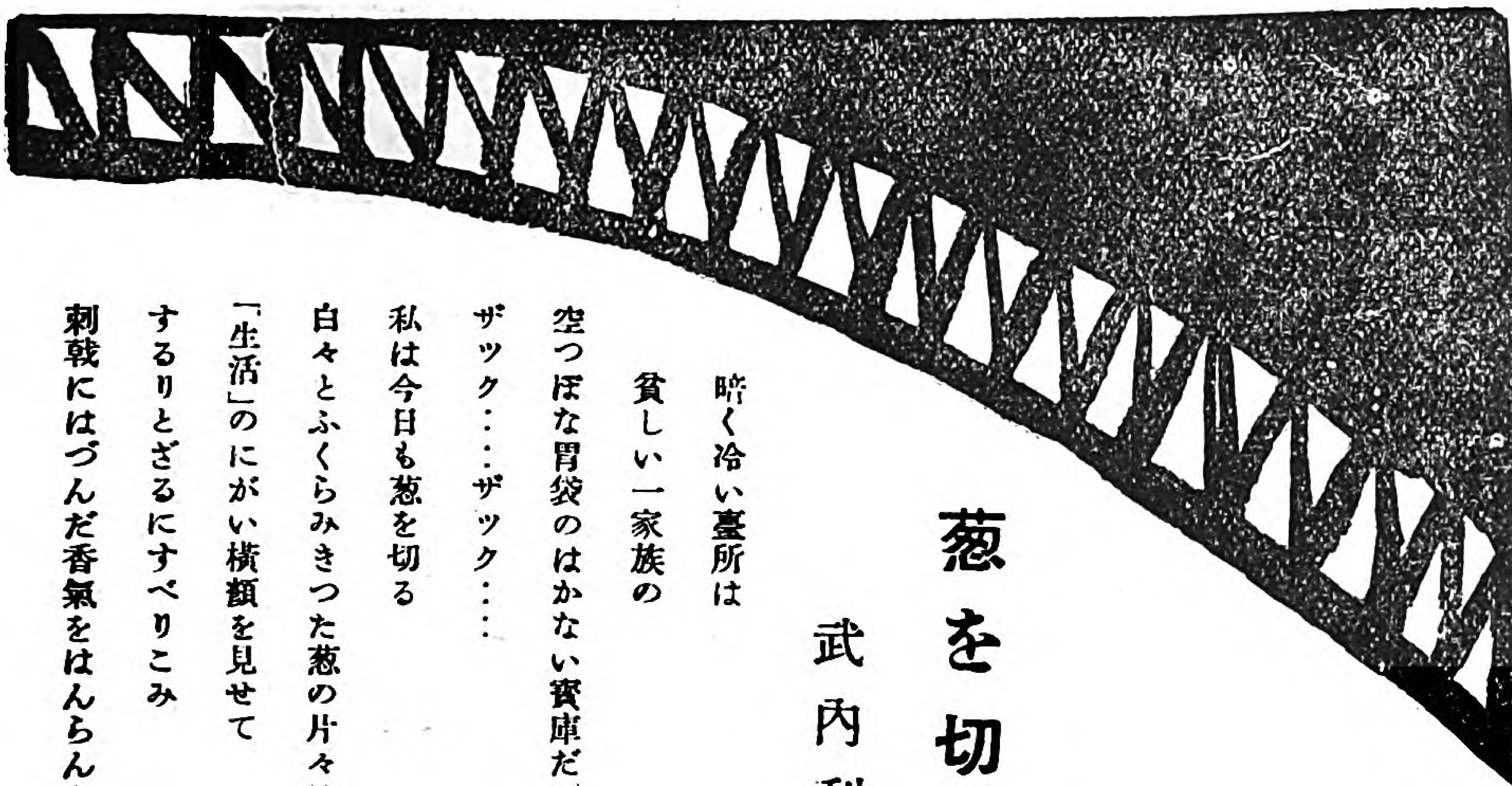
## いよ〳〵無産者診療所が開始された！

全國に無産者病院を作れ！

病める鬪士傷ける同志を救へ！

勞働者農民並無産市民の熾烈な要求の下に基金募集中だつた病院設立運動は、まづ東京に實現され去る一月二十六日より診療を開始してゐます。場所は市外下大崎二七九名稱は無産者診療所。診療科目は內科、小兒科、小外科、性病科、眼科で診察無料、藥價一日一劑十錢診療時間午前九時より午後九時まで、一日十五日は休診となつてゐます。

診療所開始されるや患者が喜びを以て詰めかけ一ヶ月位しか經ない今日既に一日二十人以上の來診者を見る程ですが、勿論充分に治療に從事するには之だけの設備では足りなく日本各地に設立する要求から、維持會員（勞働者農民諸君にして**月五錢**）贊助會員（正義と同情の士にして**月一圓以上**）を廣く募つてゐます。「無産者の病氣は無産者の手で」を充分揮發するために無産者診療所支持を希望します。



# 葱を切る

武内利榮子

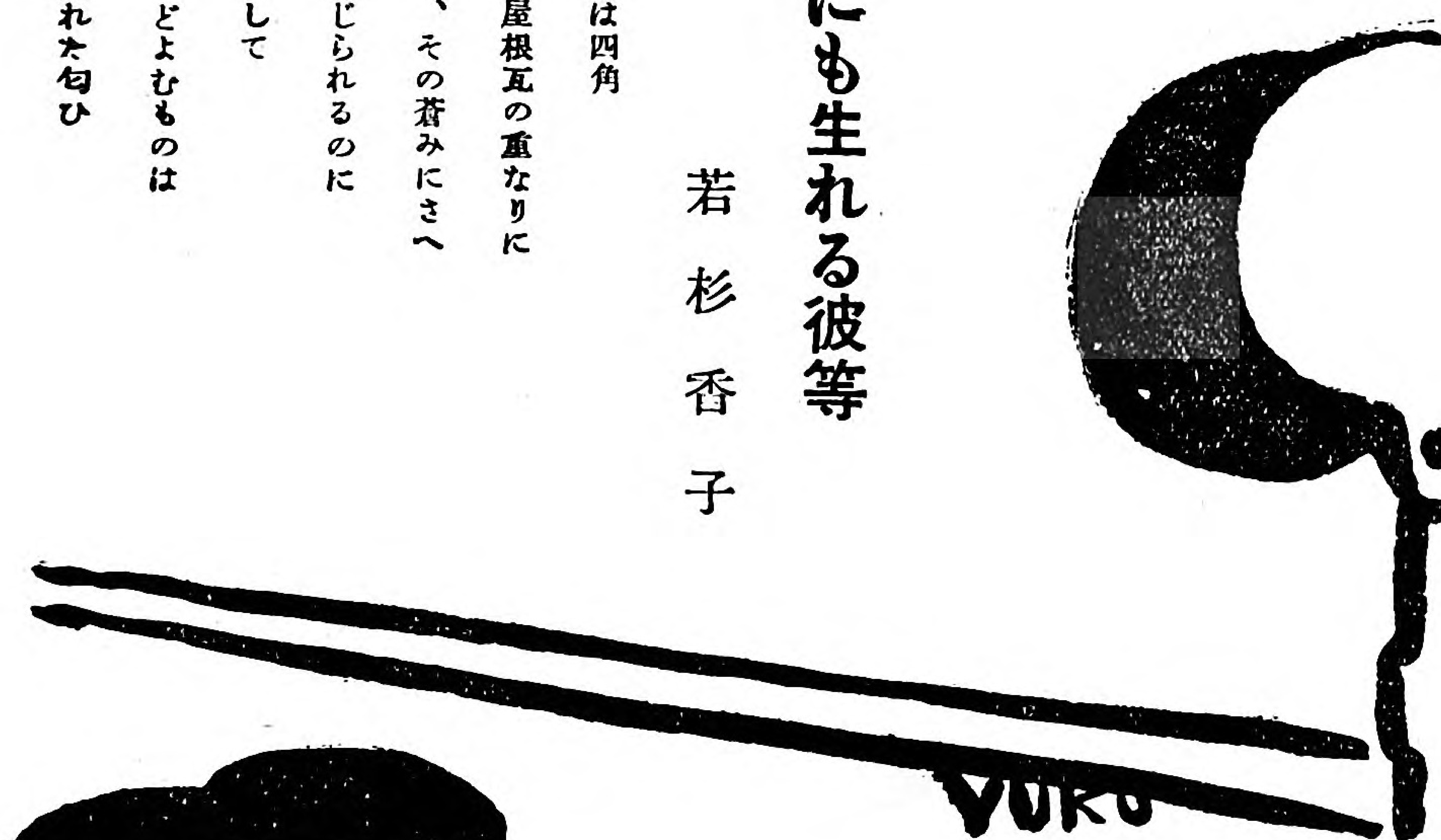
暗く冷い臺所は
貧しい一家族の
空つぽな胃袋のはかない寳庫だ。
ザツク…ザツク…
私は今日も葱を切る
白々とふくらみきつた葱の片々は
「生活」のにがい横顔を見せて
するりとざるにすべりこみ
刺戟にはづんだ香氣をはんらんさせ

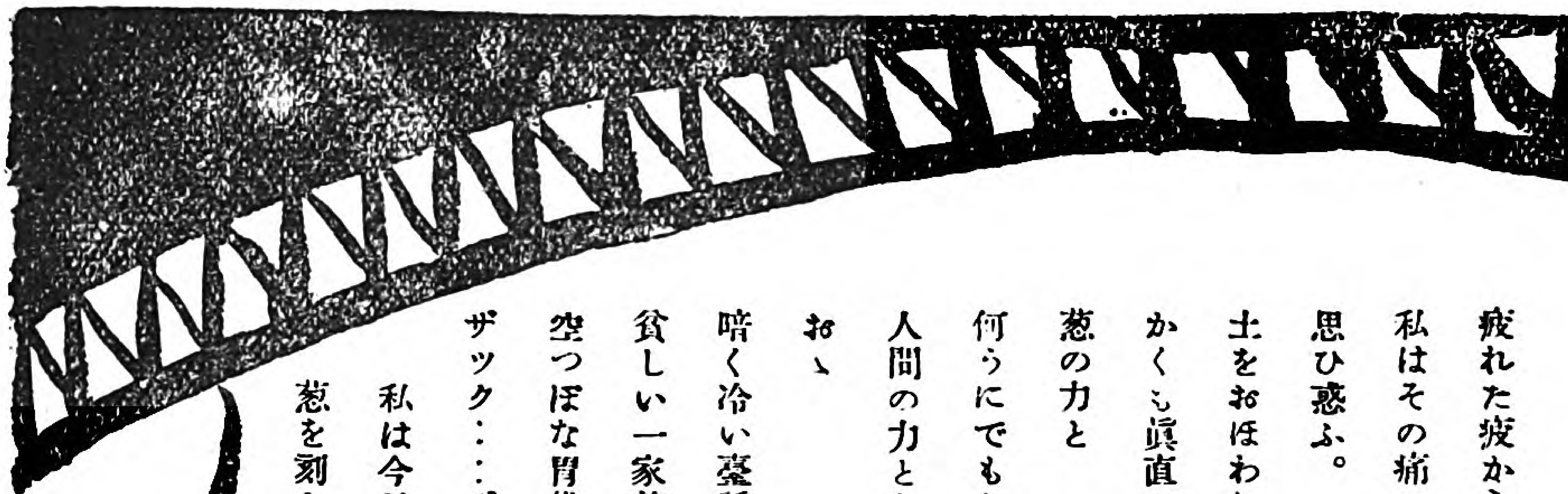
---

# 此處にも生れる彼等

若杉香子

此の町の空は四角
ぼろぼろの屋根瓦の重なりに
區切られた、その蒼みにさへ
春は近く感じられるのに
こんとんとして
うづまき、どよむものは
貧しさに汚れた匂ひ





疲れた疲から心へ迫つてくるのだ。
私はその痛い匂ひにむせつゝ
思ひ惑ふ。
土をおほわれおほわれながら
かくも眞直に地の中で伸びあがつた
葱の力と
何うにでもして生きやうとする
人間の力とを――
おゝ
暗く冷い臺所は
貧しい一家族の
空つぽな胃袋のはかない寶庫だ
ザック……ザック……
　私は今日も
葱を刻んでゐるではないか。

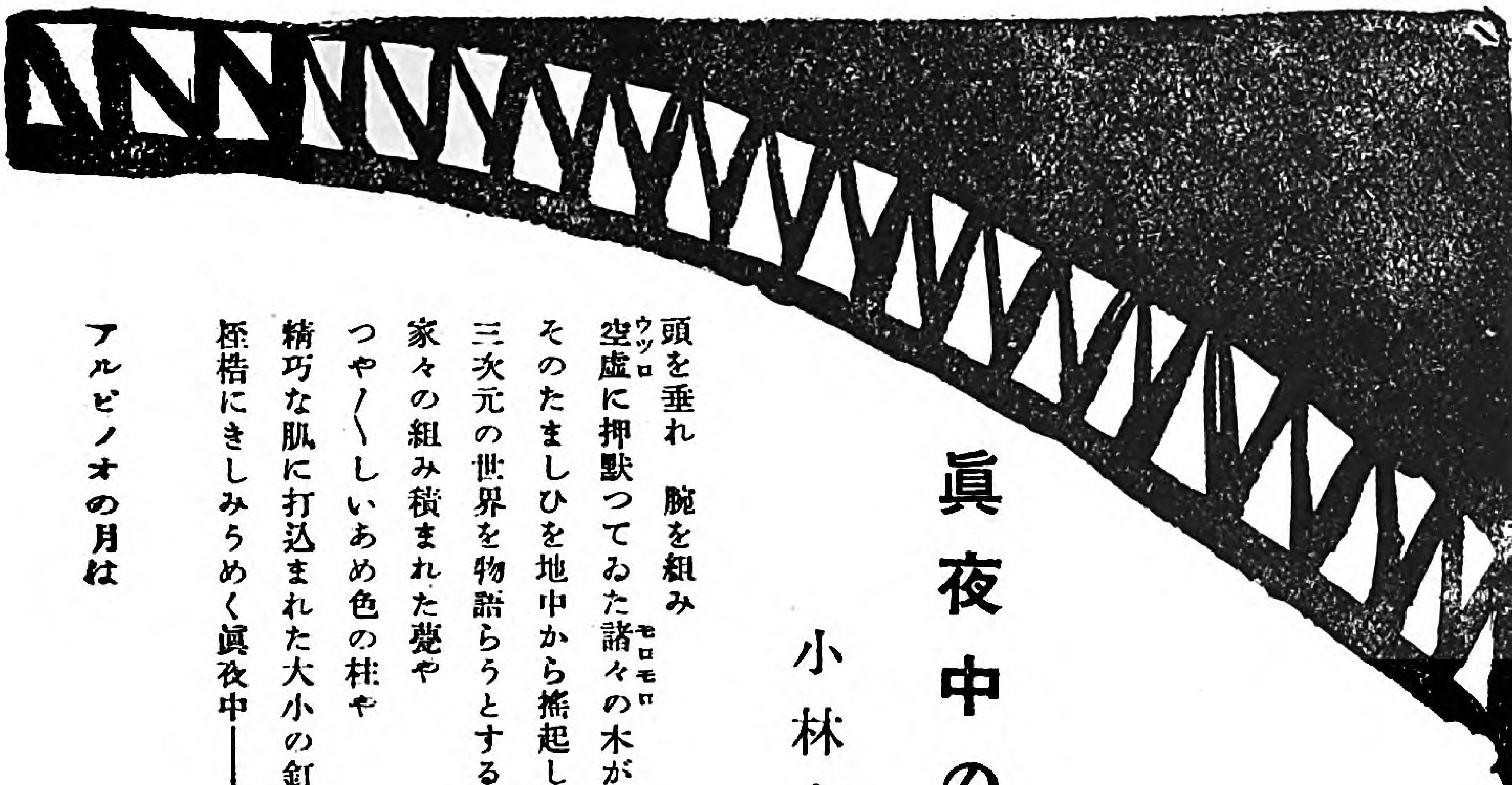
---

それを掻き亂し、ふりとばすのは
疲れたる母の怒號

さて其處に
まこと空を突いて立つてゐるのは
あれはアンテナではない
見よ
華々しいムツキの行列

併しそれよりも尚華々しいのは
歪んだ家並みの窓々に
上品なしなをふりまきふりまき
つやゝかにすべり込む
クライスラー





# 眞夜中の月

小林すみ子

頭を垂れ　腕を組み
空虚（ウツロ）に押默つてゐた諸々（モロモロ）の木が
そのたましひを地中から揺起して
三次元の世界を物語らうとする眞夜中
家々の組み積まれた甍や
つや〳〵しいあめ色の柱や
精巧な肌に打込まれた大小の釘が
極桔にきしみうめく眞夜中――
アルピノオの月は

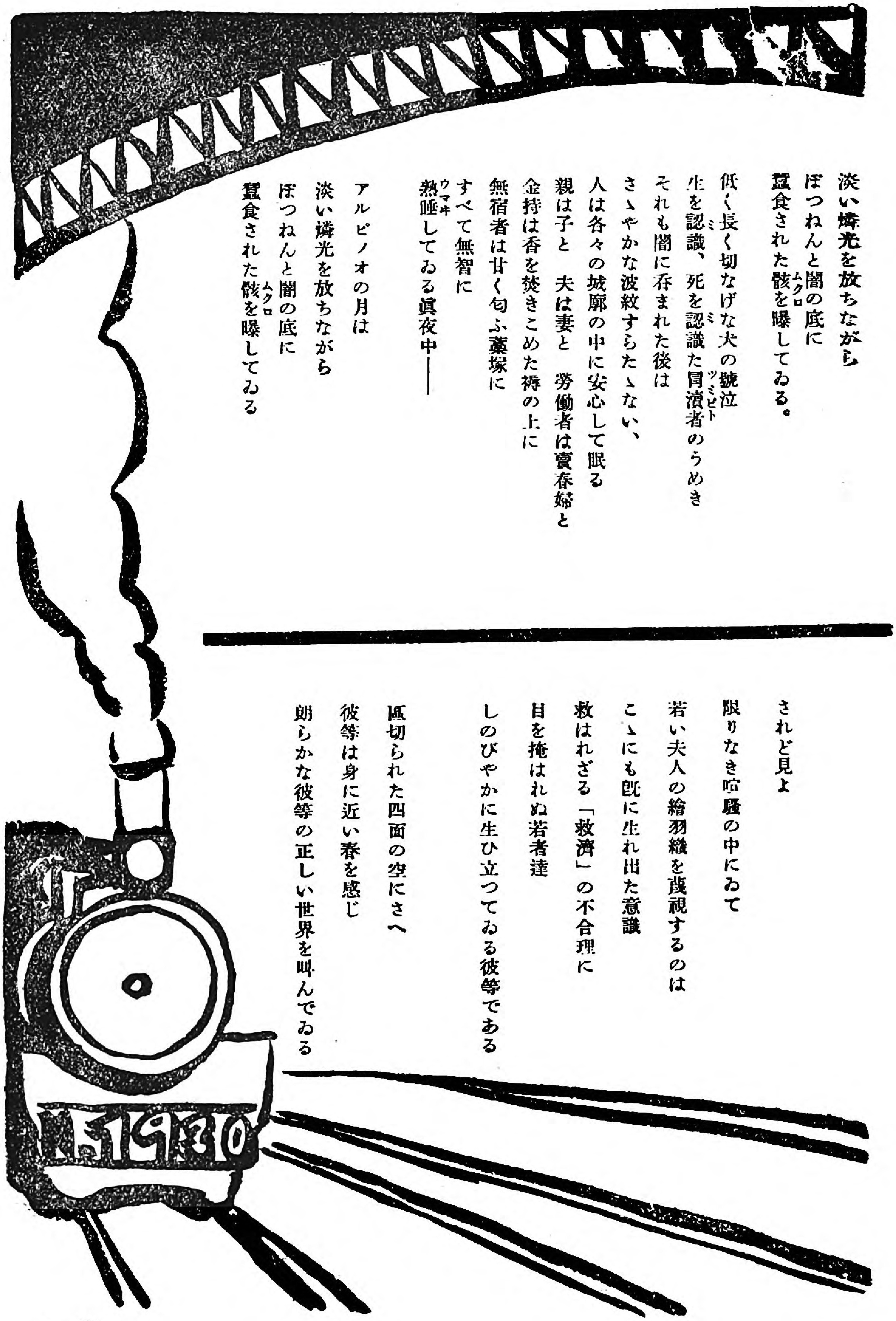
---

慈善事業！
貧民救濟！

若い夫人は
むれどよむ餓えた匂ひに
一刻だけ耐える虚榮をもつて
空腹に目覺めて　いち早く
子供等は　わだちの音に飛び
ごうごうとして絶間なく
湧き上り　跳ね上り
喚き　犇めき　奪ひ合ふ








淡い燐光を放ちながら
ぼつねんと闇の底に
蠶食された骸(ムクロ)を曝してゐる。

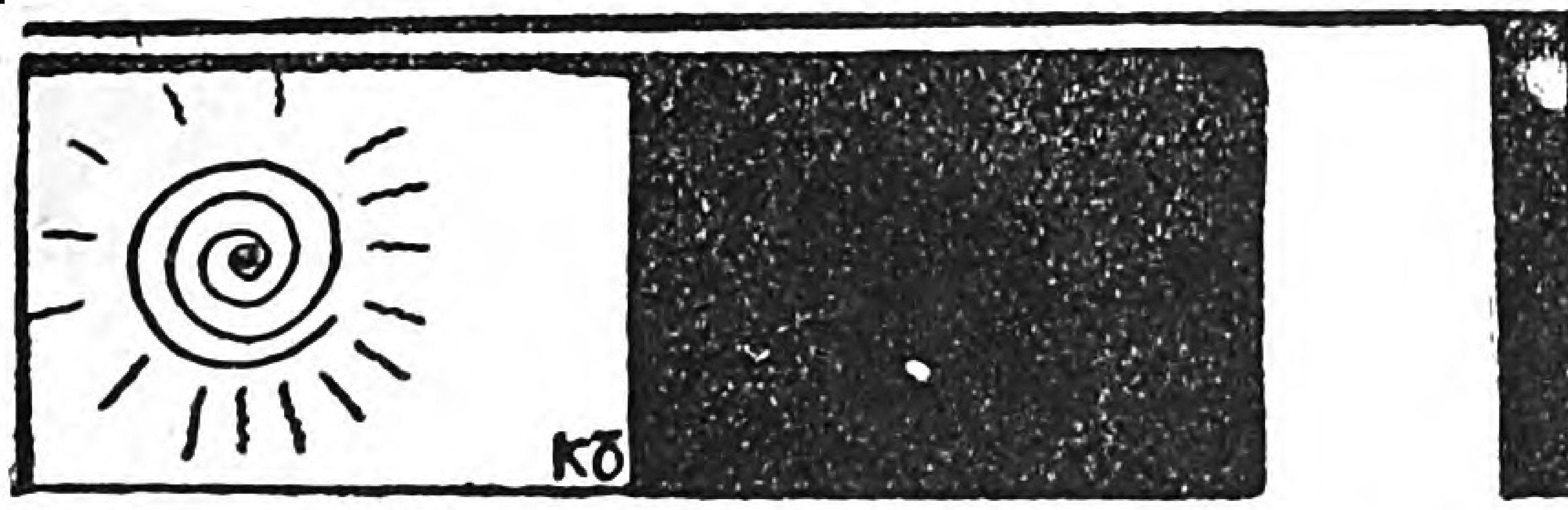
低く長く切なげな犬の號泣
生を認識(ミ)、死を認識(ミ)た冒瀆者(ツミビト)のうめき
それも闇に呑まれた後は
さゝやかな波紋すらたゝない、
人は各々の城廓の中に安心して眠る
親は子と　夫は妻と　勞働者は賣春婦と
金持は香を焚きこめた褥の上に
無宿者は甘く匂ふ藁塚に
すべて無智に
熟睡(ウマキ)してゐる眞夜中——

アルビノオの月は
淡い燐光を放ちながら
ぼつねんと闇の底に
蠶食された骸(ムクロ)を曝してゐる

されど見よ
限りなき喧騒の中にゐて
若い夫人の綸羽織を蔑視するのは
こゝにも既に生れ出た意識
救はれざる「救濟」の不合理に
目を掩はれぬ若者達
しのびやかに生ひ立つてゐる彼等である

區切られた四面の空にさへ
彼等は身に近い春を感じ
朗らかな彼等の正しい世界を叫んでゐる

# 實話・四篇



## 張作霖北京

雀

**ある國際的病院の私宅應接室**

**看護婦A** どうぞ、あたくし達をお歸し下さい。

**B** 明日、出る船が御座いますさうですから。

**C** 今晩八時の列車でまゐりましたら、間にあひますさうですから。

**夫人** （しばらく沈默）——どうしても、あなた方は歸りたいと仰言るの。

**A** ええ、どうぞ歸さして頂きます。醫者方の奥様たちは、もう、今朝ほどお出立になりました。あたくしたちも若いもので御座いますから。

**B** 醫者たちはもう、昨日から奥様がたを お歸しになるので大騷ぎで 御座いました、あたくし達のことは、すこしも考へて下さいませんのでなんですか悲しくなりまして、事務の方たちに樣子をうかがひにまゐりましたところ、お前達のことは知るもんかと、すこしも相談に乘つて下さいませんし、あたくしたちはどうして良いのか途方に暮れて居ります。もう、殆んど居留民の女の人達は、歸つたといふことで御座います。

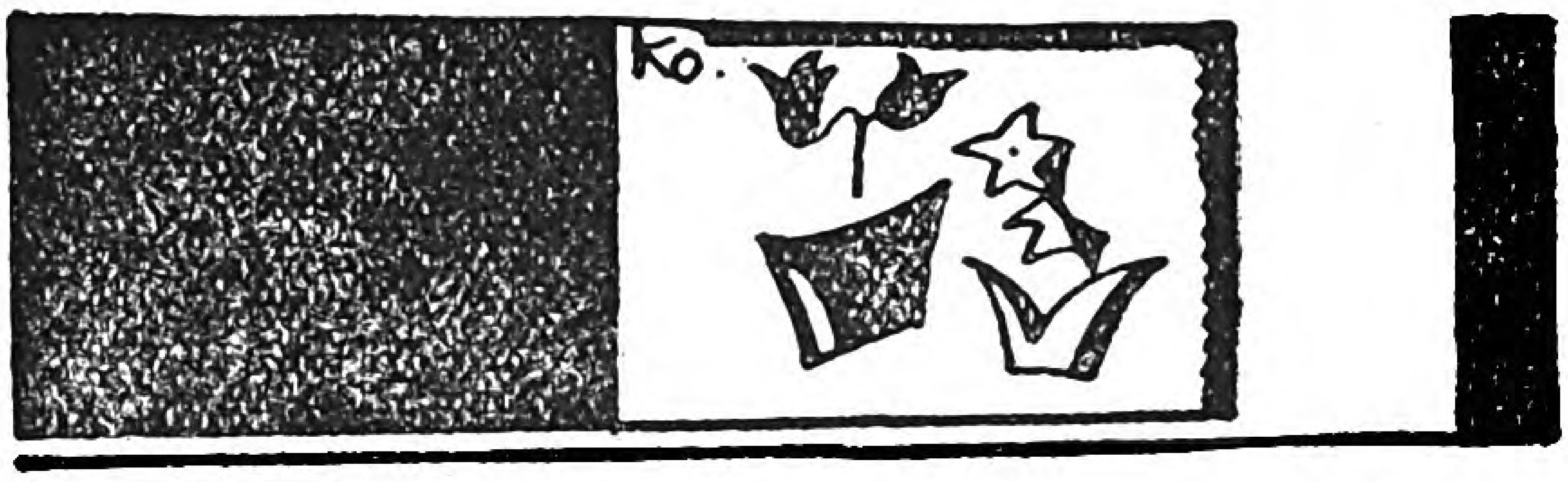
**C** いくら職務があると申しましても、あたくしたちも同じ女のことでは御座いますから、貞操が大切で御座います。

**夫人** まあ。あなたたちは、貞操を汚されると思つてゐるんですか。

**C** ええ。さうで御座います。このまへの南京事件でも、女の貞操を汚されたと申します。

**夫人** 南京事件のことを、そんなやうに言ふ人があるけれど、あたしは決して、そんなことは無かつたと思ひますのよ。——日本婦人が、なんで、そんな恥辱をうけて生きてゐませう。あの時、一人も死ななかつたじやありませんか、男の人たちだつて、





# 脱出の前夜

千鳥

女の人を眼のまへで恥かしめられて、手むかひも仕ないでゐるなんて、あたしは、決して信じませんのよ、よしまたあつたとしても、この北京で、また、そんなことが必らずあるとは、限らないじやありませんか。——いつも、あたしは、さう思つてゐますのよ、あたしたちけ、お國のためになんにも働いてゐないで、まるで良人の寄生虫のやうなもので、ほんとうに恥かしいと思つてゐますのよ、あなた達は若いのにお國のために、海外に出て、第一線に立つて直接働いてゐらつしやるのを、どんなに羨やましく、また、尊敬してゐましたでせう。それなのに、今度のやうな時に普通の女の人たちと同じやうに、逃げ出すなんて、あんまりふ甲斐ないじやあ、ありませんか。

**A** でも私たちは命までもお國の爲に、この病院のために捧げやうとは思つて居りません。

**B** 犬死などいたしたく御座いません。

**夫人** まあ。それではあなた達は、ここに居れば必らず死ぬと思つてゐらつしやるんですか。

**C** えゝ、皆さんがお逃げになるところを見ますと、危険があると信じられます。

**夫人** それあ。無理も無いわね、男の方たちでさへ大分昂奮してゐるやうですものね、——然し、日本人がこんなに騒いでゐるのに、院内の支那人たちは誰れも、すこしも動揺してゐないやうですね——それに、入院患者も澤山あるのに、醫者や、看護婦たちが、引上げたら、どうなるでせう。また不幸にして事件が起つて、負傷者でも出來たり病人のあつた時には、どうなりませう。其時こそあなた方が働くときでは無いでせうか。

**A** 今も申上げました通り、あたくし達は命までも投げ出して、犠牲になることは出來ません、兩親や兄妹のあるものも御座いますから。

**一同** どうしても、歸して頂きたうござゐます。

**夫人** よく解りました。皆さんにも御兩親や、お兄妹もおありになるわね。——あたしも子供たちがある。——馬鹿な母ァさんだと、嗤ひもし、怨みもしませう。では、皆さんのお自由におまかせいたします。院長へはあたしから良く話して置きます。それでも、あなた方は、こんな際なのに、よく宥しを乞ひにお出になりましたわね。そのことは、院長にかわつて、あたしから感謝いたします。

**一同** では、歸りましてもよろしうございますか。

**夫人** (淋しげに)氣をつけて——大事に——

**一同** それでは、御機嫌やう、お體をお大事に。

**夫人** ありがたう。氣を附けていらつしやい。

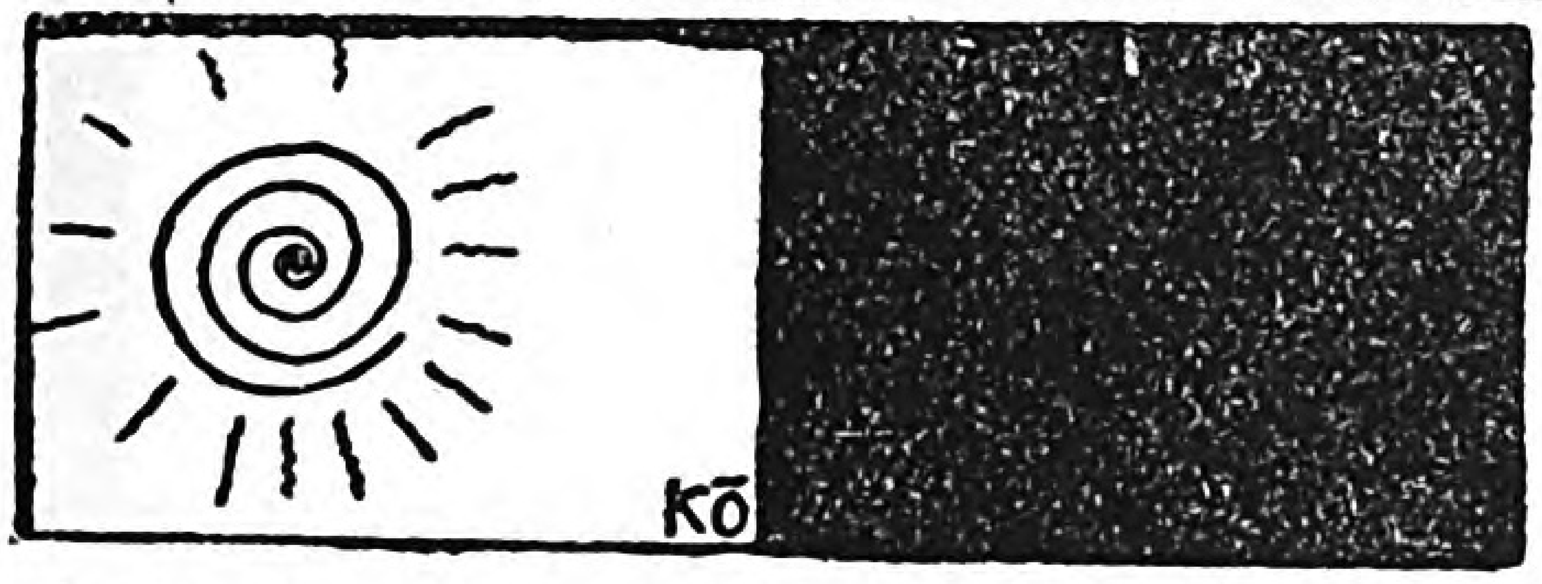


## 院長夫婦の書齋

主人博士（武装のつもりのゴルフ服、やや昂奮の面持ち） いよいよ。最後の船が出るといふが、どうしても歸らないかね。

夫人（手紙を書いてゐる） えゝ、いくら仰言つても、歸ら無いといふことに決心して居りますから。

主人 お前の强情は、いま始まつたことぢやあ無いが、體も弱いんだから、この熱さの最中、大勢の居留民の人達と一緒に、疊、一疊に二人などといふところに、居ることも出來ないだらうし、その中には病人の出來ることは解つて居る。ことに、お前は、腎臓が惡るいのだから。第一食物に困るだらう、野菜はすぐに缺乏するにきまつて居るから。




夫人 でも、居殘ると覺悟いたしましたからには、元より命を惜んでは居りません。でも、病氣が重つて、あの中で死ぬのは隨分みじめね。

主人 みじめに死ぬのは厭で、立派に、死にたいといふのか。お前らしい言ひ草だ。——一體お前は見得坊なのだ、そして、エゴイストなのだ、自分一人の體だと思つてゐるのが第一間違なのだ。——子供たちのことを考へなさい、——母性愛とかなんとか、ふだん言つて居ながら、自分の意地のために、自己を通すのはエゴなのだ。——虛榮なのだ。

夫人 あたしを口惜しがらせて、止めさせやうとなさつても、私は止めません。

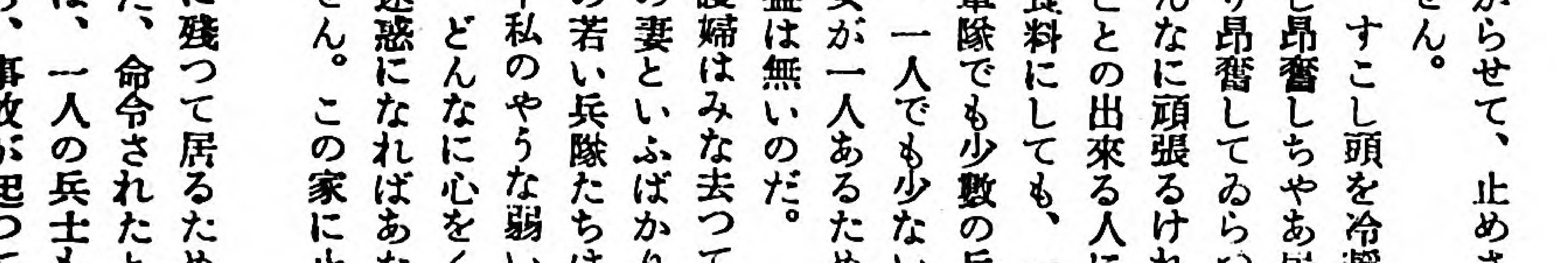
主人 よく聽きなさい。すこし頭を冷靜にして。

夫人 ちつとも、あたし昂奮しちやあ居りませんのよ、あなたこそ、かなり昂奮してゐらつしやるわ。

主人 然し、お前はそんなに頑張るけれど、民會では、一人でも歸國することの出來る人には、歸つてもらひたいのだ。第一食料にしても、一人へればそれだけ助るのだから、軍隊でも少數の兵士で多くの居留民を守るのだから、一人でも少ない方がよいのだ。——お前のやうな女が一人あるために迷惑はかかればとて、すこしも益は無いのだ。

夫人 ——ですが、看護婦はみな去つてしまひました。私は今日ただ貴夫の妻といふばかりで頑張るのではございません。あの若い兵隊たちは——事務員は——居留民たちは——私のやうな弱い女でも居殘つてゐるといふことが、どんなに心をくつろがせるかしれません。民會の迷惑になればあたくしは、民會の御厄介にはなりません。この家に止まつて居ります。

主人 お前が、この家に殘つて居るために、軍隊は守ることは出來ないのだ、命令されたところにあつまらない人民のためには、一人の兵士も出すことは宥されないのだ、だから、事故が起つてから兵士が





駈け附けて來て、大事になつたら、お前一人のために、國際問題を引き起こすことになるかも知れん。——そんなことを仕たら、國家に不忠ばかりじやあ無い、多くの日本人に申譯けが立つか。（稍激昂する。）

**夫人**　（冷情に。）それでは、あたくしはこの家にも居りますまい、支那人の家にでも隱れてをりませう。

**主人**　いや、それでもいかん、お前を隱したために、その支那人に危害があつては濟まない。

**夫人**　それでは、どうしたら良いのでせう、民會には厄介になるな、家には止まるな、支那人の家には行くなでは

**主人**　それだから、あすの船で日本へ歸りなさい、良人として命令するのだ。

**夫人**　（思ひいつたる面持ちにて。）あなたが、あたくしを想つて下さるお心はわかつてをります。子供たちの事も想ひださないのではありませんが——いま、あたくしには、手離してある二人の愛子のことより、大勢の患者や兵隊たちのことが目の前に一ぱいです。あたくしは逃れる心はみぢんもございません。

**主人**　（悲痛な沈默）

**事務員**　（ノックしてはひつてくる。運動服、ゲートル巻、武裝してゐる）院長、張將軍は、いよいよ今晩、夜中に脫出するらしいとの報告がございました。列車の用意など整へて居るさうです。事變は、その前後に起ると思ひます。軍隊でも、すでに、用意を整へて居るさうですから、どうぞ、病院までお引上げをねがひます。

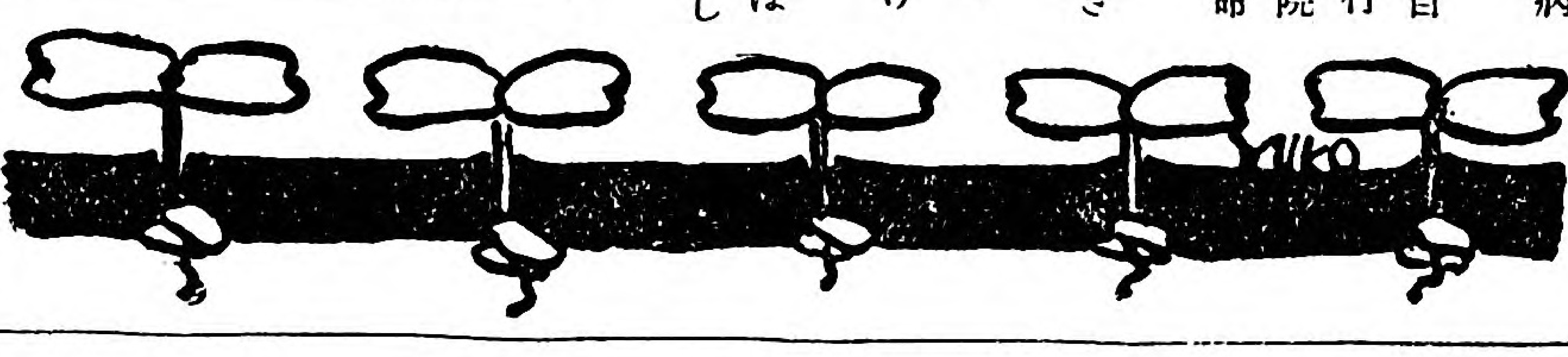
**博士**　いよいよ今夜か。それでは、直ぐ行くから自動車の用意をさせて呉れたまへ。（事務員、出て行く。）お前は、病院の從業員で無いんだから、病院へ引き上げることは出來ないのだ。公使の引上げ命令を待つて、指定の場所へ行きなさい。

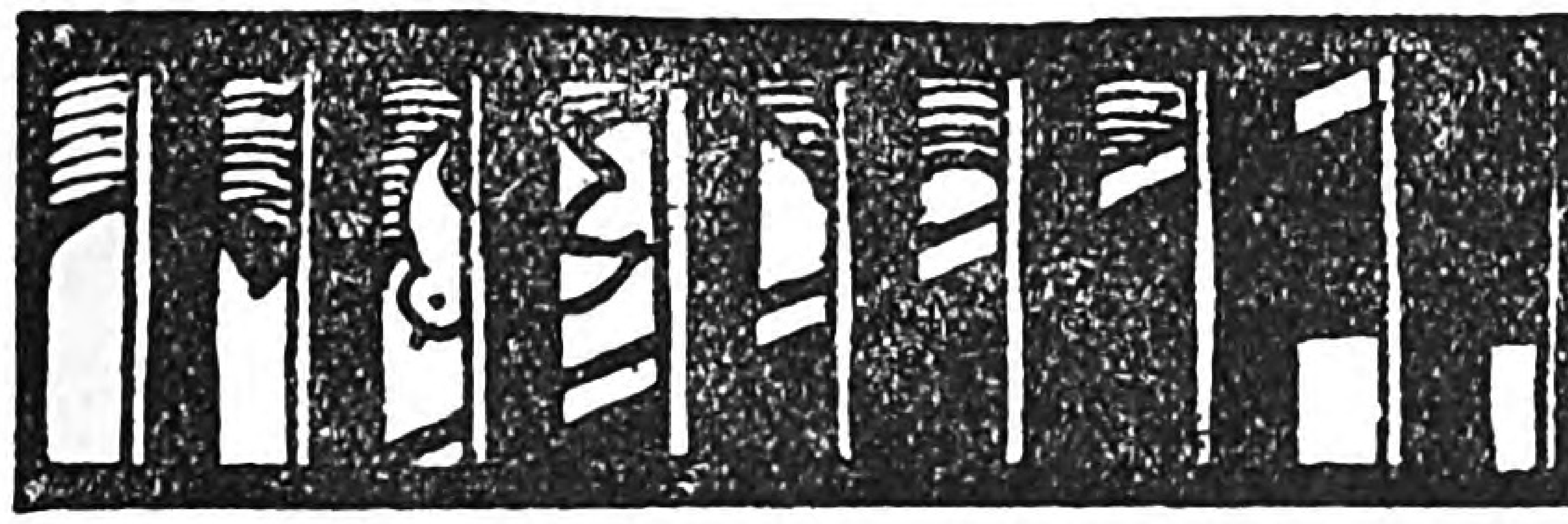
**夫人**　あたくしは、私のお役にたつ場所で何か働きませう。それでは、御機嫌よう。

**主人**　氣を附けなさい。くれぐれも言つて置くが、馬鹿な意地を張らぬやうにしなさい。（行きかける。）

**夫人**　あ、一寸、おまち下さい。——これ、掃除はして御座います。（ピストルを渡す。スタンドを消して、月光にて、子供たちへの手紙を書く。）

戰爭の悲慘。ドクガスや砲彈に對する恐怖。近代人の神經は尖銳な人殺し道具の暴力を喜ぶ程荒び果ててはゐない。北京の動亂で張作霖が逃げ出した時、在留邦人保護のために多くの兵隊が駐とんした。その時窪さんが實見したざんごうの中の××兵はすつかり怖え切つて、氣狂ひの樣だつたといふ。一日ごとに目を吊り上げ口を曲がめ戰はない先きから多くの病人が續出した。病人とは卽ち狂ひ！





# 娑婆の

## ――ブタ箱

江原

### 街の女

ドシンと後から突きとばされる樣に誰か入つて來た。看守の聲は靜寂の中にひろがつた。

「なんだ。お前またやつて來たのか。まだ十日にもならんぢやないか。」

「どうもすみません。」といつた聲は女だ。

「仕樣のない女だな。今度は何で來た。また現場を捕へられたのか。どうだ今夜は儲かつたかい。」

「旦那、今夜はさうぢやないんです。」

「ぢやなんだ。また無錢飲食か。さうぢやなからう？　淫賣だらう。アッ臭いな。賣るばつかしで湯に入らんもんだから臭くて仕樣がねえ。いゝよ／＼、そこまであけなくていゝよ。もう今度はすぐ返さないよ。お前なんか娑婆よりこゝの方がいゝだらう。」

看守はからかひながら、保護室の戸をガチヤリと開けた。石川さんだ。彼女は顔みしりのK子を見てニッと笑つた。「またお世話になります。」

K子は一寸會釋して、今迄寢て居た手布を半分わけ樣とした

「寢ちやいかん。今夜は一晩立つてゐろ。お前なんかに留置場が優しくしたらきりがない。疊にねるなんて贅澤だ、立つてゐろ。」

「石川さん、嚇しだから構はずお寢(ヤス)みなさいな。」

だが彼女は、まことにつゝましい。立つてゐる。が器用にすや／＼と眠つてゐる。

「また石川の奴來ましてね。」

交替に來たB看守に前のA看守は報告した。そして二人は保護室の前に立つた。

「オイ石川、眠つちやいかん。どうだ今夜は賣れたか。何人位お客があつた？」とB

「こんなのを買ふお客もあるんだからな。女にすたりはないとよく言つたもんだ。」とA

「お前、五十錢か」

「いや十錢位だね、五人束でかゝつて三十錢位に負けらあな、石川。」

看守は格子の外で勝手にしやべり散らす。

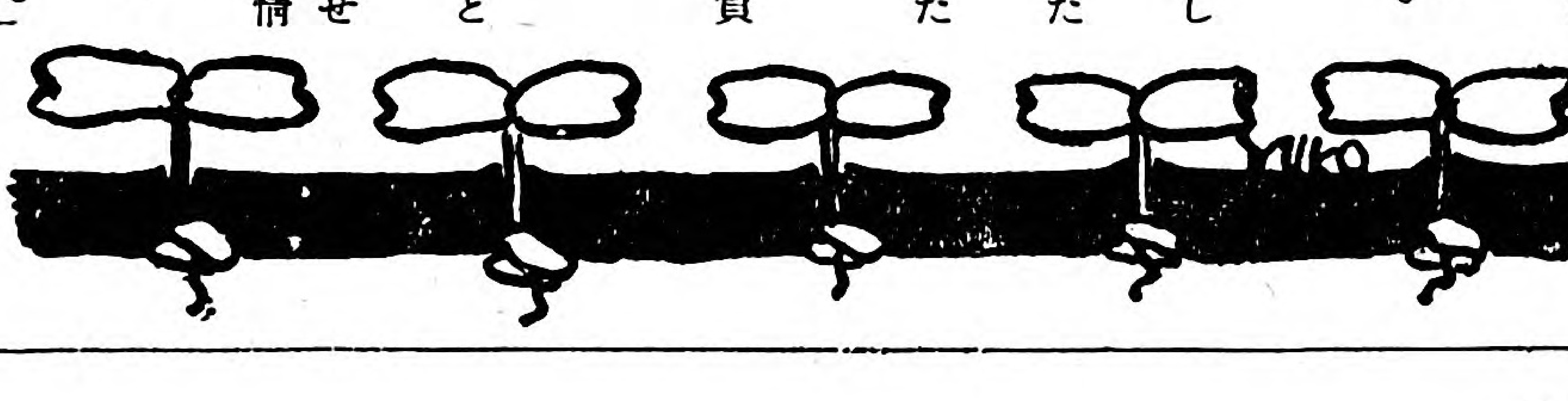
「まさか、そんな安いんぢやありませんよ。」

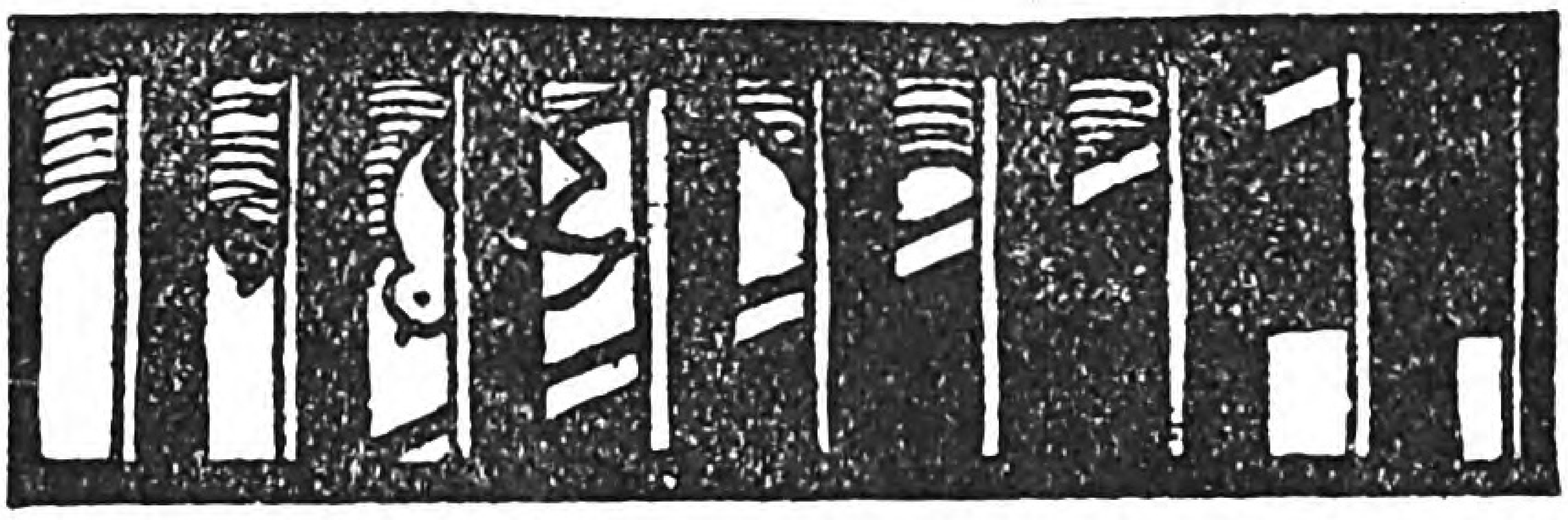
それでも彼女は、多少の矜持を可憐にも持たうとする。

「オイ／＼さうこゞんぢやいかん。今夜中は立たせておけと主任の命令だ。この室に入れるのさへお情けなのだぞ。」

大したお情けもあるものだ。この寒空に、房外に夜つぴて立つてゐられるかい。

「いゝのよ。知らん振りしてこゝにお寢みなさい。」





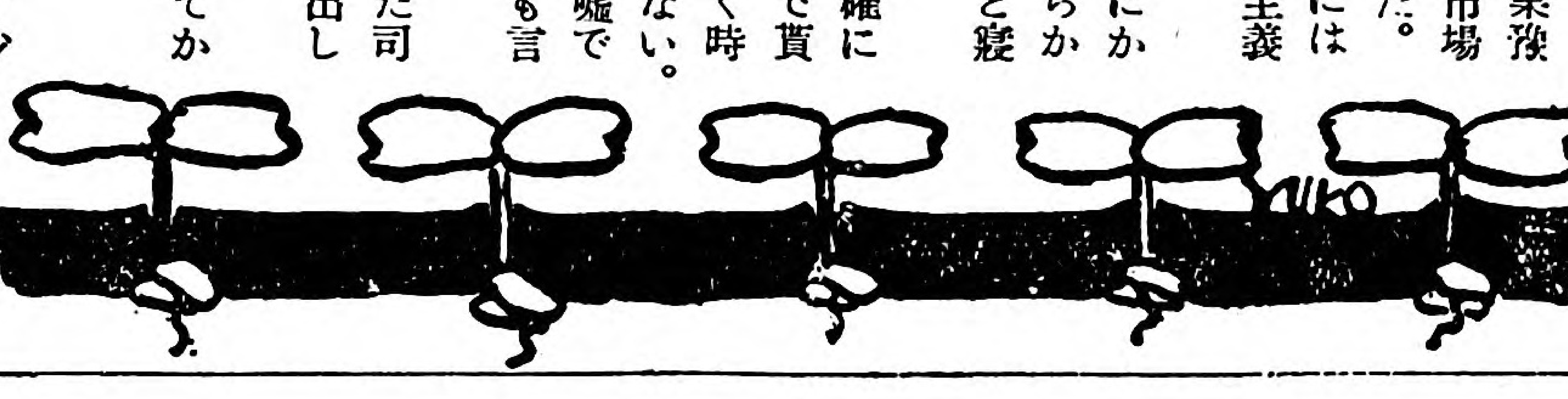
# 裏道

## ——風景

朝子

「十日も經たないに又やられるなんてお恥かしうござんすわ。」
「どうしたの。今夜は何？」
「また無錢飲食ですの。私おぢいさんの所から逃げ出したんです。」
「おぢいさん？」
「私ね、こゝを出るとすぐ、世話する人があつて植木屋さんに緣付いたんですよ。おぢいさんは今までの借ふとんをやめて新らしく買つたり、先のお內儀さんの着物をくれたりしますけれど、ケチでね。それにもう六十ですのよ。寒くはなるし、町で商賣は出來なくなるし、冬仕度もせねばならいので、私我慢して緣付いたけれど、どうにも嫌ひでね。私今晩まで嫌ひ通したんです。隨分おぢいさんに打たれましたよ。年よりはしつつこいから嫌ひ……」
なんと相槌を打つたもんだらう。
「けれどね、今夜はどうしても頑張りきれない事があつてね、私思ひきつて逃げ出しましたの。そしてお金もないのにそば屋に入つたもんですから。」
「私またあなた磨き粉をつめる內職に通つてると思つてましたわ。」
「三十錢か四十錢の日給で食つて行けるもんですか。」

親父の賃銀で足りなかつたら妻君も働かせろ、それでも食つて行けぬなら子供も勞働させろ、產業豫備軍を街に溢れさせても、一家總動員で、勞働市場に勞働力を賣らせる樣な仕掛けの現代の世の中だ。さて夫もなし、子もなし、それで食つて行く爲には女の只一つのものを賣らねばならない事も資本主義の世の中だからだ。
が石川さんは、運命の前に從順だ。いつの間にかK子の半分の毛布にくるまつて、すや〳〵と安らかに寢息をたて、翌朝K子が起すまで、ぐつすりと寢込んだ。
彼女は黴毒でないのかしらん。異常な臭さも確に唯事ではない。おぢいさんの言ふ事を聞く約束で貰つたといふ紺絣の單衣の上つぱりを、便所に行く時に、ぬいで步くと思はず鼻を押へずにはゐられない。昨夜お湯に入つたばかりだとは、皮膚を見ても噓ではなささうだが、臭ひだけから言つたら噓だとも言へる。
朝の楊子を使ひながら、ブタ箱の顏見分に來た司法主任は、石川君がゐる事に、變に悲痛な聲を出した。
「石川、仕樣がないね。お前、もう今月になつてから、こゝに來るのは三回ぢやないか。」
「どうもすみません。」
「今度こゝへ來るとどうしても檢事局送りだよ。少





しは他の管轄でもやれよ。」

「どうもすみません。」

「なあ、いつそ養老院にでも行くか。あすこへ行つてしまへ。その方が僕達の面倒もなくてすむといふもんだ。」

「だつて旦那、養老院では、働ける人は引きとらないでせう。私の様にまだうら若い者はまだ養老院で引き受けなんかしませんわ。」

彼女はどうしてだかまじめで辯解してゐる。

「うら若い？　お前いくつだい。」

「旦那、私まだ三十八ですよ。」

「三十八？　それぢや僕と同じぢやないか。しらがを見てから物を言へよ。」

朝の退屈を慰さめる道化師は、どうもお坊ちやんの司法主任より役者が一枚上らしい。醫者が病氣に追ひかけられるやうなもんだ。

「司法主任、今朝はイヤに猫撫で聲を出してるわ。あんな優しい顔して打つんですよ。」

「先に打たれた？」

「えゝホッペタを隨分！　初めの時なんか。もうこんな所へ來まいと思つたけど、打たれたりなんかすると平氣になりますわ。同じ私の様な事で來ても美くしい着物を着てたりすると待遇はいゝですね。」

「そんな事もあるでせうかね。」

「私初めに來た時ですわ。こゝに友禪の錦紗ぞつきで斷髪にしたお孃さんが居ましたね、私初め何んだらうと思つたんですが、一緒に刑事部屋に呼び出されたので分りましたの。ダンサーですつて。鎌倉に行つたとか、東京ホテルにとまつたとか、どの位お客をとつたとか調べられたので、まあこのお孃さんもと思つたんですよ。××××せがんで奢らせてね。氣嫌とつた方が得なので、一度に×××奢つたりしましたつけ。實際、自家を持つてると商賣がしよいわね。」

「その商賣、嫌ぢやない？」

彼女はK子の迂遠を笑ふ様に顔を歪めた。

「現場をつかまつたつて十五日も入ればいゝんですもの。お客さへあればね。――あなたは何？　でも旦那の所に歸れるでせう。」

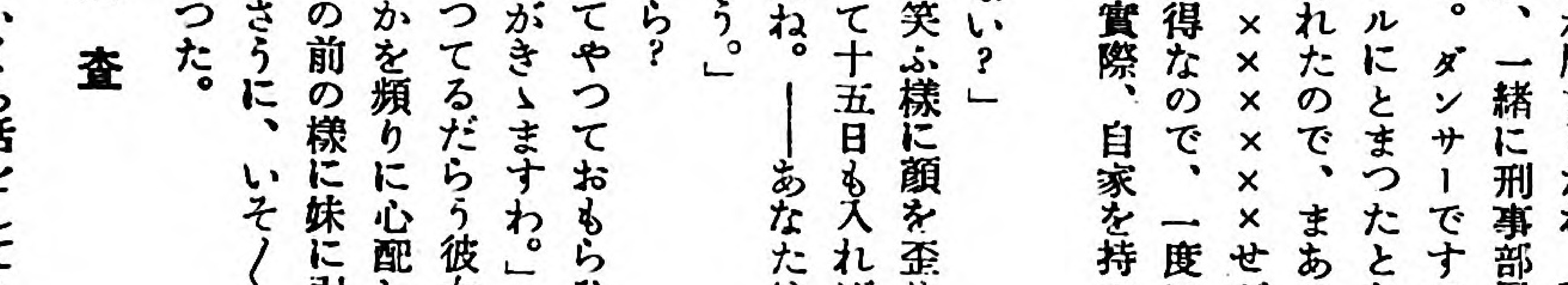
何と答へたものかしら？

「旦那の所にさういつてやつておもらひなさいよ。少し位の罪ならもらひがきゝますわ。」

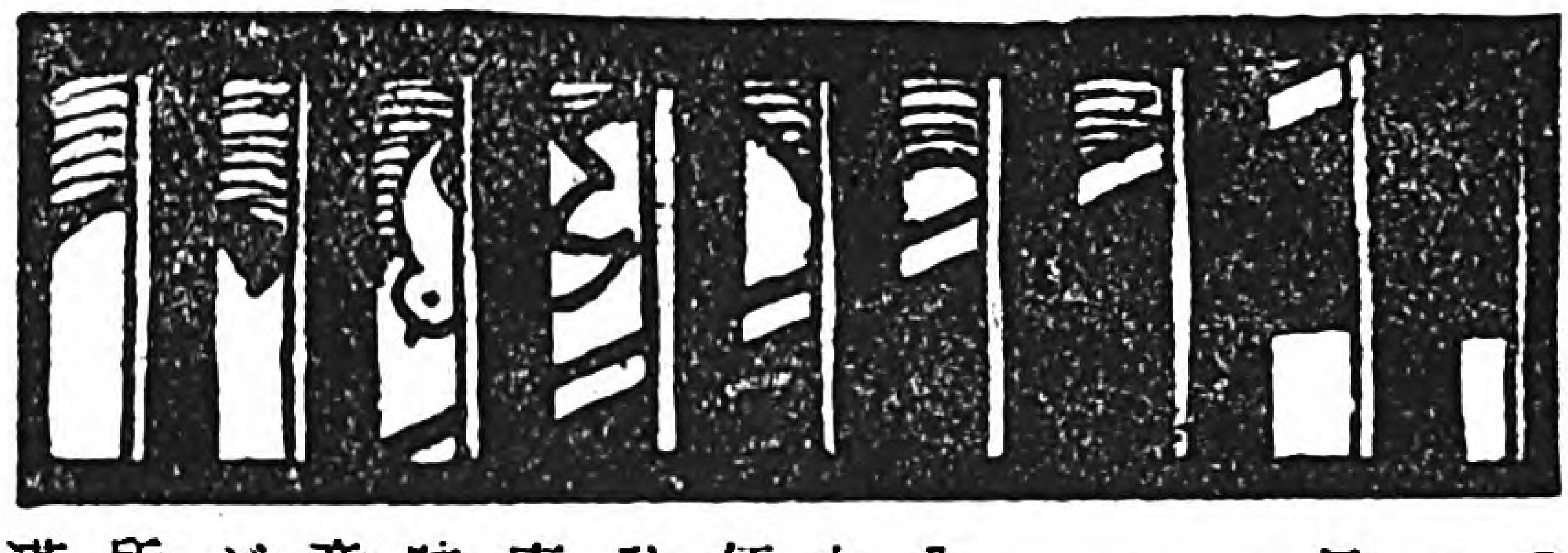
K子を萬引とでも思つてるだらう彼女は、自分は今度誰に引き渡されるかを頻りに心配してゐた。しかし日暮れ頃、またこの前の様に妹に引き渡されたのだか、何の苦もなささうに、いそ〳〵と、K子には挨拶もせずに出て行つた。

### 模範巡査

「わしの番の時には、いくら話をしてもかまわん。



一體話したり、寢たりするのが何故惡いんぢや。君達をこゝに留めておくのは、懲らしめの爲もあらうが、大體は取り調べの都合からなんぢやらう。それなら自分の家に居る樣に待遇をすればいゝんぢや。わしは自由を束縛する事は嫌ひぢや。人間は自由を欲するもんぢや。だが看守長の奴うるさいからな。足音がしたら靜にするんだよ。」××看守はキングが好きだ。司法省備付の富士だつていゝ教訓本だと思つてる。



「旦那、便所が願ひたいんで。」

單調な時を消すには、便所に立つのさへが喜びだ。身體を動かすのが何となく嬉しい。

「ようし、出物腫物所嫌はずぢや」こつそりと入口の錠をあける。

「××さん、僕もやつて下さいよ。」

「ようし。さあ行きな。」

自分達の頭腦のやうに、誰の身體も機械的にのみ動くと思つてるらしい彼等は、夏でも冬でも、九時、一時、四時と朝起きた時、夜寢る時の他は便所に立つ事を許さない。病人や醉つぱらひが舞ひ込んで來て便所へとせがむ哀願嘆願の涙の出る喜劇は、ブタ箱特殊の風景だ。けれど××看守の時ばかりは、この光景は變ずる。單調を破りたい意慾の發現は、便所行きを欲するので、彼はさながら、留置人の便所番となるのだ。歌舞伎座の便所番は金を溜めるが、××看守は人道主義的自己滿足をかち得る。

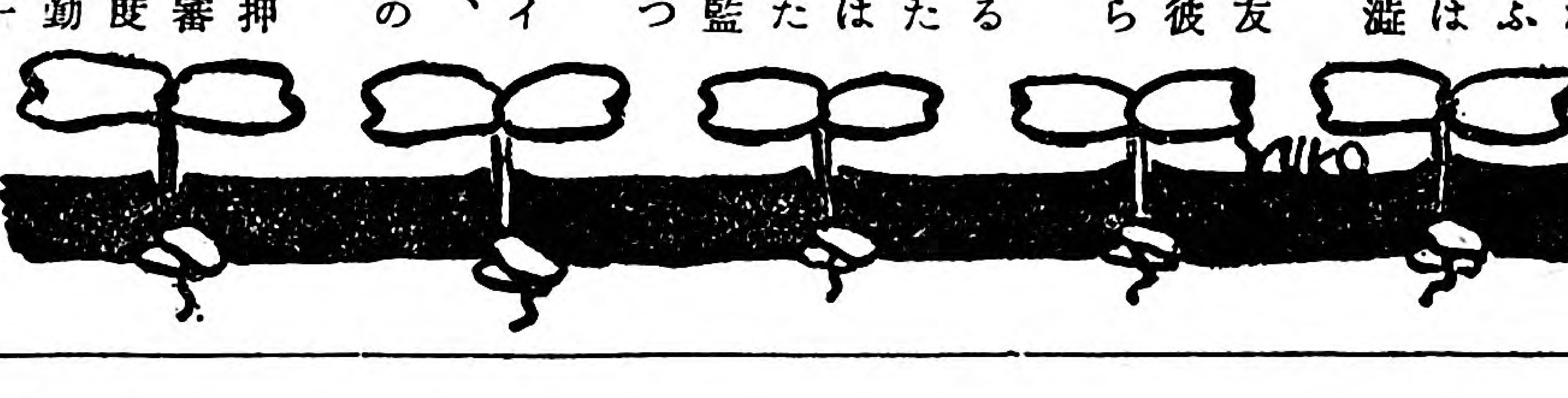
と共に、口の活動で一ときの自由を見出す。だから、少しの隙にも話が發展する、笑ひはオヤと思ふ程に爆發する。誰か入つて來たつて靜まるものではない。××看守は、言葉の手前怒る譯にも行かず澁面をつくる。

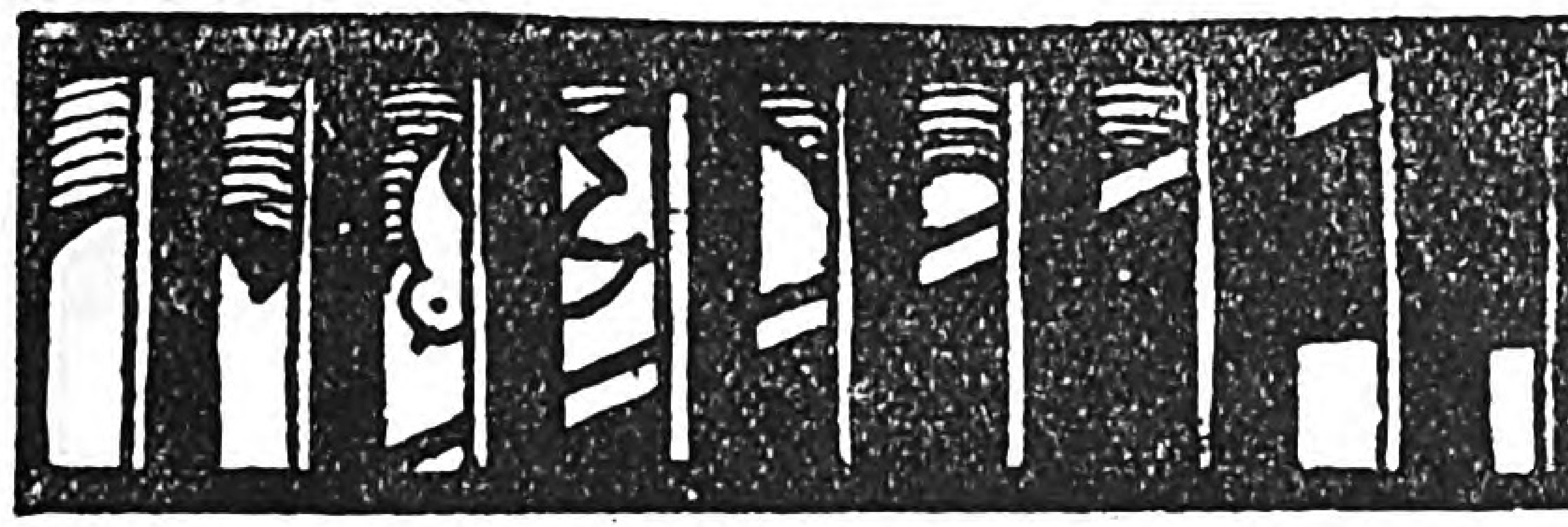
「わしは泥棒と仲よしにもなれるし、人殺しとも友達になれるが、どうも主義者とは友達になれん。彼等は理屈ばつかり言つて、秩序を重んじないからな、殊に田口と來たら、わしは匙を投げたよ。」

或る爭議にからまつて、騷擾罪の嫌疑で來てゐる田口君は、なか〳〵のアヂテーターだ。そしてまた××看守勤務時間中の喧燥の發頭人でもある。彼は自分の監房を、ストライキやデモの宣傳で湧き立たせるばかりでなく、時々は小便に言寄せて、他の監房にまで連絡をつけて歩く。××の歌の音頭もとつたりする。

××看守は、默殺でそれに對抗した。彼闘士がインキンで藥を賴んだり、妙布を貰ふ事を賴んでも、知らん顏をしてゐる。そして看守は美談で全監房の注意をまとめ樣とする。

「××つて仕事は、現在では、嘘で堅めて權力で押し通す仕事ぢや。毎晩よく交番の巡査が、擧動不審をつれて來るが、あゝしないと××の機嫌は目出度くないんぢやからな。擧動不審をつれて來ると、勤勉だといふんぢや。わしは交番に隨分立つたが、一





人も連れて來たことありやせんぜ。それで××からはお覺えがよくないが、これでも總監から立派な褒狀をもらうとる。」

「旦那、總監からの御褒美ぢや大した善行でせう。」いつも××看守と仲よく猥談してゐる第三號の盗品を買つた男。

「イヤなに大した事でもないがね。」といふものゝ彼はなか／＼大得意なのだ。貧しい老婆の生活を秘かに助けてゐたのを、新聞が寫眞入りで書き立てたさうだ。そこで看守は、身體をそらして結びを強める。

「しかも大新聞なんぢや。みんなが交番で人をひつぱつて來ては署長にほめられる時、わしは總監から褒められるんぢや。今は可隣想な子供に、少し宛、小遣を出しとる。」

彼は現在の資本家の行爲は憎んでゐるが、權力は愛してゐる。貧乏人の救濟は好きだが、解放には考へ及ばない。畢竟彼は、社會政策的低能兒だ。だから、かうした約束を約束する事だつて、人道のうちに加へられるのである。

「旦那、板橋はようがすぜ。二圓五十錢もあれやね、よりどり好きなのを宵の口から朝まで×けますからね。旦那も一つとこばかりよか、變つた所へ行つて見ることです——ぢや二三日してからお××にあがりますぜ。旦那は奇數日にお×でしたね。」

盗品を買つた男は、定規の拘留を食つて出て行く時の口約である。彼等は淫賣の話に於てうまが合つてゐたのだ。

だが××看守は、自分が道德的であると思ふ事に變りがない。

「わしは今年いつぱいで巡査を止して田舍に歸るんぢや。そして今度の選擧には代議士に打つて出やうと思つとる。今の政治家共に國をまかせておいては、貧乏人はます／＼貧乏するばかりぢや。これでも田舍に歸れば農民の味方ぢやよ。」

「チエッ、社民黨からでも出ろよ。警視總監と仲よしが、勞働者農民の味方になれるかい。監獄に入れられるぞ。」秘密集會でやられた鬪士渡邊。

「××が資本家の手先きになつて社會運動を彈壓するのは、日本の國體を知らないからだ。わしは、四海同胞ちう事を極力說くんぢや。兄弟には鬪爭もなければ彈壓もないんぢや、な、さうだらう。」

大まじめな××看守の言葉の下から朴訥な怒聲が起つた。

「俺はな、小さい時にも小學校でも、四海同胞て事を聞いたよ。噓つきめ。同じ兄弟でさ、贅澤こいて甘いもの鱈腹食つて遊びほつついてゐる時、年から年中働いても、ろくすつぽ飯も食えねえつて兄弟があるかよ。平氣であるつていふなら、それは資本主義の社會だからだ。四海同胞は、地主や資本家が俺達を搾るための眠り藥よ、その位の事は、働いてりやすぐわからあ。××さん、折角だが勞働者農民の代表は俺からお斷りするぜ。そんなムホン氣起さず



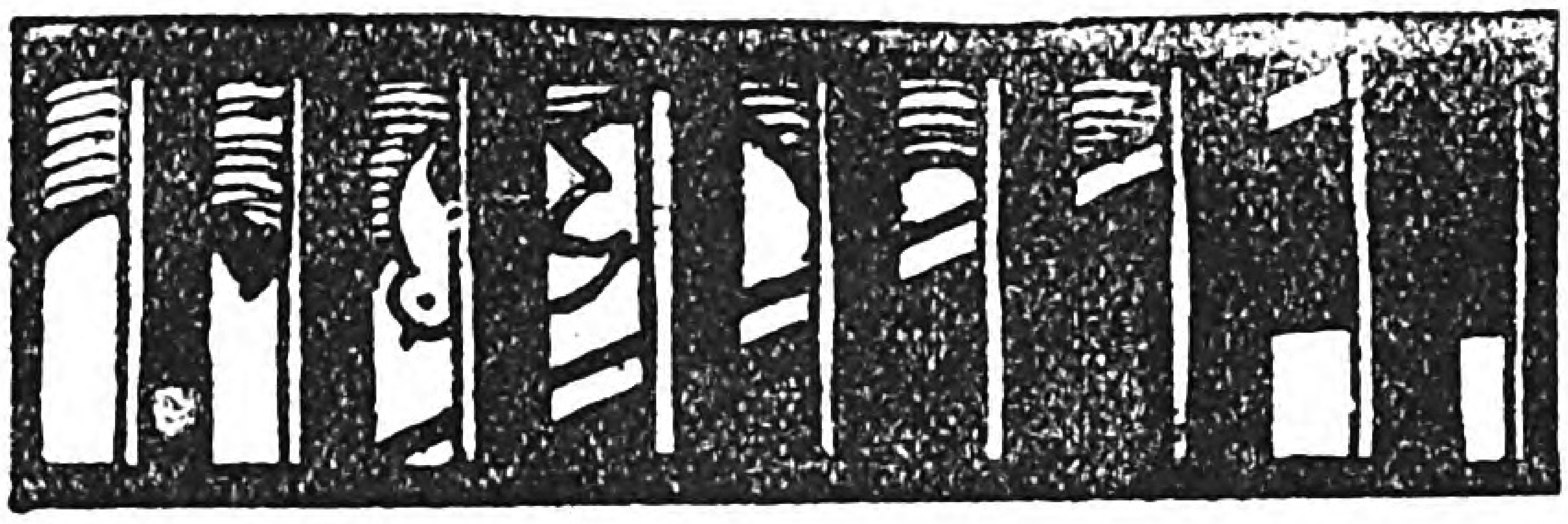
にもう一枚警視總監の賞狀でももらつたらどうかね。」
——交番の時刻は、彼模範巡査に、おもむろに對策の餘裕を與へた——。

## 貧乏人心得

一、汚いなりをして交番の前を通るべからず。

二、いくら仕事にあぶれても、勞働者は公園のベンチを利用すべからず。

三、勞働者は掲示板の前に立つべからず。



四、妻君の着物を持つて交番で質屋の所在を問くべからず。

五、朝起き三文の得は封建的搾取の金言、現在貧民は、電車の發車前に交番の前を通るべからず。

六、商賣道具と雖どもネヂ廻し等を持つた者は、交番の前は廻れ右すべし。

七、汚いなりの者は交番を見たらつかまると思へ。但しドロボー、殺人強盗でも、リユウとしたなりの時は、大手を振つて通るも差支へなし。

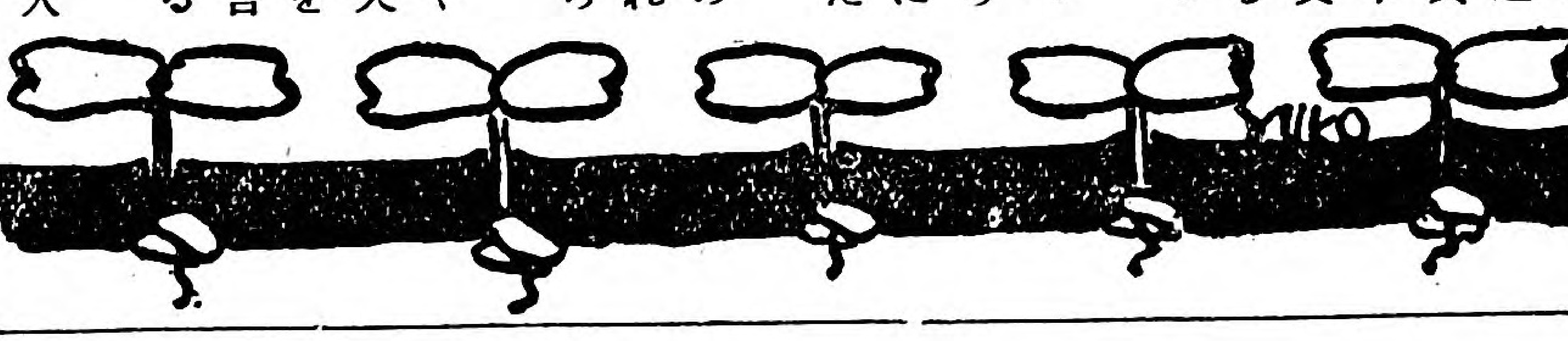
そんな茶化しを言ふな、といつてはいけない。それは、××をあまり正常的に考へるからだ。いふ事が常識的で、行ふ聲が天才的なのは××のやり口だ。例へばだ、大典の最中である。大典の盛儀を行ふたとき、豫備檢束の爲に、何もしないのに、官費の飯を食はされた社會運動の鬪士諸君は元より、一寸出て行方不明となり妻君を驚かした人達はどんなに多いかしれない。ブタ箱は文字通り滿員だ。どれを見ても、不景氣な、金の慾しさうな連中である。天才的巡査は、第六感を働かしすぎて、貧乏人は叩けば埃り、いや惡事が出るものと思つてるらしい。日本の人口九割の貧乏人を、いつそ、一つとこに住まはせたらどんなもんかしらん。

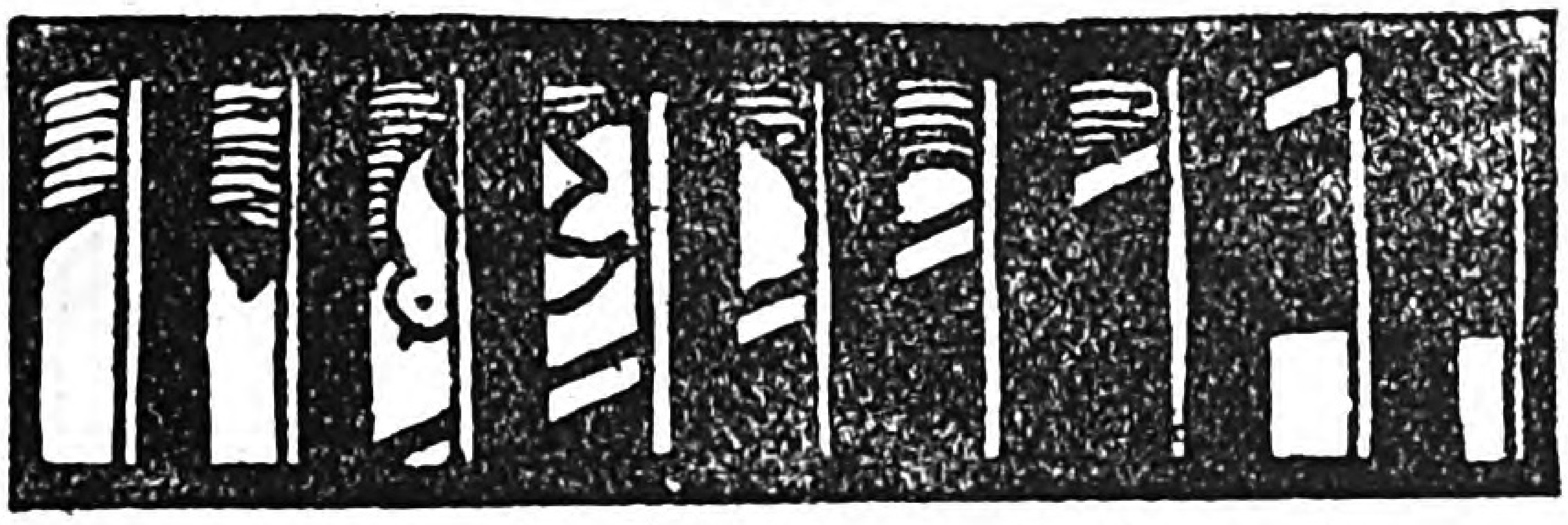
一勞働者は、その日仕事にあぶれて、或公園のベンチで資本論を讀んでゐたら、一寸來いと引つぱられたきり、二日の泊めおきだ。おかげで腸カタルにかゝりすぐ働く事が出來ないので、署長に談判したら、署長のご挨拶はかうだ。

「日本程××制度の行き屆いてる國はなく、犯罪の檢擧率の多い國はない。お前等が擧動不審でやられるのは、君等が惡いので、一々損害賠償に應じたら警察は破産ぢや」

またそれと同じ頃である。明日子供に持たせてやる月謝の工面に、妻君の着物を持つてでかけた夫は、交番で質屋の所在をきいた所、男が女の着物を持つてるのは怪しいとて、これまた檢束、彼等に言はせるなら、交番で質屋のありかを聞く馬鹿があるか、とでもいふだらう。

所で、かう何でもブタ箱に入れたがりながら、入れないものが唯一つある。阿片患者の乞食だ。





それは或寒い夜の話。

十時頃巡査は一人のかつぱらひ？　を連れて來たらしく、ドヤ〱と入つて來た。

「こいつ、圖々しくつてな、どうしてもはつきりと言はないんだ。啞かと思へば啞でもなし、こらしてやれ」

ピシヤリ、頭をなぐつた音がする。

「かつぱらひか？」

「いや軒下にもぞ〱してたので連れて來た。多分泥棒にでも入るとこだつたらう。オイ名前はなんといふんだ。」

「…………」

「なに、はつきり言へ。」

「…………」

「こいつ……」またゲンコツがとんだ。

「看守さん、その人は朝鮮人です。」

「なに朝鮮人？　さうか、早く言へばいゝに。あつ臭いな、その着物はどうした。どぶに入つたのか。鄭、お前聞いて見ろ。」

朝鮮總同盟員だといふ鄭君。監房から出されて通譯の勞をとつた。それによると彼は朴といつて二三年前日本に來て、高田町邊の阿片を使ふ工場で虐使されてるうちに阿片中毒にかゝり、モルヒネ注射によつて、漸く生命をつないでゐたさうだ。だが、働いても食へない現在の社會だ、病氣は即ち生存拒否である。お金がないので屑ひろいしてはとにかく藥を買つて居たさうだが、今夜は一錢もなく、しかし藥がきれかゝつて來たので、道におちてゐた瓶をひろつて賣りに行かうとした所をめつかつたさうだ。鄭君は重ねて言つた。

「今夜は泊る所がないから、一晩とめてくれつていふんです。注射もして欲しいさうです。」

「こいつ圖々しいな。朴檢策だぞ。」

「さあ、持つてる物を皆出せ。帶をとくんだ。」

「あつ臭え、どうした、今まで何處に寢てたんだ。ドブから這ひ出して來たやうぢやないか。オイ〱早く帶をしろ。」

「ねえ君、こ奴臭くて中に入れられないよ。」

「どうしやう。房外におくか。」

「房外におく規則はなしな。さうだ朴、こゝに寢てゐろ、眞中では通りに邪魔だから、隅みつこに寢てるんだ。」

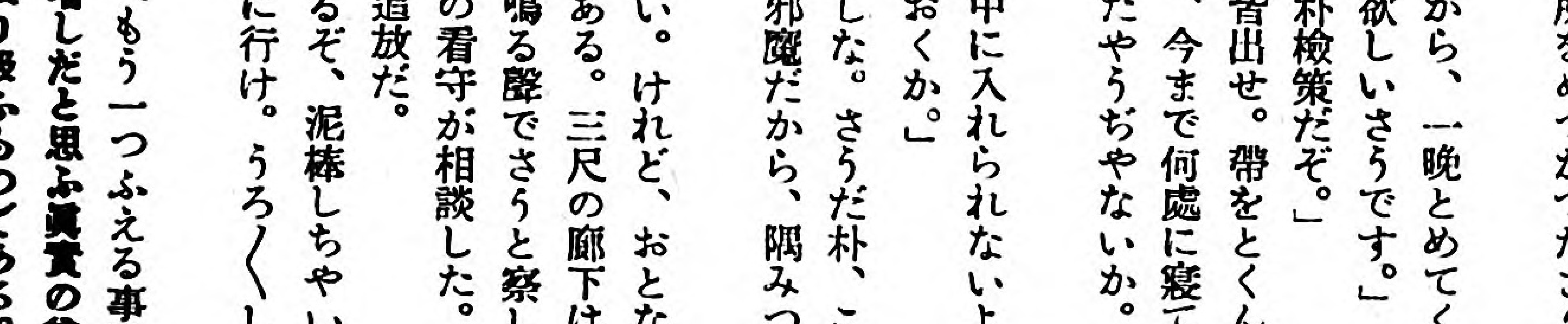
漸く片がついたらしい。けれど、おとなしく寢てゐても、男一匹の彼である。三尺の廊下は通るに不便らしい。通る人の怒鳴る聲でさうと察しられる。

「どうしやうか」二人の看守が相談した。さうして結局、訓戒をもらつて追放だ。

「今夜だけは歸してやるぞ、泥棒しちやいかんぞ、早くこの管内を出て他に行け。うろ〱してるとまた連れて來るぞ。」

そこで貧乏人心得は、もう一つふえる事になるか

**××は、ブタ箱をさへ增しだと思ふ眞實の貧民に對ては、金持ちと同樣に取り扱ふものである。**



# 初花

生田花世

七つほど蕾のついてゐる櫻をとつて、目に近くさしよせて、しげしげとその色を味つてみた。

ふしくれ立つた枝――おどろいたやうに張り切つてゐる蕚の絲。

ほつとふくらんだ蕾の桃色。

蕾の尖端(きつさき)をぢつと見てゐると、桃色が其處にしたゝるやうに集つてゐる。

指でそれを押したりまわしたりしてみても、手を離すとまたほつとふくらんで來る。矢張り、一種のいきみがあるといふことがわかる。花の『力』が感じられる。

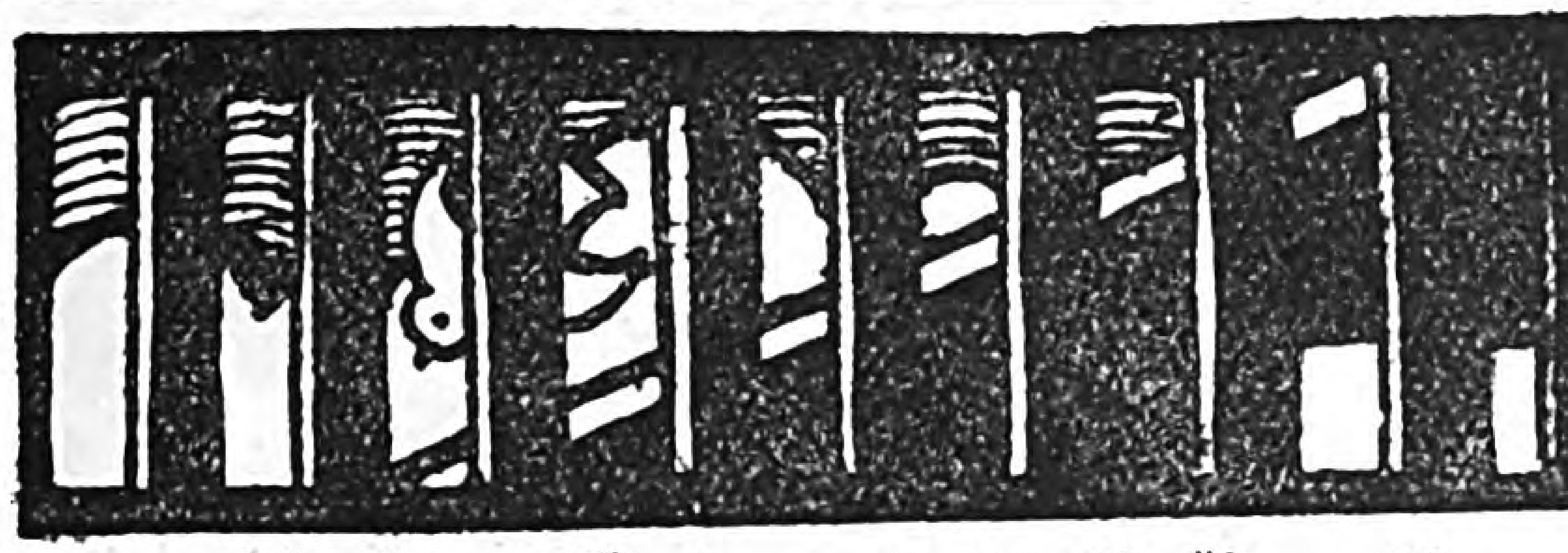
鋭尖(きつさき)に指を觸れて靜かにそのふれる感覺を味つてゐると、自然に…決して不自然でなく、十四の時に、むら〳〵と浮き立つやうな思がして、ものに驚く氣分の極めて鋭くなつた時に、さとく觸覺を覺える指で、胸の乳をぴつたり抱いて、靜かにふれて、そのぷき〳〵した力をつよく感じて見たその時の情味を憶ひ出した。



# 留置場

——ブタ箱

八木



森閑とした空氣に電燈がぼやけて看守の靴音が洋刀の金屬の響にからみ合つてきこえる。十時、十一時。やつぱり私ひとりだけ引かゝつたのか。解散と同時に警官の柱に圍まれた同志達だつたが。諦らめて、オーヴアのまま、靴下をはいたまま毛布にくるまる。毛布といつても本來の動物的あたゝかさは少しもない。

翌朝掃除の時に見ると向側男子の房は板の間のウスベリで、雑巾をかけてゐる。私のは疊敷で保護室なのださうだ。

「君、この室はいつか河上肇博士が這入つた事のある室だよ、キチンと座つて馬鹿に温和しくしてゐた、どうだ河上博士と同じ室に這入るなんて。」

「博士々々つて別に偉いとも何とも思やしない。」

「さうか、變り者だな」

洗面は、眼だけこすつて、ちり紙で拭ておく、便所も洗式、洗面所の設備もあるので一寸意外な感がした。

晝頃になつても調べる模様もない。私は何より女人藝術の仕事の事でいら／＼し出した。もう編輯締切り間際で、打合せなければならないことがいくらもある。電話をかけさせてほしいといくら頼んでも要領を得ない。それと、けふの午後三時に親戚の家族の就職のことで人を訪ねなければならぬ。もし、これが外れるとすると、どうして食つてゆくか、もう十日を保つに足る金もないのだ。

雨が降り出した。たつた一つの窓の磨硝子に顔を押しつけて外を覗くと、押收したであらう自轉車の山に紙札が雨にぬれてはためいてゐる。骸骨のやうな骨と白いふるへる紙片だ。疊をとほして寒さが波濤のやうな慄へとなつて膝から突き上つてくる。歯を噛かしめ呼吸をつめて力限り抵抗して惡感の通り抜るのを待つと、脂汗が全身ににじみ出てくる。懷手をしても、どこに體温がありさうにも思へない。

「司法主任に會ひたい」といふと

「君は高等係の方だ、だから高等主任といふのだよ」と敎へられる。だが何度請求しても駄目だ。

「君をば警視廳の特高から預つてゐるからこゝの主任ではどうすることも出來はしない」

そこで、私は單なる檢束でなく相當永くなるとを想像出來た。放免になつて歸つてゆく勞働者がある。

「ほら、金が二十五錢、これで全部だな、ぢやまた來いよ」

「御冗談で、もう眞平です旦那」

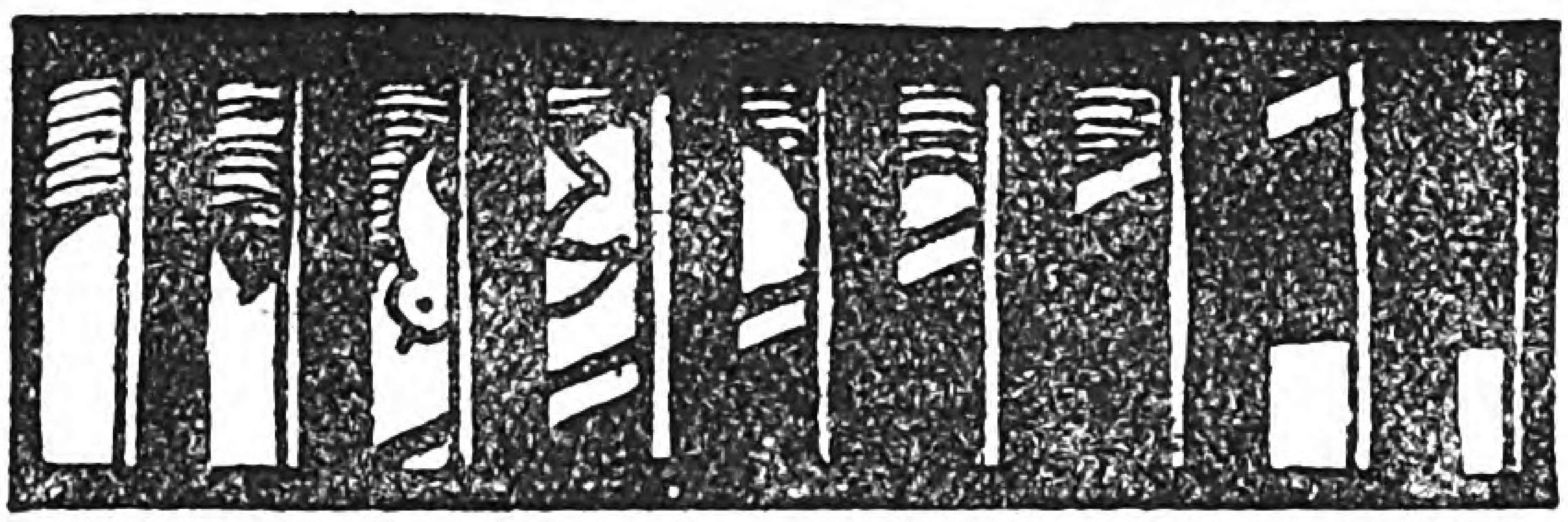
「噓つけ、また五日もすれや戻つてくる癖に、お前たちや全く世話ねえな、六圓も無錢飮食でたつた七日や十日の拘留で濟むんだからな、羨しいよ、結構



# 點描

## 風景（二）

秋子



な御身分で」

「いえ實際、今度からは、御厄介になりません」

　どんなに藻掻いたつてこの鐵の檻の中でどうなるものか、あの仕事もこの用にも、あの人の事も、この家族の人達も——重い絶望的な憂鬱だ。膝を組んで頭を垂れてゐる男達を格子越しに見ると、私はいろんな空想と憤りで全身が熱してくる。留置場だけですらこれだけの若い肉體と精神が空しく幽閉されてゐるのだ。更に全國の未決、既決の監房には？　しかも彼等はその特權をもつてどんなにでも料理するのは思ひのまゝだ。

「こゝ開けて下さい。出るから」

「便所か？」

「何でも可いから開けて。私は錠で押しこめられる覺えはない。失敬な」

　そして私はがら〳〵と扉をあけさせて敷居の上に立つた。

「引つぱられたのはこつちの間抜けで仕方がないが、これ以上服從することは嫌だ、どの錠もみんな明け放つてやつて下さい」

「莫迦なそんな事したらこつちの首が飛んでしまふよ」

「ぢや、私自身は自由にするからさう思ふが可い、決して錠を下しちやいけない、たかが演説くらゐでぶちこんで、取調べもなくてひきずらうなんて不法拘留だ、おとなしくしてゐられるものか」

と、向ふの監房の中から若い男の聲。

「いやぢやありませんか」でどつとくる。それ以後私は勝手に房を出入し、火鉢にあたつたりお茶をのんだり、差入れのお裾わけで草餅にもありついた。何よりも巡査の心理について興味あるいろ〳〵の事を知つた。

「おい、賴むから室に這入つてくれよ、上の人が來るのであぶなくて不可ん」

「ぢや、どの房へも火鉢と椅子を入れたら可い、そしたらはゐつてやる」

　してくれよほんとに、困つたお孃さんだ。出れば出たで官憲の壓迫だの不親切だので書きたてるしなあ、やりきれんよ」

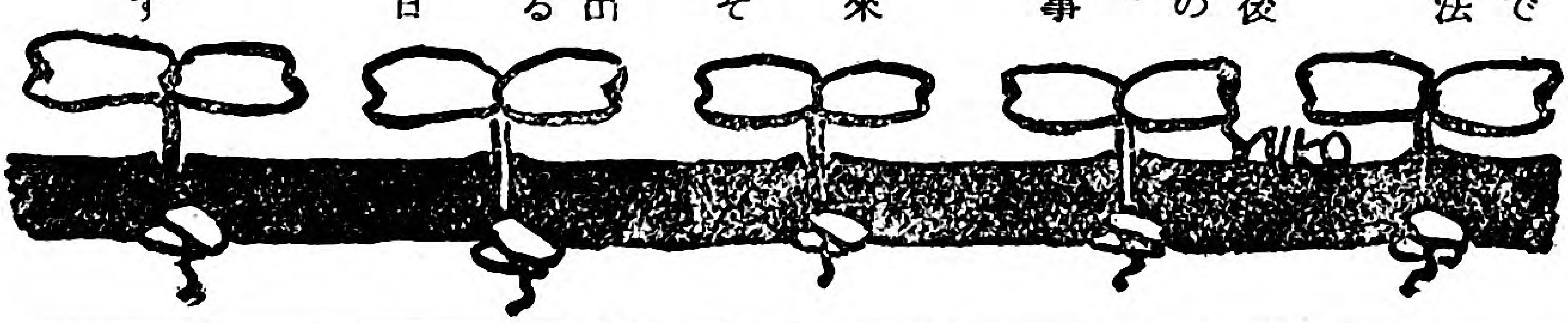
　巡査は新聞をよんでゐる。そこへ雜役の二十九日の男が覗きこんだ。

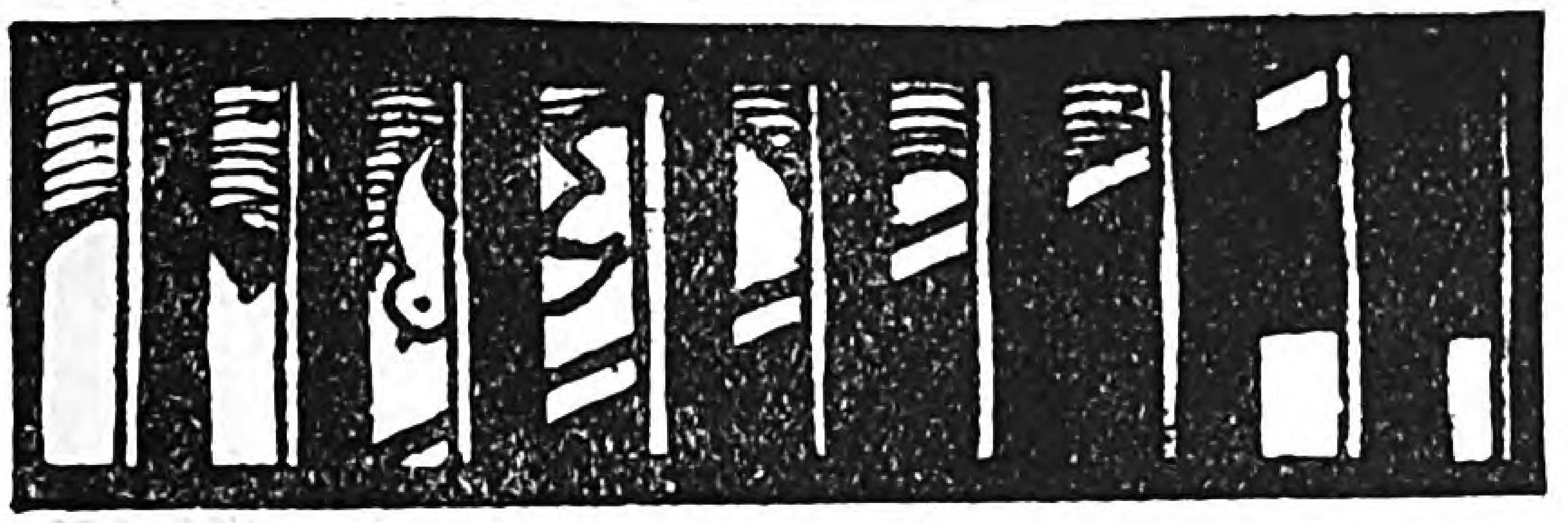
「旦那裟婆にや變つた事でもありますかい？」

「うむ、とうとう中岡艮一が出た」

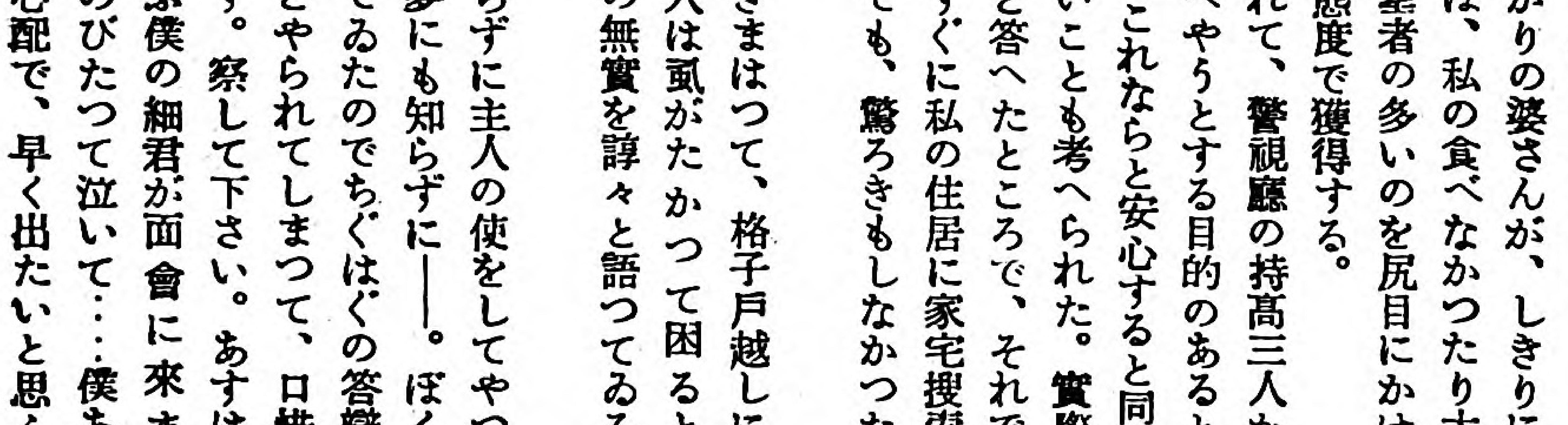
「へえ、艮一がねえ、わつちやあの男を知つてますよ、仙臺の收治監を壞しに行つた時にね」

「どうして行つたんか？」



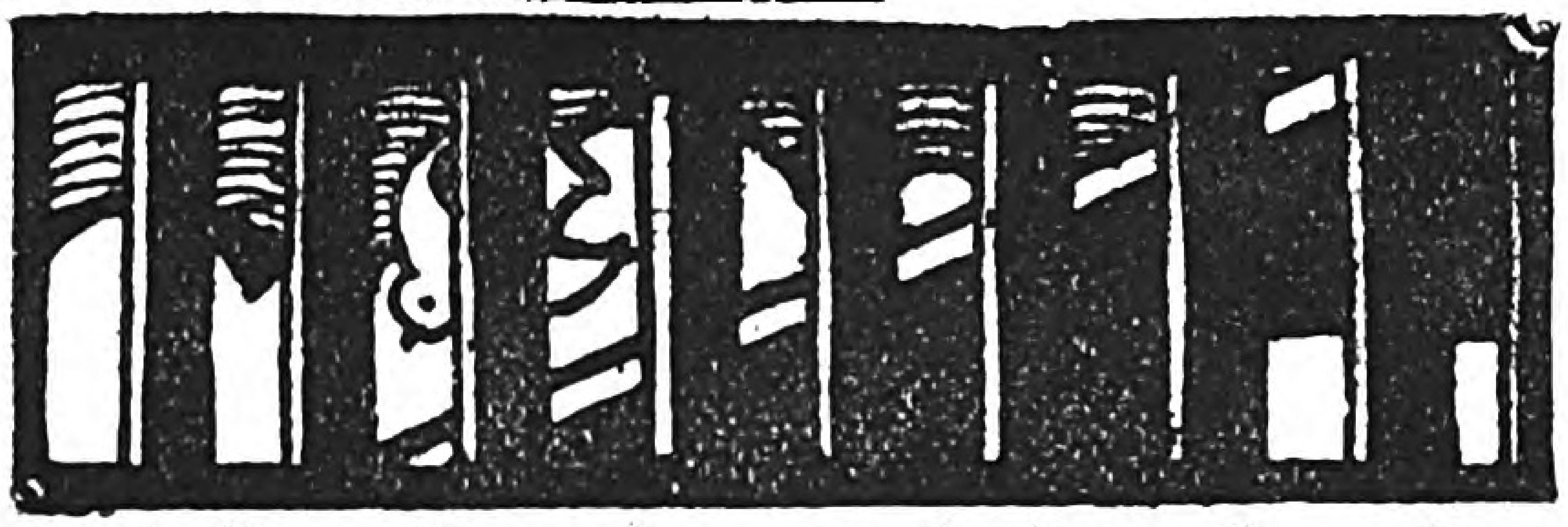


「弘前の監獄にゐた時にね。派遣されて行つたんでさ。なか〱大工事だつたもんさ」
「小父さん、あんた隨分方々詳しいのでせう」
「ああ、この親爺ときた日にやどうして、豪の者だ、なあおい」
「ヘッ！網走の監獄をはじめとして北海道全體から樺太、近くは小菅、神戸、長崎、恥しながら股にかけたものさね、面白かつたのは網走の時代だ。あそこは終身くらゐの凄い野郎ばかりだからね、生命なんざ草履みたいに思つてる連中なもんだ」
それからこの雜役の話は限りもなく展開する。しかし、これをそのまま傳へることが出來ないのは殘念だ。
「奧さん、あんた此所出て行く時には寄附してゆきなさいね、ほんの五十錢だけで可い」
「お安いことだが、どうするの？」
「みんなに甘いものや何か、奢つてやるんですよ、それから手拭のない者や、ちり紙のない連中にね」、
「早速今夜奢らうぢやないの、五十錢出すわ」
旦那の承認を得て、彼は留置場内の有志を集めにかゝつた。集まつたのが四圓八十何錢。小使に五十錢ほどお禮をする事にし、大福を全部買つて、平等に分配するのだ。その夜、小使の爺さんがいそ〱と岡持ちをさげこんだ。房の人數によつて公平にわけられた紙包みが、差入口から消える。私の分として三十個ばかりが――見ただけでうんざりして他の房へ入れてやる。隣りの、保險金ほしさの放火だといふ五十ばかりの婆さんが、しきりに呟きこんでゐる。お辨當は、私の食べなかつたり大部分たべ殘したのは、希望者の多いのを尻目にかけて、その雜役が特權者的態度で獲得する。
翌日は、呼び出されて、警視廳の特高三人から取調べられた。大體調べやうとする目的のあるところがはつきりしたので、これならと安心すると同時に、相當永びくに違ひないことも考へられた。實際、知らない事を知らないと答へたところで、それで通る官憲ではないのだ。すぐに私の住居に家宅搜索に出向くらしい事を知つても、驚ろきもしなかつた。
私は留置場内を歩きまはつて、格子戸越しにいろんな話をした。ある人は虱がたかつて困るといつた。ある男は、自分の無實を諄々と語つてゐるうちに泣き出した。
「實際、僕は何も知らずに主人の使をしてやつたんです。そんな事とは夢にも知らずに――。ぼくはあんまり驚いて逆上してゐたのでちぐはぐの答辯をしたんで、けふはうんとやられてしまつて、口惜しくつて仕方がないんです。察して下さい。あすは本廳へ引出されます、けふ僕の細君が面會に來ましたが、ひげがこんなにのびたつて泣いて……僕あ、細君がかはいさうで、心配で、早く出たいと思ふとやりきれないんです」



「君あその若さだものなあ、無理あないさ、いつ結婚したんだい」
「三月ほど前です、僕あ、コックです」
「俺あ腹が空いて不可ねえ」
「奥さん、あたしや實は女が欲しいんで」

その夜、ふたりの男女が這入つてきた。四十恰好のモヂリ外套の男がしきりに恐縮してゐる。女は五十五六、前歯がぬけた口もとがガクンと窪んで白髪の銀杏返しだ。



「婆あ、またやつてきたな、何處だつた？」
「どこも此所もあれやしない。面白くもないやね」
「いゝ年してこの淫賣婆あ、世話ばかりやかせてやがる」
「ヘン、世話も何もないぢやないの旦那、勝手におしよ、大體この野郎が間抜けさね、わたしが、そら來たつてよばるのに夢中で××××いて離さないんだもの、やんなつちやう。また七八圓かね」

婆あは婆あ同志が可い。こゝへ這入れ。仲よくしろよ」

五十歳の淫賣はまもなく覗いて見ると、放火の婆さんと抱き合つて布團の中でねむつてゐた。

午後呼出されて自働車に乗せられる。裏門から滑り出た車は快いスピードで春の街を疾走してゐる。もう春だ、氣まぐれな陽炎が雑然とした街路の人の頭や電車にすらさまよひのぼつてゐる。弱つた神經を強い外光が一時にゆすぶり、ゆり動かす。街角には議員候補者の立札が至る所佇立してゐるのだ。眞中の特高の一人は煖爐の上へ兩足をのせ毛皮へ頤を埋めて同志の消息についていろ／＼質問する。私の實際に知らない事についてあまりに知悉してゐるのに呆れてしまふ。警視廳へ行くのかと思つてゐたら數寄屋橋から日比谷の方を廻り、濠端を進んでゆくのだ。

「市ヶ谷行きですか？」から訊くと、特高はにやりとして「市ヶ谷へ行くにはまだ少し早いだらう」といふ。××署の前で降され、そのまま再び留置場へ——。

自働車の中で、私は前の署の留置人たちへ、周章てゝ五十錢の寄附をしてくる事を忘れた事を思ひ出してゐた。特高はこんな質問をした。

「君、は林芙美子はどんなアナキズムの理解をもつてゐるのかね」
「知らない。あの人はアナキストぢやないでせう」
「ぢや何だ」
「あの人自身、ニヒリストだといつてるから」
「しかしニヒリストにはよほど豪い人でもなかなれるものぢやないぜ」

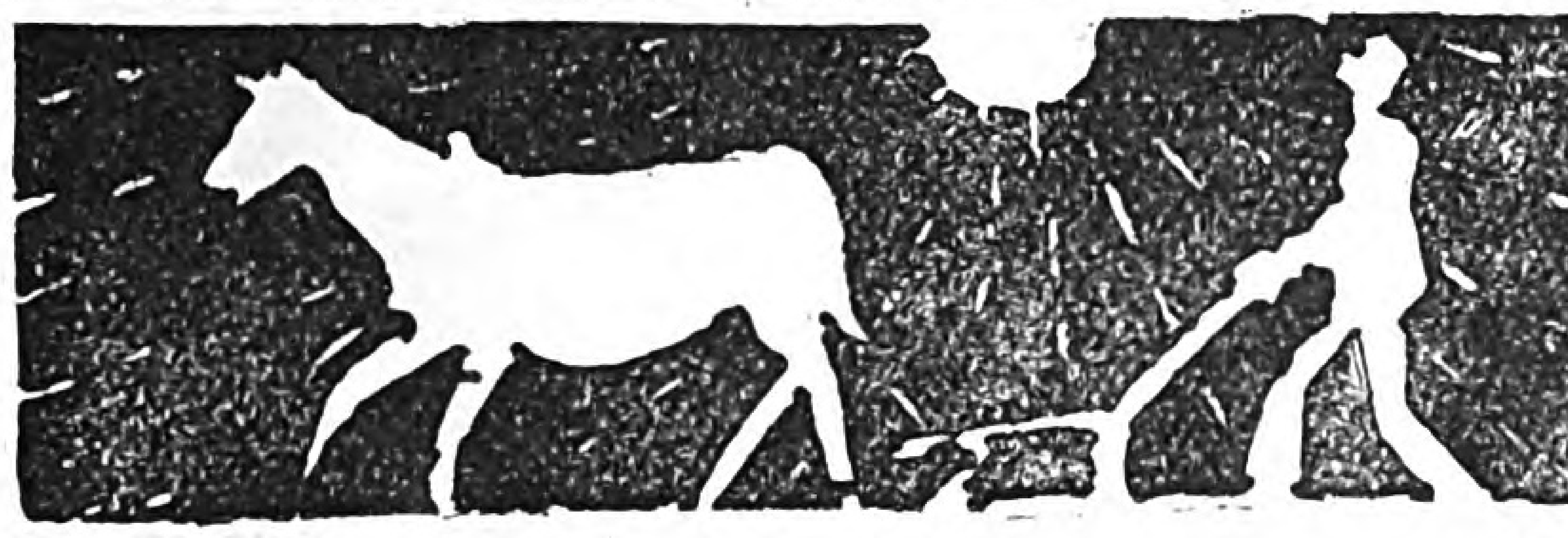
その偉いところを持つてるかも知れない」

あの人の思想は私にはよく解らない。



# 地に働く

大澤



汗ばんだ五體に心よい觸感が、皮膚にさわつて春風が吹いた。風が過ぎると、よどんだ生温い空氣が、不氣味に絮子の手足にしたひよつた。ポッポッと無數の毛穴から出かゝつた汗は、布のやうな風にたゝかれて、はけ口を失ひ、桑のカブトのやうに土と汗で、白つぽく汚れた手の甲に、溶解爐の中の鐵の樣にブツ〳〵と沸いた。

次の瞬間に絮子の體はブル〳〵とふるへた。木の葉の騒々しい音につれて、人家から山の根に夕ぐれが、這ひ立つた。谷間々々からは遠い遥かな空に、こゝぞとばかり、夕ぐれが手をのばした。

山の畑では、キンキンと鍬が石ころに、あたる金屬のこだまの音も消えて、木の葉の上を通つて夜の風があたる。

裸足のせいか、冷氣が一入絮子の細い腰に、くひ入る。闇が追ひせまる樣に、絮子の手元に動いた。鍬が一つ打ち込まれる度に、濕つた黒土がはねかへる。足は一歩々々と後じざりした。

青麥をいたゞいた、三つのウネが遠く平行線を作つた。堀り返へされないウネが闇の中に、白く尾を引いて光つた。

口角についた砂糖に、舌を波のやうにうねらして、糖分をタラコの舌先に付けて嬉ぶ、幼兒の樣に、新しい土の香は獨り絮子を、喜こばした。

母のお淸は、自作農から小作農へと變りながらもよく心棒して働いた。もうこれ以上落ちて行く所はない、といひながら、動物の樣に毛深い夫の手とならんで働いた。

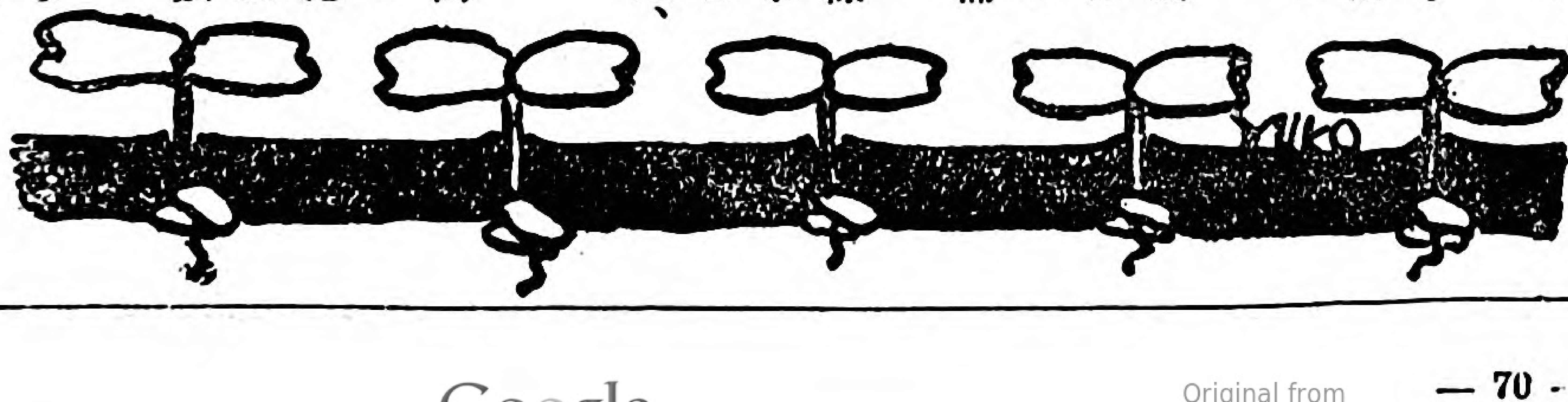
農閑期には、絮子、宮子、と女子手を相手に、養蠶をはじめ、目の廻るやうに働いたが、お淸夫婦に子供四人の生活も、必要なだけの米は出來なかつた。雨が降りつゞいて、日雇のない暮の日は、手桶をかゝえ絮子が、隣りから米を借りて來た。

干飯のやうに、ひからびたお淸は、世界地圖の樣に青バナと、飯粒がへばりついた手拭を、後生大事に太い腰紐と一緒に細い腰にはさんだ。鼻の頭をこすつては、水鼻をかんだ。秋が來る度にけづられた、お淸の下腹が、膨脹した。

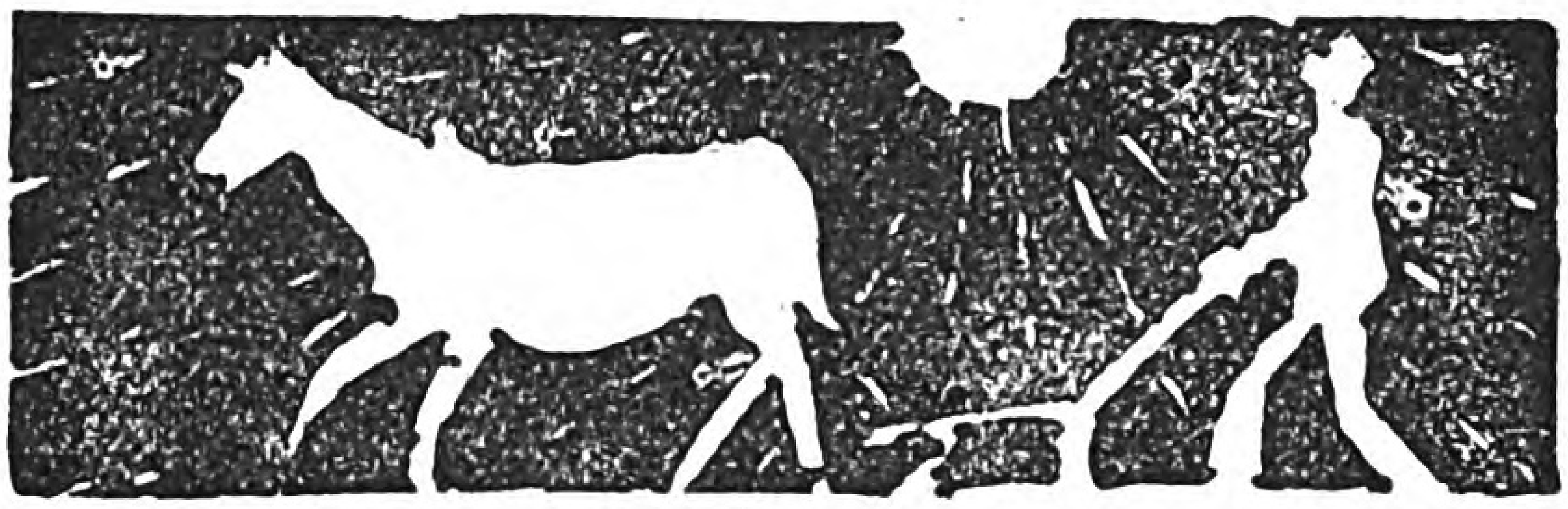
「また口が一つ殖えたか、チエッ」

厚い唇から、憎惡に光つた白い視線が、お淸の高い頬骨に飛んだ、又かと、空虚な目をしたお淸のオトガヒが、衿垢の光る中でゆれた。四人の子供を抱へた、手は擲の割れ木のやうに、固く、冬が來れば松笠の赤くのたうち廻つた、アカギレの皹割が、數へきれない程あつた。

苗代の上をなでゝくる風は、田道を通る人の臭覺に、次第に近づきつゝある、秋を思はした。頭から



# くもの



環

大きな手で、押しつけられる度に苗代の苗はイヤ〳〵をした。

職場の鍛冶屋さんが、固い鋼をフイゴで、太陽の赤さにふくらかして、三角、四角、圓とどうでも自由に動かした。支配する快感を黒ずんだ部厚の唇から洩らした。

無數の農民を押へる、地主の樣に風は苗代に、暴威を振つた。

六月に入ると、苗は五、六寸伸びた。

「もう植えてもえゝ時分だぞ」

といふ聲が、鍬やモッコをかたいだ、仕事がへりの男の話の緒となつた。

農夫は雨の降るのを待つた。

飯釜の輪形になつた、バラ〳〵の飯を、杓子ですくひ上げ、爪垢と一緒にまるめ、豆粉にころがして走つた。子供達の樂園、レンゲ畑が、太陽の光りを細長く引き、キラ〳〵日足をとばす、水田となつた。

設計圖の遠く連らなつた、水田が、雲母を散らした樣に、風につれて踊り上つた。

田植が初まると、村の子供は黒くなつた。

蜀の毛髮に、蒸芋のハタをつけた子供や、青バナを横なでした子供達が疊の上で、はね廻つた。

節子はメヤニの張つた目を、口をとがらして、鼻溝をまるめたが、マツゲがツン〳〵引張るばかり、舌で指をなめて、目につけると、學校を休んだ二番目の、宮子が、肩に泣虫の一郎を、せおつてゐた。黒い交叉した、帶の先に、頰を鼻汁で、黒くした一郎の顏が、のぞいてゐた。

父も母も、節子も居なかつた。スヽで燻の樣になつた、茶瓶の口から、小指程の茶の枝が、突張つてゐた。

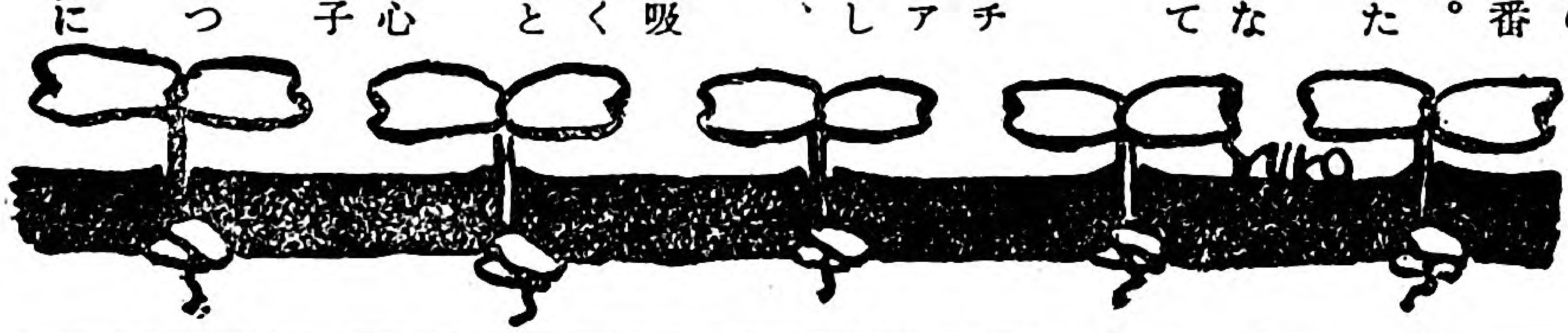
苗代の苗は、女達によつて、ぬきとられた。箕で豆をころがす樣に、兩手をふるわした。プチ〳〵と小氣味よい音を立てゝ、泥土の中から白いアブクを、立てゝ根が上る。一握り、二握り片手にしめつけられた苗は、ワラグロの樣に苗代の水中で、浮いた。

節子はふくれた、母の下腹と、肩で波打つ、呼吸とをみた。平手で打たれた、母の頰は、青黒くむくんで、障子に飛んだ、雨しぶきの樣に、はつきりと形をうつした。

齒糞の黄色い口を、くひしばつて、彼女はよく心棒した。目頭に光る涙をみると、三人の子供は節子の影に、すくんで、火の付く樣に泣き叫んだ。

ねぎの樣に、ひよろ長い節子も、胸に圓味をもつ娘になつた。

子供が生れるのが、喧嘩する程、悪いことの樣には、どうしても、思はれなかつた。





何遍も考へてみたが、何時も最後に、モヤ〱と雲のかゝつた、頭の中ではつきりした答へは、出なかつた。何故とは知らないが、食へないからだといふ信念を持つ樣になつた。或る晩遲く、北裏の熊さんが、もらひ風呂の石鹼臭い、顔をして、濡れた手拭を、ハタ〱さして來た。

「早乙女が、一人り足りないが、お淸さんの腹の子に障らなけりや、二三日來てくれんかえ」

腹の子といわれて、三人の視線が、突出した先に、兩手で行儀よくならんだ、お淸の膝をみた。

煙管を打つた父はドーランを引き寄せながらやにの出た雁首に、きざみをまるめこんだ。破れをつくろつていた、繁子の脂肪の浮いた、小鼻に皺の子のひきあごをしやくつた。

「俺んとこは、何時でもえゝきに、繁子の奴も、つこうてくれえ」

猫の手まで數ひたい秋。農夫は體中の水分を、キラ〱輝りつける、太陽に最後の一滴、まで絞ぼらした。モジヤ〱と馬鈴薯の毛ずねに蛭をつけて、田から田へと走つた。

幾數もの頭が、都會のアスフルトの上を、走る電車のやうに、さびれた田道を、縱横に、通る。

半透明の薄皮を、張つた水田が、ねぎ畑の樣に、苗の正列した、稻田と變つた。

村では祭りのやうな、騷ぎが每晩續いた。

舌のまわらぬ、ヨサコイ節が、拍子とる手と共に、子供の目を何時までも、つむらさなかつた。

キリ虫が桑の葉に、ついたやうに、ポツ〱と稻の花が咲く頃、繁子の父は、四十匁の、はぎの底をたゝいて、ドーランにつめて、家から八里も離れた柳瀨の道路工事に、ツルハシを擔いで出ていつた。

見知り越の監督は、右肩を前につき出して、歩いた。其の度に皮の靴は、重役の樣になつた。繁藏と同じ村から雇はれて來た、寅吉といふ老年の人夫は一畝の田もなかつた。

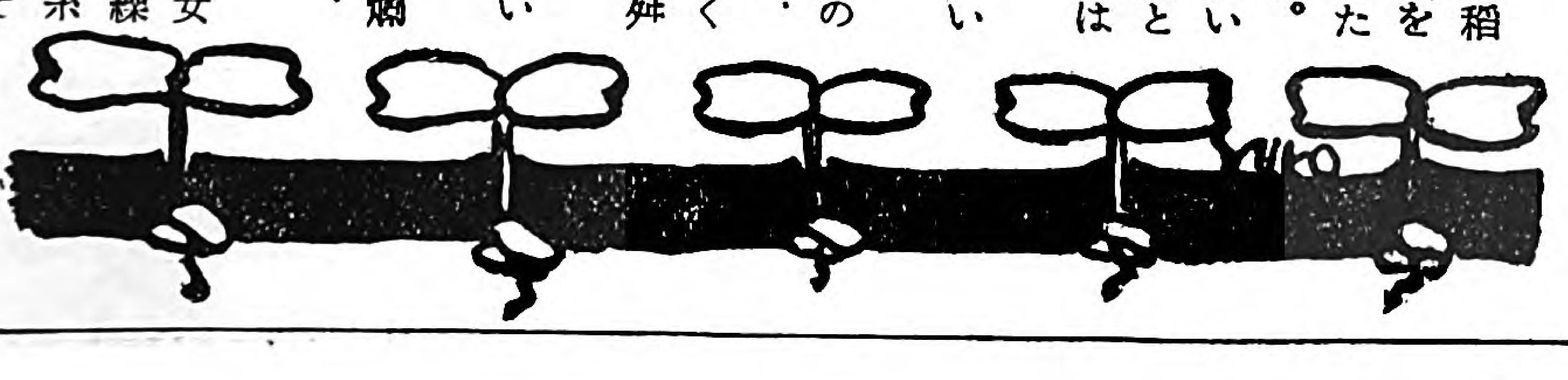
小作をするにも、彼には並村製糸工場にいつている、お君が一人しかなかつた。

彼等親子が一つ家で、暮らすのは、お君が日影の植物のやうな、艶のない顔に、紅をはいて歸へる、八月の盆と舊のお正月の、二回だつた。見習の繭くばりから、三年かゝつて、この頃ではやつと、八舛位まで、とれる樣になつた。

娘ばかりで蒸せ返へす樣な、工場內は、酸つぱい匂が、むつと鼻についた。

水腫のした、指叉をボリ〱かきながら、白く爛れた、皮膚が唐紙のやうに、一へぎ一へぎ指先で、散つた。

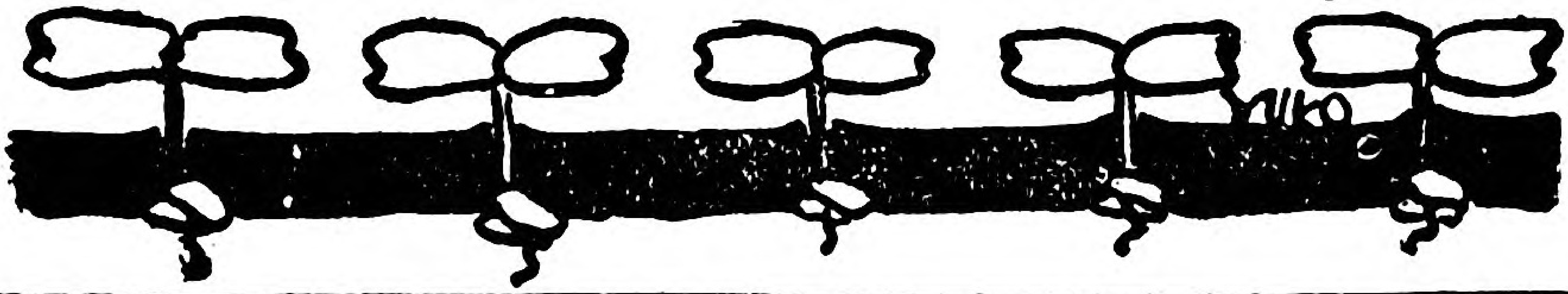
煮釜の繭が、枠に捲かれて瘦せてゆくやうに、女工自身も、過勞と粗食のために、細くなつた。糸繰器の前で、思春期の弓を張つた、腰が、糸屑と枠糸のはねかへす、沫が五色の虹を製つては、性慾をそ

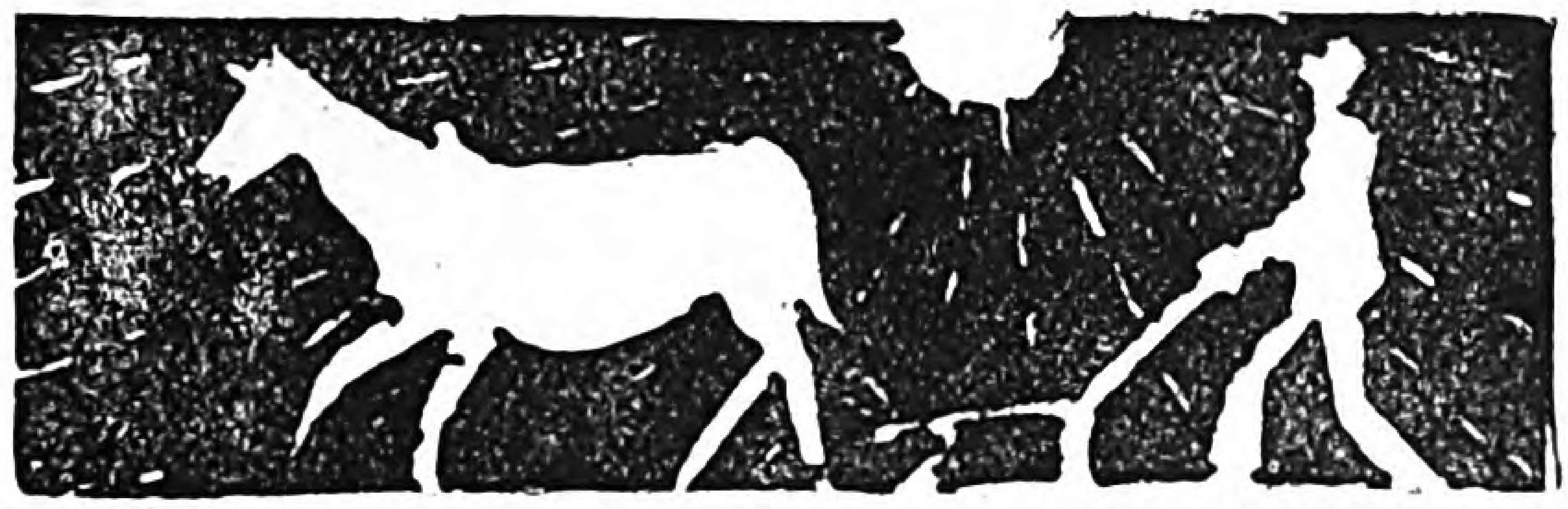


そる樣に、低く腰のまわりを、たゞよつた。
朝の六時から、晩の六時まで、晝食の時間も、正規に休まなかつた。能率々々で不當な搾取を行つた。そして女工達間に競走心をあほり立つた。
蛹の香のする體が、濕氣を吸つた、石炭殼の附近で、轉つてゐた。
性慾不滿の、ヒステリカルな女工は、木柵の向ふに働く、飯場の人夫に、交尾期の犬のやうに血走つた、目を走らしてゐた。
疲れてゐる女工の、まわりを煩く、蠅がとんだ。飯場の臭に、誘れて集つた蠅は、黒く群をなして、ワヤ〳〵と井戸蓋に集つた。

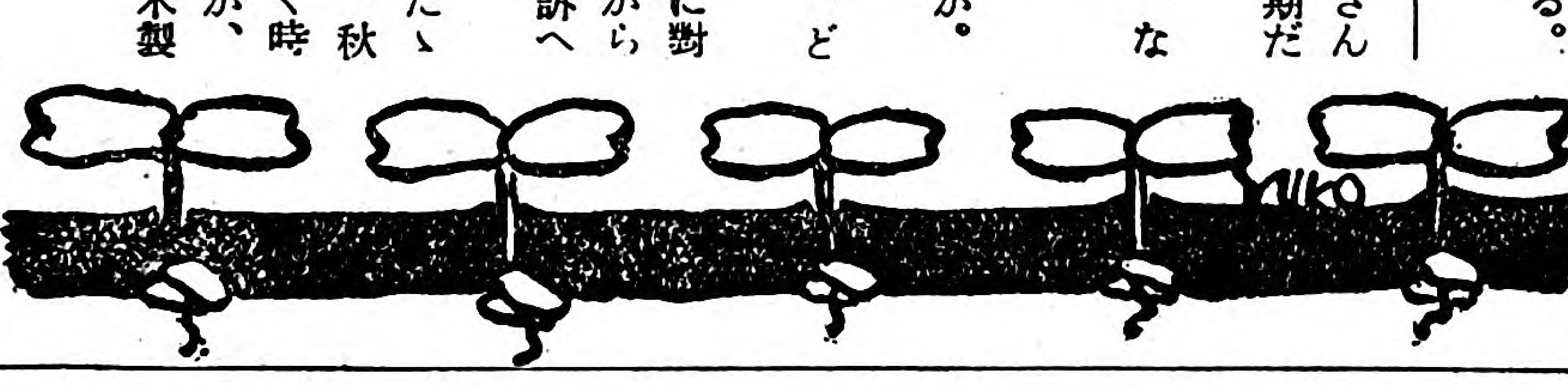


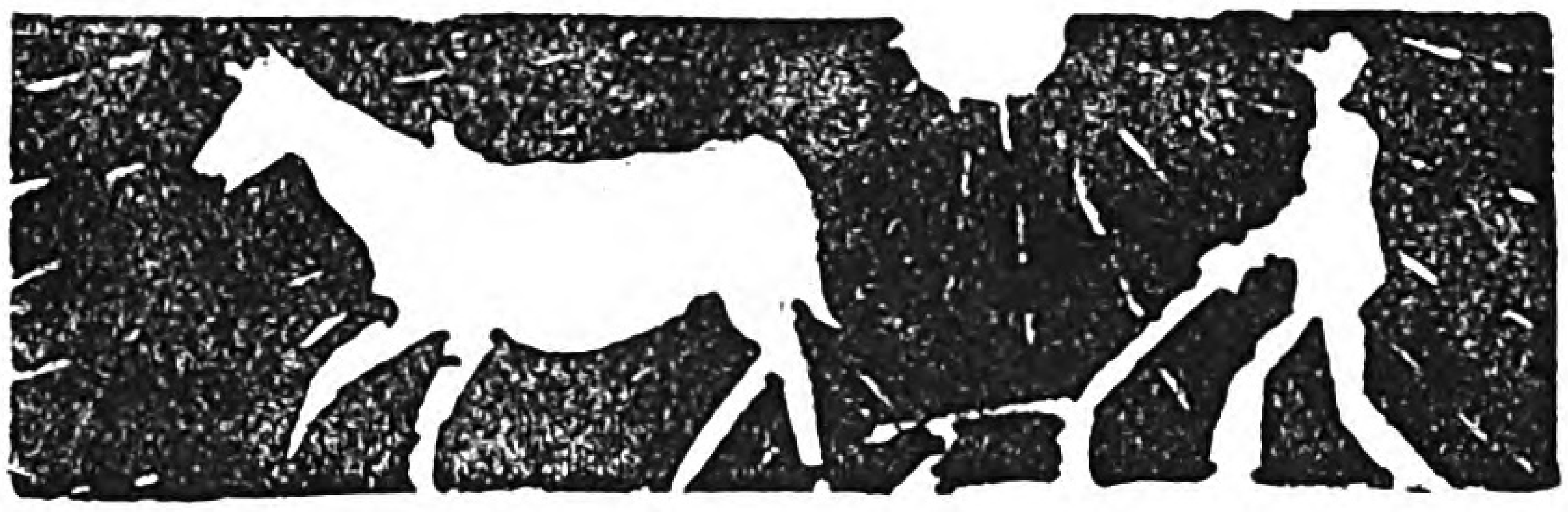
いそ〳〵と夕暮が、よつて來た。川面をなで來る風は、ふやけた體の女工を、よろこばした。寢室は動かない沼の樣だ。鋭く尖つた舍監の視線にあつて見習當時のお君は、壁氣の濕氣を含んだ、布團を頭から、かぶつてさめ〳〵と泣いた。
ブンと鼻につく香をした扁平な胴に毒々しい縞をした、南京虫の話をきいたお淸達親娘は、虱が股を這ひ上るのを想像した。
皮膚がツンツンする程、痒い南京虫は、この製糸工場より外では、みられなかつた。
お君はよく、工場内のことを話した。
涙の目を、シヨボ〳〵さしては
「お君さんも苦勞をするなあ、早う養子をもろうて、お父やんと一緒に暮らす樣に、せにやあ」
と、いひながらも、小作人で、五俵しかとれなかつた。昨年の秋を思ひ浮べて、女工生活との大差ないことに氣がついた。
赤い鷄冠を立てた鷄が、眞綿のやうな、ヒヨツコを連れて、庭土をつゝきながら、餌をあさつてゐた。
お淸の下腹が、野良犬の樣に、半圓を描いた。營養不良のお淸に似ず、生れた子は、まる〳〵と大きかつた。
刈り入れが近づいた。栗の花が、白い尾を引いて地上に落ちる頃、夫の松藏は鶴嘴を、擔いで一月前出て行つたと同じ姿で、歸へつて來た。寅吉爺さんも、一緒だつた。
俺らあ、監督の奴の、息の根が止る程、毆つてやつた。監督だと、偉らさうに、いばり散らしてよ、監督でも俺達日雇人夫が、なけりや用事がないもんよ、寅爺は老人で、間に合はねえから七分役だとよ」
酒くさい息を吐いて、朝から何回も同じことを、くりかへし〳〵憤慨した。
常々監督の横暴に、反感をもつた人夫達は、トロツコの影で、アルミの辨當箱を、脚袢の上に乘せて話した。
昂奮した人夫の背で、トロツコの中に積れた、赤土の魂が、岸の傾斜に沿つて、ころがり落ちた。木の根元にあたつては、波の樣に散つた。人夫賃をも





らいにいつた人夫に、交つて寅吉は歸つて來た。
「えゝ、松藏さん、わしや年老りやきに、七分役が、ぼつちりぢや、いふて雇はれて來た日から、七分役に下つたぞ」
交渉に行つた。松藏が充血した目を、ギラ〳〵光らして歸へつて來た。
「さあ爺さん、歸へろうぜ、言句をいふ奴は、働かさないとよ、此所だけが働く所ぢやなし稻刈も近づいたし、家の方で働こうよ。」
「だが爺さん、俺え、靴で監督の奴を、いやとい ふ程毆つたぞ。大分こたえたことぢやろ」
松藏は小鼻を、ふくらして愉快げに笑つた。家に近づくにつれて、冷靜になつた。暮の出來の事を考へた。「喧嘩しちやあ、雇つてもくれまい。早く耕地整理でもすりやあ」
　幼兒を抱く、夫の腕は、柔かさうだつた。
　勝手の違つた廣い胸に、押し付けられては、幼兒は泣いた、がその姿をみて、お淸は、微笑した。
　八日になつて、白粉花が長い把をつけたまゝ、散つた。發動機で殼を落す音が、ハシカと共に飛んで來た。
　お淸の家では、繁子に、まだ學校通ひの宮子と、親子四人がイガを干した。筵の上を舞つた。小柄の宮子は、イガ打をはねる度に、中心を失つて、ヒヨロ〳〵した。殼は飛んで姉樣かぶりの、上にとまつた。
蚊遣火の烟が土を這ふ時、浴衣の胸か開いて、團扇がゆれた。涼臺の上から、キン〳〵と頭にくる、女の聲が聞える。時々腹を抱へる樣に、高笑が流れる。
「繁子はボツ〳〵なんぞ、手をつけておかんと——並木は三年もすれば三十圓位とれるさうな、爺さんこの、お君さんが盆に、もどつた時……農閑期だけでも……」
働くよりも、食つていく事を、考へなければ、ならないお淸達小作人の、生活だつた。
どうすれば、稻に穗が多くつくか。
桑を澤山喰さずに、重量の多い繭を、造らすか。
工場主、地主は多くの、利潤を生んだが。
小作人は借り入れた、僅ばかりの瘦土地から、どうして多くの收入を得ようかに、苦しんだ。
肥料代をのぞけば、三ヶ月間の晝夜の、勞働に對する報酬としては、あまりに少ない、といひながらも、二番作の稻は黃色い、葉をして營養不良を訴へた。
　收穫の多いといふ三十二合が、八俵あまり、たゝきの薄暗い土間に、積み重なり、鎭守の森から、秋祭の太皷の音が、風に送られて、強く弱くとよく時物慣れたお君の後から日焦のした、頑丈な繁子が、風呂敷包から、ブリキの金盥をのぞかせて、並木製糸工場の寄宿舍には入つた。





# 一　景

山ノ木つが

金の花が咲いて――日輪がクルクル廻つてゐる。――お伽噺の挿繪のやうな光景だ。

九段坂、右手に向つて靖國神社の大鳥居玉垣、遠く本殿、左手に近衞竹橋聯隊正門、前に、維新成功者たちの銅像、紀念碑、有名な九段の高燈籠。

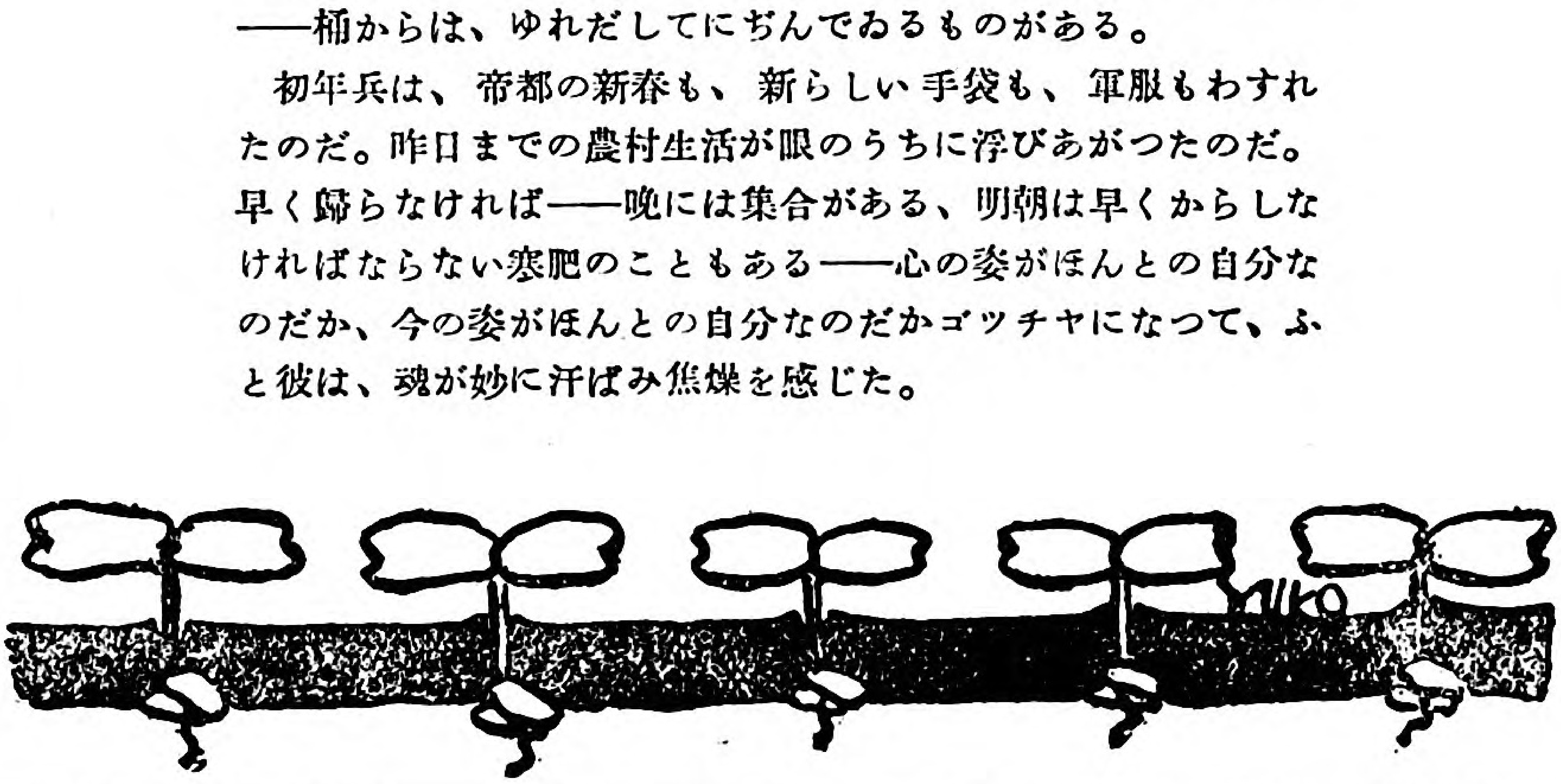
九段坂削取工事で途上が掘りかへされてゐる。

登場者、近郊の農村青年、おなじ年頃の初年兵。時、新春、寒い夕方。

人通りが激しくせはしい。坂の下の方に神田の街の灯が賑かにつらなつてゐる、坂の上には富士見町の灯が赤い。重い重い荷車を曳いて若い農夫が坂を登りかねてゐる。車の上の肥桶は重くパチヤンパチヤン音がしてゐる。農夫の顔は赤らみ額からは汗が出てゐる。春の晴着を來た往來人は男女共、車を避けて通りすぎる。農夫がハツと白い息を吐いた時、重い車はズルズルと歯がもどつた。

と、見る。若い兵隊さん、ウンと力を入れて車の後を押した。見よ、その手袋は、木綿だが眞白だ、だが脱いでゐるひまはない。右の手は車の腰へ、左の手は、馴れた手つきで肥桶へ――桶からは、ゆれだしてにぢんでゐるものがある。

初年兵は、帝都の新春も、新らしい手袋も、軍服もわすれたのだ。昨日までの農村生活が眼のうちに浮びあがつたのだ。早く歸らなければ――晩には集合がある、明朝は早くからしなければならない寒肥のこともある――心の姿がほんとの自分なのだか、今の姿がほんとの自分なのだかゴツチヤになつて、ふと彼は、魂が妙に汗ばみ焦燥を感じた。





# 目覺め

堀川

こゝは熊本落城の主勳者T將軍の住居であつた。門傍の大銀杏が金色の雨を降らし始めた小春日和の或る午後、植込の一角から流れる銀木犀の濃厚な香りに泌み泌みと故鄕の秋の横顔を感じ乍ら蒼い鄕愁を落葉と共に掃き寄せてゐた彼女の肩をトンと叩いた手が云つた。

「御主人は居られるか。」

「はい、どなた樣で—」

「かう云ふ者だ。」

傲然と張つた胸の金鎖の横着な光に形の無い反感を釀し出した眼は渡された名刺の白い皮膚を滑々と走つた。

—特高課刑事、廣瀨良三—

瞬間、豫感をサッと心に黒く引いた直線のピリヨードは昨夜出たつ切りの木島の廣い肩巾を浮してゐた。

—危險思想、解雇—

—怪しからん、忘恩—

扉に喰つ付けた彼女の耳が鍵穴の冷さを氷のやうに意識し始めると盆に乘せた茶碗の中でコヽアが小波を立てた。

背廣の男とオランダ苺のブツ〳〵のある巨大な鼻を持つた主人に憎惡を一束にして投げつけるとテーブルクロースの純白にこぼれた茶色の汚點を視覺の昂奮に流した彼女の熱した素足はリノリユームをどし〳〵踏んだ。バタンと扉が鳴つた。

—黑檀の机の上で女神の時計が六時—

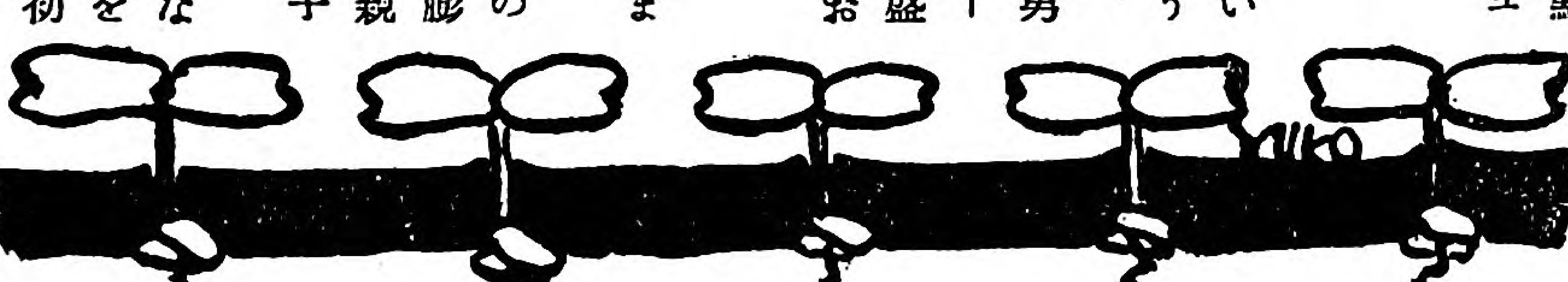
主人の巨大な鼻孔が飽食後の弛みを見せて明るい花電氣の下に光ると心臟病で雨漂しの瓢簞のやうな夫人がアメリカ產のオレンヂの皮を剝き始める、その頃廣い臺所の板の間で六人の女中と二人の下男の寒い晩食である。半月形の齒形の殘つたソーセージ、食ひ殘りの野菜サラダ、それ等をごて〳〵と盛つた西洋皿を前にして雇人の專制女王を自認したお初さんが云つた。

「チビ、之を一つ呉れてやろうか。」

空腹へ夢中で飯を搔き込みながら彼女は默つたまゝポリ〳〵漬物を嚙んだ。

「意地つ張りの變屈屋、給金前借の癖にさ」六人の媚を含んだ眼と眼の焦點で毒舌を振ふお初の胸が膨れた。K大學に籍を置いてゐる此處のドラ息子と親父の寢室を深夜に戸別訪問をする此の女だけが菓子戸棚の開閉權の自由を握つてゐた。こうだ。

—慾しいだろう、呉れてやろう、私や奧樣のやうな吝な人間とはちつたあ違ひまさあ」菓子屋の陳列を思はせる戸棚の硝子を拭いてゐた彼女の懷中へお初はチヨコレートの一摑みを無造作に押し込んだ、そ





# て行く

登女

の結果は—「あの子はとても圖々しいつたらありやしないんですよ、お初さんはいくら取つても構はないんだから私にもお吳れよですとさ」

それ以來瓢單夫人は彼女を菓子戸棚から隔離して近づかせなかつた。

一杯の飯が終るか終らないにベルが鳴る、目を白黒させ乍ら長い廊下を走る。

「このナイフは葱臭いよ、誰だい、果物用で野を切つたりしたのは、洗つといで」

二杯目が終らない內に又ベルが鳴つて長い廊下を走る。

「熱いお湯を持つといで、ホツトレモンを造るから、お急ぎだよ」

皆濟んでしまつた膳でふやけて南京米の長さになつた飯を冷えた茶で流し込む。

—女神の時計が十時—

今夜も又歸らない息子のことを愛情と叱責を等分に含んだ嘆息に吐いて夫婦が寢室に入ると、

「前借さん、後は賴みますよ」

お初を中心に女中達の口は盜んだ菓子と猥談とに盛んに活動し始める。散らばつたカルタを揃えて果物の皮を始末すると彼女はお茶の間で夫人の腰巻を縫ひ始める、疲勞が後頭部をガクンと突き上げ出すと銀色の針が十本にも廿本にも見えて身體がゆら〳〵と前後に動搖する。

—女神の計時が十二時—

靜まり返つた空氣の中で裏木戸が遠慮勝ちな音を立てると卅圓のソフトを制服の上に乘つけた御子息が先づ親指をおつ立てる。

「寢たか」

「ハイ」

にやりと笑つて着物を着替えると酒と香水の匂ひをぷん〳〵周圍へ散しながら日本橋の藝者と本牧の淫賣へ手紙を書き始める。

—女神の時計が一時—

體溫より冷えた垢だらけの湯の中で洗ふことを忘れてコクリコクリと居睡る、寒さが全身を這ひ廻つて外へ出る勇氣を無慘に挫く、

—女神の時計が二時—

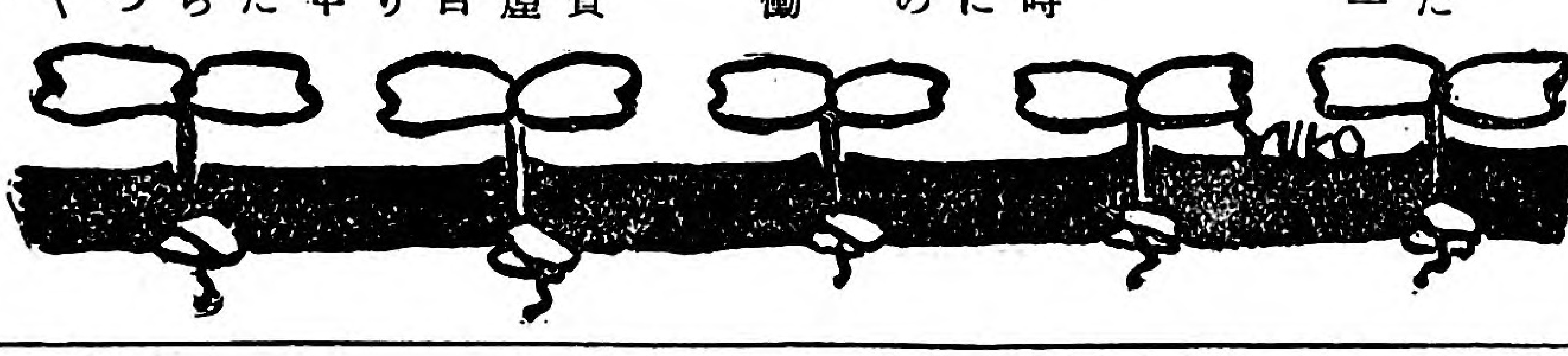
六時迄の四時間を故里の夢すら忘れて眠る。

月々定まつた主人連の觀劇は雇人の伸んびりした心の洗濯日である、秋の薄陽がH大學の屋根を鈍い銀色に光らしてゐる、濠に沿つた土堤の枯草の上を男女が歩いてゐる。女の赤い帶を視覺一杯に擴げた彼女は高い欅の幹に背をもたせて呟いた。

「こんな日に思ふ存分廣々とした野原を歩きたい、



それにしても今年は年貢を收める事が出來るだろうか」
「――今年こそは一度でもいゝ、たつた一杯づゝでも――子供達に白い飯を食はしてやりたい。」
かう云つた父の黒い顔と働き疲れた母を思ひ出した。收穫の大部分は年貢に取られる、國の百姓達は悲慘な貧乏に追はれながら働いた、働いたら貧乏なんかなくなると考へて――旱拔のため少い收穫を前にして親父は地主に嘆願した。
「今年は年貢を減らして戴けないもんでごぜえやせうか、大勢の家內が干乾しにならなきあならねえやうな譯で――どうかお慈悲にお願ひ申します、」
地主の氷のやうな表情は横に振られた。東京から嫁いで來た若奥樣が傍から云つた。
「お前さん、お久美を奉公にお出しよ、給料前借で女中に出したらどうなの、里で丁度一人慾しいと云つて來てるんだがね、お金のことは私からさう云つておくよ、」
小さい汚れた驛で親父は云つた。
「女郎にでもならなきあならねえ所を助けて戴いたんだから確り働くのだぞ、二年間だ、辛抱してなあ、身體を大事にしろよ、」
隣家のお利加は伊豆の温泉宿へ女中に行つた、お秋は大阪の紡績で血を吐いて糸のやうな身體になつて死んだ。年貢は百姓と娘達の血を吸つて地主の腹を滿月のやうに膨らした。
「襤褸を着て馬車馬のやうに働いても何故充分飯が食へないだろう、それだのに温い飯を食ひ、じやら／＼した着物を着た人間は遊んでゐる。」
「おい何を考へてるんだい」
卑屈になつた雇人根性でビクッとして飛び上つた彼女の眼前に茶色がゝつた柔い眼に健康な微笑を一杯湛えて木島が立つてゐた。
「さあ、お掛け、僕も掛けやう。」
捨石に二人は並んで腰を下した。
「お久美さんは本は嫌ひかい」
「好きですわ、大好き」木島の質問は叱りつけた時の母親の濡れた眼を思ひ出させた。杏の花が眞白に笑ふ頃、町の女學校へ通ふ地主の娘の赤い袴を末の子を負つて指を銜へて見てゐたもんだつけ。
「私今日こんな事を考へたの、百姓達はあんなに働いても働いても何故貧乏だらうつて」
木島の茶色の眼が輝いた。
「そりやみんなこの社會の仕組みが惡いからだ、貧乏なのは百姓ばかりぢやない、ほら向うに眞黒な煙突が見えるだらう、あれは工場だ、あの中では何百何千といふ人間が馬のやうに働かされてちよつぴりの賃金で貧乏に苦んでるんだよ、お久美さん位の年頃の女が營養不良の蒼い顏を埃だらけにして働いたり、遊びたい盛りの十二三の子供まで血と汗を絞られて酷き使はれてるんだ、此處の親父や夫人は絞つた金で帝劇へ行く、着物を奇麗に着飾つてのら／＼と遊んでゐる人だ、本を讀んだらみんな分るんだ、



遊んでるものが贅澤して働いてるものが飢えなきあならないやうな不合理がね、本をお讀み、暇が無かつたら便所の中でゞも、僕が本を上げやう、解らない譯はどし〱聞くんだ、だが今一番何が辛い？」

「私一度でもいゝ溫いお風呂に入つて思ふ存分寢て見たい」

「成程遲いから湯も冷えてるだらう、よし俺が毎晩燃してやらう、その時解らない事を聞くのだ、いゝか」



「金は一文も入らない、只この兒を育てゝ一人前にして呉れ、一人前に―」

工場の不意の失火は職工長の全身を火傷だらけにした、病院の白いシーツでのたうち廻つて彼はこの遺言を苦痛と共に絞り出した、そして死んだ。木島は工場主の書生となつて庭を掃き玄關傍で番犬の代用をしながら夜は小石川のT大學で社會科學を聽講した。時々家を明けたり、夜更けて歸つたり、疲勞に靑ざめて黑ずんだ臉に傷をつけてゐたりした。

だらだらと絕え間の無い勞働の暇を盜んで彼女は夢中になつて本を讀んだ、便所の惡臭に息を殺して一行をより多く一頁をと、無理の蝕んだ疲勞は彼女の頰肉をげつそりと削り落した、がある意識の芽がそろ〱と思想のアウトラインを形造つていつた、

「木島さん、神樣つてあるだらうかね」

「馬鹿だなあ、まだそんなことを云つてんのかい、天國なんて奴等の勝手に造つたお伽噺さ、神樣なんか偶像なんだ、うんと働いたらあの世では天國へ行ける、こんなことあお前達をうんと働かす爲の道具みたいな云草さ、大體、神樣つて觸つたことか、見た事でもあるつてのか」

湯殿の硝子を隔てゝ彼等は話した、石炭はゴウ〱と音立てゝ燃えた。

お久美さんの年期は未だ明けんのかい」

「後三ヶ月よ、いやで〱仕方がないけれど國の地主と此處とは親子の關係だからね、私が出たらどんな難題をお父つあんに持ち出すか分らないし私の更りに年のゆかない妹が使はれたりすると可哀想だからね」

「でももう直だ、俺は明日にでも出やうと思つてゐる、そして工場へ入るんだ、今の所こんな頑丈な身體だからね、鬪爭に一番必要な武器は團結と統一だ、あそこには同志が居る、俺は彼等と鎖のやうに手を繫いで未來へと進軍するのだ、俺等を搾る奴等のどてつ腹へこの腕でハンマーをガンと打込むんだ」

「木島つて奴あ社會主義者だとよ、恐しいぢあないかね、ほんとに」





コーヒー茶碗を洗つてゐた彼女はお初の憎さげな視線を背後に感じながら呟いた。

—今日こそ云はう—

珍しく家に落ち付いた息子の顔を滿足氣に眺めながら瓢簞夫人は直徑二尺餘の怪尻を絹座蒲團の花模樣の赤に落ち付けて茶を飲んでゐた。

「奧樣、あのうお願があるんでございますが、長い間、色々とお世話になりましたが實はお暇を戴き度いと存じまして」

「おや、さう、だがそんなものかねえ、そりや出たいんなら今にでも暇を遣るよ、約束の期間を三ヶ月も過ぎてる位のことは私だつてちやんと承知してるよ、ぢあ何かい國元のお父つあんから約束の時が來たら暇を貰つてとつとと歸ろとでも云つて來たの、お前が東京へ來る時親父さんがTの若奧樣になんと云つたか、覺えてるだらうね、女郎にでもならなきあならない所を助けて戴きまして、どうぞ一生でもお使ひ下さいましつてさ、髮結ひだつて禮奉公位知つてるよ」

天氣晴朗は一變した。

「それとも好きな人でも出來て世帶を持つとでも云ふんなら兎も角ね、私の方でもお前も年頃になつたしお嫁入の時にや季節時の着物や簞笥の一棹でもと內々心配してるんだよ、もし好きな人でも出來たつても相談位はして吳れるお前だと私は思つてたよ、まあ世間の義理つてことをようく考へて御覽よ」

前借だけ働いても恩は恩として永久にもとのまゝの姿だ、彼女は長い廊下を冷く歩いた。

緊縮、緊縮は師走の風に失業者の塊を街頭に吹き漂した。N硝子工場では馘首反對運動が熱を持つて膨れ出した。突然解雇された百人の職工達は組合の應援を待つて赤い旗を振り始めた。

「主人は居られるか」

裸になつた大銀杏の下だ、玉川砂利が泥靴で蹴り飛ばされた。

「俺達はお約束通り解答を聞きに來たと云つて吳れ」

汚れて蒼黑い五人の顔を順々に見た彼女は氣の毒さうに云つた。

「主人は居ません、昨晩急に熱海へ行つたんです、確かT旅館にゐるだらうと思ひます、今居るのはやつぱり昨日から來た變な男と夫人だけです、」

「畜生、うま〳〵と逃げやがつたな」

「おーい、どうした主人は居たか」

五人の首が一齊に門を振り返つた、一人の肩巾の廣い男が馳け込んで來た。

木島だ、茶色の眼が鋭く輝いてゐる。

「職工長の奴股膏藥見たいだ、工場主から調停費だと云つてうんと絞つたらしい、築地の待合に居るのをやつと見付け出したら市ヶ谷の邸で工場主が俺達の要求を入れる爲に待つてると吐したんだ、」



「だが居ねえぜ、」
「なに、居ねえ、本當かそりや」
「木島さん！居ないんです、確に」
「おや、お久美さんぢやねえか、まだこんな所に居たんか」
「木島さん！うんと闘つて下さい、私も出ます今日でも、そして！」
「おい木島、熱海へ押し掛けやう、」
「さうだ」
「が一先づ本部へ引上げるんだ、こゝの青膨れの夫人ぢや相手にならねえや、誰か鉛筆を貸せ」

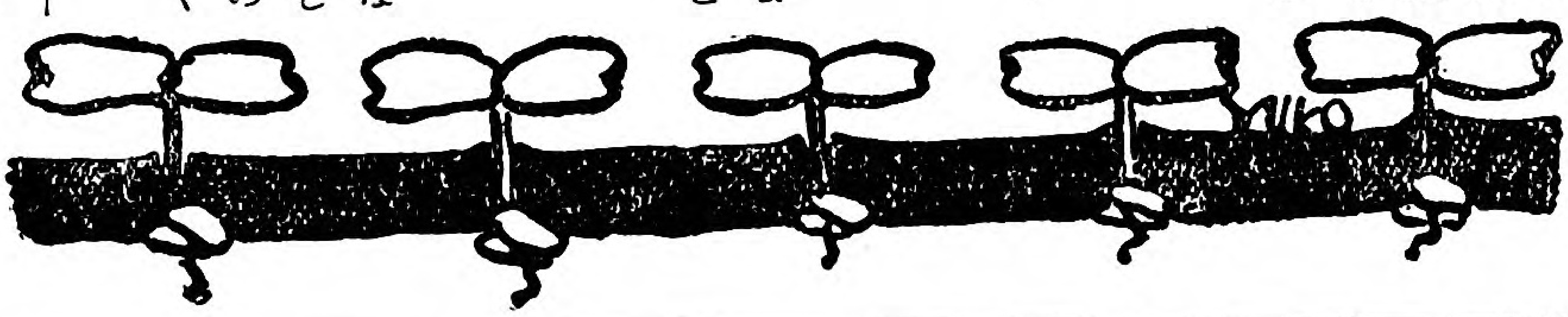


「おー行かう」
　汚れた微笑を殘して小走りに去つた六人の青い背に力を一杯感じて紙片を持つ彼女の手は昂奮にぶるぶる慄えた。おゝ空が蒼い—蒼い、冬だと云ふのに今日の太陽は血色に熱い。
　胸の動悸は屋敷町を拔けてK坂の繁華に出た頃やつと靜まつた。
「之からは自由だ」
　停留所に立つて動く町を、動く人を見る彼女の眼は故郷の家の暗さを入れるには餘りに朗か過ぎた。
「俺が居なかつたら上つて飯でも食つて呉れ、歸りが遲かつたら先寢てるんだ」
　事も無げに云つた木島の顔を思ひ出したが居てれた方が良いと考へながら橋に立つて重油のやうに濁つた川水を眺めてゐた。河岸には軒並の低い長屋が錆びたトタン屋根を並べてゐた、その上に飜る雜巾色の洗濯物、來る人も行く人も汚れた顔と疲れた身體を懶げに運んでゐるやうだつた、どの眼もどの口も彼女にお上品な憐みも輕蔑も投げはしなかつた。
「おー來たな」
　葱をぶら下げて木島が立つてゐる。
「道筋は直ぐ分つたらう、今晩は御馳走をしてやる。こまぎれのな、それに大勢集るんだ。」
　彼女はほつとした、涙が溢れ出さうだつた。
「おい竪川の水みたいな眼色をするなよ」
「第一うなだれて歩るくつてこたあ壓迫されてもまだ眠つてゐる階級の姿だよ、さあ行から頭をうんと持上げて、胸を張つて—」
　彼は低聲に歌ひながら大股に急いだ。

　　奪ひ取られし生産を
　　正義の手にて取り返せ…………

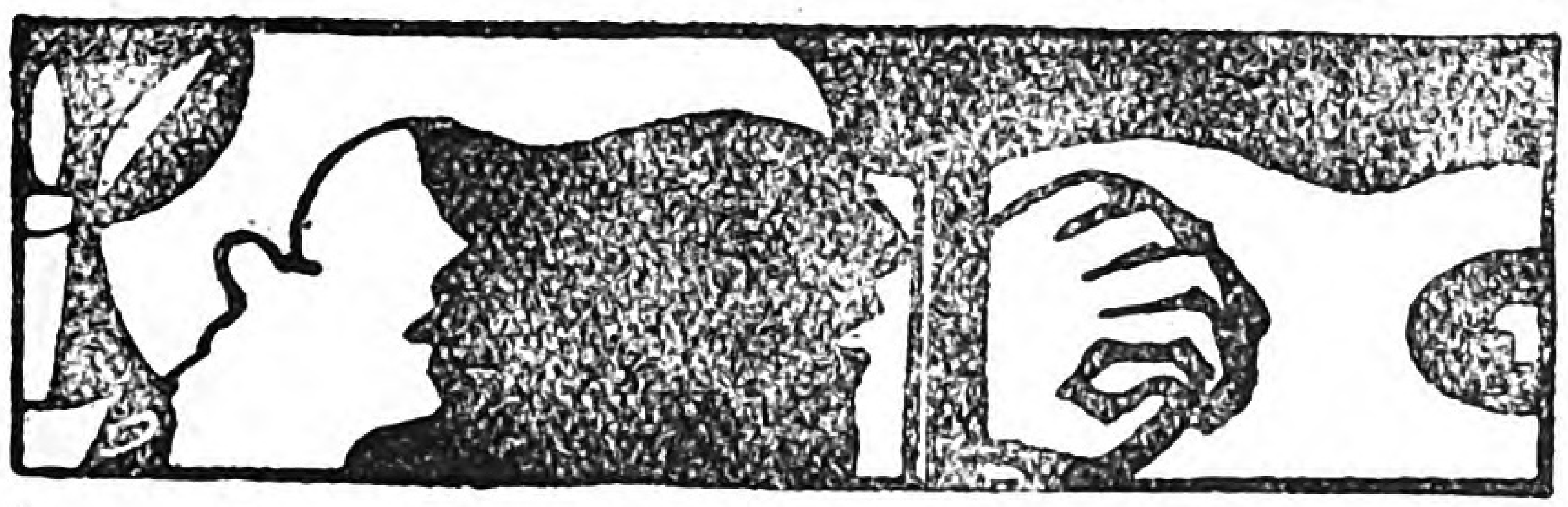
　熱したバスが濁水の上を辷つて行く、まだ知らない歌の一句毎にドクッドクッと心臟の血を絞り出しながら彼女は彼の歩調に合はして歩いた、薄い冬の陽が西空の煙突に引掛つた夕暮の河岸をぐんぐん歩いた。
　頭をうんと持上げて—胸を張つて昂然と昂然と—

終り　一九二九・一・



# 影の

# 紅



憎むべき殺人犯人巣山敬二が死刑の言渡しを受け空しく絞首臺上の露と消え失せてからと云ふもの一私立探偵として此殺害事件に最も大きな功を立てた村瀬信彦は殆ど終日其事務所に閉じ籠つて何か深い物思ひに沈んでゐた。

或朝の事、前夜から降り續けてゐた雪が尙止まずもう一尺程も積つてゐる上に酷い風がびゆうびゆうと吹きつけてゐるので只さへ沈み勝になつてゐた彼は全く打萎れて泣き出し度い樣な樣子をして肱掛椅子に寄りかかつた儘今朝着いたばかりのニユーヨーク・タイムズをぼんやり眺めてゐた。

「喜美ちやん、ココアでも出して吳れない。」

彼は妹の方を振返つて力無く言つた。其に答へて妹は張りのある聲で、

「今、お湯が沸かしてありますから直ぐ拵へますわ、兄さん。」

兩親を夙うに失つてしまつた兄一人妹一人の此兄妹は何時も本當に睦まじ氣だつた。やがて二杯のココアを持つて妹は彼の書齋へ戾つて來た。

「お待たせしました。兄さん。」

「や、有難う、まあ、お掛け。」

彼は妹に椅子を薦めた。其顏には何か深い決心をしてゐる樣子がありありと見えてゐた。彼はココアを一口飲むと妹に訊ねた。

「喜美ちやん、お前もうお仕事はありやしない。」

「えゝ、もう別に。」

「さう、それならいゝけれども。」

「なーに、兄さん、そんなに改まつて。」

彼の樣子が何だか平常と違つてゐるので妹は不思議さうに聞き返した。

「……………。」

彼は默つて又ココアを今度は一氣に全部飲み乾してしまつた。

「もう一杯造りませう。」

「いや、もう結構。」

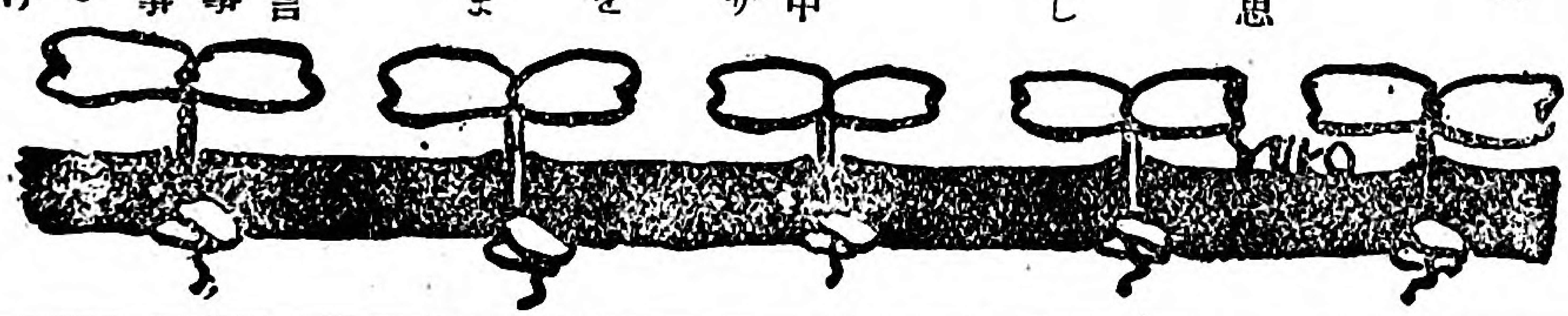
暫く沈默が續いた。彼女は起上つてストーブの中へ石炭を注ぎ足した。近くの工場で鳴らす始業のサイレンがけたたましく吹雪を突いて響き渡つた。

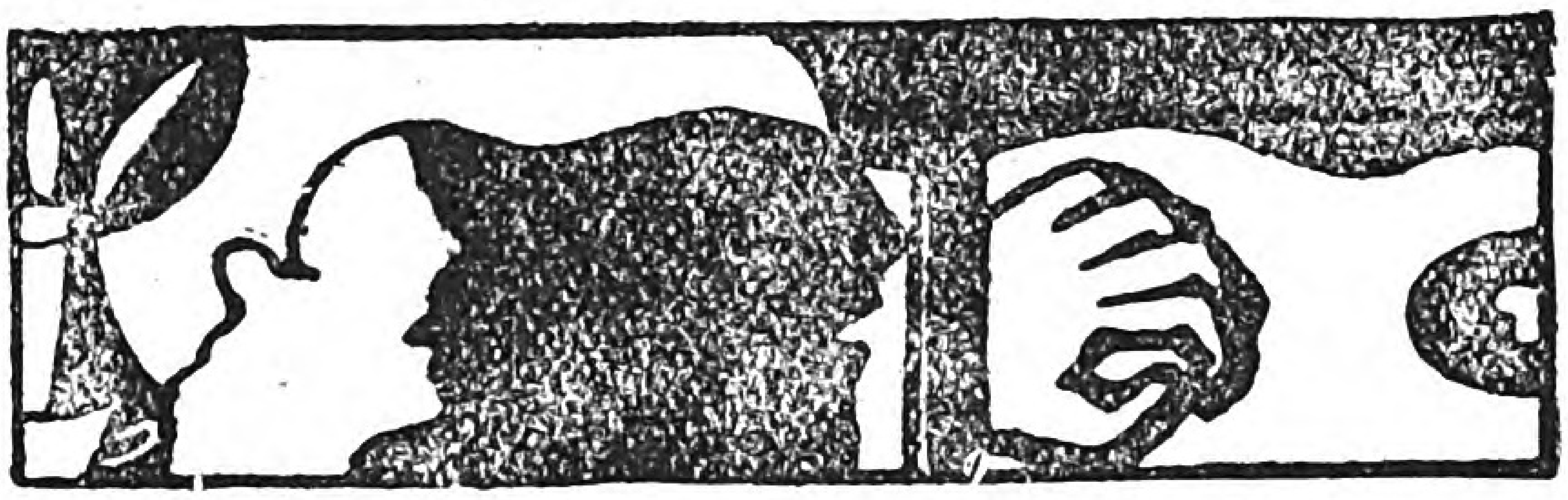
「もう八時だね。喜美ちやん、今日は僕の言ふ事を確乎と聞いて吳れる?。」

「えー、何日だつてお兄さまの被仰る事なら何時までもお聞きしますわ。」

其聲には幾らか不平な樣子が表れてゐた。

「ふん、そりやあ、さうだつたね。」彼は詫る樣に言つた。そして言葉を續けた。「喜美ちやん、此間の事件を未だ忘れはしないだらふね。巣山敬二の殺人事件を。……今日は其事に就てゆつくり聞いて貰ひ度いのだがね。喜美ちやんも無論知らないだらふけ





# 手

信子

れども、あの事件の主人公と言ふのは本當は巢山敬二でも無ければ片山春子でも無いのだよ、いやまあ其は如何でもいゝとして。鳥渡これを御覧。」

彼は『双生兒の研究』と書いてある一册の本を取上げ、前以て栞の挾んであつた所を開いて妹の前へ差出した。

「此處の相同双兒と言ふ處を讀んで御覽。」

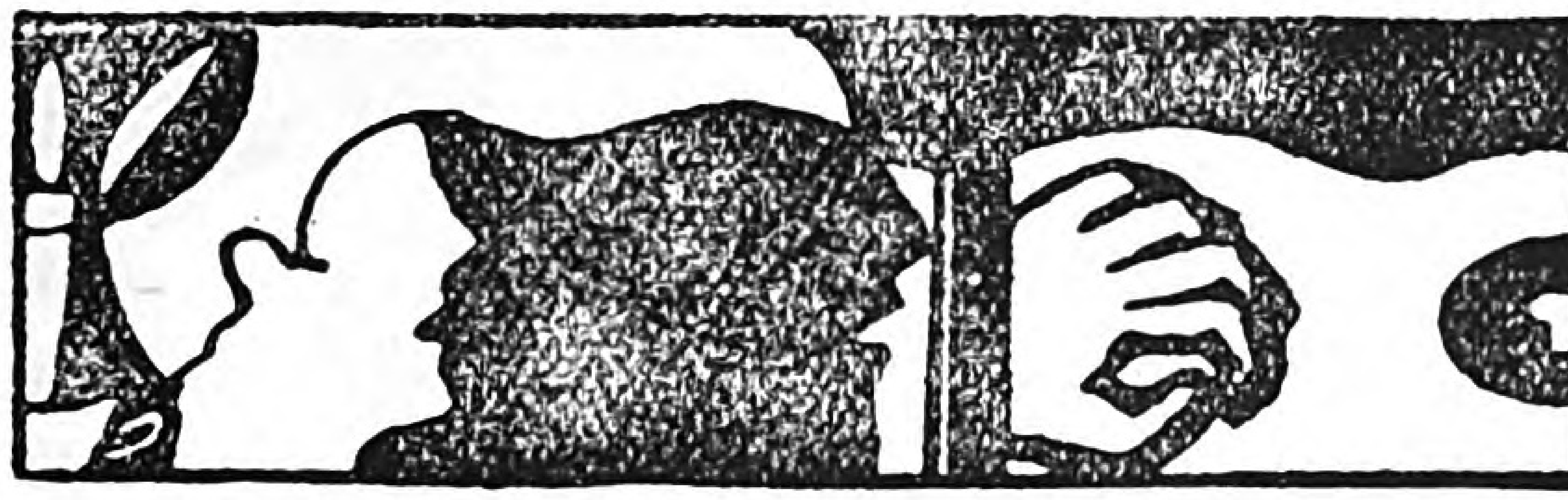
其處には次の様な事が書かれてあつた。

――相同双兒とは一つの卵が受精され一つの子供として生るべきであつたのに、途中に於て其受精された一つの卵が二つに分割され其各ゝが獨立して一つ〳〵の子供に發達したものと認められてゐる。從つて此相同双兒は前述同胞双兒と大に異り、其性（男女の）はいつも必ず同一であるばかりでなく、一般の形態的及び精神的の性質まで殆ど同一人と認めらるゝ程、非常によく似通つてゐる。第十八圖以下第二十五圖迄何れも相同双兒の例である。――

◎妹は讀み終ると中に挿入されてゐる數葉の寫眞を凝乎と眺め入つてゐた。妹の讀み終つたのを見計らつて彼は又小聲で語り出した。

「つまり今度の事件の眞相を解く鍵は其處に秘められてゐるのだよ。殺された片山春子と其姉の高田秋子とが若し双兒でなかつたとしたら。いや双兒であつてもいゝ、只相同双兒でさへ無かつたら、あんな悲劇は當然起らふ筈が無かつたのだ。此事を話すには先づ順序として話が五年程前に遡るが、未だ高田秋子が高田吾郎と結婚してゐなかつた頃、つまり片山秋子と言ふ一處女に過ぎなかつた頃、秋子、春子の二人の姉妹は當時某女學校の英語の教師をしてゐた一人の青年を取卷いて熱烈な戀の爭を續けてゐたのだ。言ふまでも無く其青年と言ふのは高田吾郎だつた。或人は戀を人生の總てだと言つた。或人は戀する男女は盲目だと言つた。又或人は戀愛こそ人類を鳥獸から區別する尊い標準なのだとも言つた。だが僕には最初は此等の意味が少しも解らなかつた。…………いや、喜美ちやんには勿論解らないだらう。それでいゝのだ。何日までも僕と一緒に居てお呉れ、ね。お前が居て呉れないと僕は自分の仕事に少しも手の着かない男だから。…………

……………………餘談はさて置き、二人の姉妹は其性質が全く同一と言ひ度い程能く似通つてゐたのだから從つて一人の男に對する二人の考へも全く相等しく同じ程度の熱烈さを以て其男を爭つてゐたんだ。又其青年にとつても其二人こそ選ばれたる異性であつた、つまり其二人を心から戀してゐたのだ。出來る事なら二人を同時に妻とし度かつたのだらう。でも然うする事が出來ないとすれば止む無く其



青年は二人の內からより勝れた一人を選ばなければならない。然し背丈と言ひ、容貌と言ひ、健康さと言ひ又氣質と言ひ何一つ其處に優劣の差を見出す事の出來ない彼は全く途方に暮れてしまつた。

すると其頃妹の春子が何處から拾つてきたものか腸チブスに罹つて病院へ入院する。そして一時は其生命さへも危ぶまれた。此事を宜い機會に姉の秋子は益々其青年に近づき遂に妹の退院を待たずして其青年と結婚してしまつた。勿論、退院する迄妹は此事を少しも知らなかつた。只彼の心が日毎々々に姉の方へ傾いて行つてるだらうから退院後姉に傾いた高田の愛を再び自分の身に取返す爲に自分の採るべき色々の方法に頭を惱ましてはゐたけれども。

そんな譯で退院して間も無く戀に破れたのを知ると妹は落膽の餘り書置を殘して家出してしまつた。無論死ぬ心算だつたのだ。そして一度川へ飛込んださうだけれども附近の者に救はれ其儘、其家で厄介になつてゐた。憧れの青年！　戀しい異性を胸に懷いて永遠に惱み多い此世から曉の夜露の如く安らかに消え去らうとした其企てが失敗に終つた時彼女は又もや其青年を奪ひ返すべく姉に對して終生の挑戰を試みやうと確く〳〵心に誓つたのだ。最早や戀に破れた春子の前には、そして執拗にも戀の回復を迫る妹の前には何等の拘束もない。法律を無視して、血緣を度外視してゐた。可憐な少女の眼前にちらつく物は只、雪の樣に白い、そして火の樣に溫かみの有る青年の幻のみだつた。

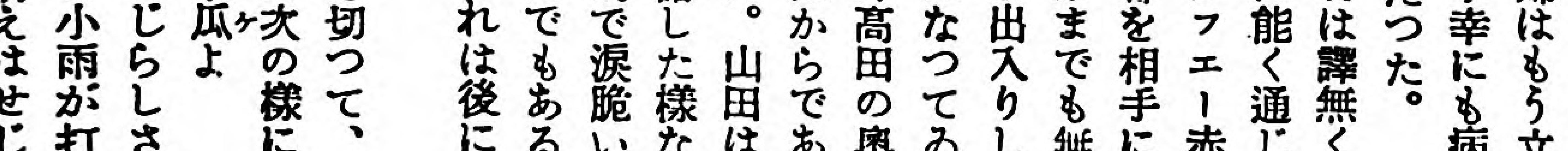
戀に勝利を占めた姉はもう立派に高田夫人になり澄ましてゐるのに、不幸にも病の爲に後れをとつた妹の方はこんな有樣だつた。

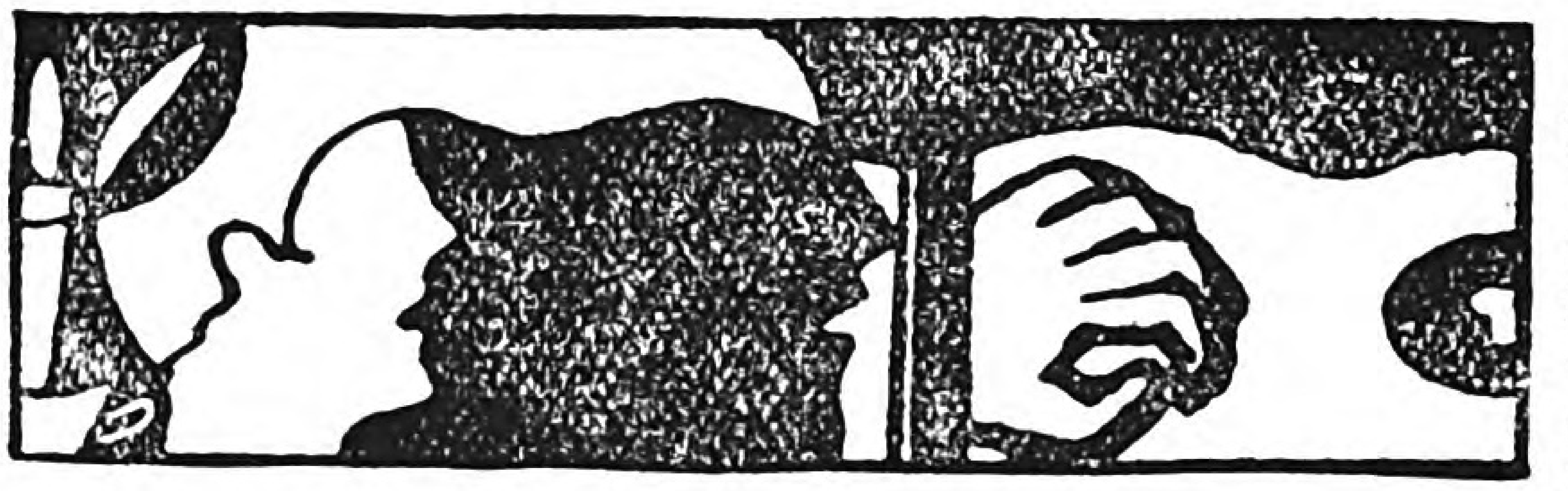
斯うして四年の月日は譯無く過ぎ去つてしまつた。

或日高田の家の內情に能く通じてゐた山田と言ふ一人の若者が廣小路のカフェー赤玉を訪れた時の事である。彼は其處でお客を相手に媚を賣つてゐる一人の女を見出した。言ふまでも無く、春子だつた。山田は常日頃高田の家へ出入りしてゐた關係上其奧さん達とも能く顏馴染になつてゐた。山田が春子に好奇心が動いたのも全く高田の奧さんを見てゐる樣な氣がしてならなかつたからである。山田と春子とは其處で色々な話をした。山田は高田夫妻の內輪を詳しく話し、春子は今話した樣な身の上話しを逐一物語つた。性來、感性的で涙脆い山田は春子の話を聞くとまるで自分の事でもあるかの樣に感激したさうである。――これは後に僕に話して呉れたのである……。」

彼は玆で一寸言葉を切つて、机の曳出しから一枚の便箋を取出すと其に次の樣に書いて妹に手渡した

女心は堤の木瓜（ボケ）よ
草に忍んだいじらしさ
人が踏まふと小雨（ナサケ）が打たふと
燃えた情は消えはせじ





暫くして又言葉を續けた。

「誰の唄つた詩か忘れてしまつたが何かの本でこんな事を讀んだが、今になつて初めて此詩の意味が本當に呑込めた。と其當時山田が言つてゐた。

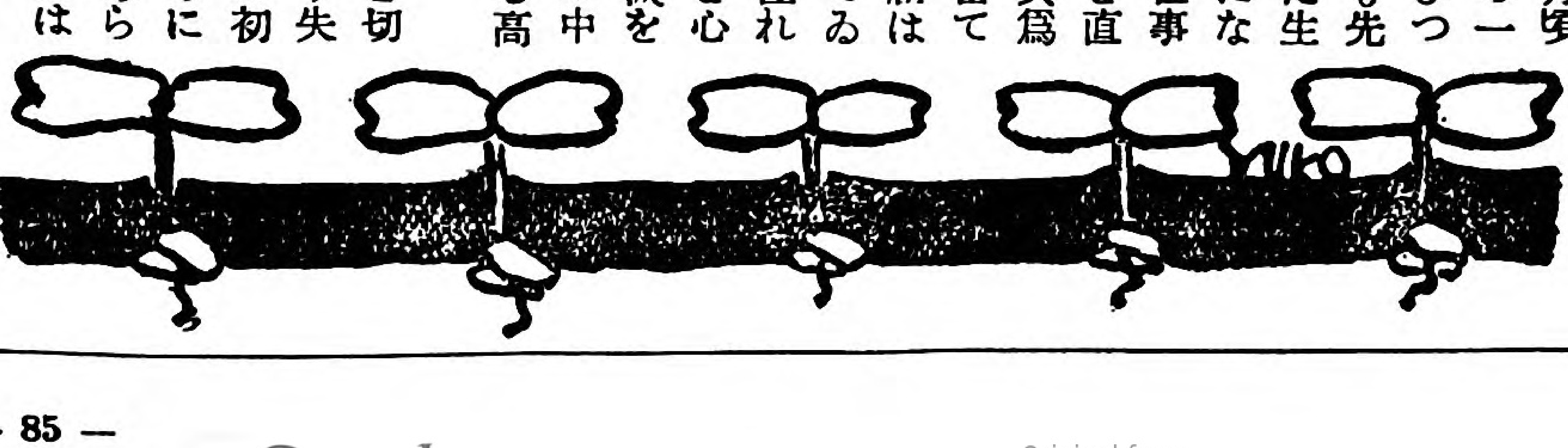
それから山田は彼女の志を助けやうと隱になり日當(ヒナタ)になりして力を貸した。其の後、春子の採つたあらゆる手段は皆山田の理智的な頭腦から絞り出されたものばかりだつた。

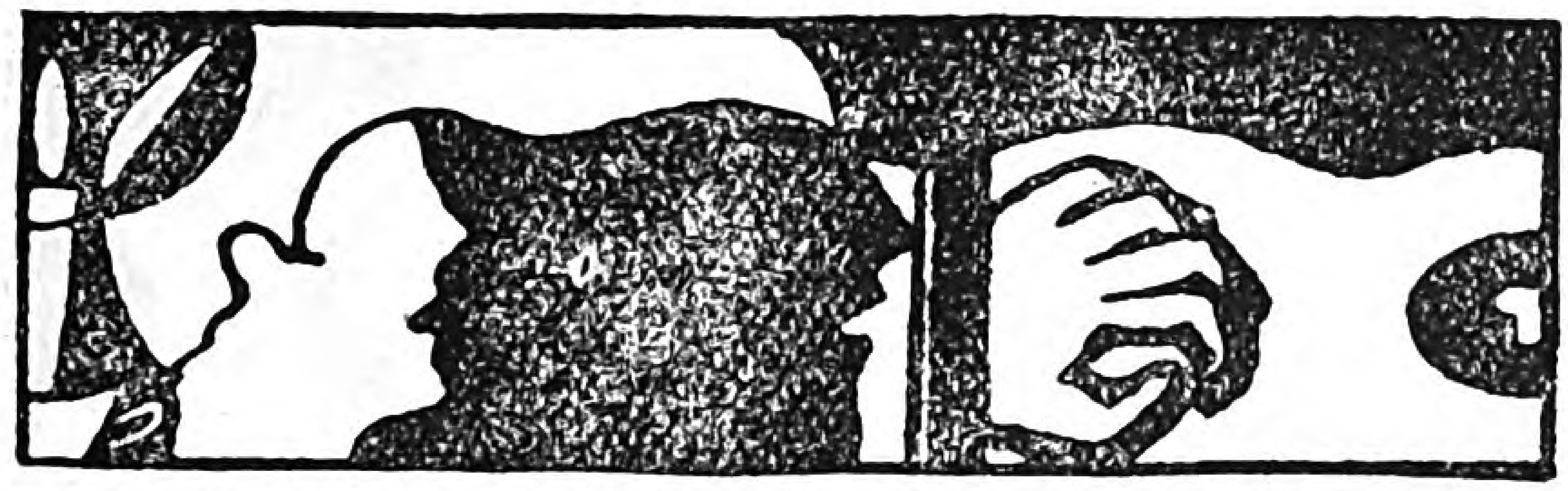
三ヶ月過ぎた、春子には巣山と言ふ情夫が出來た。それから五ヶ月過ぎた春子は巣山の愛に倦怠を覺えてあの慘劇の原因となつた手紙を自分の手で認めた。そして悲劇の行はれた當夜、春子は高田の不在であつた秋子の家を訪ね、秋子と一緒に浴場へ行つた。そして自分一人頭痛を訴へて先に歸つてしまつた。其時春子はわざと姉の着物を着て廻り路をして家に歸つたのであつた。

姉は殘された妹の着物を着て平常の路を歸る途中あの不幸に出會つたのだ。喜美ちやんもう想像がついたでせう　殺されたのは、妹の春子ではなくつて姉の秋子だつたんです。無事で高田の家へ歸つてきた春子は其夜から秋子と自分の名前を改めて全く姉になり澄してしまつたのだ。

一番問題になつてゐたのは胎兒の事だつた。秋子は昨年の二月頃懷姙したのだから若し其事を忘れてうつかりして居ると高田に今迄の總ての秘密を見出されてしまふかも知れないと言ふ心配が有つたんだ。それで山田の奴、拔り無く昨年の三月頃から頻りに春子と關係を續けたのだ。天も春子の一心に同情して下すつたのか四月になつてからはぴつたりと月經も止つてしまつたのだ。これで春子も先天的の容貌とか性質とかは勿論、後天的に生じた生理的の狀態に至るまで秋子と寸分も違はぬ人間になつてしまつた。あの樣に自分の正しいと思つた仕事の爲には手段を選ばない山田でさへも流石秋子を直接自分の手で殺す事は出來なかつたとみえる。其爲姙娠二ヶ月の時早くも春子に情夫として巣山を當てがつたのだ。巣山こそ本當に人殺しをする爲に雇はれた樣なものだつた。春子は萬事を山田に委してゐたから山田の言ふ儘になつてゐた。長い間想ひ憧れてゐた高田の胸に確乎と抱きとられる近い未來を心に描いては、彼女は只山田の骨折りに感謝の涙を流す事しか知らなかつた。嗚呼！今の樣な世の中に在つて此樣に一人の女から思ひつめられてゐる高田と言ふ男は何と幸福な人間だらう！。」

村瀨は一息に玆まで喋つてしまふと暫し言葉を切つて深い太息を漏らした。多分、曾て彼を裏切り失戀の痛手を味はしめた一人の腑甲斐ない女性との初戀を想ひ起し今此春子の純情に思ひ及ぶ時そゞろに無量の感慨に打たれて思はず太息をついたのであらう。兄の言葉をじつと謹聽してゐた喜美子の眼には何時しか熱い涙が頰を流れた。



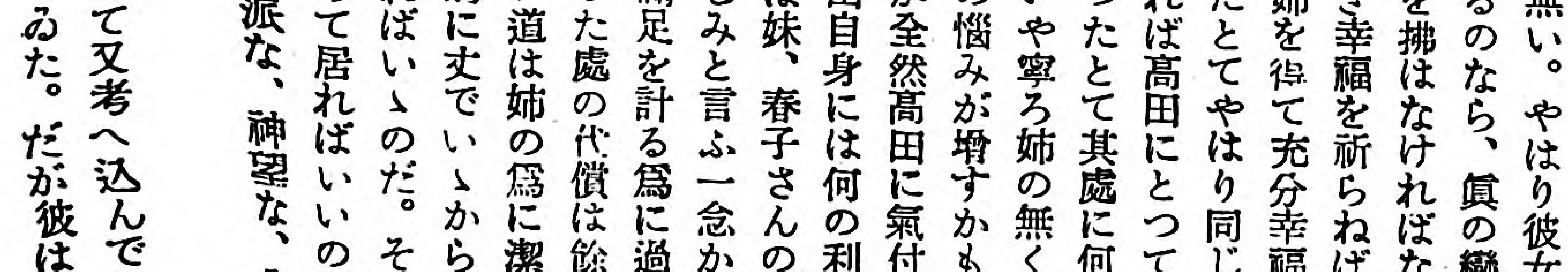


「喜美ちやん、貞節とか貞操とか言ふ樣な點に於て春子さん――いや、今はもう秋子さんと呼ぶべきですね――其秋子さんの採つた態度は責むべきだらふか？　無論、自分の肉體を思はぬ人に容易く委した、言ひ換へれば全く打算的な考へから女の誇をむざ／＼捨てたと言ふ事から見れば秋子さんの行爲は確に賣淫と見る事も出來るでせうね。淫らな女と言ふ罵も甘んじなければならないでせうね。然し、何が彼女を然うさしたか、其動機を考へる時、僕等は淸らかな女の內でも最も純な操を此女の內に見出し得ないだらうか――

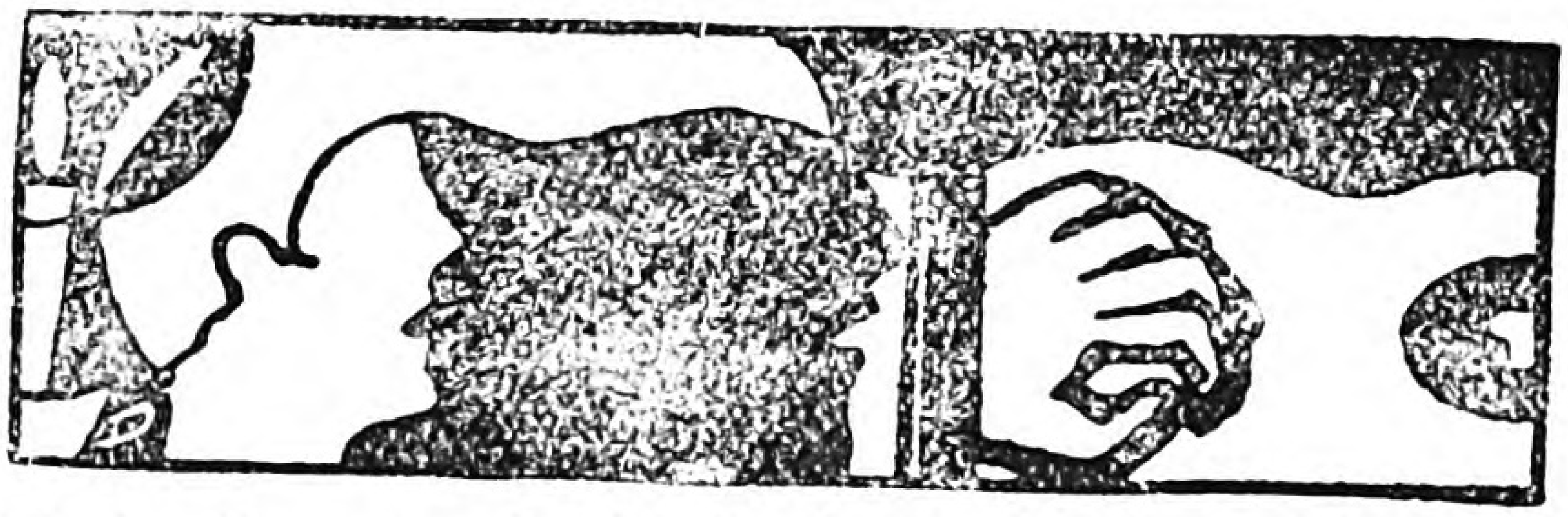
曾てはうら若い青年の胸の裡に顏を埋めて泣き崩れ淚と沈默とに託して甘い戀の囁を交し又一方に於ては双兒として生れ出でた事の今迄想像も及ばなかつた程大きな惱みの存在してゐる事を嘆かないではおられなかつた可憐な乙女の純情こそ彼女自身をして親身の姉婿である高田告郎を取り返す事を條件としてならば如何なる代償を拂ふとも決して悔まない迄に思ひつめさせたのだ。肉體の事は姑く措くとしても精神的に此程純潔な貞烈な女が又とあるだらうか。……………喜美ちやん、然うは思はないか。

然しね。此處が考へ物だよ。大ざつぱに然う言つてしまふと成程妹さんの行は賞むべきかは知らないが何故もう一段奥まで考へなかつたのだらう。やはり彼女の行ひは間違つてゐたのだ。神の最後の審判廷に於て其は到底認められないのだ。然し殘念な事には人間の智慧丈では一寸其處までは考へ及ばなかつたのだ。今斯うして僕が考へてみれば何でも無い。やはり彼女は其程にまで高田の事を思つてゐるのなら、眞の戀人である高田の爲には總ゆる犧牲を拂はなければならない筈だ。そして戀人のより良き幸福を祈らねばならない筈だ。又此場合高田は姉を得て充分幸福である筈だし又姉でなくて妹を得たとてやはり同じ程度に仕合せであるのだ。してみれば高田にとつては姉が無くなつて其代りに妹が入つたとて其處に何等幸福の增加する譯はない筈だ。いや寧ろ姉の無くなつた事が原因となつて彼に一つの惱みが增すかも知れない。假に其姉と妹との交替が全然高田に氣付かれない樣に行はれたとしても高田自身には何の利益も無い譯だ。斯う考へてみれば妹、春子さんの行爲は縱令戀人に對する懷しい親しみと言ふ一念からであつたとしても結局は一身の滿足を計る爲に過ぎなかつたんだ。そして其爲に拂つた處の代償は餘りに度が過ぎたのだ。本當の正しい道は姉の爲に潔く高田を渡してしまひ自分は精神的に丈でいゝから高田の妻として死ぬまで處女であればいゝのだ。そして每も高田の事を胸奧に深く秘めて居ればいいのだ。さうすれば二つの戀は何れも立派な、神聖な、そして何よりも幸福だつたのだ。」

村瀨は急に頭を垂れて又考へ込んでしまつた。彼の眼には淚が溜つてゐた。だが彼はそれを押隱した、



「さういふ譯で春子さんの行ひは總てに於て罪惡だつたのだ。だから神も見捨てゝはおかない。今完全に姉になり澄まし高田の愛を存分に受け自分の思ひを滿足させ、其上愛玉の樣な子供も立派に分娩したけれども、其處に一つの手拔かりが有つたのだ。高田家に慘めな悲劇が演ぜられるのも遠くはあるまい。少くとも今度生れた子供が死なない限りは當然悲劇は免れまい。あの男の子は高田の血は一滴も混つてゐない——此事は前にも言つた通りだが。只それ丈の事ならまだいゝとしても其證據が歴然としてあの理智的な高田の面前に表はれてゐるのだから堪らない。

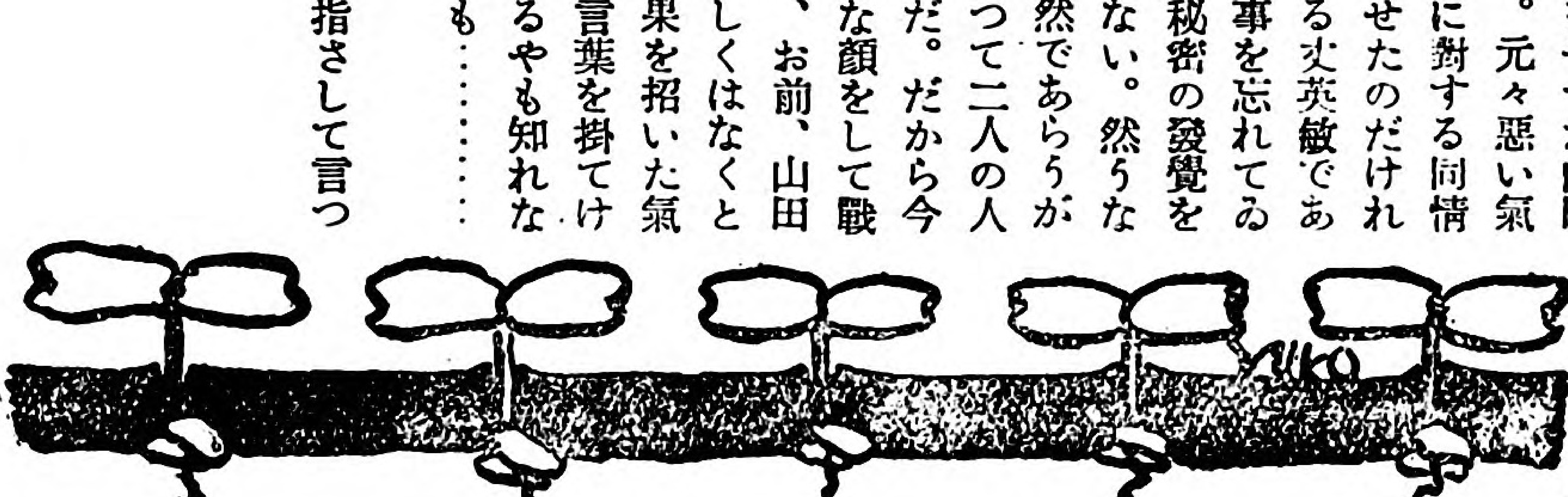


喜美ちやん、僕達の皮膚の色は白い方か黒い方かね。勿論黒いと言はなきやならないでせう。之は僕達のお母さんが色の黒い方だつたから其遺傳によるのだよ。然し兩親共色が黒くたつて白い子供が生れる事はあるんだ。けれどね、然しこれ許りは絶對的なんだ。いゝかね、卽ち兩親共色が白かつたら其子供は必ず皮膚の色が白くなければならないのだ。話が少し傍へ外れたが。あの秋子さんはどうだ、透き通る樣に眞白だらう。それに高田も雪の樣な膚だし、それだのに生れた小供はどうだらう黒いと言ふ內でも殊の外黒い程度が大きいではないか。高田がそれに氣付かない筈はない。よし今氣付かないにしても此後第二第三と今度は本當の高田の眞白で雪の樣な小供が生れた時には、其處に何等かの秘密がなければならないと言ふとか容易に想像される。

あれ程手際良く、あんな大膽な仕事をやつた山田と言ふ男も今は非常に後悔をしてゐる。元々惡い氣でやつたのではない。只可憐な一少女に對する同情心、義俠心があんな大それた仕事をさせたのだけれども、そして彼の頭腦も充分其に堪へる丈英敏であつたけれども、只一つ自分の色の黒い事を忘れてゐたのだ。その爲、產後間も無い彼女は秘密の發覺を恐れて何時赤兒を絞め殺さんとも限らない。然うなれば、いや寧ろ然うなるのが反つて當然であらうがさうなれば山田は結局自分の意志に依つて二人の人間に殺人の罪を犯さしめた事になるのだ。だから今日此頃と言ふもの山田は殆ど病人の樣な顔をして戰々競々としてゐる次第だ。喜美ちやん、お前、山田の爲に、——正しい動機から、いや正しくはなくとも少くとも義俠的な動機から誤つた結果を招いた氣の毒な山田に慰めの言葉、溫い同情の言葉を掛けてやる氣は無いかね。何日何時、自殺するやも知れない山田に、せめて命ある內に一度丈でも………………。」

村瀨は突然に妹の手をどつて自分を指さして言つた。

山田は此處に居る。」





# 宗教の現實的批判

## ――特に女性のために――

中島幸子

「宗教的苦難は、一つには現實的艱難の表現であるとともに、又一つには現實的艱難にたいする抗辯でもある。更に云ふならば宗教は抑壓されたる生物の嘆息であり、又それが魂なき狀態の魂であると等しく、それは無情の世界の感情である。卽ちそれは民衆の阿片である。」

　私は玆に、マルクスのヘーゲル法律哲學批判の序論の中の一節を前提として、この論をすゝめやうと思ふ。

　最近、讀賣新聞の婦人欄に宗教問題が、かまびすしく評論されるやうになつた。しかし乍らその立場が、無神論的な抗辯の仕方ばかりでなく、中には寧ろ反動的な意見を吐露して、宗教讃美にうき身をやつし、女性一般の神への絶對的依存の感情をあふつて、宗教擁護の態度を示してゐるものもある。それ以外に高津正道氏の無產階級と宗教なる著述・及び法界雜俎と云ふ雜誌の特輯號等々、そのために一般女性は、宗教問題にたいする自己の立場を決定し難く、一層昏迷におとし入れられやうとしてゐるのである。

私は無產階級的理論を、論述のみちびきとして宗教批判を若干ものしたいと思ふ。

### ――女性としての宗教批判の必要――

　吾々が人間の社會史において、女性一般の社會的地位を觀察するに、あらゆる抑壓を蒙つた階級が、歷史の必然的過程によつて、常に自己を解放して行つたにもかゝはらず女性のみは不斷の社會的、經濟的、政治的束縛から脫し切らずに、重い鐵鎖をひきずりながら陰慘な現實的生活を經驗してゐた。此の永年の歷史的過程によつて、かつて女性が原始共產體にあつて太陽の如く自由な、不羈奔放な生活をいとなんだことを忘却して了ひ、漸次、社會の因習的な生活に安んずるやうに習慣づけられて行つた。それゆえに、永いあひだのしきたりの結果、女性は自己の苦難にみちた社會的地位を絕對なもの、變革すべからざるものとして考へるやうになつたのである。

　自己卑下、貞操觀念、三從七去的精神、諦觀的思想、等々は、

女性が自分で課したところの宿命的イデオロギーであつた。ことに、我國には家族制度といふ特殊的社會制度が永いあひだ存續してゐて、女性に此の男子への服從義務をいはゆる美風として盲信するやうに强迫した結果、いよ〱女性は社會の傳統的習俗に盲從するやうになつた。

然しながら、歷史的事象は一つとして不變的なものはないのである。不斷に對立物との闘爭を展開しながら、その容態を更めて、質的に前代とは異つた存在に移行してゆくのである。女性の地位とても、辯證法的運動の一部分であつたのである。經濟的矛盾を第一の原因として、近世に至つて急激にその社會關係の紐帶が弛緩したゝめ、女性解放の導火線は各所に燃えあがり、その改革運動は、とうてい阻止すべからざる狀態にあつた。

しかし乍ら、女性解放の經濟的原因が、かくの如くあらたになつたとはいへ、女性は急激に自己の桎梏からの蟬脫は不可能であつた。それはなぜであるか？　卽ち新興意識を把握したところの女性が、いかに熾烈に解放を欲求するとも、階級社會の顚倒したあらゆるイデオロギーが、女性の頭腦に根强く喰ひ入つてゐるあひだは、永久にその足枷を脫がしめないのである。とくに吾々は、此のイデオロギーの中で、最も決定的な支配力を持つてゐる觀念の發生根據をさぐると、いまだ旺盛な威力を有してゐて、もし吾々が斷呼たる闘爭を開始しないならば、決して自然には消滅しないところの宗教的觀念態があるのである。

「宗教の批判はあらゆる批判の前提である（マルクス）格別にわが國の社會的な特殊性を觀察するに、我が國は階級對立のいろ〱なる段階に、いろ〱な容姿をした宗教が傳來してきてゐる。そして經濟的に搾取されてきた民衆は、自己の現實的な艱難からの逃避を、天上的な彼岸非俗世的な神々に求めやうと、この宗教を無批判的に信仰するに至つたのである。就中、わが國の女性大衆は、社會史上にあつて幾重もの壓迫と苦惱を蒙つてきたところの人間であるからして聖なる神のたもとにすがつて、せめても彼岸の樂園に幸福を求めることをひたすら渴仰したのであつた。儒教の本質的精神を見よ。それのもつ三從七去の觀念は、女性に自己卑下の思想をつたへるに充分である。更に佛教を見るならば、その教義の內容は、佛の慈悲の廣宣ではないか？　此の觀念こそ階級的對立の思想を緩和し、氷解し、且つは女性をして、先天的に持つと教へ込まれた身の垢の淨化のために、佛にすがることを教へるのであつた。この事項は、支配階級の立場からするならば、いかに宗教が阿片的機能を果すことよ！　又抽象的な卿愛、正義、人道を說くところのキリスト教とても、その原始的な女性觀を曝露するならば、此の宗教とても婦人の侮蔑をとなへ、肉よりの解脫をといてゐるではないか「女よ、汝は人類の破滅のもとであつたことを吾々に忘れさすために、喪服と襤褸とをまとひ、眼には淚をたゝへて步むべきである。女よ、汝は地獄への入口である！」この言葉は、女を常に劣等なるもの、不潔なるものとして、いやしめたのである。ブルジョア學者は、近代における婦人の地位の向上が、キリスト教の影響だと說かれるが、それは謬見である。ベーベルも云ふ如く、婦人の社會的地位の改革は、キリスト教に依據してゐるのではなく、他の社會的原因のために、キリスト教側が婦人觀を變更することを餘儀なくせしめられたのであつた。此處では、われ〱は原始的諸宗教が如何に婦人を輕侮したか、又諦觀的思想を植ゑ付けたかを明白にするならば充分

であらう。

要するに、過去の社會の民衆を涙の谷から、聖の谷、卽ち現實的生活苦を幻想的神に依つて忘却さすために役立つイデオロギーとして、決定的な勢力を及ぼす三つの宗教がある。卽ち、儒教、佛教、キリスト教がそれである。その他雜多な封建的遺制の宗教は存在するが、以上の宗教が婦人大衆に對する精神的感化の甚大なることは否定し得ない事實である。それゆえに、宗教的イデオロギーが、女性一般から揚棄されないあひだは、眞に女性解放の目的は達成し得ないであらう。

私達は、この女性に諦觀的觀念を賦與する宗教的イデオロギーを根本的に批判しなければならないのである。

### ――階級的立場からの批判の必要――

私は、簡單ではあるが、女性史の立場から、宗教が何故批判されなければならないかをのべた。だが、今まで殘された批判の他の觀點があるのである。卽ちそれは無產階級的な立脚點からである。

あらゆる過去の社會が階級鬪爭の時代であつた如く、二十世紀も資本家階級とプロレタリアートとの對立關係におかれた時代である。殊に、國際的には資本主義諸國と無產階級の祖國であるソビエツト・ロシヤとの對立は、ますます激化して、現在は單に內部的な矛盾を包藏しながらも平衡の情勢を示してゐる。それと同樣に、帝國主義國家內部にあつては、經濟的矛盾は愈々益々尖銳化されてゐるし、又必然的にも、尖銳化されねばならぬ有樣である。資本主義的利殖可能性の維持のための資本主義的合理化にともなふ大衆的失業は、資本主義的危機の一要素である。まさに現在こそは、すべての大衆の窮乏化、プロレタリア化であつて、この現象は、無產階級運動の必然的な發展を招來したのであつた。この故に、支配階級は被支配階級の制御すべからざるこの成長激化に恐怖をいだき、あらゆる反動的要素を自己の勢力下に集中せしめて、プロレタリアートに對し、强行的な攻勢に出るであらう。この資本の攻勢に動員されたところの構成要素は、ブルジョア自身の陣營內部のみならず、尠くともプロレタリア革命運動の危機に直面して、最も反動に役立つところの階層は、社會民主々義者である。卽ち資本家的階級は、民主々義者を利用して、プロレタリアートの結成した戰鬪的統一を破毀せしめるであらう。しかし、ブルジョアジーは、此の危機の時期にあつて、社會民主々義的要素との提携で、安堵するものではないのである。彼等は一層陣營內の敎化的機關の完備に努力をそゝいで、プロレタリア階級の團結を弱らしめるであらう。つまり、プロレタリアートの反抗的意識を眠り込ませるに役立つ支配階級の最も不可缺な武器は、宗教的觀念の積極的利用であるのである。

だが、われ〱はブルジョア階級がプロレタリアートの麻睡のために、利用する我國宗教に就いて一言付け加へなければならない。

無產階級的立場から、批判し鬪爭しやうとする宗教の重點は、わが國現在に於いては、宗敎團體のかつて有してゐたところの政治的權力や經濟的勢力でなくて、宗教の把握してゐる本質的なイデオロギーに對してゞある。たとへ、世界の無產階級運動の鬪爭の特殊的任務として、地主・教會・付侶の土地××、あらゆる土地の國有のスローガンがあるといへども、然し此の合言葉は現在の我國の客觀的情勢の分析では、さまで重要性をおびてはゐないのである。宗教團

體は、且つて巷大な土地所有と關聯して權力階級として民衆の上に絶對的勢力を及ぼしてゐた時代があつた。例へばローマカトリック教會は、財政的公課や物税（例へば十分の一税）及び行政機構を有する事實上の王國をなしたこともあつた。當時の宗教的權力が如何に廣汎にわたつて、權力をもつてゐたかの實證は、歐洲の暗黒時代の諸相、或ひは又宗教裁判を見れば充分である。又ロシアのツァー時代に於ける宗教が、國家權力とむすびつけられてゐたことは、必然に宗教は私事として宣言されねばならなかつたのである。我が國の往時も、歐洲と比較するならば、その權力的內容は相違するけれども、かなりの政治的勢力を有してゐた時代もあつたのである。だがそれよりもわが國の現狀を觀察することにしやう。

且つて我國に於いて、宗教は、政治的な支配力をしめしてゐたものゝ、漸次その內容は消滅し、明治維新のブルジョア革命を楔機として、若干の經濟的勢力の要素を殘存せしめながら、封建的勢力を喪失して了つたのである。即ち明治初年の社寺領に關する規定中に「諸國社寺由緒の有名に拘らず、朱印地除地等從前の如く下賜せられし處、各藩版籍奉還の際社寺のみ土地人民を私有す可らざるを以つて、今般社寺領、現在の境內を除くの外一般上地を命じ、追て至當の祿制を定め、更に廩米減（扶持米）をもつて下賜すべし……云々」是で見る如く、土地の沒收に依つて、宗教團體の政治的經濟力は殆んど剝奪されて了つたのである。それゆえに、資本主義的攻勢の現段階にあつて、吾々の批判の對象は、宗教のイデオロギーに對してゞある宗教の持つイデオロギーは抑壓されてゐる被搾取階級を重壓する精神的威壓の一種である。レーニンの言葉を使用するならば、宗教は資本の奴隷に依つて、人間をその人間らしい生存の要求を溺滅して了ふところの一種の精神的毒酒である。此の宗教的イデオロギーの有する役割をブルジョアジーが利用して、資本主義的奴隷制の永久化を維持させやうとするのである。例へば宗教法案のもつ主要目的は、反動網の一種には違ひないが、幻想へのあこがれ、彼岸への追慕として、宗教的イデオロギーを組織的に被抑壓階級の中に撒布することである。又教化總動員に於ける宗教家の役割、或は普通選擧に依つて、宗教家が一票の行使權を獲得してからの、彼等の態度は、事々に反動的支柱に轉化することは自明である。殊に驚くべき事實は、自由の國として誇るアメリカ合衆國において、最近ダウインの進化論を說くことに依つて、大學教授が彈壓を蒙つたといふことは、進化理論が神學の教義を根本的にくつがへすからである。此のことは、ドルの國アメリカ帝國主義が現段階において、いかに反動的に化成したかの一證左であらう。

吾々は、資本の攻勢がかくの如く意識的に强化したとき、イデオロギーとしての宗教を批判し、宗教の反動的イデオロギーにたいしてあらゆる場合をとらへて、宗教の階級性を大衆に曝露することに努力しなければならない。マルクス主義は、常にその本質的內容として、宗教への鬪爭を開始してゐる。ことに、その理論のもつ意義が無產階級の鐵鎖よりの最後的な解放にあるとするならば、宗教への鬪爭は、消極的であつてはならない。

「人間がその中に分裂してゐる宗教と國家とから人間を引離すこと、人間と人間との直接の結合、これ人間の完全なる解放である」なら、われ〳〵は宗教のプロレタリアート的批判は是非共必要である。

宗教問題に對する態度に依つて、無產階級解放運動は二つのイ

ンターナショナルの類型に區分されてある。即ち徹底的に宗教に抗爭する第三インターナショナルの態度は、宗教に對して、何んの寛容も與へず、最後までその批判と攻撃を決行するのである。しかしながら此れとは反對に、第二インターナショナルの人々は、宗教は私事なりといふマルクス主義の原則を誤解して、宗教への無關心の態度を强調してゐる。然り、宗教は私事である。だからと云つて誤つてはならない。宗教が本來的な意味において個人的問題といふのではないのである。若し誤つて解釋して、宗教への抗爭を廢棄するならば、それは百パーセントまで日和見主義的である。

それのみではない、社會民主々義者達の中には、カント哲學を基礎において、宗教運動を盛んならしめやうと意識的に努力してゐる俗惡な背教者がゐる。その典型的な人物は、マクス、アドラーである。彼れは、カントの先驗的意識を採用して——否彼は頭の頂上から足のつま先迄カント主義者である——信仰の機能、又は宗教的意識は、人間の本質に內屬するものだと主張し、信仰は、社會化された人間（此の言葉は、マルクスの概念を竊取したのである？）の意識の必然的な、また普遍妥當的な形式だと云ふ反動的な結論をしてゐるのである。彼の說教の本質は、人間の生活には、絕對に神がなくてはならないと云ふのである。彼がこうした宗教意識・神にとらへられたのは、事物の因果關係的觀察を否定して、目的論的見解を支持した結果によるのである。彼に云はせれば、社會の發展は、神の御意のまゝに遊ばされるのである。だが、第三インターナショナルの人々の謂ふところの宗教は、私事なりといふ要求は、國家に要求するのである。即ち宗教を、國家から切り離すことを宣言することである。故に、パリ、コンミユンにおけるプロレタリアート政府は、宗教的要素を國家權力から切りはなしたし、一九一七年のロシア革命の際でも同樣であつたのである。しかしこのことは、宗教との抗爭を中止せよといふのではない。宗教は私事であることを要求することに依つて、吾々は一層果敢に宗教批判を企圖しなければならないのである。

マルクス主義者は、如何なる場合においても、宗教との抗爭、無神論の宣傳を忽諸すべきでない。「マルクス主義は、唯物論である。唯物論としてのマルクス主義は、第十八世紀の百科全書學者（エンサイクロペヂスト）の唯物論又はフオイエルバツハの唯物論と同樣に、宗教には敵對的である。しかし、マルクス及びエンゲルスの辯證法唯物論は、唯物哲學を歷史に、社會科學に應用することによつて、百科全書學者及びフオイエルバツハよりも先へ進むのである。吾々は宗教と鬪はねばならない。それは全唯物論のイロハであり、從つて又マルクス主義のイロハでもあるのである。けれども、マルクス主義は、イロハに止つてゐる唯物論ではない。マルクス主義は、一層先へ進むのである吾々は宗教を克服することを知らねばならない。そして夫れがために吾々は大衆における信仰及び宗教の起源を唯物論的に說明することが出來なければならぬ。」此れはレーニンの宗教に對する勞働黨の態度に就いてといふ論說からの若干の引用である。吾々は舊式な唯物論の行つたやうな宗教に對する形而上學的な觀念的鬪爭では不充分なのである。吾々は如何なるイデオロギーも、それ自體では完全に理解することは出來ないのである。吾々は、宗教的觀念の發生を、物質的經濟的基礎との關聯において觀ることに依つて、宗教批判の方法を確立しなければならない。殊に、婦人大衆の進路を阻害し、社會生活を墮落せしめ、欺瞞するところの宗教的イデオロギー

が、なんであるかを明確に表示しない限りは、彼等の社會的愚昧は、永久に啓蒙されることは不可能であらう。それでない限り、宗教を説くブルジョア婦人等の跳梁跋扈をほしいまゝにすることは必然である。

吾々は、民衆の幻想的な幸福としての宗教を揚棄することが、彼等の眞實の幸福を要求することであると同じく、二十世紀の婦人の眞の足枷の放棄は、先づ宗教的意識からの脱脚から努力しなければならないであらう。

## ――宗教批判のマルクス主義的方法――

沒落期のブルジョアジーが、その社會形態の存續の意義が喪失したにもかゝはらず、如何なる無理をしても、社會的矛盾をいんぺいし、被支配階級たるプロレタリアートの勢力を殺戮しつくさうとする努力の中には、いろ〳〵な仕方で氣狂ひじみた反動期の政策が行はれてゐる。その一つとして、帝國主義的ブルジョアジーは、且つて彼等が批判検討したことのある宗教的觀念すら動員して、自己の歩調を整然たらしめんとしてゐる。

吾々は階級鬪爭が激化した現段階にあつて、最も執拗になされなければならないものは、即ち國家權力から宗教を分離さすことである。そしてブルジョアジーの覇權の集中に分裂をもたらし、その强大な勢力を殺がねばならない。

プロレタリアートは、反動的日本の現段階にあつて、宗教批判は正に當面の重要な任務としなければならぬのである。

吾々は一九二九年に於いて、藝術的イデオロギーの領域にあつて、その過去の藝術の持つブルジョアイデオロギーに對して激烈なる批判がなされたのを見のがしてはならない。そして、ブルジョア藝術家が如何に焦燥して、プロレタリア藝術理論に抗爭したにも拘らず、プロレタリア文學の建設、轉形期における役割、大衆へのアッピール等々は、殆んど確定的なものとなつた。勿論プロレタリア文學の末梢的な部分には、幾多の誤謬はあらうとも、又ブルジョア藝術家が、デマゴーギを飛ばして、最後の死の舞踏をしやうとも、日本の無産階級運動の一環としてのそのプロレタリア文學のもつ階級的役割は、決して無視することは出來ない程であつた。然らば何故あのやうに、全盛をきわめたところのブルジョア文學が、もろくも崩壞したのか、それはブルジョア文學のイデオロギーが、その存在理由を失つたからである。如何に、絶對的藝術を主張しやうと、上層建築としてブルジョア藝術の依つて立つ經濟的基礎がゆるぎはじめたとき、ブルジョア藝術が意義を失ふのは當然である。その代りにプロレタリア文學が、轉形期の政治的價値を持つて歴史の前面に現はれてきたのであつた。尙且つプロレタリア文學理論家の批判の正當であつたのは、彼等が批判の武器として、唯物辯證法を把握し、それによつて上層建築の藝術を經濟的基礎に對應させて批判したがためである。吾々は宗教のもつイデオロギーも亦此の唯物辯證法的な視野で批判されねばならない。即ちマルクス主義における工藝學（テクノロギー）は、つねに精神的表象が人間生活の直接的生活過程、同時に人間の社會的生活關係から由來することを明確にしめしてゐる。もしも此の方法の完全なる展開がなければ、宗教的イデオロギーも正しく理解されないであらう。それ故にエンゲルスやカウツキーの宗教史の研究、殊に原始キリストの解剖が、正しかつたのは、史的唯物論を基礎としてとりあつかつたからである。つまり吾々は、批判の

方法として生産關係の變革と共に、上部構造たる宗教的形象も徐々に或ひは急激に變更し、その物質的土臺に適應することを觀るのである。玆において明らかに理解できるやうに、宗教的イデオロギーは、それ自體では決して解明されないのである。吾々は宗教の起原の問題に觸れる場合、又宗教的觀念の發生根據を、マルクス主義的視野から見なければならないのである。

宗教批判は、ことに、無神論の問題はプロレタリアートの果敢に戰はねばならぬ問題であるが、それはすでにブルジョアの勃興期に際し、封建的絕對主義倒壞の武器として利用されたのであつた。殊にラメトリー・ドルバック等十八世紀フランス唯物論者の人々の活氣ある無神論的教說には、吾々の學ぶべきところが多分にあるのである。只彼等の無神論の基礎となつた唯物論には、世界を一個の過程として、歷史進化の中にある一個の實在として理解することが出來ないやうな偏狹と素朴さはあつたが、しかしその反神學的な態度の中には、戰鬪的な要素が包括されてあつたのである。そして如何に彼等の理論が絕對主義の倒壞を目標としたブルジョア革命の武器として役立つたのみでなく、プロレタリア解放戰に不可缺な要素たるマルクス主義的無神論に多くの意義を賦與したのであつた。それ故にレーニンは、特に十八世紀唯物論者の無神論の研究の必要を强調してゐる。そしてその不必要を說く人々を指して、「一種の衒學主義でなければ、マルクス主義の完全なる無理解をかくしてゐる學者振つた詭辯よりも惡るい」と云つてゐる。吾々はあらゆる機會を利用して、宗教に對して破壞的な批判を浴びせたフランス唯物論者の勞作を知らねばならないのである。又それと共に、宗教と妥協する修正主義者等の假面を引きさかなければならぬ。吾々は歷史過程に於いて、被支配階級が自らを支配階級の地位においたとき、彼等の且つての鬪爭目標の一つであつた宗教と妥協した實例を多く持つてゐる。卽ちその典型的な例證としては、英國ブルジョアが、封建的制度に對抗して鬪爭を開始したにも拘らず、彼等が一度び政治權力を獲得するや否や、宗教に轉向して、宗教において大衆の奴隷化の利器を求めたのであつた。英國のブルジョアジーは、既存宗教を一切排擊したにも拘らず、反つて理神論を樹立した。理神論とは何であるか？　それは本質的には神學の一變形であつて、至高本體の認容である。謂はゞブルジョア的信仰の變形である。吾々は此處に一つの教訓を見出すことが出來る。現代の改良主義者が、カント哲學を社會主義學說と結合させて、現代的な宗教を說教すると同樣に、英國ブルジョアが、理解論の體系を發展さしたのは、彼等が大衆の隷屬と搾取の上に社會を建設したかぎりに於いて、宗教へ徹底的に抗爭し得なかつたのであつたし又あり得なかつたのであらう。卽ちブルジョアの幸福が、プロレタリア大衆の苦難を基礎として建設されたのであるからして、宗教の消滅は絕對に不可能であると云へるのである。

吾々は、此處に於いて、宗教觀念の發生について論述する必要にせまられた。

然らば宗教とは何んであるか？

吾々は、宗教的表象が幻想的絕對物、超人間的、超自然的存在、あるひはそれが馬の骨、さんまの尻つ尾であつてもかまわぬ。どんな形をしたものであつても、宗教的觀念がどんな場合、如何うして生じたのかを明瞭にするならば、それで充分である。吾々は階級關係の存在するところ、又その階級關係の存在する限りでは、宗教は決し

て消滅しないと云ふことが出來る。即ち幻想的神の發生した社會的根源は支配階級と被支配階級との對立の場合に生じたのである。それ故に、フオイエルバッハの宗教批判に於ける「人間は自己に似せて神を作つた」といふ辛辣な言葉は、最も妥當するものである。即ち階級社會にあつて、搾取階級に對する被搾取者の無力如何ともなし得ない苦難が、不可避的に現世においてゞはなく、彼岸に於けるより良き世界、換言すれば、幻想的な絕對神への信仰を導入せしめたのである。それ故に、吾々は宗教すらも、生産關係及びそれに依つて規定されてゐる政治的社會的秩序の反映として發生したものである事を知るのである。原始キリスト教の歷史をみると、その最初の歷史は、奴隷と被解放奴隷との、又貧民と公權被剝奪者との、ローマに依つて壓服せられ、又は散亂せしめられた諸民族の宗教として出現したのである………基督教は、此の救濟を死後の彼岸の生活の中に即ち天國の中にありとなしたのである（エンゲルスの原始キリスト史考より）又吾々は佛教の起原を見るに、それは印度の嚴格なる階級制度にたいする反對として生じたのである。それが世界宗教になつた所以のものは、階級的に抑壓を蒙つた人間等に對して、普遍的なる解脫の形式を考へたからである。それ故に、印度の宗教史の研究にもし此の階級關係を考察しないならば、眞の宗教史の理解は出來ないであらう。よし、大乘佛教の生命であらうとも、本質的には、被抑壓階級の彼岸への熾烈な欲求に對應してつくりあげられた表象であることは、否定し難いことである。又輪廻なる思想すら生産關係から理解するならば、さまで困難なく理解が出來るのである。私は極めて若干の例證を以つて、宗教的な一切の上部構造も人間社會の物質的生産關係に依つて決定されることがわかつた。それ故に、如何に觀念論者が、神を現實世界から獨立した人格神として、又絕對的な存在物としたからと云つても、只それは階級的に見るならば、支配階級への阿附迎合に過ぎないのである。我國に於いて、×××の集團が一般に宗教心の熱烈なるのは、彼等には階級關係が現實にあつては、絕對的な、そして改革すべからざるものと思惟されてゐる結果、せめて未來の世界に幸福たることを憧憬しての結果に外ならないのである。それ故、彼等にたいして、繁雜な儀式的形式を有せぬところの民衆的宗教たる眞宗が勢力を及ぼしてゐるのは當然なことであそ。他力本願は、涙の谷から容易に、來世に於いて×××會人を救濟すると思はせるであらう！

吾々は、宗教的觀念が絕對物でなく、生産力の未發達によつて生じた階級關係の存在するところには、何處にも起るのを簡單に究明することが出來た。

私は玆にボグダノーフから引用して、宗教も社會關係の變遷によつてその形式をかへることを示めさう。「たとへば社會が、二三の相互の結合の弱き種族からなり、それらの各々が其長老及び酋長を有するならば、その時は宗教は多神教の形式を採るのである。又若したとへば統一の過程を經て、中央集權的君主制が生ずるならば、それと同じく天上に於いても、平行的に行はれ、天上では地上の支配者と同樣に冷酷な唯一神が御座に登るのである。もし奴隷を有する產業共和國を例にとるならば、そこでは假令へ、多數の神々のなかで、戰勝都市の女神パラス・アテネが嶄然頭角をあらはしてゐるとはいへ、神々も亦共和制的に組織されてゐる……云々」

私は今、資本主義社會の宗教の批判に移らう。現代資本主義の時代は過去の時代と比較すると、より進歩した社會である。だがブル

ジョア社會が如何に進歩した形態をとらうとも依然として階級關係が存續する限り、宗教の觀念は嚴然として存在してゐる。特にマルクスの謂ふやうに、神學的な執拗さに充ちた物神崇拜の性質と、その秘密をおびたところの商品生産社會の關係のもとにあつては、又人類の意思とは無關係に、しかも恐慌、失業、窮乏の間斷ない社會では、宗教的表象は一層あらはになるのである。此の人間の對抗しがたい超人的な力の作用が、即ち合理的な社會統制の不可能なことが、資本主義社會における信仰の根本的理由である。吾々は、資本主義社會における宗教について、レーニンの宗教に對する勞働黨の態度についての論文から引用しやう。「近代資本主義社會諸國においては、宗教の起原は主として社會的起原を持つてゐる。勞働大衆の社會的壓迫、資本主義の盲目的な力の前における彼等の明白なる絶對的無力、日々刻々普通の勞働をする人々に加はる戰爭、地震の如きすべての非常の事變よりも千倍も恐るべき苦痛――これらのものゝ中に宗教の深い今日の根源はもとめらるべきである。恐怖が神を創造した、資本の盲目的權力の前における恐怖、盲目的恐怖、プロレタリア及び小ブルを、一歩一歩脅威して、彼等に「突然の」「豫期せざる」「偶然の」窮乏を、沒落を、乞食、窮民、淫賣婦への轉化をもたらすことが出來、彼等を餓死にゆだねるところの恐怖――これが即ち……近代宗教の根源である」（レーニン宗教論、佐野氏譯二三）我々は資本家商品生産の組織の盲目的な力が支配してゐる限り、觀念的な無神論を說教しても、それは單に消極的にしか効果はない。人間が社會化された人類に、即ち社會が人々の意識的な計畫的な管理におかれたときにのみ、完全に宗教的表象はその存在の根據を失ふからして、消滅して了ふであらう。

吾々は今、顚倒された現實の資本主義的社會の解體と共に、宗教が消滅することは大體理解できたことゝ思ふ。吾々は寸時もやすむことのない資本主義的攻勢の時期にあつて、宗教批判を現實的な當面問題としてとり入れるけれども、しかしその鬪爭が抽象的なものであるならば、最後的な勝利、大衆を無神論に導くことは成功を期し得ないであらう。少くとも、プロレタリアートの階級的解放運動の具體的な實踐と關聯さすことに依つて、即ち資本主義制度の廢棄につとめることに依つて、宗教を究極まで克服することが出來るであらう。『プロレタリアートを地上のよりよき生活のための、眞實の鬪爭に結束することによつて、來世への信仰から彼等を解放する』されぱこそプロレタリアートの全般的な解放は、宗教の必然的な消滅となるのである。

（一九三〇・二）

## 春風抗

いたづらものの春の風は鬼の髭もふけば、佛の耳をもくすぐるでせう。本誌についてのデマが飛ぶと告げられますが、私どもは微笑をもつて春の風になぶられませう。

編輯同人

# 清川八郎

報知新聞所載
長編小説
再版三冊

三上於菟吉作・高巖五百枚装幀

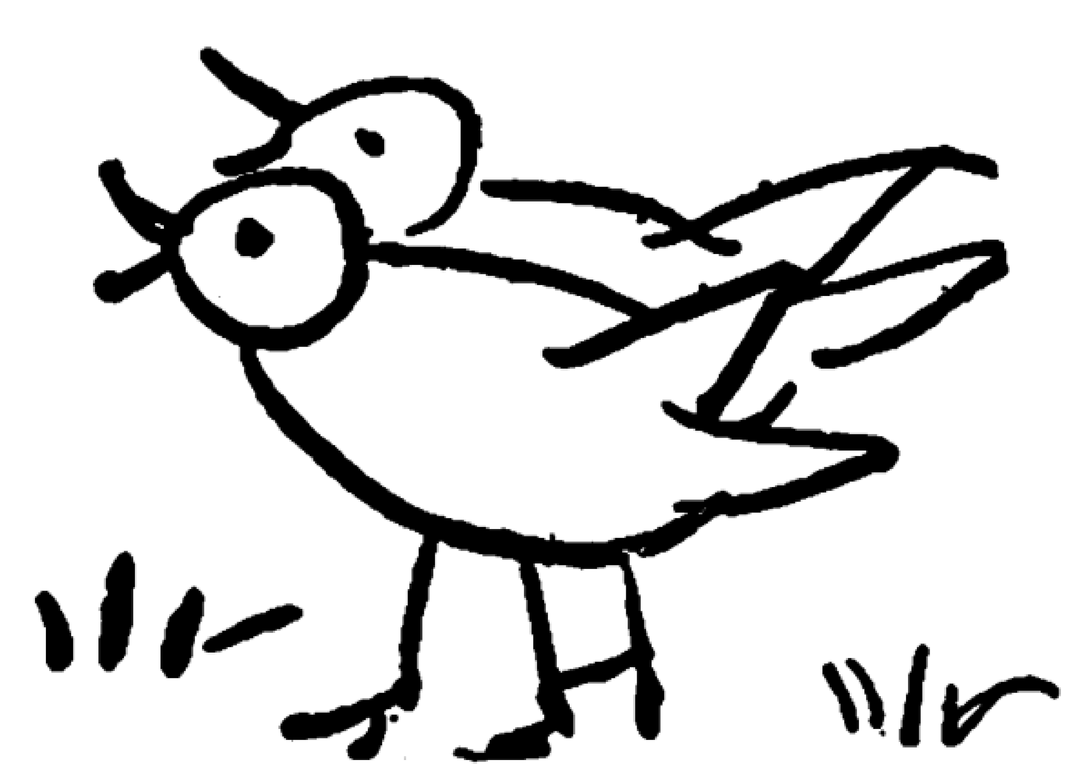
東京・本郷富士前町
先進社
振替東京六五二三八

定價 金七十錢

## 花のかんばせ

大馬力をかけた三月號も出來上つたし編輯室もこのところ暇だから、どう年頃の娘さんたち花のかんばせをかたみにのこす、寫眞をとらふよ、そこで評議一決二月二十日午後一時尾張町集合。一人で行くよりは二人でと本郷まで大久保からのこのこ出掛けて優子さんを誘ふ。冬の風がどこかに春の匂ひをはらんで心にも體にもなごやかさがとけこむ。お晝すぎ、たんのうしてゐるおなかに心殘りのおいしい蜜柑、友達甲斐に素川さんのお土産にしませうよ、包んだハンカチイフのゆとりに素川さんそんなに好きぢやないけど今からゆくと遲刻だからそのおわびに之もとばかり欣にならんでゐた甘いお菓子もおしこんで、こんなにお天氣がいいとテクテク歩きたいわねえ、時間の約束を忘れかけて時計を見ると一時すぎ、あはててとびのつた市電のガッタンゴーののろさが、のどけさに似ないいらだたしさをギシギシと身内になげこむ。

銀座十字街尾張町の電氣時計の長針と短針がかつきり十二と二の所をさしてゐる時に、白いペーブメントは二つの大きな女の影を停止させて、「居ないぞやつぱり」―怒つてるかな」―「でも今日は暖かいから日向ぼつこの好きな素川さんそんなに怒りやしないでせう」―「一寸今日とる寫眞やさんどこ」―「知らないの―「オリエンタルつてんでせう」―素川さんのお友達のゐるとこ」―どこか銀座うらでせう」―「あ



# お墓のすげかへ
## ―日本橋―12

時雨

### チンコッキリ――ツヾキ

一族の石塔五十幾基をもつた、朝散太夫藤木氏の末裔チンコッキリおぢさんは、三人の兄弟であつたが、揃ひもそろつた幕末お旗本ならずものの見本で、仲兄は切腹、上の兄は他から歸つてきたところを、襖のかげから跳り出た父親が手にかけたのだつた。末子のチンコッキリおぢさんが家督をついだ時分には、もうそんな、放蕩兒など氣にかけてゐられない世の忙しさだつた。

岡本綺堂氏作の「尾上伊太八」といふ戯曲の中に、伊太八といふ幕末の江戸武士が吉原の花魁尾上と心中をしそこなつて非人におとされてから、非人小屋の床下を掘る場面があるが、あれを見るたびに私は微笑とも苦笑ともなづけがたいほゝゑみが突上げてくる。伊太八のは根强い惡だが、藤木さんのは時代のユーモアがある。この放蕩漢兄弟は金がほしくなると種々な智惠の絞りつこをしたが、だんだんに詰つて士を賣ることを思ひついた。

らオーキの三階ぢやないの」「あれは帽子やよ」「それぢや私しらないわ」「あたしだつて知らないつと」「困るわね」「うん」「仕方がないから銀座の裏を一軒一軒さがしてみませうよ」「暖かいからあきらめて」のこのこと動き出した影がこんだはコツコツと靴の音をひびかせながら、マツダランプの角を右に折れてアザレの前に來た時「東鄕靑兒の奧さんここで働いてるんですつて」「見ちやわない明代さんてんでせう」「どれあの人かしら」「そうらしい」むしろを敷いてある鋪道の通路の網張りのかげからぬつと出た女の黑い帽子、その横に反對色の强味でしみる白い鉢卷きと仕事着の人の顔が、正面に向きなほつた瞬間にすつと覗野の中にとびこんで、とびこむと同時に「あ素川さん」「ずい分さがしたのよ何處に居たの」「今オリエンタルつてのをさがしにこの邊と見當をつけて來たの」「一體何時に來たの」「二時尾張町」「驚いた今Wさん（素川氏の友人で今日あたしたちのしやんをとつてくれる白い仕事着の人）と二人で、二人が何處かに迷つてやしないかと思つて」「あら何故、」「さては素川さんもちこくしたな」「うん、一時半にきたのよ」「だから二人がどこかへ待ちくたびれて行つたと思つたんでせう」「さうさで、今又カフエユーロツプに居るかと思つて行つてみて、コーヒーをのんできちやつた」「あら口惜しいもう行つちやつたの」素川さんを發見した場處が丁度オリエンタル寫眞工業株式會社のビルデイングの前で、二人とも一なあんだ一とばかり「こんなとこ？」

江戸の下町でよい庭をつくるには、山の手の赤土を土屋から入れさせるのである。今のやうに富限者が、山の手や郊外に住居や土地をもつてゐなかつたので、藏と藏との間へ茶庭をつくり、數寄をこらす風流を樂しんでゐた。一木何十兩、一石數百兩なぞといふ——無論いまより運搬費にかかりはしたであらうが贅澤を競つた。その地面に苔をつけるには下町の燒土では、深山、又は幽谷の風趣を求めることは出來ない。植木のためにもよくない、そこで赤土の價がよい。

三人の兄弟がその時ばかりは志が一致する。父親が勤めに出てしまうと、なるたけ坪數のある廣間、書院の床下から仕事をはじめる。自分たちでやつて見たが、根から遊嬾な男たちには、堅い土がいくらも掘りかへされはしないので、大つぴらに父の留守をねらつては拂ひさげをやる。賣る土がなくなると姉が死んだといつて、藏前の札差しに、來年さらいねんの扶持米を金にして貸せといたぶりに行く。札差し稼業はもとよりさういふ放埒な又まつたく貧乏な武士があつて太るのだ。貴下には泣かされますといひながら絞る。いくらにでも金にすればよいので、時價なぞにかまつてゐないよいお得意なのだから、彼等の番頭はうやうやしく町人袴をはき、手代を供につれて香奠をもつて悔みにくる。おなじ穴の狢友達が出て殊勝らしく應待して、包んで來た香奠の包みをもつてはひると、そんな事は知らない姉ぢや人が、日頃厄介をかける札差の番頭が來たといふので挨拶に出て、すつかり巧みの尻が割れ、ならずものたちは裏門から飛出してしまう——

そんな話を藤木さんは自分でも面白さうにはなす。尤もそれは、柳橋にすむやうになつて、誰も酒盃をもつてゐられるやうになつた、ずつと晩年のことではあるが——

柳橋の角に、檜づくりの、磨きたてた造作の藝妓屋を、姉娘の旦那に建てもらひ、またその隣家を買ひつぶして、小意氣な座敷を妹娘の旦那に建增してもらつて、急に××家の

オリエンタルのスタデイオは混んでるとかで、W氏たちとは兄弟の樣に仲がよく親類の樣に親しく、親子の樣に氣が許せるつて云ふ近所のスタデイオにゆく。三人の年頃の娘さんそこの應接室でエヘンとすましてお茶をのみながら、北に開かれた窓から西北に延長された大東京の展望をなつかしいものに見る。「ねえ、こんちは」つて云へば「うんこんちは」つて返事をしそうに、晴れた初春の空氣の中に邦樂座や朝日新聞社が近く見える。大きな娘二人とちいさなの一人と合計三人スタデイオに入つてシヤシンをとつてもらふ。「氣取るのようんと」「なるたけステキに美人になる樣に」「少し位不美人でもあとでシヤシンやさんが美人に習正してくれてよ」そこで一番大きな小池みどりがまんなかで、優子さんと素川さんがはぢで、みんな一二三とすまして、うつしますよシユッといくだらうと思つて待つてゐるがなかなか、そつちの太陽燈をつけて、五千ボルトのそいつを消して、反射鏡をもつと右の方にひつぱつて、おしまひに龍宮の乙姫樣をあほぐうちわのうんと大きい樣な白や黑の反射光線をやわらげる變なものまで持ち出して、はやくとつてよう顔がせつかくすましたのにこわばつてしまふ」と悲鳴をあげても、もうぢきもうぢきとばかり、それでとるときはきつとシユッといふだらうと思つて安心してたら、いきなり「もう一度とりますからそのまま」「あらシユッて云はないの」「そんな舊式のはつかかつちやいません」へエー。

おとつさん〱とたてられ、ばかに華々しく彼のキンカン頭が光りだしたは、持前の毒舌はいい氣になつて發揚した。無學で——それは彼もおなじなのだが——平民といふと、見下られるものとのみこんでゐた無智な仲間は、娘を賣るやうな士族でも偉さうにあつかつたので彼は得意だつた。例によつて、彼自身では、何一つ樂しみも與へもしないで、苦勞ばかりさせた妻にむかつては「ぼていふりの嬶が相當だ」と罵つた。朝湯にはひつて、講釋の寄席へ晝寢をしてゆくのを毎日の仕事にしてゐたが、あんまり口やかましいので、佃島の庭の梅が咲いたからお訪ねなさい、櫻がよいでせうから行つてらつしやいと、私の父の閑居に體よく追拂はれては來た。生てゐたころの木魚のおぢいさんと三人、のどかな海に對して碁を打ち暮した。島には木橋の相生橋が懸つてゐたばかりで、橋の上を通る人は寥々としてゐた。本佃の住吉の渡船でくるか、永代橋のきはから出て、父の閑居の門前につく渡船に乘るかが多かつた。

この渡船は、助さんといふ前の小屋にゐた若い船頭さんのために、父がすこしばかり手傳つてやつてはじめさせた渡しだつた。人通りのない父の家の門の柳が、わたし場の目じるしだつた。さて、その三人の幕末の殘り者が緣近くに碁盤を据えると、汐潮があげてきて、鼻のさきをいせいのいい押送りの、八丁艪の白帆が通らうと、相生橋にお盆のやうな月がのぼらうと、お互が厭がらせをいひながら無中になつてゐる。父は、島人から村長さんと名づけられてゐるほどのんきでいい飄逸な、長い白い髭をしごいてゐる。木魚の顔のおぢいさんはムンヅリと、そのくせゲラ〱と、聲をださないで崩れた顔を示す。つまみよせたやうな眼の、キンカン頭の藤木さんは、俳諧でもやりさうな澁仕立の道行き姿になつて、宗匠頭巾のやうな帽子を頭にのせてゐる。そして懷中時計を三十分に一度は屹度出して、ただ眺める。龍頭をいぢつて耳へもつてゆくしぐさを繰返す——

素川さんが立つたり座つたり目玉をくるくるまわしたり肘が動いたり、とかいつて大騷ぎしてシャシンをいと美しくとつてゐる時に、ずるをして優子先生に（特に奉る稱號）今日のルッソンをさらつて貰つてゐた小池みどりとその先生を天然色の寫眞屋さんは色彩の配合がいい！ばかりよろこんでとる。「うまく出來たらあげませんよ下手に出來たらあげませう」「何故」「うまく出來れば見本にいつてをきます」「つまんないや、うまく出來なきやいやだし出來ればくれないし」光線で汗が出る程あつたかくむされて活動の女優さん達はしよつちうこんな光線にさらされるのかなあなんて同情してる間に「よござんす」待つてるまに現像が出來て「すてきだ」「すてきだ」「スタディオはじまつて以來」とかなんとかまだ乾かない板を持つて大さわぎ、丁度すまあして一人のをとつてもらつてゐた小池みどり、「早く〳〵みたいなあ」たまらなくなつてとび出して行つてみるとステキステキ優子さんのホッペタの赤いのもみどりさんのホッペタの赤いのも、ゆう子さんの肩掛の赤いのもみどりさんの線の洋服も、黒いかみも勉強した手に持つてるエンピツの黄色いのも、ちやんと出てる出てる。すごいたあ、ほしいなあ「小父さんこれ下手だから丁だい」「下手ぢやないから駄目」「つまんないなあ」「まあいいこんど又とつてあげませう」一枚つきやとらないから貰つても優子さんと二人でわるわけにもいかないから仕方がない。あきらめちやへ（みどり）

夕貌かかぼちやか知らず花三ッ（社長）

この碁打ちたち、かたちはさも巧者でありさうだが、だが、ある折、妹の婿の若い、海軍のヘッポコ少尉がこの三人の前で、

「とても駄目です、僕は軍艦でも、ものにならない方の、その中の一番しまひです。」

「まあ、やつて見な、おれが對手になつてやらう。」

父が少尉との最初の盤にむきあつてすぐ負けた。若い軍人は言つた、

「お父さん負けてくだすつたんです、そんな筈はありません。」

「そりやそうだらうとも、さあお出なさい、こんどは僕だ。」

藤木宗匠が向つた。父は變な顔をして默つてゐた。勿論チンコキリ宗匠もすぐ負けた。

「妙だね、こりやおつだよ、以心傳心若いものに華をもたせやうとするのかな。湯川氏はさうはいかないぜ。」

「いや、拙者はどうも。」

木魚のおぢいさんは目をクシヤ〳〵としばたたいて蟇のやうにゆつたりしてゐる。だが、結局はやつぱり負けた。若い少尉はころがつて笑つた。

「僕より拙いものがあるなんて――これぢや碁ぢやない……」

「碁ぢやないつて？碁ぢやない、碁ぢやない、こちやゴヂヤゴヂヤだ。」

藤木さんも黄色い長い歯を出して笑つた。

しかし、さうしたのんきな生活――藝妓［げいぎ］おとつさんの成功も、藤木さんみづから努力した運ではなかつた。彼の生涯に惠まれた幸福は、服從心の強い、優しい妻と娘とをもつた事だつた。木魚の顔のおぢいさんの老妻がいしくもいつたことがある。

「親不孝者が親孝行の子をもつなんて、誠に不思議さね。」

## 春の町

北平へ歸る笙千鳥氏の夫君を東京驛に見送つた歸り例の通りみんなに「ようよう」とひつぱられて「一圓かつきりの御飯きや食べさせないよ」さては財布が重くないな。うちの社長さん銀座を好きぢやないので何遍來てもはじめての樣な氣がするらしい。

春の匂ひを含んだ風がしつとりと吹いて、銀座通りはよつぱらひと美しいおじようさんと、御婦人と、旦那樣とモダンボーイとガールとの人むれ、「いやに今日はよつぱらひが多いね」云ふや云はずに四五人の男、足元をひよろつかせたのが「長谷川さん」往來のまんなかでうちの社長さんをつかまへて、「長谷川さん」なんて云ふ男の若い人は大ていなにかせびる人が多いので、もろもろの同伴者「さては」とばかり身がまへする。社長さんだまつて知らん顔をして又歩きはじめる。不二屋の前當りから丁度シネマ銀座の前邊りまで來た時、後ろからどうもついてくる足音の氣配で――少し氣味が惡いから向ふ側へ行こうか――舗道から足を車道にふみかけ樣とすると、その中の一人追ひつひて「長谷川さん僕です」ところが社長さんに僕が通じない。目玉をパチパチしてると「改造社のKです皆なが代表して御挨拶をして來いつて云ふもんでムニヤムニヤ……」皆樣大變い、御機嫌である。で女性諸氏皆敬意を表して默まりこんでオチニ、オチニ――ジリリリリリン「醉つぱらつてんだらう」ジリリリリリン金屬性のかん高い音が、けんけんごうごうの銀座通りに



酒元と踊りで賣つてゐた姉娘お職に地味な客がついた。丁度年期があいたあとだつたので、彼女は地味にひいてしまつた。その頃の九段坂上は現今よりグツト野暮な山の手だつた――富士見町の花柳界が盛りになつたのは、回向院の大角力が幾場所か招魂社の境內へかかつてからメキメキと格が上つたのだ。從つて町の雰圍氣も違つて來た――お職さんが選んだ妾宅は朝々年寄つた小役員でも出てゆきさうな家だつた。母親は臺所を見るために

び出して、シネマギンザの割引だ「見ちやえ、見ちやえチャンバラ」そこで御一人大枚金二十錢也の木戸錢を拂つて中へ。「安いのねえいいのかい」社長さんの變な心配が又とび出す。
一ぱいの人が立つてゐる一番後につつたつて「紅椿」とかなんとかいふふやけたチャンバラをみる。そこに現はれてくるつりをしてる色男のさむらひをみて社長さん曰く「あの低能な侍は呉服屋の小僧がおなかがはつた時の様な顔してるね」おまちとかいふ美しい娘をすきで、その娘を家まで送つて行かうとしてる時に片岡チエゾウ扮するところの第二の色男のさむらひが出て來て要領よくその娘をおなかのはつた呉服屋の小僧の様な武士からとつて送つて行つてしまふ。この所喋々喃々——人のいきのくささと、活動のつまらなさと、立つてる足のつらさとで二十錢でもそんなに安くはないとばかりとび出してしまふ。
「あのお侍ひさんたちのふところ紙は鼻紙を三帖程も入れてる様だつたね」思ひ出した様に社長さんが云ひだす。
「今日は市電で歸りますからそのおつもりで」新橋の停留場に立つ事二十分、「さすがに寒いね」「一體どうしたんでせういやにおそいなあ」待ちくたびれてめんどくさい「タクシイを拾つちやへ」之卽ち初志不貫徹、悲しい節約不履行である。
二十四時間後女人藝術社の暴力團長のところへ——
昨夜は飴代(サラリー)を貰つて銀座に押か



よばれていつたので藤木さんの不服は一方ならずであつた。
お麻さんがその妾宅で、髪髷をひつつめた大丸髷にいつて、短かく着物をきてゐたのも暫らくでまた柳橋へかへつた。こんどは提灯かりの通勤だつたので、おなじ藝妓町に住居をもつた。
地味な氣性でも若い藝妓である。雛妓のうちから顔馴染の多い土地で住居をもつたから

け醉つぱらひ候。貴社長さんをお見かけし同僚にケシカケられて勇敢におひかけ申候。日頃膽の据つた社長さんも流石タジタジとなられて恐懼いたし居り候。決して物貰ひ、强請の類ならざりし事、若者の誼みでお詫び下されたく候。それから一言申度候は、ブカブカドンドンや食べる事ばかりに氣を取られないで社長さんの御警備專念になさる事、芝にて苦勞性――とばかり薬壽が一つ舞ひこんで來た。そこで若者のよしみで社長さんにその儀申上奉ると「よつぱらひのよたんべたち四人や五人何もこわくてにげやしないさ。合憎ビンボウで財袋が逃げたのさ。」そこでこの暴力團長モソリとよろこんでその段改造社のK氏に早速申送り置き候也。敬具（暴力團長）

乔の灯は魔女なり人を醉はせけり（社長）

## 貧弱な行進曲

これで一週間目の雨が降る。お蔭で道はぐちやぐちや。靴は乾く暇もなく又御用を勤める。濕つぽい靴を脫いで編輯室に入ると、待つてゐましたと云はぬばかり、「あなた今日行つてね。」と秦川さんすましたものだ。私は嘗く役ぢやないもの。昨日あなたが行くつて云つてたぢあないの…とちよつとふくれてみる。「まあスケッチでもしに行くさ。お土産を待つてますから宜しく願みます。」そこでこつちも行けてゐない事にした。「私の代りにカット描けつて云つたつてあなたにや描けないぢやないの。私にだつて文章なんてうまく書け

訪ねてくるものもある。見得の張りたいところを裏長屋で辛棒してゐるのだから、察してやらなければならないのを、チンコツキリに厭きはてた父親は、一緒に住まはせなければ、晚にいつてその家の棟で首をくくつてやるといやがらせた。事實さうもしかねないほど思ひ入つてゐるので一緒にはなつたか――娘の心は悲しかつたであつたらう、藝で賣つた柳橋だとはいへ、一時に負擔が重すぎた。私は從姉をたづねていつて、暗澹たる有樣に胸をうたれて途方にくれたことがある。これが、あのはなやかに、あでやかに見える、左褄をとる女の背に負ふ影かと――

平右衞門町の露路裏だつた。柳橋の裏河岸に、大代地に、大河の水にゆららぐ紅燈は、幾多の遊人の魂をゆるがすに、この露路裏の黑暗は、彼女の疲勞のやうに重く暗くおどんでゐる。一番奥の、人力車夫の長家のやうな板戸の家が彼女の巢だつた。

更けてはゐなかつたが戸を叩くと、床の低い四角い家の上りがまちに籐木さんが寐てゐて黑つぽくモゾモゾした。奥の壁の隅に島田髷が小さく後向きに寐てゐる。にぶい燈火にも根に結んだ銀丈長が光つてゐた。壁にはいろいろなものがさげてあつたが、藝妓の住居らしい華やかなものは一品もなかつた。

「あの娘は癇のせいか寐出すと一日でも二日でも死んだもののやうに眠つてゐて――」

母親は祝ひにきてくれたのにと氣の毒さうに呟いた。

心の重荷――そんなものが感じられて從姉の苦惱に私は胸をひきしめられてゐた。この裏家から高樓をとつて、切火をかけられて出てゆく藝妓姿はうけとれなかつたが、毎日細二子位な木綿ものを着て以前の抱えられた藝妓屋へゆき、着物をきかへて洗湯にも髮結ひさんにもゆくのだと母親が說明した。

とはいへ、さうしたはかない裏は知らず、料亭の二階へよぶ客は、藝妓と見れば自分か

やしない」「所で君は違ふよ。器用貧乏ぢやないか」例の器用貧乏を持ち出されて、今更不器用金持だと辯解も出來ず社長さんの御伴。女人聯盟員で鐵道省に勤めてゐる×氏に依賴された鐵道省の事務員達のための講演會である。三月八日、今日は全國の婦人デーに當つてゐるので若い聽衆の前で元氣のよい話をすると云ふ事はかなり愉快な事に違ひなかつた。それに聯盟員の依賴である。社長さんは快く承諾はしたものの編輯の忙しい最中、徹夜の續いた後である。いゝ加減うんざりした雨の中を疲れた體を運んだわけだ。東京驛の前を通つて日活のわきの細い道を入るとそこがクラブだ。今女子大の正田女史の講演中だと云ふ。社長さんと文戰の今野氏が御話に夢中になつていらつしやる。今後も女人藝術は大いに婦人の啓蒙運動に奮闘してもらひたい等と大變女人藝術の肩を持つて下さる今野氏の、少しく禿げあがつた額をちよつと失敬してスケッチすると講堂へつれてつて貰ふ、正田女史なか／＼雄辯家である。拳を握つて振りまはす。今、正にアメリカ大統領フーバー氏はとやつてゐる。「彼も又始つから大統領だつたんではありませんよ、チン／＼とやつてゐた車掌さんでありました。皆さん今は學校へ行つた人ばかりが偉いんではありません。働く事は神聖であります。我が國の將來は青年諸君、皆さんにあるんですよ。」ところで聽衆をひとまはりみわたしたが、青年諸君ばかりではなさそうだ五十を越した老爺もあり四十代の氣むづかしさうなおばさんも交つてゐ

ら陽氣になつてくれる。彼女にもよい客が出來かけた。今日は何家の裏二階で、昨日はどこの離れでと招ぶ客の名が知れると、妙なことにチンコッキリおぢさんが納まらなくなつた。前に圍つてくれた旦那と二人して妨害運動をしたりしたが、律氣な――鉢植えの擽みたいな生れつきの妓にも芽が出て、だん／＼に繁昌して來た。一人だちになり、勝氣な負ずぎらひな妹もおなじ水にはひつて、どうやら抱妓もおけるやうになつた時、東京中の盛り場で「旦那」とよぶのはあの人だけだといはれた遊び手の若い大商人と緣を結んだ。

小山内薫氏の書いた小說「大河端」や「落葉」に出てくる木場の旦那、および多さんがこの二人である。多さんとは藤木廝女のことである。

私はつひにそこまで達した彼女の子供の時からの苦勞をあんまり知りすぎてゐる。だまつて苦惱をになつてゆく、瘦せた、小柄な、あまりパッとしない彼女の藝妓姿をいたはり撫でたい氣持ちで遠くながめてゐた。アンポンタンは成長するにしたがひ家內のなかの異端者としてみられてゐたから、どうする事も出來ないで、抱えの時分流山みりん瓶入の贈物をもつてくる彼女の背中を目で撫でてゐたが、彼女におとづれた幸福は、彼女にはあんまりけば／＼しい色彩なので、信實はやつぱり苦勞が絕ないであらうと痛々しかつた。なぜなら、らんまんたる櫻の咲きさかる春のやうな、または篠つく豪雨のカラリと晴れた、夏のやうな風情は彼女にはそぐはなかつた。もつと地味で緊實な愛が彼女を待たなければ眞の幸福とはいへないやうに思へた。私が彼女にあふことはより遠々しくなつた。

放蕩兒が金を散じる時の所作はまづ大同小異である。幇間にきせる羽織が一枚か百枚の差である。藝妓のとりまきが一流と二流の相違は、料亭待合の格式、遊ぶ土地、すべての附合の範圍と廣さにおよぼしてくる。中村鴈次郎が東都の人氣を攫得しやうとすると、歌舞伎座から「まだ旦那のお招きをうけないが――」と賴みこんでくる。攝津の大掾が來た、

る。この雜多な聽衆の頭に正田女史の熱した唾が飛ぶ。「皆さん、今日では勉强したいものは誰でも心がけ一つで何でも覺えられる。軍縮とは何だ。七割要求とは何だ、新聞がみんな敎へてくれる。ねえ皆さん惜しいぢやありませんか。何百人もの手がかゝつて出來た新聞を端から端まで讀まないなんて。心がけ一つであります。お腹がいたい〳〵と考へてゐる暇に、仕事がある、會社があると思ふ。働らかなきあいけない、これも國家のためひいては自分のためと思ふ。そうすりやお腹のいたいのなんか飛んでつてしまふ。」

　腹のいたいのなんかなほるものけえ、とどこかでつぶやく。微苦笑が顏を歪めるのをやつと我慢して控室に歸へるとお話に夢中の社長さんを一生懸命つゝついた。「とてもやさしいお話なのよ。とてもやさしいのよ。そのおつもりで。」

　そこへさつき寄附した全女性行進曲の繪ハガキを聯盟員の人が持つて來て、歌つて頂けないかと云ふ。一人ぢやいやだけど皆さんも一緒に歌つて下さればと云ふと、ぢや敎へて下さいと云ふ事になつて、五六人廊下に出て「トザースクーモ」とやり始める。講堂では丁度、マンドリンや何かで音樂をしてゐる。あれで伴奏をしてもらへばいゝ等と思つてもみたがいくら何でも餘り卽製すぎる。「アレクルーウアラショ」と皆があぶなつかしげについて歌ふ。追々演壇に出て行くと續いて出てくる筈の皆が出て來ない。結局その歌のうまい、黑田さんと二人きりになつてしまつ

何が來たと東京の盛り場の人たちが大阪でうけるお禮のかへしを、一手に引受けるほど遊びに顏を賣つた旦那を彼女は旦那にしたのだつた。しかも彼女は律氣眞面目一方で彼をまもつた。

　彼女は濱町に住んだ。藤木さん夫妻は妹娘を眞にして柳橋でパリパリの××家のおとつさんおつかさんになつてしまつた。手拭ゆかたの立膝で昔話をして、小山内さんや猿之助を煙にまいてゐた。濱町の家には、近くの中洲の眞砂座にたむろしてゐた、伊井、河合、村田、福島、木村などの新派俳優の下廻りが、どつちが樂屋かわからないほど入込んでゐた。藤井六輔とか小堀誠などは自分の家のやうにまめに働いてゐた。藝妓、各遊藝の家元たち、はなしか、幇間、集ればワッワッいふ騷ぎだつた。お麻さんはいつもそれらの後始末ばかりしてゐたが、彼女は一中節の都の家元から一稲の名をもらつてゐたので、その名びろめを旦那が思ひたつた時は——彼女に對する日頃の謝意といふより自分の道樂の方が勝つたであらうが、二日に渡つた盛大な催しを柳橋の龜淸樓で催した。仕着せ、まきもの、配りもの、飾りもの、ありきたりな凝やうではなかつた。芦に都鳥を描いた堤灯は、さしもに廣い龜淸樓の樓上樓下にかけつらねられて、その灯入りの美しさ——岸につないだ家根船にまでおなじ飾りが水にゆれて流れた。

　濱町の岡田ではこの旦那のために舞臺をつくつて、あの廣い家中を一間〳〵樂屋にして素人芝居が開催される。もとより番附その他の設備、樂屋の積物、いふまでもなく人氣役者の名題披露の通りにした。とう〳〵新富座まで借り入れてやつたこともある。

　お麻さんと旦那の生活はこの位にしておかう、お麻さん夫妻の濱町の家に特記してよいのは、小山内氏のために潮文閣を擧して第一期「新思潮」を出したことである。そのころとしては作家たちを花屋敷の常磐といふ一流料亭に招待したり、一足飛びに稿料何圓かを支

たこんな事なら出て來るんぢやなかつたとたぢ〳〵してもらおそい。伴奏も何も出て來てくれない。實に泣面だ思ひきつてやつつけちやへとばかり「モロウデヲサシノベ」と歌つてもちつとも兩腕をさしのべてゐる樣な氣になれい。

今度はいよ〳〵社長さんの番だ。漫談口調で話しはじめ、次第に眞目なものに變つて來た。婦人がはげしい仕事に益々進み出るにつけ風懐と云ふやうなものを持つてもらひたい。プチブル氣分とは違——ふそんな事を言ひかけて何かめんどくさそうに考へていたがいきなり、どうも妙になつてしまひましたから此の位で失禮致しますとサッサと自分から中止！

漫談にしよと思つたら前の方に若い女の人がみえたのですまないと思つて話を變へかけたら、むづかしい顏をしたおやぢさんが、こんな顏をするんですものと、實に傑作な顏をしてみせるのに吹き出してしまつた。私、中ぶらりんの氣持ちはいやだからやめちやつたと。氣もち惡がつてゐる。困つた大きなヤンチヤさんだ（優子）

古鼓雨にたるみて音もいでず——（社長）

## 淀君挿話

一人のルンペンマルキスト（この言葉は随分變だが）が來て、歸りの電車の中で讀むのだからと云つて、女人藝術の大家さんの本を持つて行つた。翌晩やつて來た時に「夜明かしで讀んぢやつた。俺も馬鹿だと思つたよ、

拂つて一般の稿料價上げを促したものである。

姉娘と妹娘との旦那の張合ひで××家は柳橋でもパリパリの藝妓家となつた。妹娘の旦那銀行の頭取りは、事毎に木場の旦那とは違つたゆきかたで、自分の女にした妹娘の家作に手入れをする、動產、不動產、いづれも消てしまはないものを注ぎ込んだ。その時分の藤木さんの家こそ不思議だ、敷居一つまたぐと次の間は妹の家作で、入口の方の家が姉娘の家作、どつちの道角家の磨きあげた二階家つゞきで、お師さんの藝妓名をついた妹が主で、大勢の抱妓がゐた。妹は築地のサンマー夫人のところへ會話を習ひにいつたりして、二階の一間には床の間に花あり、衣桁あり、飾り棚があり、塗机があり、書道の手本と硯が並べてあるといふ豪奢な貴婦人好みであつた。

產むなら女の子をうんでおけと——むべなるかなで、チンコツキリおぢさんはその家のお父さんとして死んだので、實に大層もない葬式の列が編上げられて、死に果報なことゝなつたが、同時にこそばゆい華やかさでもあつた。

最もその時分、角力の親方だとか顏役だとか、人氣役者とかいへばさうした突拍子もないお祭りさわぎの葬式もあつたが、チンコツキリおぢさんを知つてゐるものには不思議な微笑をもつて送られた。小禽が何百羽はひいつてゐやうかと思はれるほどの大鳥籠、萬燈のやうな飾りもの、金、銀、紅、白の蓮の造花、生花はあらゆる種々な格好になつてくる。龍燈、旗、天蓋、笙、篳篥、女たちは白無垢、男は編笠をかぶつて——淸楚な寢棺は一代の麗人か聖人の遺骸をおさめたやうに、みづ〳〵しい白絹におほはれ、白蓮の花が四方の角を飾つて、靑い簾が白房で半ば捲上げられ、それを幾町が間か肩にかつぎあげずに靜々と柳橋から藏前通りへと練り歩かれた。

それをまた迎へる本堂は花を降らし、衆僧は棺をめぐつて和讃の合唱と香の煙りとで人

だが巧いなあ」としきりに感歎する。「あの遲くから五百頁はちよつと感心するはね、といつたつて、私も此の間淀君で夜明かししたわ」
その「淀君」がお芝居になつて、新橋演舞場で帝劇の女優が演る。「女人藝術は切符を買ふだらうね」と大家さん「ぜひ大家さんの御招待をあてにしてます。」と編輯室の連中。どつちがどうなつたか私は知らないが、一日演舞場の二階に皆の椅子がちやんととつてあつた。
舞臺は今や常陸之介の娘で、淀君へ間者に入り込んでゐた楓が、朋輩のいびりのひなげしを逃して折檻されるところ。原作では可憐で、純潔でその癖女らしい一本氣な强さと、美しさとを持つた楓の性格がまるで出てゐない。苦しむ度に輝やく魂ひの代りに、只愛人の爲に活き愛人の死に殉じる單純な娘氣がある丈で餘韻のある美しさが斷たれてゐる。「半三郎と心中させてしまふといふ事はない！」と社長さんの憤慨だが、とても觀念的な扱ひ方だ。楓のやうな性格の女が只私たちの戀のために凡てを忍んでくれなどゝ泣いて男の苦しい決心を强ひるとは受けとれない、原作で楓を遠ざけて常陸之介が半三郎に要求する方がずつと本當だ。半三郎が自分の愛のために、愛しい楓のために恩愛の主人を殺さうとする氣持を、泣き乍ら有がたがる楓ではあつても、「私たちの戀」を楯にするやうな楓ぢやない筈だ。
「よくお布團の出るお芝居ね」と最後の幕おまんの方の寢室の時隣りの人がさゝやく。ほんとにお布團の出る場面が三つもある。一度は下手を頭に、一度は正面を頭に、最後は上

を窒息させた。しかもまた堂にみつる會衆は、片時もだまつてゐられないたちの種類なので、後側の方は、おとむらひなのかお淡ひなのかむじんなのか、ともかく寄合には相違ないが忍び笑ひまでする――
私は死んでも、決して自分ひとり所有の立派なお墓なんていふものをたてるものではないとその時思つた。前にもいつたが、藤木家一族の墓石は幾十基かならんでゐるが、その中に、特によい位置をしめて、四角四面、見上げるほど高く、紋をつけた家根まで一ッ石でとつてある、石の質も他のとは違ふゆいしよありげな一基は、ずつと前の徳川將軍に昵懇してゐた女性の墓だといふことだつた。それがまあ、なんと光榮なお見出しに預かつたことか、肝心な墓の主に斷はりもなく――尤も斷はらうにも百萬億土にゆかなければならないが――墓主が代つたことである。これがいい、これがいい、そんな風にかんたんにとりかはつてしまつた。そしてかつてはどんな美女で將軍の意志、即ち時の天下の意志を動かしたかも知れない女の墓名は、チンコッキリおぢさんの名に代つてしまつた。尤も、何々院殿といふ偉さうな名にはなつたが――
しかし、もとの墓主だつて、私は美女ときめてゐるが、どんな人だつたのかそれはわかりはしない。墓石が立派だから下の人まで立派だとはいはれない。むしろ藤木さんなどは愛すべき俗人だ。彼は言つてるだらう。
なんといふべらぼうなこつたか、干からびた鼠のやうな俺が――ここにはひるんだつて？　わしやはづかしいわいなあ―(この項完)
日本橋から魚河岸のなくなつたことは、今後の「日本橋」氣分によほど違つたものがくると思ふ。日本橋といふところは商業の中心地であり、諸國道中の振りだし地であり、

手を枕元にして、色どりがやゝ違ふ丈で大した變化もない。三つ共死にまつはる場面だ。半三郎が石田を刺しに來る。半三郎が床の上で腹を切る。折り重なつて楓が自害する。最後はおまんの方の寢所でおまんの方が毒藥自殺。そこで大家さん曰く。

「僕は夜書く事が多いんでね、自分には氣がつかなかつたが、全く夜の場面が多いんだ。だからどつか舞臺も暗いよ。」と、急におなかゞ空いたおなかゞ空いたと食堂へ殺到する大家さんと向ひ合せに腰かけた社長さん早速ふんまん。「ひどい芝居だわね。婚禮には貧乏徳利みたいなお銚子を持ち出すし、あの無道人の馬のくつわの音は何？パタ〳〵〳〵。あの凝音はひどすぎるわね。深夜のくつわの音と、歸つて來るあかつきのくつわの音がはつきり書き分けてあつてい〻所なのに……」すると大家さんは澄まし込んでスープをしゃくひ乍ら「い〻よ、君みたいに怒つたつて芝居だつて商賣だものお金で賣つたんだから仕方がないさ」「だつて餘り作者を無視した遣り方ですもの……」「僕はそんな事を云ふのは嫁ひだ。賣つたものあむからのものだ。人のものを見てゐるやうで却つて面白いよ、淀君が二つ出來たのだと思や愉快ぢやないか」

　正義派が口惜しがれば口惜しがる程大家さんはすましてうそぶいて殊更ら氣持よさそうに見せかける。淀君よりかこのお芝居の方が餘程面白かつたと、憎まれ口を利いて胡麻かしておく。

角ふりて互に笑ふ蝸牛　（社長）

そして「魚河岸」のあつた事が面白い組合せをして、特種の下町氣分をつくつてゐた。私の書いてゐる日本橋は、過去のものであるとつく〴〵感じた。日本橋の結末にはみんなその人の人生の結末があり、終局の墓穴が口をあいて待つてゐる。私はそこに幾人を葬るであらう。私もまたそこに葬られる日まで人生の行路を書きつけていつて見やう。

私の「江戸ッ子觀」をある婦人が覺えてゐて書かれたのを、拜借してこの餘白を埋める。

——江戸ッ子といふ代名詞は、各地の精鋭な人々、其地に甘んじられず中央に出てくる覇氣滿々たる徒、つまり其時代の精鋭な代表的な人々をさすわけで、その時代の新興階級こそ眞の江戸ッ子です。江戸で生れたからと誇るやうな人が決し江戸ッ子ではありません。江戸女の束ね髮とか浴衣がけとかいふものも凜とした氣象の表れの一ッです。自然そこには鬪爭的のものがあります。プチブル氣分は持たない、それが外面的に表はれて上は粗末な着物でも下を淸く、何處で倒れても恥しくない準備をしておくといふ風になり、内面的には金錢や權勢に阿諛せず、虐げられる者に同情する氣持をつくつたのです。氣概氣象、實行において男性的精神と、本當の女性らしい美點をもつた者こそ、江戸ッ子といふ名で表はすに最適な人です。

　その土地に生れたからとて、いきだとかおつだとかいつて、單にそれら江戸ッ子精神を虛名的にまねたヘドッ子はたまらない。私は土地ものとして、大都會人としてそんな虛僞には反對する。

# 鳥　鶸




愛する友よ
私は今晩荒々しい悲しみにとらはれて
ふいに哭き叫びたくなりました
口を利くのも本を讀むのも
はるかに遠くはなれてゐて
私はこんな夜は
夜更けの空洞の様な常暗の空を
目を凝らしてみつめてゐます
月もなく星もない空の彼方から
悲しみの黒潮は
渦をまきながら押しよせてきて
私を攫つてしまひ

私のみにあるつよき強き理念を愛し
愛することを信じたい！
邪念の賢らなる甘き酒は
私に毒盃の苦がさをあたえ
醒めたる酔ひの哀しみは
私を騙つてぬばたまの粘き泥沼に浴あみさせました
けれど、友よいまこそ
私は悲哀と寂寥の海中に押し流され
溺れながら
たかき高き　私のものを信じたい！
今晩も
魂の墓場に護りをする

## 大石千代子

盲ひたる鶻鳥は
私は溺れながら
激しい獣欲に頸を垂れ
恐れにふくらめる胸を抱きて
潸々と涙を流してゐます
悲しみは私の喉をしめ
よるべなきさびしさは
その奔流の速さに私を壓倒しつくして
私は立つことが能きません
友よ
私は嗄れた鋭い聲をふりしぼり
涙のひま〳〵に訴えて居ます

---

私は今こそ
暗い灰色の翼をとぢて
破れた小さい嘴でもつて
鋭く悲しげに鳴きつゞけてゐます
友よ
私の扉を叩く此の哀れなる欷聲に
私の心はゆれいたみ、ひとすぢにゆれ痛みます
私は双つの腕をのべて
闇閉ぢたる奔流に叫びつゞけ
嗚咽を噛みながら
あゝ、高きたかき
私のものを信じたうございます



# 谷間の村落

平林英子

## 1

五時十分發の一番電車が、谷間の殺風景な、積木細工の樣な驛から、運轉手と車掌とを乘せて發車した。吹雪の中を鳴り響く警笛が、積つた雪の表面を這つて、薄暗い家々の戸口へ凍りついた。

「一番が出たぞ！」

松治は、毎朝一番電車の警笛を目醒し時計にして床を出るのだつた。爐端で、梅干の入つた毬の樣な握飯を燒いてゐた女房は、松治の聲に立ち上つて、薄暗い佛壇の横の柱に、祖父の代から掛つてゐる古風な大時計の針を、周章てて五時十分の處へ當てがつた。非道く耄碌したこの柱時計は、大切な時に道草を喰つたり、勝手に休息したり、途方もないところで、時間はづれにボン〳〵鳴り出すのだつた。だが、機械と言ふものも、人間と同じ樣に、擦切れて全く役に立たなくなるまでは、

我慢強く働き續けなければならない。

炭燒を生業としてゐる松治は、ごつ〳〵と雑巾の様に糸を刺した堅い仕事着の上に、女房が編んでおく茅の炭俵を、握飯と一緒に背負つて、隣家の源太と共に、毎朝山へ出かけて行つた。

彼等が家を出る頃には、町からの二番電車が、毎朝の様に一群のスキーマンを運んで來た。厚い、柔かさうな毛糸のジヤケツを着てぴつたりと體に吸ひついたオーバの背に、スキーとリユツクサツクを負つた人々の姿を、彼等は、別人種の様に眺めた。

「物好きにも程があるぢやねえか、この寒い日に、わざ〳〵山登りだとよ」

「雪の降るたんびに、俺、仕事が出來ねえで困ると思ふに、こんないけすかねえ雪が珍らしくて、錢を使つて見に來る人間もゐるだでなあ」

「あきれ果てた話さ！」

頰冠りをしても、鼻の頭が凍りつく様な風に向つて、ガンヂキの足を辷らぬ様に、一歩々々踏みしめながら、毎日小一里もある山奧の仕事場へ通ふ者にとつて、都會の人間達のすることは、半ばは不可解であり、半ばは癪に障ることだつた。

夏から秋にかけて、彼等は、拂ひ下げになつた官林の巨木の枝を共同で買ひ受けて、その太い部分を、選つて堅炭を燒いた。そしてこの頃では、殘つた枝先を集めて、炬燵用の灰炭を燒くのが、彼等の仕事だつた。資金のない二人が、この枝を買ふのにも、相當の苦勞をした。二人が途方にくれてゐた時、村會議員の安村が、彼等に資金を借すと言ひ出したのだつた。二人は、安村の好意を恩に着て、凡てを彼に依頼した。

「それで、お前達が燒く炭は、全部俺の家の庭へ積む事、一俵の炭に就いて、二割の賃銀を資本の返濟金としてこちらへ入れて貰ふ事、炭の賣買は一切俺にまかせて貰ふ事、これでいゝだらうな？」

勿論、無力な二人に異議のあらう筈がなかつた。安村が中間でどれだけ儲けようが、それは彼等にとつて、ぢつと辛抱強く我慢しなければならない事だつた。それよりも、冬の雪の中で、親子が餓死しない事の方が大きい問題であつた。

夕方、その日の仕事を、安村の庭へ積み上げた彼等は、鼻の穴まで眞黒になつた冷え切つた體を、土足のまゝ、自家のゐろりへ踏込むのだ、そして、焚火の埃で髮や肩を眞白にしてゐる女房が、茶釜の底から取り出す一合の地酒をぐつと一息に飲みほすと、彼等は始めてほつとするのだつた。

かうした彼等の所へも、時々は、少しばかりの樂しみが訪ねて來た。一つは秋の祭禮である。だが、是は、新しい事にだけ矢鱈に興味を持ちたがる役場の青年達が、虚禮廢止と言ふ事を何處からか聞き込んで來て、親戚を招待したり、赤飯を贈答するのを殆んど命令的にやめさせて仕舞つたので、今では、まるで淋しいものになつて

仕舞つた。他に全く娯樂と言ふものを持たない女や子供達が、社の境内の露店で、僅かにキヤラメルや大福餅を買つて食べる位のものである。

町の中學を卒業して、少し横文字が讀めるので、百姓をするのも惜しいと言ふ、金持の息子達が、遊びがてらに勤めてゐる役場、そんな處から百姓達の氣に入る樣な命令の出る筈がなかつた。彼等は、眞面目な顏をして、時々理屈に合はない事を考へ出すのだ。この前も、東京に震災があつた時に、村中の者から、一枚か二枚しか持つてゐない着物を、まるで剝ぎとる樣に集めて、その點數を他村と競つて、得々と寄附して置きながら、村の宇平の家が丸燒に逢つた時等、東京の人達から、襦袢一枚も貰つては來て與れなかつた。

だが、村人達は、さうした事に長く頭を惱ましてはゐられなかつた。彼等が、密かに熱心に待つてゐるものは、實は「選擧」なのだつた。村長でもいゝ、村會議員でもいゝ、縣會議員や代議士ならば尙更上等だ。選擧が始まると、村中の家々へ漏れなく金が配られる。村の重だつた人達が、この時ばかりは珍らしく、慇懃に猫なで聲で愛嬌を見せながら、しかも甚だ遠慮勝ちに頭を下げて、一圓、二圓と配つて行く。だから、村人達は、クリスマスのサンタクロースを待つ都會の子供の樣に、選擧を歡迎した。

「こんねに、樂にいゝ日當が貰へるなら、選擧は毎日あつても惡るくねえなあ！」

「馬鹿云へ！そんなら働く者がなくならあ」

「ぢやがな、三木の旦那を議員にしとくと、俺達だけは、內證で租稅を安くして與れるちゆふ事だよ」

「あの人は、東京の大學へ行つて、仲々の物識りだと言ふからなあ、法律も知つてゐると言ふ話だ」

「さうとも、あの電車をつくつたのも、登山者の步く路を修繕したのも、みんな、あの人の考へ出した事だそうな」

村は、久しく帝政會と民友黨とに別れてゐた。勿論、それは重だつた人達が、勝手にそんな色彩をつけてゐるだけで、一般には何が何やら解りはしなかつた。そして、それは又どうでもいゝ事だつた。選擧が始まると、村長や村會議員達が主動者となつて、自分達の繩張りを擴張する爲に、それ〲の潛行運動が開始されるのだつた。彼等から見れば、村民達は、池の中に泳いでゐる鯉の樣なもので、餌を與へた時には、皆で寄り集づて來て、當然の樣な顏をして食べるけれど、又平氣な顏で、外の人の與へるものをも食べに行く。この淺間しい鯉の食慾には、等しく兩黨の運動員達が惱まされるのだつた。まるで、池の兩側に陣取つて、氣隨に泳ぎ廻る鯉の頭數を、少しづゝ餌を投げ與へながら、自信なさそうにかぞへてゐる樣なものである。だから、永年、さうした事に苦しんだ兩政黨では、常時と言へども、決して油斷はしなかつた。彼等は恰度、泥棒が金持の番犬を飼ひ習す樣に、根氣よく村民のさもしい根性に、酒

と言ふ魔藥を注ぐ事に努力した。
年に二度づゝ、紅葉狩りや、雪見に名を借つて、農閑期を利用して各政黨の村民招待會が催されるのである。この日會場には、酒樽と肴がうづ高く積まれ、地方新聞の政治記者や、議員代理等が、自動車で町からやつて來る。「正義」や「道德」に關する講話がある。特に、「政治上の道義心」に就ては、それとなく、遠廻しに語られる。招待された村民達は、牛肉の「お預け」をされた犬の樣に、橫目で酒樽を睨み乍ら、それでもおとなしく、彼等の演說を聽いてやつた。村で唯一人の酒嫌ひな、大工の光公は、八十五になる酒好きの義父を自分の代りに會場へやつて親孝行をした。
例年の如く、今年の第一回雪見會が、村の金水寺と言ふ寺で催されると言ふ通知が來た時、その前日、村民達は、妙にそわ〳〵と落ちつかなかつた。
長い冬中を、木小屋の地下室の中へ寄り集つて、何時も無言で藁仕事をしてゐる男達も、今日は朝から猥談等をしたり、卑俗な流行唄を唄つたりした。中には牛の藁靴を、片方だけ二足も造つたり、突拍子もない聲で笑ふ者もあつた。親子で選擧權を持つてゐる家では今年は誰が行く番か容易に決定しないで、時ならぬ親子喧嘩が始められた。
松治は、源太と並んで、今朝から燒いた灰炭を、炭俵に詰めながら、上氣した樣な顏をして話し合つた。
「いよ〳〵明日は飲めるぜ」
「うん、ありがてい話さ」
「だが、一體、誰があのとてつもねえ酒や肴を買ふんだい？錢に見積つて見ねえな、なまやさしいもんぢやねえぞ」
「さあ！解らねえ」
源太は頭を左右に振つて、手鼻をかんだ。そして、炭の一杯詰つた俵の口元へ、しなやかな生の小枝を曲げて蓋をすると、それを兩膝で押へて、力を入れ乍ら、急所々々をぐつと細繩でくゝりつけた。
「何しろ、學問のある人達のやる事つてものは、俺達の樣な馬鹿者には、どうも呑み込めねえや」
軈て、一日の仕事を片づけた二人は、臼の樣な形の炭俵を一俵づゝ背負つて、雪の上へ殘して來た自分達の足跡を、逆に又一歩づゝ拾ひながら歸途についた。
鼠色の空を、太陽が手さぐりをして、直ぐ目の先の山の蔭へ落ち込むと、短い冬の一日は、すつかり夜になるのだつた。山の斜面に橫一文字につくられた細途を通る時、源太は何時も、小學校を出た年、始めて父親に連れられて、炭燒きに來た時の自分の姿を想ひ出した。輕く詰めた一俵の炭俵を背負つて、辷り落ちそうな崖路を步いた時、膝から下が妙に震へて、體中の神經が足の先に集つた樣な氣がした。そして、高等科へ通ふ友人達の事を考へたら、淚がわけもなく頰を傳つた。翌年の夏、父は官林の伐採の折、誤つて大木の

下になつて死んでしまつた。他に仕事を知らない彼は、その儘炭燒が本業の樣になつてしまつたのだ。でも、その頃から思ふと、山の道は餘程歩きよくなつて來た。

「おや！」

源太は吃驚して思はず聲をあげた。一間程先きを行く松治の背中の炭俵が、カチ〳〵山の狸の樣に煙を吐いてゐる。

呼び止められた松治は、周章てゝ炭俵をおろしたけれど、合憎、雪の積つた、せまい細道の眞中では、どうする事も出來はしなかつた。片手で俵を押へ、片手で雪をつかんで上からかけて見たが、既に俵の横腹には穴が出來て、其處からも煙が出て來た。

「えい！畜生！」

瞬間、彼は角力取りの樣な格好をして、俵を崖から突き落した。投げられた炭俵は、突然灰埃をあげて、羽二重の樣な雪の面へ、奇妙な墨畫を描きながら、見る間に谷底へころげ落ちた。灰炭は、それをかまどから出して消す場合に、水を多く使ふと、目方ばかり重くなる上に、タドンの樣にかたまつて仕舞ふので、餘程、消し加減を注意しないと、時々こうした失敗を招くのだつた。

一日中の勞力を、雪の谷底へ奪はれた松治は、子供の樣な泣き笑ひをして、空を仰いだ。灰の樣な粉雪が、後からあとから落ちて來た。何か、押へつけられる樣な、へんに重苦しい壓力を頭上に感じて、思はず首を垂れた。彼は、明日の雪見會の誘惑に、思はず浮つ調子になつてゐた、今日一日の自分を、腹立しく後悔した。彼は、歩き乍ら、雪をまるめて、當てもない大空へ自棄に投げつけた。

## 2

臺灣海峽の波を越え
マニラの港に來て見れば
シガーの香り高くして
昔をしのぶコルキ城

村立農學校へ通ふ生徒達が、雪に埋まつた道を、聲を揃へて歌ひながら歸つて來た。毛布を頭から冠つた者や、かるさんの上へ舊型マントを引つかけて、手拭いで鉢巻をした者や、藁の雪靴を履いた者や、まるで道化役者の樣に、思ひ〳〵の格好をしてゐた。だが、彼等は自分達の姿を、少しも滑稽だとも不體裁だとも恥づかしいとも感じてはゐなかつた。彼等の頭の中は、今日、學校へ移民會社から宣傳に來た、洋服の男が語つた、南米ブラジルへの憧憬に輝いてゐたのだ。

……………………………

四季花の絶へまなく
バナナ黄いばり
椰子實のり
人煙まれなる土地廣し

「俺も行きていなあ！」

「ふんとだよ」

廣漠と果てしのない大平野の眞中で、軍馬の樣に勇ましく働く同胞の姿や、想像も出來ない豐富な食料品の山積！そして、其處にはあり餘る天然物が人を待つてゐると言ふではないか。生徒達は瞳を輝しながら、空を飛ぶ鳥の樣に、思ひ〴〵の空想を南米の空に驅け巡らしてゐた。

「會社で旅費を備せるつてんだから、俺、家へ歸つたら、お父つさまに賴んで行く事にしるよ」

「俺もだ、十年も働いたら、うんと金が溜るだらうに――」

堅く、土の中まで凍つた雪路の上を、有頂天になつた生徒達は、足音も輕く、それ〴〵の住家へと急いだ。

與作の家では、夕飯前の一時を、ゐろりの周圍に集つて、伜の三郞を中心にして、ブラジル行きの話だつた。

「そんな事云つたつて、お前よく考へて見ろよ、何處の國まで行つたつて、働かねえ事にや喰へりやしねぞ」

「さうだよ、だけんどな、同じ働いても、うんと儲る方がいゝぢやねえか。俺んとこで、どんなに皆が働いたつて、ちつとも樂になりやしねえや」

與作は、何時もの樣に、薪箱の橫に座つて、枯れた桑の木を、熊手の樣な手で、亂暴にへし折つては、鍋の下へ突つ込んだ。

「何處の國まで行つたつて、一升桝にや一升さ、心配しねえつて、貧乏神はついて廻るよ」

板の間の莚の上に座つて、赤坊に乳房をふくませてゐた母親が、營養不良で潤ひの失せた目をこすりながら、父親の言葉に續けた。

「それに、そんねに遠い國へ行つて仕舞つたでは、親の死に目にも逢へりやしねえよ」

「そんでも、俺どうしても行きていよ、やつてくんろよ」

三郞は、情なさうに淚ぐんだ。

翌日から、農學校の校堂や廊下では、生徒達が、毬投げや木馬をやめて、彼方此方に集つて、急性の移民熱に浮かされ出した。コーヒーとか、椰子とか、日頃彼等が考へても見なかつた、珍らしい物の名前が、輕々と、一種の親しみを持つて、皆の口から流れ出た。

彼等はすつかり昂奮してゐた。

「大きい船に、幾日も乘るんだつて」

「さうだ、そして、船の中では英語が習へるんだつてよ」

「土人つて奴は、年中裸で踊つてばかりゐるつてな、だから、彼奴等をうんと安く働かせるに限るつて……」

洋服の男が持つて來た、ブラジル移民熱は、チブス菌の樣に、貧しい少年達の心身の奧までも浸潤して行つた。まことに是は、少年達が考へる如く、町の中學へ行つた金持の息子を羨望するのとは違つて、決心さへあれば誰でも行く事の出來る自由な樂園であつたか

ら——

## 3

町の女學校を卒業して、東京のミッションスクールへまで行つて來た、金貸の佐竹の娘の光子が、嫁入前の閑な體を、村の兒童敎育に盡さうと思ひ立つて、自宅で日曜學校を始める事にした。彼女は、自分の父親が、三十圓の貸金の代りに、町の士族の後家さんから取つたオルガンを、座敷の隅に据えて、イエス・キリストの名に於て、無敎養な子供達を敎育しようとした。彼女の言葉の如く、野生的で、猿の子の様な子供は、彼女が分け與へる西洋花の模様のあるカードが欲しさに出掛けるのだつた。

　まことの神様はたゞ一人
　皆さん早く信じませう

信じるとは、カードを貰ふ事でゝもある様に考へてゐる者が大部分なのだ。

唱歌や說敎が濟むと、この若い女の先生は、何時も右手を胸に當てゝ、首を垂れ、お得意のお祈りを初めるのだつた。まるで人に聽かせる爲にするやうな、深刻さうなお祈りの時間中を、子供達は退屈しのぎに、前にゐる者の頭を突ついたり、隣の連中の膝をつねつたりしながら、早くお祈りが終局に近づくのを待つてゐた。そして、やうやく最後のアーメンの處へ來ると、皆は一様にほつとして、同時に不作法な聲をあげて、遠慮もなく笑ひ崩れる。

何處へ行つても、基督敎と禁酒運動は兄弟分である。光子も矢張り、熱心な禁酒論者であつた。彼女は、日頃から村の男達の、だらしのない飲酒振りに顰蹙してゐた。だから、彼女が日曜學校を始めた、第一の原因は其處にあつたのだつた。

食ふ事には、少しの心配もいらない光子は、春先きの縁側で陽なたぼつこする時の様に、心地よい自己陶醉的な感激に滿たされながら朝な夕にその白い指をくみ合はせて、音樂の様な樂しいお祈りをした。今日も彼女は、子供達を集めて、天使の様な氣分で說敎を始めた。

「——皆さん、世の中にお酒程惡るいものはありません。お酒は、自分の體を滅ぼし家を滅ぼし、最後には國家をも滅ぼします。あなた方は、決して／＼お酒を召し上つてはいけません。あなた方のお家の方で、お酒を飲む方はありませんか？」

すると、子供達は、待ち兼ねてゐた様に、殆んど全部が手を揚げた。彼女は、水白粉の薄くついた、形の好い額へ皺をよせ、さも仰山さうな表情をして、さて、靜かに說敎を續けた。

「それはいけません事、あなた方の大切なお父さんやお兄さんの命を奪ふお酒を、何とかしてやめさせねばなりませんね。あゝ、今日は好い歌を敎へてあげませう。どうぞ皆さんは、よく是を覺えて、もしお家の誰かゞ、お酒を飲んでゐられましたら、その前へ行つて

靜かに座り、兩手をお膝の上に乘せて歌つて下さい。必ずお家の皆さんは、この歌を聽いたら、お酒をおやめになりませう」

平吉は、もう長い間、村の川口に水番をしてゐた。季節の變化や、それに伴ふ雨雪の關係によつて、水量は敏感に增減するので、その度びに、彼は水中に飛び込まねばならないのだつた。夏の頃はさして氣にもならなかつたが、寒中の水番は、餘り有難いものではなかつた。

今日も、川下の米屋から、水車が凍つて困るから、水量を增してくれと苦情が來た。彼は、その作業の爲に、水口へ裸體で飛び込んで、うしの取りつけをせねばならないのだ。彼を働かせる唯一の力は「酒」である。酒の助力がなければ、水番なんて仕事は決して勤まるものではない。だから、日頃の彼の豪酒は、人も自分も許すべき性質のものであつた。平吉は、寒さに對抗する樣に胸をはだけ、あぐらをかいて、恰度、畫本で見る大江山の鬼の樣な格好をして、茶碗で酒を飲みながら、水中へ飛び込む準備をしてゐた。

小學校から歸つて來た、娘のお時は、その樣を見ると、周章てゝ靴をはづして、何か惡い事でもする樣に、妙にはにかみながら、父親の前に座つた。彼女は、日曜學校の先生に敎へられた方法を實行して、父親を酒の毒手から救ほふと決心したのだ。

父さん／＼お願ひします
鬼の子供が住むといふ
黃ろい水のそのお酒
飲むのをやめて頂戴な
…………………

「馬鹿阿魔め！やめねえか！」

平吉は、茶碗を、突然疊に投げつけて、眞赤な顏をして怒鳴りつけた。

「酒を飲まねえで、どうして仕事が出來るつてんだい、まぬけめが！」

お時は、そのすさまじい權幕に驚いて、おい／＼と泣き出した。

「そんでも、日曜學校の先生が……」

「何？先生が大臣樣でも、俺の酒だけはやめさせられめえ、靑二才めが！」

## 4

春先きの雪解水を利用して、山奥の谷川から流して來る木流しは、村の青年達の毎年の仕事である。

一本の鳶を唯一の武器として、彼等は輕快に、谷川の岩石の上を飛び歩きながら、ともすれば、川の中央に十文字にもつれて停滯する大木を、一本づゝ器用にほぐして流すのである。時々、頭から水の飛沫を浴びながらも、何處か悠長な諧調をもつ、古い木流唄が、

誰からともなく唄はれた。木流唄は、實に春の先振れであつた。處が、今年は、木流しに先立つて、村へは見馴れない洋服に、ゲートルを巻いた測量技師達がやつて來て、毎日の様に、山や河原を歩き廻つた。やがて、この村にも發電所が出來ると言ふのだ。

軒のつらゝがすつかり解けて、土手の青草が、次第に色彩を鮮かにして行つた。蠶室の籠の中では、蠶が何回も皮を脱ぎ捨てた。そして、森の杉の木の枝では、今年も鶺鴒が卵を産んだ。村はづれの空地へは、東海電氣株式會社の社宅が玩具の列車の様に竝んで建つた。すると、會社から出張を命ぜられた現場社員が、家族連れで續々と入村した。下受負の鈴木組と山十組の土方達が、出征兵士の様に隊をなしてバラックの飯場へ陣どつた。閑散だつた電車は往復回數を増加して、荷物自動車とマラソンを始めた。工事當て込みの料理屋が、村の空屋を借り受けて、長火鉢を据えると、白粉をぬつた狐の様な女達が、何處からか集つて來て店へ竝んだ。昨日迄は、死期の迫つた病人の様に寢てゐた小賣店は、急速度に店舗を擴張した。そして、小學校では、皮を剝がれた蛙の様に、滑らかな顏をしてゐる、言葉の好い社宅の子供達が、村の子供達から、先生の注目を掠奪した。でも子供達は、國賓をもてなす臣民の様に、この美しい闖入者達を歡迎した。

松治も源太も、儲らない炭燒をやめて、日給一圓五十錢の臨時人夫に雇はれた、ブラジル行きを諦めた三郎は、セメント運搬夫になり、上級の小學生達は、日曜や其の他の時間を利用して砂ふるひに出て、修學旅行の旅費を稼いだ。村へは一時に夢の様な幸福が舞ひ込んで來たのだ。十五日と三十日の給料日には、日給袋をさげて、酒に醉ひ乍ら――金のねえ國や何處だいな――等と狂ひ廻る人夫もあつた。夜となく晝となく、隧道を開けるハッパの音が、保守的な村人の心臟の皺を一日毎に引き伸し、幾代もの祖先が馴染んだ、親しい山河は、他國の人の手によつて、惜しげもなく崩されて行つた。老人達は、言葉もなく、唯々、乾燥した目玉をぱちくりさせた。

貯水池に定められた、山間の荒地の一部は、村の貧しいお貞と言ふ老婆の所有地だつた。それは、日清戰爭で戰死した彼女の夫が、親から讓られたもので、村人達も、皆それを認めてゐた。だのに、會社が正式にその地所を買ひ入れようとして調べて見ると、それは登記の上では、まるで他人の所有地になつてゐる事が判明した。彼等の間では、土地も物品と同様に「あげませう」「では貰ひます」式に取り引きされてゐたのだつた。工事が始まつてから、こうした珍談が、其處此處に持ち上つた。だが金のとれる仕事が直ぐ目の先きに澤山ころげてゐるので、村は日毎に陽氣だつた。時々、醉つ拂ひの土方達が、料理屋の二階で匕首を拔いたとしても、さうした事は全く花火の様に瞬間的なことに過ぎなかつた。

社宅の庭には、萬國旗の様に、素晴らしい洗濯物が、毎日陳列さ

れた。

「月給とりの奥樣は氣樂ぢやねえか、飯を焚く事と、洗濯が一日の仕事だとさ」

若い村の娘達は、未來の夫を、月給取りに定めようと決心した。

事務所の休憩室から、蓄音機のジャズが流れ、小學校の校庭では、子供達が、戀の唄を合唱した。丈夫な手織木綿の地味な着物は、化學染や機械織の派手な反物に、徐々にその地位をゆづつた。製絲場へ通ふ娘達は、大柄な染絣の着物を着て、夜、會社の男と媾曳した。

夏になると、河原の一部を納涼場にして、暗い夜の空に、盛んに花火が打ちあげられた。地方新聞は、鐵道會社と結託して、二號活字の宣傳を書き立てた。すると、町の閑人達が、電車に乘つて、ぞろ／＼と納涼場へ押しかけて來た。

どれ、俺も今夜は、のうりようつてものを見物に行つて來ようかな」

村の女房達は、蠶に夜桑をやると、乳呑兒を背負つて、華々しい「納涼」の見物に出かけた。

工事が豫定通り進捗して、完成に近づくと、次第に人夫の淘汰が行はれた。バラックの土方達も、次第に、次の工事場へ移動して、村が少しづゝさびれかけた時、三千粁の自動發電所が、むつちりと山間の窪地にがんばつた。

「こんな風に、たつた一つのスヰッチで、三千粁の電氣が獨りで起るんだ。一對、俺達はどうなつて行くか知つてるかい？」

少し勉强をしてゐる會社の職工が、意味ありげに、村の臨時雇ひの人夫達に話すと、彼等は、冬眠を終へた蛇の樣な顏をした。——今に、想像も出來ない樣な恐ろしい怪物がやつて來て、猫が鼠をとる樣に、自分達の生存を奪つて仕舞ふのではなからうか？革命の樣に、突然この村を襲つた電氣會社は、村の自然や人々の心を根こそぎに破壞して、怪物の樣な發電所を殘した儘、平然と何處かへ去つて仕舞つた。

「それ見ろ、だから言はねえ事ぢやねえ、旅の者は薄情だでなあ」

老人達は、さう言つて、自分等の未だ破壞されない心をなぐさめた。

穴のあいたゴム風船の樣に、縮んでしまつた村は、皺だらけのまゝ沒念としてゐた。途方に暮れた失業者と、私生兒を孕んだ娘達とが、永久に冷やかなコンクリートの發電所の屋根へ、やるせない憎惡を送つて吐息をした。

地方新聞は、今日又繭の値の下落した事を報じた。そして紙屑だらけの飯場の板の上では、子供達が、土方遊びを發案した。

完

# こひぶみ（二）

——愛する人に捧ぐ——

高橋鈴子

再び書かないとあたし自身の口ではつきりとあたし自身誓つてをきながらもあたくしはまたあなたへこんな手紙を書いてしまつたのです。

お赦し下さいませ。がこれも最初のものゝようにあたしの手元に積まれてゆきます。

一月×日　よる

愛する人よ、愛する人よ、あたしの大切な愛する人よ。

あなたは、今夜どんな所で、何を考へていらつしやるのです？

今夜あなたの手であたしを死なせて下さい。やすらかな永遠の眠りをお與へ下さいませ。もうこれがあなたへの最後の訴へ、わがまゝ、あなたを困らせる最後のものです。

なぜそんなに悲しい眼をお見せになるのですか？

「強く生きてゆかなくちやいけません」と、

なぜ「死ね」と一言言つて下さらないんです。

××さん。泣かせて下さい、今夜もあたしを泣かせて下さい。

「ね、そんなに泣いてゐないで」

それは慰さめです。憐憫です。劬りの優しい言葉が何もかも決定されてしまつた後に何ほどの役に立つでせう？

惡魔のようにあたしを責めつけて下さい。

「お泣き。いつまでも泣き死をするまで、今にあなたの泣

聲が細く細く杜切れるまで、そして自分の腕の中で息が絶えるまで」

かうおつしやつて下さい。かう命じて下さい。

あたしはその言葉をあなたからもらつた一番貴い最後の言葉として喜びの中にあなたに抱かれた儘死んでゆきますどうぞ死なせて下さい。

あなたを見ることの出來なくなつてからの今から、あたしの一生がどれだけ不自然な不幸な毎日になるでせう。方向も、希望も喜びも、みんなあたしにはあなたと巡り會ふ日までの堪えに〱て來た懸命な努力から生まれたものでした。そのあなたを失つたあたしは孤りの弱い女。あらしの中に旋風に煽り立てられてもう立ち續ける事は出來ません。あたしはあなたの最後の日を覺悟してしまひました。あなたがあたしに對する最後の愛情はたゞあたしを死なせる事です。

生きながらへて居て、これからの苦闘と叛逆との中へあなたの手からつき放なされた小さな弱い女がどうして起つてゆけるでせう？　あたしは今あなたとの別離によつてそれは永遠に相逢ふ日のない別離から生涯癒えることのない生ま生ましい痛手に悶えつゞけてゐます。死、それはあたしを一番樂な幸福世界に坐らせて下さることです。

一月×日　あさ

××さん、今朝こんなに靜かな心持になりました。

「あの方を憎んでいゝ、あの方を忘れるのです。あの方は默つたまゝたゞあなたの一生のポイントの様にあなたの前で一寸微笑んで行きすぎてしまつた人ではなかつたか」

あたしの或友達はこんなにあたしを嘲笑しました。だがあたしにはあなたの眼の中に、あなたのあのお聲の中に、あなたの御心の全部に僞のない眞實があつた事をあたしは知つてゐます。信じて居ります。

「嘘だ」とおつしやつても、いゝえ、それが「嘘」です。あたしはすべてのものに憎惡したり、反逆をするには弱い女性です。「愛」によつてこれからのあたしの人生も美化し、藝術化し、苦しめるもの、惱めるものゝ心を鼓舞し、和めてまゐります。

憎むにはあまりにあたしはあなたを愛しすぎてゐます。恨むにはあまりに大切な大切なあなたです。あなたは生

きてゐて下さらなければなりません。そしてお幸福でなければなりません。

あたしはあなたを知つてゐます。あたし以上の大きな苦痛と悲しみと惱みが、戰ひがあなたをしつかり縛りつけてしまつたのぢあないか。そしてその堅固な砦の中にこれからのあなたの長い〳〵一生を責め苛めることさへも。

愛する人よ。眠れなくなつたとおつしやつてゐましたあれからもうお元氣になりまして？　きつと眼鏡の度がいけなくなつたのでせう。

獨逸の「ノクテナル」といふ睡眠劑がよく効きます。でもお寢みになる早くにお服みにならないと朝方から眠くなつて翌日一日お困りになりますよ。それとも溫罨法を眼の上にして御覽なさいませ。きつといゝと思ひます。

頭が重くおなりになつたら外のすがすがしい空氣にお觸れになるのが一番いゝのです。

こんなことを書いて居りますと、もうあたしは胸一ぱいにおし擴がる悲しみが――あなたの苦しい不眠の一夜もあたしの力で安らかに出來ない、あなたの苦しみを見てゐるよりすべのない悲しみに堪え得られなくなつて參ります。

あなたはお幸福でなければなりません。

あなたはお元氣で生きていらつしやらねばなりません。

あなたのお力であなたのお仕事をどんどんおやりになつてゆかなければならない大切なお身體です。

あたくしはあなたの苦しみも、悲しみも、すべての煩悶をあたし自身に背負ひきれたらいゝと思ひます。多くが苦しまなくてもいゝのです。

「下積み」と「喜びある犧牲」其處には建設があります。土の底の埋もれた暗い苦しい生活の上には絢爛な美しい花が爛漫と咲き誇つてゐる事實を見ます。

あなたの爲にはあたしはどんな蹂みにぢられた苦しい生活の中にもぢつと我慢して居られます。あたしの小さな身體の周圍から、上部から、地の底から一歩の間隙もなく大きな苦しみ悲しみが力强く壓し付けてまゐります。

あたしはその苦しみの中にぢつとぢつと堪えてゆきます。反撥も逃避も無駄です。けれども堪えて堪えてはゐながらもこみ上げて來る苦しい涙を止める事は出來ません。

あなたのお心を引搔き廻してはいけなかつたのです。もつともつとあなたを和やかにおさせしなければならなかつ

たのです。
あなたにはつきり誓つた、最後の夜の方向と希望に生きてゆきます。大丈夫です。
あなたに對して持ち得たこんなに深刻な、鋭敏な、そして懸命な戀愛の中に一貫した眞實性をあたしの一生の仕事に捧げます。あなたに捧げるべき愛情の全部を藝術と仕事に注ぎます。
再び嘆くまいと思ひます。
今からいつかの斃れる日まで一線に向つてはつきりと一人の長い旅を始めます。
多くの人間に對する道德的のやさしい女、他人の境遇にあたしを置いて其人を理解しようとする努力と要求、「眞實」の最後の勝利に對する熱烈な信仰、此の「眞實」に對する不斷の希求、世の弱いもの、苦しめるものに對する變らない同情、多くのもの丶幸福の爲には、喜びの爲には脊負ひきれるだけの重荷を受けて、下積みになつても、悲慘のどん底に蹂みにぢられてゐてもい丶、多くの喜びの聲、感激の涙を見る瞬間、あたしは喘ぎながらも感激と喜びの大きな頷きを返して微笑みます。

生きてゐます。あなたの最後のお言葉のように強く生きてゐます。倒れる日まで闘ひつゞけて、けれども最後の日やつぱりあなたのお傍まで辿りつきます。あたしをあなたのお傍で眠らせて下さいませ。
今日は休暇です。あたくしは平靜に〱淡いながらもあなたの思ひ出の中にソツト自分を置いてはつきり自己を凝視めて居たく思ひました。鏡の中にあたしの瞳は近頃になく靜けさと希望に、苦しい幾日間から救ひ出されたように輝いてゐました。そしてやむにやまれない大きな仕事への憧憬と慾求に生々としてゐました。けれども髪を解いて居りますと、前髪の一すぢがあたしの額にサラサラと風に搖られてふりか丶つて來ました。
神經質的の長い睫毛がふるへました。
「いつの日に捧げんと思つたこの黒髪」
「あたしの眼、唇」
それは終生誰のものでもない。あなたのものである筈のものでした。けれどもあなたは。あたしは鏡の女を凝視めることも髪を梳きつゞけることも忘れて一人で暫く靜かに泣きました。

淋しい長い一生です。
けれどもあたしは堪えてゆく事が出來ます。
こんなに絶對的の激しい苦痛の中に居ながらも優しく、美しく一すぢの愛情ですべての「もの」を凝視め、微笑みかけるこの偉大な力が徐々にあたしを統制してくるのはすべてあなたがあたしに下すつた貴い哲學です。
不朽の力です。
あたしは微笑みながらあなたの微笑を呼び迎へて「あたしは靜かです。そしてこんなに和やかで」
あなたのお眼も笑つてゐる。そしてお幸福さうに——今日はもうすつかり春です。草の香にも、水の色にも、灰色の土の底からも春の空氣が、土の香が漂つてまゐります。

一月×日

いけない事をしてしまつたのです。いつかの日はあんなにはつきり「生きてゆく」事を誓ひながらも。××さん。おゆるし下さいがあたしは何もかも分らなくなつて來たのです
あたしは今日、仕事の方が非常に忙しくて晝食もとらないで仕事をつゞけてゐましたがどうしたことにかあなたのお聲、あなたの瞳があたしを責めつゞけてまゐりました。
あたしは幾度も〳〵目を閉ぢて見ましたが——無性に悲しく無性に佗しくなつてまゐりました。
「小説を書く女に碌なものなんか居ない」
「貞操觀念なんか、女流作家の××××」
「嘘つきで主義者でヌーボーで」
あなたはこんなひどい言葉をあたしにはおつしやらないでせう。
あたしは滲み出て來る涙の中でどうしてこんなにあなたを追つかけつゞけるのでせう。××さん、××さん、これからはまたこんな生活の中であたしの戰爭が始まります。
あたしは斃れろ、氣が狂へ、どうにかなれと思ふとそれからあるつたけの烟草を喫つてしまひました。
激しい眩暈がくるしさが襲つて來ました。
あなたのお眼、お姿、××さん、××さんあたしは人混みの街の中を、盛り場を氣違ひのやうに走つて行ました。
相逢ふ男の顔を、後姿を、一人も見逃すまいと氣違ひのやうにあたしはあなたのお眼を、姿を、求めて倒れてしまへばそれでもいゝと走り廻つて見ました。だがどんな場所

にもあなたを見付ける事が出來ませんでした。

あなたは何處にもいらつしやらなかつたのです。

街中を駈け歩いて――あたしには理性はない、たゞあなたが「欲しい」のです。

世界の涯から涯へやつぱりあなたはあなたです。何處へ行つてもあなたと同じ人は一人も居なかつたのです。

なぜ「强く生きてゐなくちや」などおつしやるのです?

あたしはあなたに、死なせてくれと頼んでゐるのぢあありませんか。

泣き崩れた亂れ髪をときあげてくれる人もない、よろめきさうな女を全身で支へてくれるものもない、しつかりした抱擁も、あなたはあたしの爲に泣いてまで下すつたぢあないんですか、生きてゆけると思つてこんなに淋しい土の上にほつぽり出しておしまひになつたのですか。

誰のものです?あたしは誰のものでもありません。あなたの御心の中にしつかりと坐つてしまつた女が――これから誰にとり縋つて何を考へて「生きてゆく」のです。

お目にかゝりたい、あなたの傍へ行きたい。あなたの胸で思ひ存分に泣きたい。あなたの腕、あなたの胸あなたのお眼、みんなみんなあたしは欲しいのです。

街から街へ、雜踏から雜踏へ、幽靈のやうに靑褪めたあたしは宅へかへるとお酒を飲みました。

「お酒を飲んだりして」

××さんあたしはいけない事をしてしまつたのでせうか、反逆しようとするあたしをお叱り下さい。かんにんして下さい。

けれどもどうにもかうにもならなかつたのです。

それからあたしはお酒のために一時眠りました。そして眞夜中に眼が醒めました。今日の一日がすべて遠い遠い昔の思ひ出のやうに――けれども堪えきれない寂寥があたりの靜けさの中から、闇の中から、犇々と押寄せて來ます。

「あなたはあたしのものではない」

再び相會ふ日のない事を――××さん、××さん、あたしはどうすればいゝのです。

淋しいのです。この淋しい道に立たせられたまゝ、あなたの愛情を粗末にしてゐた爲にこんなに苦しい長い毎夜をすごして行かなければならないのでせうか。

今三時を打つてゐます。

四國通ひの汽船の出帆の笛が底知れぬ哀調でヂリヂリと
あたしを深く〱曳きづつて行きます。
淋しい。堪え得られない淋しさです。
あなたは今何を考へていらつしやるでせうか?
あたしは今見てはならない夢に眼が醒めたのでした。
あなたはあたしを確かりと抱擁し、あたしの顏中に接吻をなすつたのでしたが唇にはおふれにならなかつたのです
あたしはこの儘息絶えると覺悟してゐました。
それは羽交ひじめになつたあたしが段々呼吸が壓しせまつて來るのを感じてゐましたから。
「お唇を下さい!」
あたしははつきりと言ひました。それは死の刹那です。
それはあたしの最後の最終の要求の一聲として――があなたはそれはいけないと言ふ眼をなすつた。
パアジンに對するそれは「いけない」と言ふあなたの理性の眼が――「あたしは死にます、もう駄目です」
とあなたは眼を閉ぢてあなたの兩腕にしつかりとあたしを抱きしめて思ふ存分にあたしの唇にあなたの熱い血潮の唇をおしつけなすつたのでした。

二人は泣いてゐました。二人は默り切つてゐました。
たゞこんな事をしていゝのか悪いのか無上の感激にわからなくなつてゐました。胸が掻き挘りとられるやうに、燒け爛れさうに苦しくなつて來ました。
あたしはあなたの胸の血潮をあたしがぐんぐんと呑みほしてゐるためだらうと思ひました。
其處は何處か分らなかつたのです。風は冷いけれども初春のすがすがしさを空氣の中に含ませてゐました。
「あたし等は二人つきりだ――そしてこんなにして死んでゆく」
　がまた
「だけど明日といふ日は?」閃めいた悲しい決定があたしをあなたの全身をさがさせて泣きつゞけました。
「氷のように冷い手だね」
あなたのお手は暖つたかでした。
おし擴がるあたしの泣き聲に眼がさめました。
早鐘のように高く重く鋭くあたしの胸は打つてゐました。があなたはこゝにはいらつしやらなかつたのでした。
其處には狂ひ悶えた一人の女が亂れ髪の中に泣きぬれて

ゐました。涙にぬれた枕の中でまだ醒めきれない夢を追つてあたしは泣きつゞけてゐました。

あたしのすゝりなきが闇の中に戰へてゐるのを聞きながら永遠に相逢ふ日のない、恐ろしい最後の夜の夢を追ひつゞけて——靜かに落ちついてゐたあたしぢやないか、もうあたしはそんなにあなたを苦しめようともしないのに。

がなぜなぜあたしはこんなに苦しい夢の中にあなたを追ひつゞけてゐるのでせう？

あなたを忘れてしまはうとしたのぢあなかつたか？

けれども忘れようと焦燥ればあせる程、あなたのお聲があなたの御心が、あなたの眼眸があたしの前にはつきりとあたしに呼びかけて來ます。

憎んで下さい。

笑つて下さい。

あたしに腹を立てゝ下さい。

情炎の魔女です。

いとしいあなたを呪ふほどの强い激しいこの愛情があなたのお心にしのびよる時それは冒瀆です。罪惡です。

あたしを殺して下さい。

あたしを呪つて下さい。

あたしを忘れてしまつて下さい。

けれどもあたしはあなたのものです。

あなたはあたしをいつまでも愛してゐて下さい。忘れては嫌です。

狂戀の女。戀の女。阿呆な女。

それでいゝ。あたしはそれであなたをいつの日までも戀し愛して生きてゆくのです。

あなたはあたしの命です。

忘れようと焦燥るのは嘘です。

逃避です。自己僞瞞です。

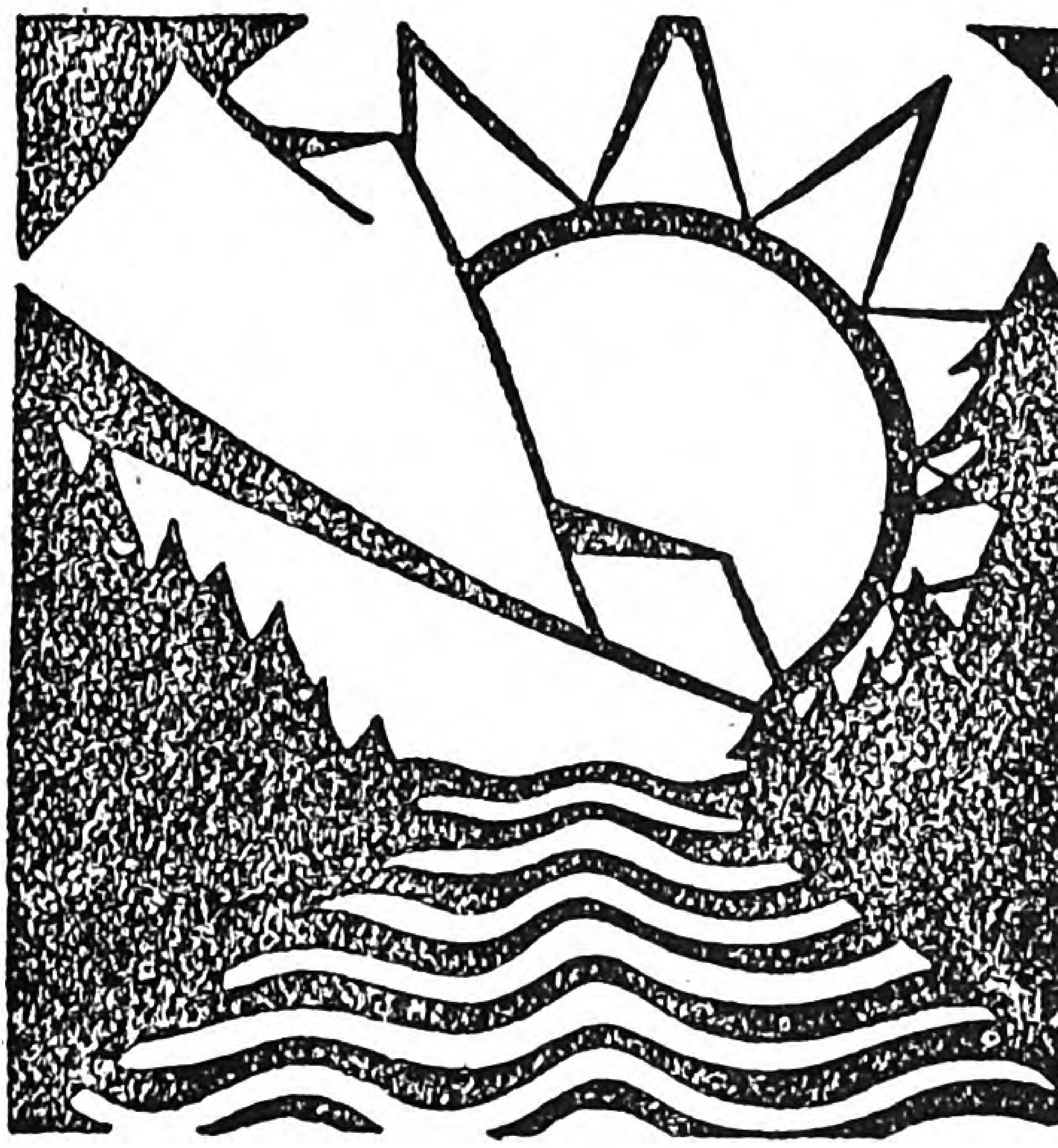
何を苦しんで忘れようとするのか？

想ひ續けていゝのです。あたし自身が苦しむだけ苦しみ續けていゝぢあないか？

思ひつゞけるまゝ、戀ひ死をするまゝ、そのまゝに心の方向にまつすぐに生きてゆくのが自然です。

嘘のない生活の中に。

「眞實」といふ言葉はあたしのこの狂ほしい戀情の中に狂ひ燃えるこの姿です。



# 動き行く町

綠川靜枝

吾妻山麓一帯に小止みもなく降りつゞく、けしの様な雪をにらんで、町の人々は毎日恐怖の中に落つかぬ心で暮した。新聞は毎朝列車の衝突、脱線、てんぷくを詳細に報道し、時には身の毛のよだつ様な雪崩の惨害で三面は埋つてゐた。

お町は新聞のひとつところを、じつと眺めたまま容易に起たなかつた。叔母は一人でいらいらと氣をもんだが、どうしてもお町の憂鬱な原因をさがし出すことが出來なかつた。叔父の視線が叔母の眼をぬすんで、時々やきつく様に、お町の身體にそそがれた。

「お町、おめえどこか惡いんでねえのか、そんなにだまりこくつてばかりいねえで、どこか惡いんなら惡いつて、判然り云つたらええでねえか、陰氣な顔ばかりしてゐられたら、はたの者が厭やだわな」叔母が投げ出す様に云つた。

「ええがな、何にもほつてをいたらええでねえか、お町だつてもう子供ぢやあるめいし口に出せねえことだつてあるべえ、なあお町、おめえさつさと風呂に入らねえと冷めつちまうぞ」叔父がうながす様に云つた。

「おらあ、今夜は湯に入りたくねえ」

「ちえつ」叔父はいまいましそうに舌打ちして、荒々しく臼場へ起つて去つた。叔母は口をとがらせながら、湯上りの手へごそごそとリスリンをすり込んで、だまつて蒲團を曳き出した。叔母は面白くなかつた。せつかく後とりにするつもりで恥も外聞も捨てて育てて

きたお町がこの世にたつて気によそよそしく用事を云ひつけても、ろくすつぽ返辭もせず、つんとすましてるのが、癪にさわつて殺してもあきたらない氣持だつた。

お町はほつとして戸外へ出た。何時の間にか雪は小止みになつて雲の斷れ間から鋭く月が光つてゐた。風のない珍らしくおだやかな夜だつた。町へ續くしろじろとした街道の上を、眞黒な弧を描いた二つの影が、もくもくと消えていつた。女に生れたと云ふことが口惜しかつた。

「逃げ出して行こうか」彼女の頭に根强くこびりついて離れない考へが浮んできた。

臼場の中からことこと叔父の跫音が聞えてきた。ざくろの枝からさつと一かたまりの雪が落ちてきらきらと小枝がゆれた。

ふつと昨夜のことが浮んできた。急にかつかつ身内がのぼせて眼まひがした。今まで知らずにゐた自分が口惜しかつた。

昨夜お町は、風呂場のしきり板にぴつたり身體をすりつけて、ふし穴から中をのぞいてゐる獸の樣な姿を、雪空のうすあかりに發見した。叔父はお町が、水を汲みに湯殿を出たことを知らなかつた。

お町はこれまで毎晩、湯に入つてゐる間中節穴から眞裸な躰を卑しい叔父の眼で享樂されてゐたかと思ふと、堪らなく口惜しかつた。

突然、山のふもとから、男のどなる聲が聞えてきた。だんだん判然した。

——オ一二三——オ一二三——

常軌をはづれた聲だ。三十になつても誰にも相手にされない、煩腦の嵐にのたうつ白痴の情怨の姿であつた。

ふと父の姿が浮んだ。

「可憐そうなお父さん」

いい年をして男狂ひに夜も日もない母を恨んで、氣狂ひになつた氣の弱い父は、丁度今夜の樣に靜かに雪の降る夜、淺い川の中へ無理に六尺の身體を押しつけて死んでしまつた。

父は儲けのありそうな商賣をつぎつぎとやつて見た。だがその度に騙されて失敗した。

母は父の苦勞には頓着なく、長い間男に金を貢いでゐた。ときどき金をごまかしては、父から半殺しの目に遭された。

或時母は寢てゐる間に丸坊主にされてしまつた。翌朝切られた髮をふりかざしながら、父に喰つてかかつた母の形相は二度と忘れられない物凄い印象だつた。父は氣が狂つてからも、絶えずつきまとう貧乏と母の苦勞とで生きる苦しみに耐えられなかつたのだ。

つるつるとうす氷の張つた河原の小石の上を、朝早くお町は姉と一緒に叔母に連れられて、父の死骸を受け取りに行つた。あまり水を飲まずに死んだ父の身體は、彼女達の見てゐる前で、二人の巡査に篠竹の先でこづき廻され、玩具の樣に調べられた。

その朝も男に捨てられることを惧れた母は、さかりのついた牝猫の様に、男の後を追ひ廻してゐた。

父の始末がつくと、末のお町は子供のない叔母の家に、養女として福島の町へ連れられてきた。姉は叔母から旅費を貰つて、東京へ知人を頼つて行つた。そうしてお町は八つの時から叔母の許で、やつと高等二年を出して貰つた。幼い時の様に物質的な不自由もなくただ子供を持たぬ者に特有な叔母の時々のヒステリーと、叔父のお町に對するねちねちとした底意地悪るさを我慢すれば、彼女は幸福であつた。叔母はいらいらしてる時に、お町がはきはきしなかつたりすると、

「見ろ、おやじは氣狂ひで死んだべし、おつかあはど婬賣みたいに男狂ひをしてやがるし、せめて子供だけも眞人間に育ててやりたいと、こつちは恥も外聞も忍んでゐるのに、人の氣持も分りやがらないで、出て去つてくれ、何處へでも出て去け、尻でも賣つて生きていつたら一番樂で、おめえにはよく似合つてらあ」

だが叔母は、一時間も經つと、けろりと忘れてお町を可愛がつた。

お町は、あの夜以來、身體が悪いと云つて出來るだけ風呂に入ることを避けた。叔父は感づいたのかこの頃は氣味悪いほど、馴れ馴れしく、笑顔を向けて接近してきた。お町は叔父の卑しい醜い心を力のかぎりぶちのめしてやりたい憎悪を、ことごとく叔父への反抗にかえて行つた。併し叔父はお町がどんなにつんとしても、口答へしても、以前の様ににくにくしげにひつぱたいたり、怒つたりはしなかつた。それどころかそんな時は何時も、

「何んだつてお町は、この頃こんなに氣性が變つてしまつたんだべえ」叔母を見ながら空とぼけた顔をしてすました。

大寒に入ると、寒さは一層きびしくなつた。雪の降らぬ日は、吾妻颪しの身を切るからつ風が終日吹き荒れた。すれずれに水嵩の減つた小川は、何重にも凍ついて、にぶい太陽の熱では容易に解けきらなかつた。洗濯物は風を受けるとたちまち、のし板の様にしみついてぶら下つた。

叔父は毎朝起きるとすぐ水門へ行つて、歎息した。

「ちえつ、今日も駄目だ」商賣を休むのはいまいましかつた。水をにらんで暮したこの一週間が、幾年もの様に長く思はれた。

臼場に入ると、水車は太いつららを下げて油をさし忘れた機械と共に、凍てついてしまつてゐた。

町ではこの頃、電氣で米を搗くことが流行り出した。少し金が廻る米屋では、我も我もと輕便で能率の上るモーターをめいめいの店へ据えつけて、二重の利益を獲る様にした。

彼等は今までの様に水車屋の世話にはならなかつた。直接百姓と取り引きして玄米を安く買ひ、自分の店で搗いて小賣にした。

お町が養女にきた頃は澤山の得意を持つて毎日面白い程の利益が叔父叔母の顔を輝やかしてゐた。叔母は月末になると金と通帳を持つて銀行の門をくぐつた。四五千圓の金がたまつた頃、この水車にまはりの田を三反程つけて買ひとつた。そしてひまひまに大工を入れては、自分の家らしく造作した。

ところが歐洲大戰が終りを告げると、世の中は急に動かなくなつた。そのひどい餘波を受けて、この北國の町にも毎日物價の變動が人々を不安の狀態にをいた。昨日まで華やかに手廣くやつてゐた店は、今日はぴつしり大戶を閉めてゐた。こうして大きな店から倒れていつた。小商人だけが比較的打擊を免かれて、僅かに息をついた。

叔父は毎日町へ出て、あつちこつちの精米所を見ては羨しがつただが折角物價の高い當時に莫大な金をかけて買ひとつた水車を毀しておいそれと機械を据えつけてしまうことは出來なかつた。近頃では水車の借り手もなかつた。

玄米をつけて雪の山を降りてきた年寄りの百姓を捉へて、叔父は相場の下つた事をくどくど述ながら、一厘でも安く買はうとした。

「ぎりぎりで二貫五百より手が出ねえなし」相手の顏色をうかがつて强く云ひきると、ぽんと膝の上からそろばんを投げ出した。

「上の源松つあんは昨日だか、町へいつて三貫で賣つてきたつて云つてましたぞし。おらあこうして十何年も、あんたとこより他へ行つたことがねえんだからな、はは‥‥三貫で買つておくんなんしよな」百姓はねちねちした口調でどこまでも三貫を云ひ張つた。

「あんた、そんなに云はれんなら一度町へ行つて景氣を見てこられたらどうだし、二貫五百に買つてもぬか代もねえんだからな、聞いてお出でなんしよ」

「あんたさん、源松つあんに嘘言れたんだぞし、おれんとこちあ決して他人樣より安く買ふ樣な事はねえから、安心してゐらんしよ」

叔母はぜいぜい聲で床の中から云つた。二貫五百でしぶしぶ承知すると、臼場の前へ米を下して、百姓は歸つて去つた。

「この頃の百姓ときたら、商賣人なんかへとも思つてゐねえんだから、源松が三貫で賣つたなんて、いい加減なことを云ひやがつて」

夕方になると風が凪いだ。白いものがちらちら降り出したがすぐ止んだ。

絹撚工場の六時のボーが鳴つた。正門から紺の作業服をつけた大勢の女工が、黑煙の樣にはき出された、街道を三三五五と流れて行つた。作業服の上から毛糸の衿卷をぐるぐるまきつけて、中にはおこそ頭巾をかぶつてゐる者もあつた。皆んな低い聲で何か話し合つてゐた。昨年出來たこの絹撚工場は設備の完全な點で、縣下第一の模範工場だつた。夏中寄宿の二階の手すりには、眞赤な腰卷が竝んで附近の若者をなやませた。

叔母は夕方になつて少し熱が出た。この二三日來の急激な寒さの爲めに、風邪を引いたらしく頭が痛いと云つて床についてゐた。

お町は賣藥の袋から、熱下しのアスピリンを探し出して叔母に飲ませた。額に手をやつて見ると一寸熱かつた。

「咳が少しも出ねえから、性の悪い風邪に違えねえ」熱の爲めに口がくさかつた。

「お町、叔父さんに湯豆腐でもして上げてくれんか、酒はまだあつたかな」

お町は臺所へ下りて德利を振つて見た。晩酌の一本位はありそうだ。豆腐を買つて置いた豆腐を奴に切つて火鉢へかけ、德利を入れて暖めた。

「叔母さんは何喰べんの、うどんでも買つてきて煮ようか」

「そうだなあ、別に何も喰ひたくねえが、梅干湯でもしてくれんかひと汗かいたらよくなるべえから」

「そんなこと云つたつて、何も喰べなかつたら元氣が出ねえわな、叔母さん」

寢てゐる間は叔母に代つて、叔父の身廻りの世話をするのがたまらなかつた。醉が廻つてくると、叔父は熟柿くさい息を吐きながら、眼をすえてお町を眺めた。

「叔母さん寒くねえの、も一枚蒲團かけやうか」とろりとした好色的な眼を感じると、お町は胸くそが悪くなつて、急につんとして背を向けた。叔母の枕許へすはつて肩のすきを直してやつた。

「おい、お町、これを片づけてめしをついでくれ」返辭もせずにしぶしぶ起ち上つた。

叔父は寢てゐる叔母には、ひどく不機嫌な顔をした。話しかけられても、知らん顔をしてそつぽを向いた。寢つくと何時ものことなので、叔母は我慢した。だが叔父があんまり當てつけがましい冷淡な態度をとると、かつとなつて喰つてかかつた。

「なにいやな顔してるんだし、あんたはわしが假病でもつかつて寢てゐると思つてゐるんだべえ、ほんとに人情なんか少しもねえんだから、わしが寢ついたらぷんぷんしやがつて、早く片づいたらいい位思つてゐるに違ひねえわ、この頃はおつかあが死ぬとあつちでもこつちでも娘の樣な女を引き入れることが流行つてゐるもんだから死ぬのを待つてることねえぞし、財産さえ二つに分けてくれたら、何時でも喜んで別れてやるから」精一ぱいの聲でどなり散らすと蒲團をひつかぶつて激しく咳をした。肩が慄へてゐた。

「見ろ、この馬鹿が、またヒステリーを起してるわ、お町が笑つてらあ」どちらへともなく鼻でせせら笑つた。

「そら、起きてめしでも喰へ」叔父は起つて行つて叔母を起そうとした。叔母は蒲團にしがみついて強く反抗した。

少し氣嫌をとつて叔母の氣持が靜まると、叔父は町へ遊びに行つてくると云つて出た。

叔母は後片づけをしてゐるお町に財布をとらして調べた。

「畜生、また金を持つて行きやがつた。くそ女でも貰ひに行きやがつたに違ひねえ、歸つてきたらほんとに承知しねえから」

どしんと、物凄い音をたてて、屋根の雪がすべり落ちた。とぎすました剃刀の様な月が一片の白雲のわきを、走つてゐた。

雨戸を引い眞暗になつた緣側に、お町はじつと腰かけてゐた。雪解けの夜の大氣がひしひしと、彼女の尻から感覺を失して行つた。

夜更けて叔父が歸つてきた。誰も寢てゐなかつた。叔父が叔母のわきへもぐり込むと、叔母は蒲團をけつて、叔父へしがみついた。馬乘りになつて頸をしめては、所きらはずひつぱたいた。叔父は抵抗しなかつた。叔母にされるままになつてゐた。叔母は病氣も忘れて、夜中金切り聲をふりあげた。

寒も明けて三月の聲をきくと、何處よりも長い冬と、きつい寒氣に蔽はれてゐた北國の町にも、くすぐつたい程に生暖な風が、もえ出た綠の雜草に、高い柳の新芽に、人間の奥深くたわむれかけた。百姓は水田をつくつて、そろそろ苗代の用意を初めた。

雨期に入ると小川は底深くなつて、緩慢な流れは水際の草を、ひたひたと流して行つた。

「お品さんがやつてきたわ」川で洗物をしてゐた叔母が、頓狂な聲で叫んだ。眞赤に腫れ上つた手をふうふう吹きながら、洗濯物を抱えてきた。川の水はまだ冷たかつた。水を使つた後はづきづき骨にこたへると云つて、叔母は何時の間にか年をとつた事を歎いた。

「お町、ちよつとそこらを片づけてくれんか、あんまり汚なくしてゐるから」

お町は四邊へちらばつた糸屑を拾ひながら、お品が毎日のやうにやつてくるわけを、うすうす感じてゐた。

親切にされたつて、どうにもならないことだ」お品の急激な接近が結局有難迷惑に過ぎなかつた。

「お町ちあん、一寸」何時もの様に裏口へまわつて、お品は半紙に包んだ立派な菓子を無理にお町の手へ握らせた。

包を見せると、叔母はかん高い聲で禮を云つた。

「富が昨日やつてきたもんだからなし、ほんとに少しばかりだけんど、お町ちあんだけお上んなんしよ」富はこの春、町の菓子屋へ嫁にいつたお品の長女だつた。珍らしい菓子を隔日位に小僧に持せて寄こすと云ふのが、お品の唯一の自慢だつた。

お品は叔母とは同年であり、片方は子持たづ（石女の意）であるに反して、一方は九人も生んだと云ふこの二人は、つきることなくよく話題を持つてゐた。叔母が子供のない寂しさや叔父の不身持ちを歎けば、お品は又息子の嫁の惡口や、嫁が毎年平氣で子を生んで困るとか、娘の嫁入口などについてこまごまと話し續けた。最後にお品はきまつて次男の源の氣立てのやさしいことや、美男であるこ

とを叔母よりもお町の方へ云つて聞かせた。
お品が歸つた後、叔母はお町に云つた。
「お品さんは、源ちあんを家へ婿によこしたがつてゐるんだぞ、ゆうべをそく藤太さんがやつてきたべ、あれはな、お品さんの家から頼まれて媒人になつてきたんだわ、源ちあんを是非おめえに貰つてくれつて」
お町は、ゆうべをそく藤太がやつてきて、いんぎんな態度で頭を下げながら、三人で何かひそひそと語り合つてゐた事を思ひ出した。
「それで何んて云つたの」お町は聞いて見た。
「とに角、すぐには返事が出來ねえから、一寸待つてくれる樣に云つてをいたが、後で叔父さんに聞いて見たら不承知らしんだわな、今から婿の心配はしてられれんて」
叔母には決して子供が出來ないと、四五年前に醫者から判然り云はれたので、せめてお町に婿でもとつて早く樂隱居を望んでゐた。
「源ちあんなら氣立てはやさしいし、町でも評判の模範青年なんだから、申し分はないんだけど」
折角のこの緣談を、叔父がいい返辭をしてくれないと云ふので叔母は不平だつた。
その叔父をどう說き伏せたものか、四五日經つてから叔母は叔父が納得したことをお町に告げて喜んだ。
「何時返事をしたらええべかな、お町、そこから暦を取つてくれんか、返事の日は媒人を呼んで酒でも出さにゃなるめえ」
叔父が白米をつけて町へ出た後、叔母は一人でほくほくしてゐた。
「叔母さん、おらあまだ婿なんかとるの早いわな、いま二三年位たつてからでええべに」叔父がこの緣談を承知したのが不思議だつた。
お町はどうしても結婚をする氣にはなれなかつた。小さい時から兩親や叔母達の生活を見て、夫婦なんて云ふものは實にいい加減なものであり、また男と云ふものが如何に頼りないかを、何年か毎日の樣に見せつけられてきたお町は、結婚と云ふものが既に光のないじめじめした墓場の樣なものにしか考へられなかつた。
子供のない叔母は、どんなに自分や自分の亭主となるものから、老後の慰樂を期待してゐるか、お町はその叔母に、少しでも叔父の自分に對する擧動を打ち明けかねた。何も知らぬ叔母は媒人を呼んで、どんどん交渉を進めていつた。叔母は理由のないお町の反對を若い娘に有勝な羞恥一圖と合點して、頭から取り合なかつた。
叔父は氣のらぬ、むつちりした顏をしてゐた。ぼんぼん爐端のふちを、きせるの頭でやけに叩いてゐた。次の日が大安であるといふので、叔母は晩くまでささやかな返事の用意をしてゐた。
お町は叔母の指圖でにしめを造つた。叔父は頭が痛いと云つて、夕食をすますとすぐ床についた。支度が終ると十一時頃だつた。二人はひえきつた身體ですぐ床についた。

ふと眼がさめた。眞暗だつた。何かそつと腰の邊りへ傳はつてくる氣配がした。はつとして無意識にかいゝ卷の端を握つて腰を包んだすつと手の感觸が引込んだ。聲をたて樣としたが出なかつた。

眼が闇に馴れてくると、蒲團のすその方でたゝみに匍ふてちらと影がゆれた。

そつと足の蒲團が持ちあがつた樣に感じた。根かぎり足をばたばたさせ樣とあせつたがしびれた樣に自由がきかなかつた。

身内が引きしまつて動悸が波うつてきた。暫らくしてお町は、しきゐの上を越へ樣としてゐる、大きな四つん這ひの影をみつめた。

「誰だ」突然叔母が起き上つて叫んだ。

お町は、はつとした。影は一瞬じつとしてゐたがすぐ立ち上つた。

「おれだわ、あかりをつけなかつたら、間違つて座敷の方へ行つてしまつた」叔父はあかりをつけて、外へしようべんに出た。

次の朝、叔母は叔父にもお町にも口一つきかず、眞青な顔をしてゐた。叔父は知らん顔して話しかけたが返辭しなかつた。

叔父が出て行つた後、叔母はお町を呼んだ。

「お町、おめえ今まで叔母さんをだましてゐたんだな、叔父さんの言ふこと聞いてゐたんだべえ、もう何も云はねえから判然り云つたらどうだ」

「叔母さん、決してそんなことねえんだ、おらあ今まで云ふべ云ふべと思つてゐたんだが、叔父さんはこの頃おれに變なことばつかりしてるんだ。風呂に入るとふし穴からのぞいたりして、昨夜のことだつてな、おらあ叔母さんに云つたら心配すると思つてだまつてゐたんだが」

「そうか、ぢあまた、あの畜生おやじがしやがつたんだ。實はなあお町、今までおめえにだまつてゐたんだが、おめえの姉さんを一寸世話したことがあつたんだわな、その時もをかしなことをしやがつたんで、姉さんは逃げて歸つてしまつたんだ。だけどおめえは娘として育てたんだから、まさかそんなことはねえと思つてゐたのに、もう何もかも駄目になつてしまつたわ。なあお町、叔父さんがそんな風ではこの家へ置くことは出來ねえから暫らく姉さんのとこへでも行つてくれるか、叔母さんがわけを云つてやるから」

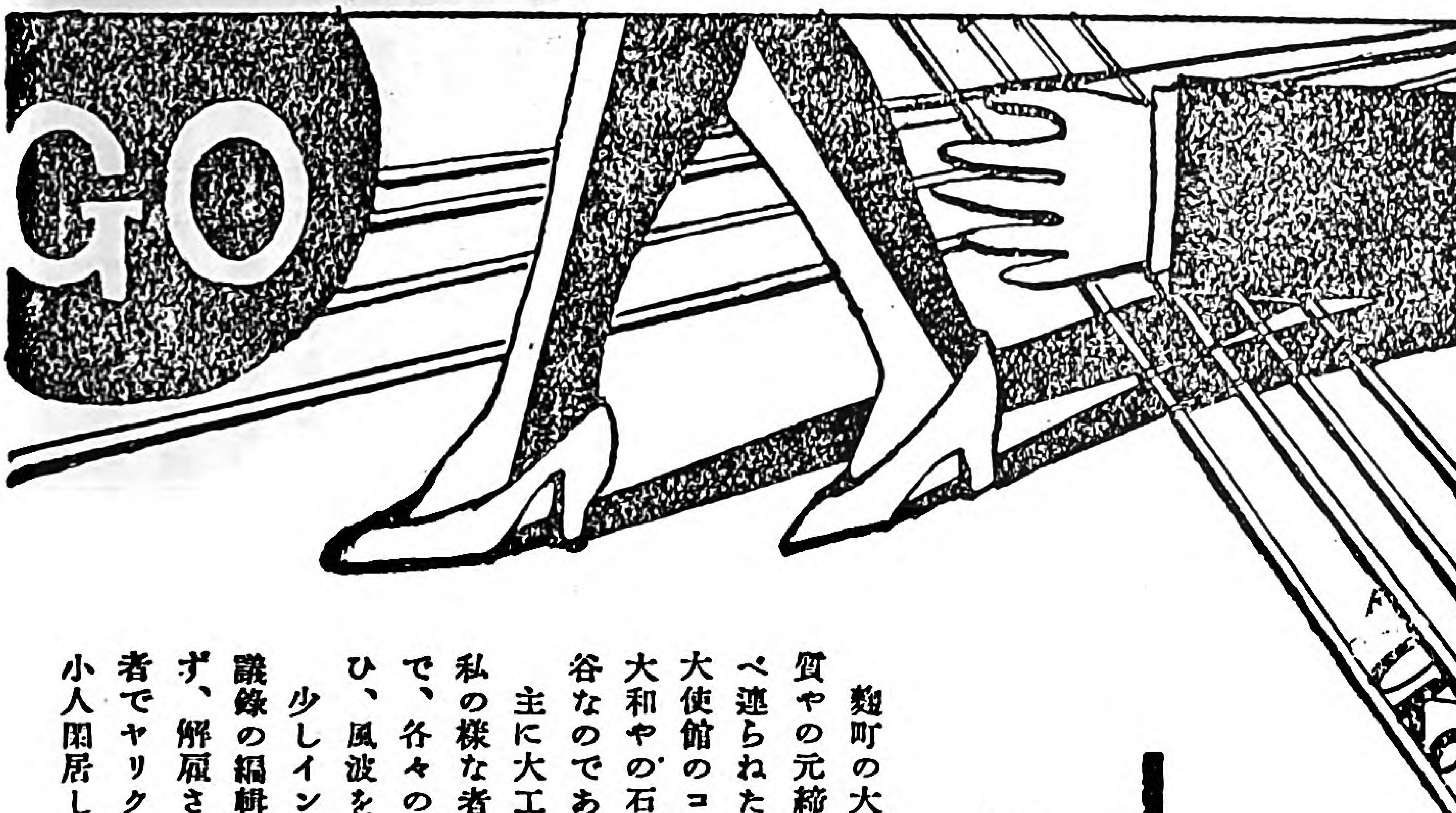
叔母は二三日のうちにげつそりやせてしまつた。

十日ほど經つてから、看護婦をしてゐる姉から便りがきた。

お町は自分の出た後の叔母を思ふと胸が痛くなつた。

「何かしでかさなければよいが」

どこまでも幸福を摑むことの出來ない叔母や、自分の女房を平氣で苦しめてゐる叔父の姿が、遠くの影には、それよりも父や母の姿が、この世の中から眞先に滅びて行く弱者の姿だつた。




# 街頭フイルム

## 麹町の谷

堺眞柄

麹町の大通りに、お藏を四つも建て並べている質やの元締の大和や本家の崖下に、三十數軒を並べ連らねた貧しい谷がある。上智大學とイタリー大使館のコンクリート塀と大倉喜七郎邸の土手と大和やの石崖とにめぐり廻はされた本當に貧しい谷なのである。

主に大工とか左官とか、洋服工などが、多いが私の様な者も住んでいる。そして各々の小さな家で、各々の小さな家風や家業を持つて、貧乏と鬪ひ、風波を起している。

少しインテリクチユアな或る一軒の主人は、議錄の編輯をやつていたが、利益ハカバカしから〔ひとへ〕ず、解雇されて三年間も失職、單に、利巧で愛嬌者でヤリクリ上手な奥さんの治政下にあつたが、小人閑居して不善をなすを實行して、先妻の娘と通じて、男子を生せ『親子の子』といふこの谷で有名な悲劇を演出した。

家が製本やで自分は印刷工であつた娘は、同じ會社の印刷工と出來て、子を生んだが、長兄は、子供の頃ランプをかぶつて顏面が火傷で恐ろしい顏だし、次兄はツンボの爲に、皆な獨身なので、末子ばかり先へ他處へやれないといふので、後家の母親の獨裁下に吸々と働いている。紙折りやの娘も、學問好きで、働き者で器量好しで、評判だつたが、日大生か何か苦學生の胤を宿して、娘ながらに子持ちになつて、未來の希望も喜びも消へ失せた樣に暗い背い顏をしている。

子供達から、蛙爺いと云はれている口入れやの喘息のお爺さんは、そのお婆さんが八十二で先達死んだが、葬式やの拂ひが出來なくて困つてい

る。洗張やのおぢさんは、お内儀さんが、十日程國へ歸へつてる間に、預り金やガス電氣代を使つた上、家中の着物を、縫ひかけのまでサラつて、質やに持つていつて遊んだとか飲んだとかで、大々的チャンバラが起つた。大工さんとこでは、五度も流産してヤツと育つた子供が、閻太郎とぶつかつて、足を折つた。一生不自由な思ひをさせると云つて、兩親は、泣いて口惜しがつたが、ホンの端金の見舞しか來なかつた。又或る日、コテ〳〵と油のついた髪を根本から、プツツリ切つて、人絹のケバ〳〵しい柄様や、歌舞伎座の幕の様に荒い縞の着物を來た四人の女が、この谷へ舞ひ下つた。府中の娼妓で勤めが嫌さに私の處に逃げ出して來たのだつた。

　質やと　大倉邸と大使館と上智大學に圍れた暗い、この谷のフイルムは、貧乏と悲劇がまき映されて、何萬呎も續くのだ。

　早く、この慘なフイルムをカットしたい。

# 月給袋

松田利久

　眞紅な太陽が、水平線に伸びて行く歸帆に夕映え、船小屋から出てくる漁師の顔を健康に染める頃、幽な渚の潮騒えに混ざつて。ギユーギユーギユー、この漁がへりの櫓の音は、——騒音そのものの様なジャズや、レビユーに浮かれる今の世の若人達の耳に聞えて來る時、それはどんなに響くかは知らぬが、潮風に吹かれて育ち丈余の櫓櫂を繰つた漁師の子として、私はその音にいふにいはれぬ一種言外な懐しみと、思ひ出を誘はずにゐられない。

　かいたや傳馬船はポンポン蒸氣のトロールとなり、天秤棒につるされた魚ざるが、ゴム輪のリヤカーに乘せられるが——。

　今は春だ。晴れた砂丘に腰をおろして、風起る毎にかるき貝殻のから〳〵となり、草の中で白き貝だちの話しかけるそれをぢつときいてゐるのだ。出來ぬ乍らもう一度私は死んだ弟と、あの圍爐裡ばたで父の思ひ出話を聽きたいと、しみ〳〵思ふ。

　先日はじめて給料を貰つた。紙幣を袋から入れたり出したり、出したり入れたりしてゐる中に。なんとも云へぬ惇い氣持になつた。私はこの最初の月給をどうしても使ふ氣になれない。

　弟でも居れば神棚へでも上げて、初めての給料を祝ふのだが。その弟も今は居ない。で姉と相談して弟の位牌を三つ買ふことにきめた。

×

　姉と私とに二つ。あとの一つは弟の中學時代の親しい友達に。

　給料は後何程も殘らなかつたので——。

　姉は

「人中へ出るにはいくら漁師の子だといつてもそんなみすぼらしい恰好ではね……。」

と、やさしい心づくしから、新しい黒の洋服を一着あつらへてくれた。

　私は姉の貧しい財布の中をよく知つてゐる。

　——たとへ、安物だつたにせよ。私は充分だつた。

　生れて始めて新しい折目のついた洋服を着て、私は歩いた。

　いそ〳〵と歩いた。帽子もかむつて。

# 長屋の選擧氣分

松村喬子

一どきに櫻が笑ひかけたのかと思はれる馬鹿陽氣の午後であつた。共同水道端ではお上さん達のオシメの洗濯と水道端會議が始まつてゐた。「口達者らしいドラ隣のお上さんが、赤毛のお上さんに話かけた。

「オイ、お前んちぢや　誰に入れたんだい。オラらちぢや無產黨の○○さんだつてトツチヤンが云つてゐたよ」

「オラとこだつて、○○さんだよ、當り前よ無產黨（無產階級）は無產黨に入れるのが――」確心持つて、キツパリと云つた。

「そうだけど、アキチヤシちのトツチヤンは民政黨の○○に入れたのだつてよ、無產黨は赤くつていけねつて民政黨だといつてた」

「染物屋ぢやあるめエし、色なんかどうだつてかもうもんか。オラ、家賃の値下げしてくれる人が一番エゝとおもふから、トツチヤンにも無產黨に入れる樣に勸めてやつたんだ」

その夜八我頃、その水道端の長屋の露路にも、荷車をとり圍んだ四五十人の勞働者の群が、當選御禮の示威運動にやつてきた。無產者の勝利の長旗を先頭に、荷車には、アンペラの砂糖[illegible]と酒樽を積んで、『砂糖稅撤廢、酒稅消費稅の撤廢』の小旗が立つてゐた。

「無產黨にはお金がないから自動車でお禮廻りは出きないんだとよ！　それでも、こんなに裏まで廻つてくれるから、やつぱり無產黨はエライネー」

先程のお上さん達は、チンドン屋を見る目で、批評した。

だが、一ケ月間、「俺達の代表」を送り出す爲めにあらゆる鬪いに勝つてきた、この示威者達は、只喜びに醉つて萬歲々々と叫んで通りすぎた。

# 春

金子せん女

一日雛市を見に山を下りて見ると道行く人の足音も輕ろくきのふ迄にひきかへて、淡色好みの花に、ぬきかへられてる身をもぼつ／＼と見かける、街の粧ひも申迄もなく衿であつて、中にも「花見ショール」とか、「花見傘や」「麥藁帽」などが目立つ。

とり／＼の色なつかしや花見傘

澁好みで。さつぱりとした女づれを見ると、ほんとうに、床しいものである、たまたま[illegible]キュッと[illegible]いた濃化粧に出逢ふと思はずめつむらされる。

粧ひ過ぎし人恐ろしや衿の町

つゝましき母娘見かけぬ衿の町

三越大丸の雛を見て

賣出しもありて[illegible]も貯へり

正札のゆゝしき雛もありにけり

雛雛と云ふを買ひ居し人ありぬ

雛道具揃へて果てしなかりけり

五色の雛菓子買ふてもどりけり

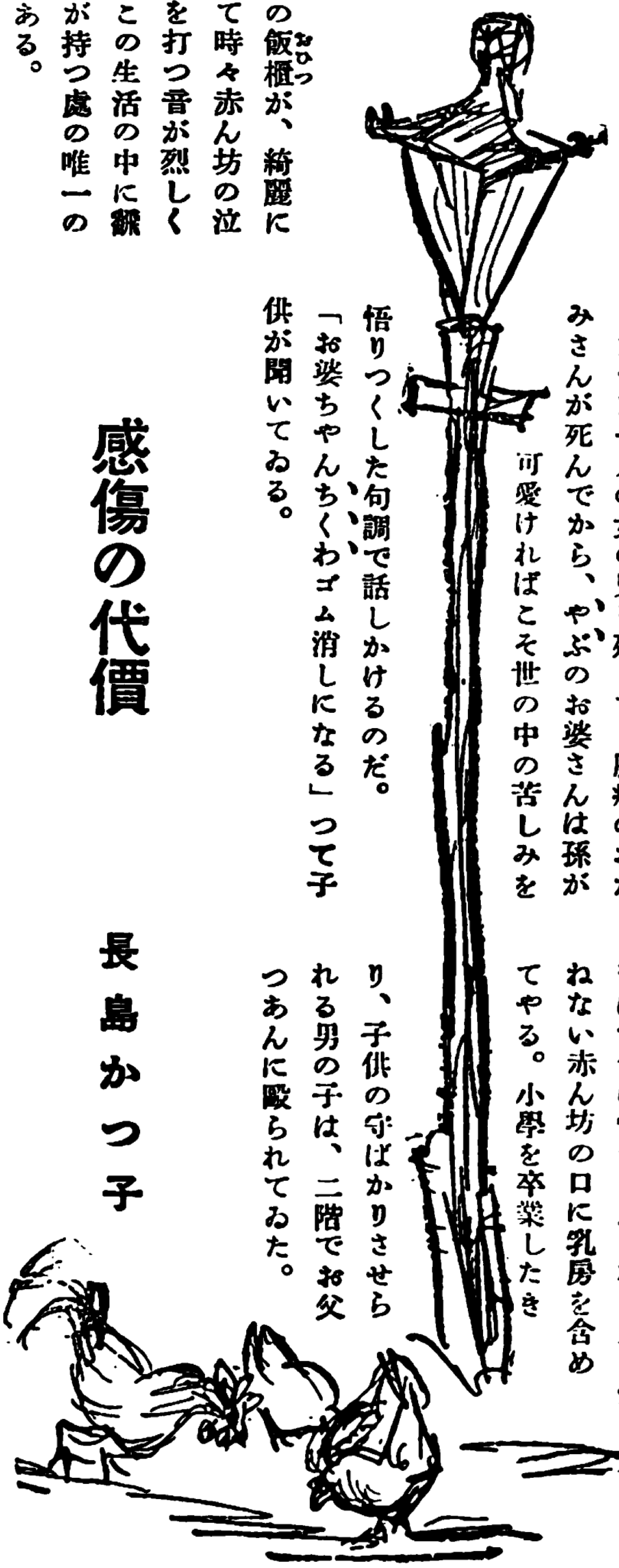
# 路地裏風景

深町瑠美子

午前十時の路地——

天理教のお婆さんが臺所から出て來て、片隅の名ばかりの花壇に水をやつてゐる。石や瓦を啣んだ赧い土に雜草が綠を伸ばして、些やかな愛嬌をこぼしてゐる。こんな間の抜けた風景の中に、長屋の甍屋根が大波の樣に動いて、窓の下には黄ばんだシーツとセンベイ蒲團が仲良く並べて乾してある。

隣の少し高い物干竿には、はげちよろの赤ん坊の着物、黒い印絆纏ネルの襦袢や、赤い腰巻やら、オシメの一隊が心地よげに風に揉まれてゐて、洗つたばかりの飯櫃(おひつ)が、綺麗に磨がれて乾してある。そして時々赤ん坊の泣き聲や、ブリキ屋のトタンを打つ音が烈しく空氣を破つて聞えて來る。この生活の中に飜へる滿艦飾こそ吾々の日常が持つ處の唯一の戰鬪艦であり、お輿(みこし)なのである。



ぼろ〳〵に朽つた板庇の上に、親になりかけたクロ猫が欠伸をして、立ち上る。「そろ〳〵飯が食ひたいなあ——」つてところなのだ。その下を「クズーイ、クズヤお拂ひ」の屑屋さんが通つて行く。

蕎麥屋さんの臺所から、じゆん〳〵蝦の天ぷらの揚る音がして香が鼻について來る。

たつた一人の女の兒を殘して、肺病のおかみさんが死んでから、やぶのお婆さんは孫が可愛ければこそ世の中の苦しみを悟りつくした句調で話しかけるのだ。

「お婆ちゃんちく〳〵わゴム消しになる」つて子供が聞いてゐる。

洗濯をした眞黒になつた汁をこぼすと、はけ口の無くなつた下水が欠多羅に自分の好な方に行つては溜る。蕎麥屋のお婆さんは炭俵やコークスの殼(から)を撒んで來ては道惡に敷く。

洗濯屋のモターが廻つてゐるので、此邊一帶のおかぐら二階の家を地震の樣にゆすぶつてゐる。おつさんがブーッと霧を吹きながら、アイロンをあてゝは「草津よいとこ一度はお出でドッコイショ！」と、唄ふ聲は彼等の唯一のリズムである。

「二階から赤ん坊が落つこちた——」

狂氣の樣になつて抱いて來たおかみさんの顏は紫色に悸へて息の根の止り兼ねない赤ん坊の口に乳房を含めてやる。小學を卒業したきり、子供の守ばかりさせられる男の子は、二階でお父つあんに毆られてゐた。

# 感傷の代價

長島かつ子

浅田三郎は何時ものやうに今朝も制服に着更へ終ると、先づ机の前に座つて煙草に火を點けた。

――今日は水曜日だ――

瞬間に彼の脳裡に浮んで來たものは、あの不衛生で退屈な教室と、そして教授のヒヨロけた姿であつた。

大體あんな男が博士である事が不思議だ。

一體彼等の女房つて、どんな女だらう、あんな亭主を御生大事に子供を産んで呉れる鈍重な顔が見てえや――彼は何度こんな事を思つたか知れなかつた。

バットの煙が氣紛れな娘のやうに逃げてゆく窓際を見ながら無表情に呟いた。

「淺田さん、今日は學校お休み?」

下宿の女將の聲が階段の下からきこえた。

「エー行きます」

彼は反對的に答へると立上つて杜の帽子を摑んで頭にのせた。然し外に出た彼は素晴しい計畫を思ひ付いたのである。

――さうだ、停車場へ行つて見やう……彼は突嗟の名案に微笑んで電車に飛び乘つた。

停車場――それは刹那的な繁忙と雑音の永久的連續である。全てが未知數の躍動だ、あらゆる事象をはらんで無邪氣に、神秘的に棲息してゐる。新鮮な生氣が目まぐるしいテンポとスピードの中に溢れてゐる。彼は今、この三等待合室の一隅で、この素晴しい魅力に傾倒し、雰圍氣に陶酔してしまつたのである。

彼の座つてゐる向ふ側に、窶れたみすぼらしい服裝をした娘が、一人の男に細い腕を摑まれながら恐怖に慄えてゐるではないか、男は女に覆ひ被さるやうにして何か云ひ含めて姿を消した。娘はそつと後を見送つた。强迫だな、誘拐かも知れないぞ、彼は颯つと立上ると、探偵的興味と、若々しい正義の情熱に兩眼を輝かせ、大膽に娘の前にあらはれた。

白粉やけのした薄汚れてゐる首筋は背骨が見えるまでおし擴げられてゐる。髮も赤くて少なかつたが肩から胸の邊りにはさすが娘らしい艶つぽさがしのばれた。

「どうしたのです。娘さん……」

娘は顏を上げて、暫く彼の顏を見ていたが

「あの男はあたしの親方なの、稼ぎが拙いつて何日でも亂暴なことをするのよ……」

成程、彼女の側には胴のすれた古ぼけた三味線が置かれてあつた。

彼は白粉でヒカ〳〵に汚れた襟から發散する特種な匂ひと、正義的亢奮を等分に感じた。そしてポケットの中を引つかき廻して有りつたけの金を取り出すと娘の手にのせてやつた。

「これだけしか無いんだが取つとき給へ」

娘は驚いて大きな瞳を擴げると彼を見上げたそして何度も辭退したが結局その金は彼女の手によつて恥しげに、だが手早く帯の間に收められた。女は何度も禮を云つて去つた。

彼は娘の去つた後、今快よき感激の中で、かくもしいたげられてゆく哀れな人間の如何に多いかを思ひ、現代の社會相を嘆き、次いで社會構成制度の欠陥を呪つた。然しこの思索も、女の悲鳴と叫聲で破られて仕舞つた。

「今度こそ逃さんぞ、圖太い奴等だ」

構内には瞬間にして群集が形成された。

制服の權威を存分に發揮した警官は、素早く巧妙に先刻の男と娘を縛り上げた。

娘の顏にはさつきの可憐さもいた〳〵しさも消えてゐた。反抗と憎惡に滿ちた瞳は群集の好奇的な侮蔑を冷たく反撥してゐた。そして驚愕に轉倒し切つた彼の瞳に出會すと如何にも意地惡く、嘲笑的に歪められた。

娘は小氣味よげな笑を漂はせた唇をツイとそらせるとさつさと歩き出した。思はずたぢ〳〵とよろめいた彼の汚いポケットの中では、バットの空箱がグシャリと握り潰された。

# 中流都市的輕茂

石井あつ子

小地主で街の女學校を卒業したAは兄夫婦と喧嘩しながら結婚期を過ぎた。彼女の消息は半年も絕へて、何をして暮してゐるのかと思ふとひよつこり訪ねて來たりした。

それから毎日のやうに話に來た。

「職業婦人と農村婦人」といふ論文を書いたからと見せに來た。

彼女は製絲工場の寄宿舍の裏の、杉並にかこまれた「離れ」の部屋にすんでゐる。門構の中の養蠶の劇しい勞働には無頓着だつた。

此處が書齋なのといつて私は椅子に腰かけた。紅茶を入れて呉れる早々、忙しいから散歩しやうと、落着く間もなく誘ひ出された。

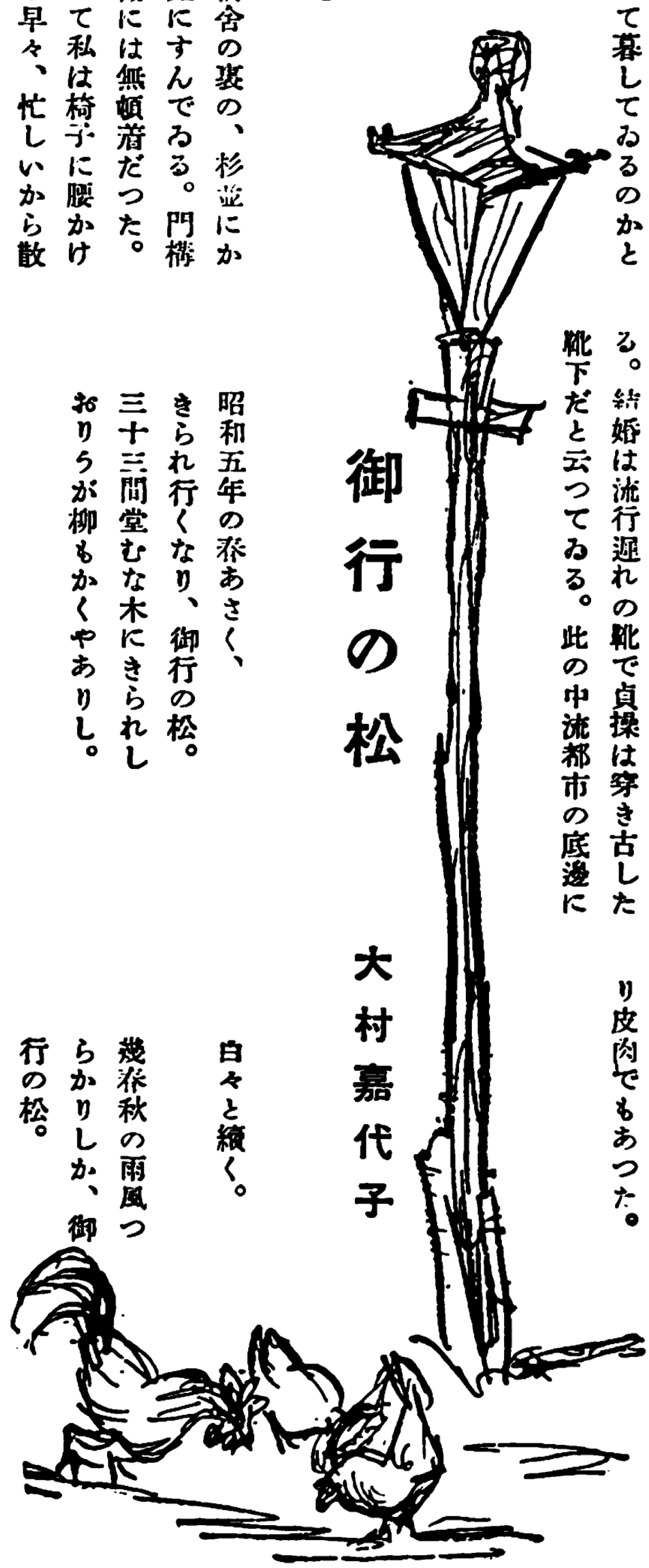
私達は桑畑の路を辿つて行つた。

私は急き立てられてゐるやうな不愉快を感じ用事を持ち出して別れやうと思つたが、Aはなかなか戀愛や社會問題の尾を切らさうとはしなかつた。

AはAらしく小地主的な理想を描いてゐる。結婚は流行遅れの靴で貞操は穿き古した靴下だと云つてゐる。此の中流都市の底邊には未だ自由主義の聲さへ聽こへないと。

だから音樂會を主にした講演をひらくのだと、婦人手藝倶樂部に農村副業の工藝品を持ち込むのだと――

私は遂に默つてゐた。彼女が臆病な母の監視と嫂への嘲笑をもつて家庭爭議の主人公であることが、滑稽でもあり皮肉でもあつた。



# 御行の松

大村嘉代子

昭和五年の春あさく、
きられ行くなり、御行の松。
三十三間堂むな木にきられし
おりうが柳もかくやありし。
「笹の雪」わづかにあれど、
うたはれし名の呉竹もなく、
大溝の水は濁りてうごかす、
裏町は鐵管埋設で掘りかへされ、
表の改正道路のアスファルト
白々と續く。
幾春秋の雨風つらかりしか、御行の松。
葉はことごとく落ちつくし、
枯れつくしたる枝突兀と
足場を高く結ひあげて、
天をさし地をさす。
巨人十字架を負へる姿か。

五辻の小路より
馳け出でし俥一臺、
とゞめて仰ぐ御行の松。
きられて行くを惜しむ人、
幌ふかくしく見るよしもなく。

荷車をひきすてて佇む男、
野菜の包みをかゝへて立つ女、
犬も馬も道行くもの
皆とゞまりて仰ぐなり。
御行の松は今きられ行く。

# 街頭風景

## ——帽子を持つた子供と——

上田文子

奥さん！　おあし下さい！

薄い着物をきた六つ位の女の子が、赤くかじかんだ手に小さい帽子をさゝげて　A夫人の前に立つた。

どうぞ、やつて下さい！

切る樣な北風に吹きすさめられて、赤くはりきつた頬に、いじけた眼が黒く誇張された哀感を湛えてゐた。この眼は、今の先まで邦樂座の觀覽席で、華やかな色と音にエクサイトされてゐた彼女の神經を、恢いセンチメンタリズムへ導くのに好都合だつた。

およし遊ばせよ、奥さま——僞乞食かも知れませんから。

連れの夫人が注意するにも拘らず、彼女はブリリアンの光る華奢な指で、ハンド・バックから、五圓札をつまみ出した。

さ、これを上げます——可愛さうに、早くうちに歸つて御休み！

夫人は狐の毛革のボアを一ゆりゆり上げると、禮をいふことも忘れた樣に五圓札を握つて呆然としてゐる子供の表情に十二分の滿足を感じて、スーッスーッと歩き出した——

お孃さん！　おあしやつて下さい！

同じ晩タイピストのB子は、同じ子供にまつはられて、ペーブメントの上にゆき惱んだ。夜勤をやうやくすませて、綿の樣につかれた彼女の心身には、冬の夜の街頭を色どりネーム・ランプもカフェの窓から流れ出すジャズの音響も、むしろ苦痛に近かつた。彼女は母親と幼い弟妹が、すでに眠つてゐるであらう場末の借屋の、冷えきつた布團に身を投げこむことに、飢えをさへ感じて、電車のストップへ、感覺のない足を動かしてゐた。

いじけた子供の目は、彼女の弟妹のある時の表情に酷似したものを彼女に感覺させた——可愛さうに——うそかもしれないけれど——それにしたつて、こんな小さい子供だましに使はれてゐるにきまつてゐる——貰ふものが少ければ、なぐられでもするんだらう——ほんの少しでも、惠んでやらうか！

彼女はふところへ手を入れやうとしたしかし、それを引きとめるものが、同時に彼女の中に動いた——十錢や二十錢——いや、例へ十圓惠んでも、そんな行きずりの惠みがこの子の不幸を救ふことが出來るか——斷じて。

私達は安價な自己滿足にふけつてはゐられないのだ——

彼女は、一見すげなく女の子のさゝげる帽子をよけて、通りすぎた。

何か責任めいた重い苦澁が彼女の疲れた頭に又、ずつしり加へられた。

（一九三〇・三・五）

# 春は玉川べりから

大野倭文子

――ゴー――・ストップ――

甲州街道の信號機は、尨犬（むくいぬ）のベスだ。

トラック、荷馬車、自轉車、肥料車のしつきりなしに行進するその眞中に立つて、自由自在に止れ！　進め！　とやるのだ。

「オイツ。コラツ、―」

ワンワンワン。ワンワンワン。凄じい勢ひでやるのが、ベス信號機のストップで、沈默がゴーだ。

煩さゝうにベルを鳴らす自轉車の商人、眉を寄せて降りて來る乘合自動車の運轉手、烈しく鞭を振つて見せる牛車の百姓、――何れもこれも、屹度一度はストップするから妙だ。

街道の右側の茅葺屋根の、駄菓子屋の前へ立つた男の子が、泣き出しさうな顔でベスを制してゐる。その手に持つたゴム風船が信號旗代りに赤い。

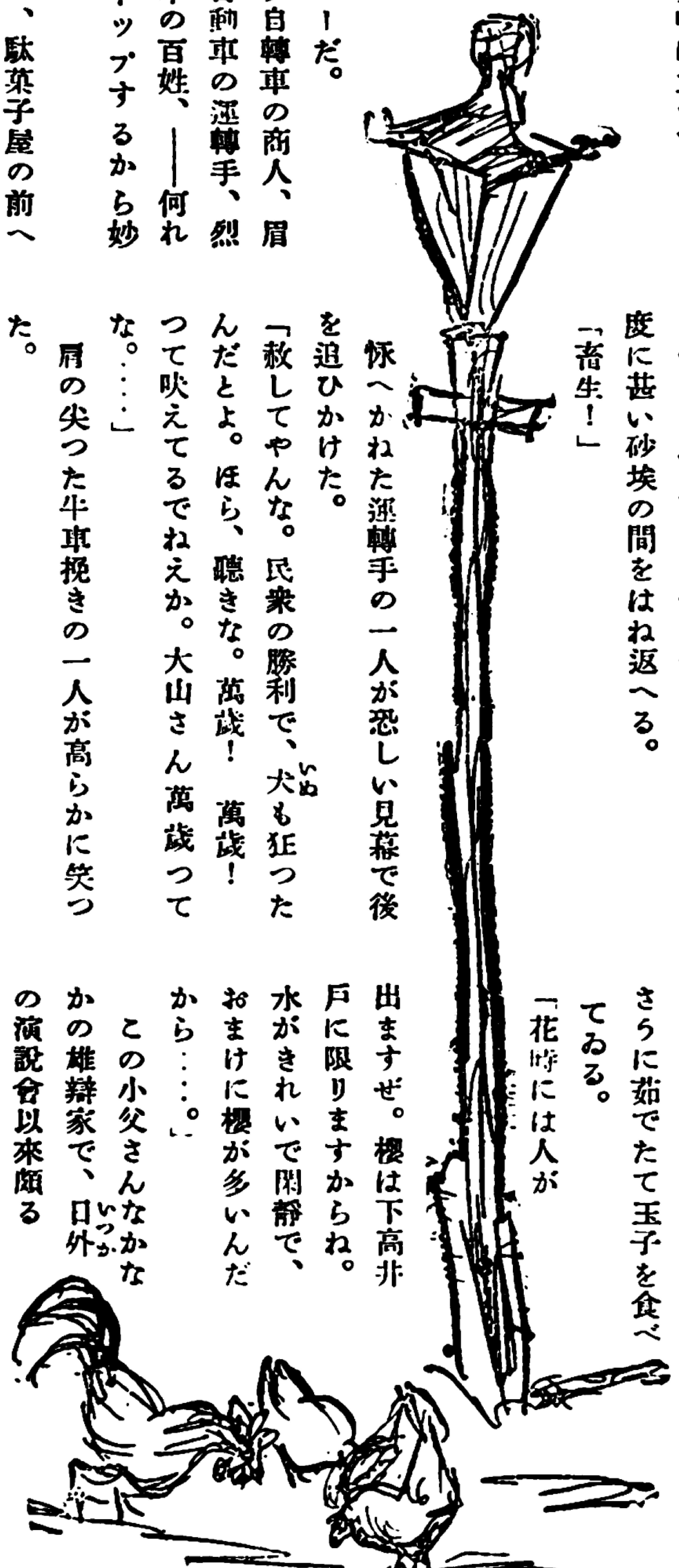
ベスのぶら下げた鎖の切れはしが、逃げる度に甚い砂埃の間をはね返へる。

「畜生！」

怺へかねた運轉手の一人が恐しい見幕で後を追ひかけた。

「赦してやんな。民衆の勝利で、犬（いぬ）も狂つたんだとよ。ほら、聽きな。萬歲！　萬歲！　つて吠えてるでねえか。大山さん萬歲つてな。……」

眉の尖つた牛車挽きの一人が高らかに笑つた。



櫻、櫻、櫻、果しも無い堤防の櫻について、玉川べりを歩いて行つたら、何處かの果てには住みよい世界もありさうな。

こゝは下高井戸の玉川堤、

「茹（ゆ）で玉子一ツ五錢――如何ですか？　え、生みたて玉子のうで玉子――」

のんきな父さんと我人ともに許す養鷄場の小父さんが、昨日出來上つたばかりの一坪半の賣店の前から笑ひかける。

「玉橋饅頭なんてえのは、何らですかい？」

鍬を擔いだ兄さんが、土まみれの手で片まさらに茹でたて玉子を食べてゐる。

「花時には人が出ますぜ。櫻は下高井戸に限りますからね。水がきれいで閑靜で、おまけに櫻が多いんだから……。」

この小父さんなかなかの雄辯家で、日外（いつか）の演說會以來頗る

の女人藝術びいき、よく織本中本女史などの消息を知つてゐる。
　春よ來い！　春よ來い！　青ペンキ塗りの賓店の前に立つて、小父さんは今迎春の曲を口ずさんでゐます。
　伴奏者はスパニール種の愛犬ハッピー、春よ來い。春よ來い。

# 春雨日記

江口章子

　朝風呂のかへりは春の小雨なり、
珍らしく街の湯に出かけると、かへりは雨だ。春雨日記は髮毛のやうに弱くまたつよく一條でありたい。
　京の寺に引き籠つて仕舞つた私は、まるで支那の昔の女たちのやうに、人の肩にすがつてゐなければ、家の中から出られないやうな、弱蟲になつて今では一人で電車に乘る勇氣を持たない。だからますます引込思案がつのつて、蝸牛のやうにちいさい寺院の一室にばかりかぢりついてゐる。
　かう言つてしまへば全く人間としての私は生き甲斐もはりあいもない死人同然となりはてたやうだが、私はこの世間的に何等の生き甲斐のないこの頃の自分の生活にたどりついてやつとほんとうの私にだけのほんとうさがあるやうに考へてゐる。
　私はすりへらされた自分の魂をふりかへるにつけ、そこから出發してゐる芭蕉や、一茶または良寛上人の、さみしくはあるがあのほがらかな境地に向つて合せられる双の掌である。
　今日も一日春雨をきいた。四疊半の昔の米倉をそのまゝ今の私の靜かな書齋にひつこもつて。
　穀倉をそのまゝ春の書齋かな。
こんなものが句といふものでないことは、なぐりがきしつゝも顔を赤めるものであるが、私はねても起きても氣樂なこの一室の中よりよい世界をおもはなくつてゐることはほんとうだ。
　紫の小田卷草を植ゑまほし春雨ふれば心しめるに。
　夜にかけて雨はますます靜かに、京の娘のすゝり泣きのやうに降りそゝぎ、しんかんとした寺院の中は死灰のやうである。
　先きにしるした、小田卷草の歌は私が三年前手賀沼の近くの山の中のお堂で、へたり込んでしまつて棺桶の中に入るやうにこの寺に來たころのもので弱々しく舊都の雨にさゝやきかけた初めのものである。かうして、足はくされても三年の寺院生活は全く私を落ちつけてしまつた。



# 春の午後

沼　蘋　女

Y夫人の誘ひを受けて上野の公會堂で或る催しの映畫にさん〴〵泣かされてより二三日した後又Y夫人の訪問があつた。

いきなりY夫人は少し目に角を見せて

隨分お話しは大きくなりますね――

あたし、Kさんからひどひ惡口を聞きましたわ―、まあ、お聞きゝ遊ばせな―、こうなんでせう。

奥さんはフキルムの前でさん〴〵泣いたつてね―、そうして紅も白粉も眉墨もごた〳〵になつたつて云ふじやありませんか、ほんとうに傑作でしたね―、痛快でしたね―、

それが大きな聲でしよう私はら〳〵いたしましたわ。

お止しなさいよ内の人達に聞えたら惡いのですよ。

あたし怒りつけてやりましたのよほんとうにおいたさんですわね―。

奥様がKにお話しになつて―。

こんな訪問を受けて私は驚いた。

奥様、ごめん遊ばせね―、多分Bでせう―、あの日ピヤノのお稽古がすむと思ふとK先生の大きい笑ひ聲がいたしますでせう、それが如何にもおかしいので遠くの間にゐた私達も貰ひ笑ひを致しました位です、子供の事でございますしすつかりあの時の顔の醜くかつた事をお話しいたしましたに違ひありませんわ―。

Y夫人も私も同時に苦笑を浮べてゐたが話題はM夫人の噂に移された。

M夫人この頃お出になつて―、お忙しいとみえてちつとも御見えになりません。

よくあんなに銀座にお立ちになりました事ね―、もうすつかり世の凡てをお通り過ぎになつての事でございませうね―、でも實際よくお活動遊ばす事ですね―、

ほんとうにあのお優さしい弱々しいお體でよくお續きになる事でございますね―、

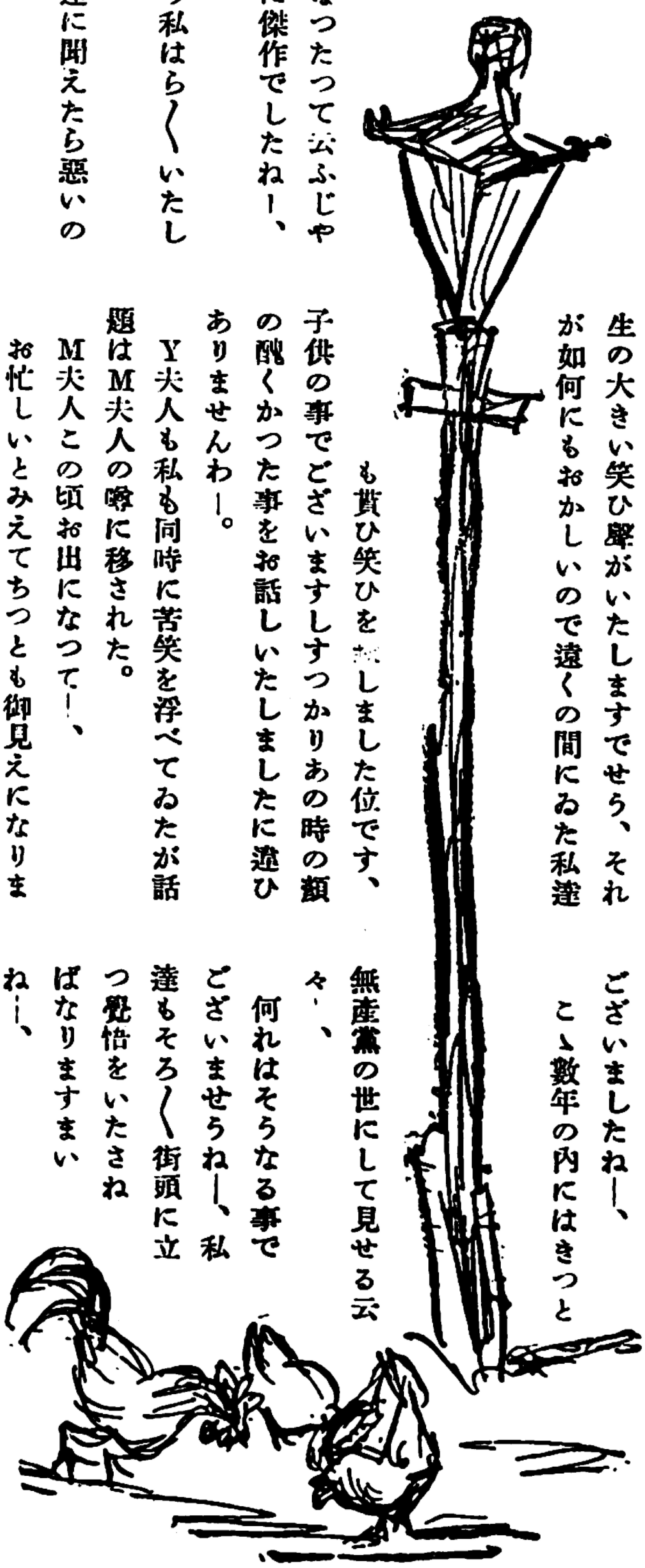
選擧がすんだらどんなにお勞れになる事でせう。

政界の皆様はそれ〳〵奮闘してゐらしやるやうですね―

ついこの頃A先生の演説が或新聞に揭げてございましたね―、

こゝ數年の內にはきつと無產黨の世にして見せる云々、

何れはそうなる事でございませうね―、私達もそろ〳〵街頭に立つ覺悟をいたさねばなりますまいね―、



Y夫人と私は際限もなく午後の柔い春の陽に浴しながら次ぎから次ぎに話しは進むのであつた。

いつの間にか時計の針は四時過ぎを指してゐた、大變ゆつくりいたしました、もうお暇いたしませう。

Y夫人を見送つた街頭には選擧當選發表の前に春の埃を冠りながら黒山のやうに人々は集つてゐた。

春塵の巷は選擧騷ぎかな

急いで歸つた私は俳帳に記した。

一九三〇、二、二七

# 町の子供

眞杉靜枝

神田と云ふ街は、消防署と、火災保險勸誘員のおぢさんを、神經過敏症にする程、家々がすし詰めに押し並んでゐる。

此の神田で、六疊一間の二階借りをして住む一家族を私は見た。

六歳と二歳の二人の男の子を相手に、その若い母親は、一日をまるで輕業師のやうに暮してゐるのだ。壁一重そとは、電車、自動車の走り路であり、子供達にとつての安全地帶は、半間巾の裏路次しかない。

母親は毎朝、床をぬけ出るなり、黒サージの事務用上着で身を固め、保險勸誘員である夫を送り出す迄に、階下から、二階の物干場にある彼女の炊事場迄、何回となく重い水バケツを運ばねばならない。

その間、二人の子供は父親を相手に、敷放された寢床の上で、思ひ切りフザケて朝の運動をやる。蒲團は、彼等にとつての芝生だ。

食事が終り、父親が身仕度くにかゝると同時に、子供達も母親の手で身仕度くをされる、それは、いつも保温と輕快を頭に於いた、手製の毛絲服だつた。小さい肩にしつかりとズボン釣りをかけられ、毛絲の靴下をはかされると、子供達は、最早兩足をうれしそうに彈ねあげ、踏みならして、ランニングの選手のやうに戸外へ出て走りまわる用意を初める。

そして二人の親は、各々一人づゝの子供をかゝえつゝ、梯子を降り、彼等にとつての玄關口である階下の勝手口から、半間巾の裏路次へと出るのだ。

するとようやく土の上へおろされた子供達は、まるでぜんまい仕掛けのおもちやを手放したやうに、走りまはり、見る間に廣い表道路へと踊り出て仕舞ふ。其處は、自動車、自轉車の流れ路だ。あつと云ふ間に、子供は自轉車自轉車の間にはさまれる。だが恐怖を知らないと子供は泣きはしない。此の場合ひ、母親が氣狂ひのやうになつてつかまへやうとすればする程、子供はうれしそうに、キツキツ聲をたてゝ、よち〳〵と逃げまわる。

それを無理につかまへて仕舞ふと、切角得た自由を冒瀆された憤怒で、子供は兩足をばた〳〵させ乍ら泣き叫けぶにちがひない。そこで母親は子供の足が疲れる迄、此の恐しい往來で、子供と一緒に輕業を初めねばならないのだ。

母は或る時、便所へ行かねばならない。その時二人の子供は、嚴しく云ひきかされて、裏路次の中に連れ込まれる。兄の方が卽ち、よち〳〵歩きの弟の監視役を云ひつけられる。

けれど歩きたての子供は、疲れる迄はぜんまいのやうに足の運動を止めるわけに行かないらしい。小さい弟は、兄に妨げられつゝ、まるでオリを出やうとする仔熊みたいにあつちへ走りこつちへ走りして、路次の兩方の出口から冒險の多い表へと出やうとあせる。兄は兩腕を一ぱいにひろげて、出口に立ち塞さがる。その度びに小さいのは癇聲をたてゝ、兄をぶつたり押したりする。終ひに小さい兄は泣き聲をあげて仕舞ふ。

『母ちやん早く出てよう』。

すると、母親は便所の中から叫び續けるのだ。

『いゝ子だからもう、直ぐですよ。出たらいゝものあげますよ』

附近には、まだ子供達が大勢ゐたが、大かた、多少でも自分の家の土間と云ふ遊び場を持つてゐ、いざと云ふ時、梯子段を昇らなく共、自分の家の疊の上へかけ込む事が出來るので、どの子供も帽子等かぶつてゐなかつた。

大きい子供達は、廣い往來の四ツ辻に立つてゐる、太い電信柱のかげが、此の往來中での安全地帶である事を、いつとは無しに發見して、その二尺四方ばかりの土の上に、夕方になると頭を集めてメンコをひろげる。

兄の方は、そのメンコ組の最年少者として加はる事が出來るのだ。で、兄は朝からポケツトにメンコの札を大事に入れて、大きい子供達が、學校から歸へつて來る時分を待ちかね、何度もその家へ訪ねて行く。

さて夕陽が灰色の街の空を赤く染める頃、いよ〳〵メンコの勝負は初められる。だが兄はその時分きまつて、母親が炊事仕事を初めるので、小さい弟に、度々その一生懸命な勝負を防げられる。弟がよち〳〵と裏路次から出かけて來ると、大きい子供たちの中で、無氣になつてがん張つてゐた兄は、素早く弟をひつぱつて母のそば迄連れて行かねばならない。そして又駈け戻り、勝負に加はるのだ。



かうした間に、日が殆んど暮れて仕舞ふ、すると街角から父が歸つて來る。父は、いきなり子供に飛びつかれるうれしさを、わざと厄介そうに額に用意しつゝ、疲れたからだをひよつこり現はすのだ。

弟は、たちまち父の手に抱きあげられ、兄は、オーバアにぶら下つて、いよ〳〵親子共に、使ひ足りたからだを、二階の我家へ納めるのだ。



# みちづれ

ヴィクトオル・マルゲリット作

望月百合子譯

## 第二章――三

ロオザは五年の懲役に處せられた。

『何んて酷いことだ』アニックは判決をきいて溜息を吐いた。

アメデエは、この裁判が、檢察官の寛大さや、裁判長の意向にも拘らず、陪審員の意見に依らなければならなかつたことや、その陪審員が男性の造つた社會法則で審判したことや、それにも拘らず刑を輕減させたのはアニックの大成功であつたこと等を說いたけれども、アニックは慰さめられなかつた。……アニックは白痴のやうにぼんやりと警官に引き立てられて行つたロオザの面影と共に苦い悲しみをいつまでも忘れることが出來なかつた。……併しそのうちに彼女の氣持をどうでも一變させずにはおかない事件が起つた。

彼女は間もなく、自分の不快の原因を知つた。それは彼女の內に、もう一つ他の生命が宿つたことだ。一つの不思議な存在が巢喰つたことだ。……アニックは最初、この時に起る不快や嘔氣を心配とも喜びともつかない驚ろきで見てゐた。……併しやがてこの未來へ――精神的にも肉體的にも――の門出は彼女を一杯の空想で滿たしてしまつた……

彼女の再生であると同時にアメデエの再生でもあつて、而も彼等とは全然獨立した生命として、やがては人類存續の一鎖となるこの胎兒は何んだらうか？……男の子か、女の子か？誰に餘計似るであらうか？……滿身の誇りに戰き乍ら、彼女はまだ何の徵候もない腹部に兩手を當てた。そして現在と未來への强い意志を感じた。彼女の肉體が一人、細胞から細胞へと形造りつゝあるこの甘い果實は、彼女のものであり、彼女のものであらう！と。

彼女は忽ち元の快活さに歸つた。そして少しも疲勞を感じなくなつた。晴れ〴〵とした滿足が、活潑な動作や、顏から、新らしく悟りを啓いた人のやうに迸り出て、アメデエを驚ろかした。彼はアニ

ツクの内に、この間中の裁判事件の屈托でやゝ失はれかけてゐた戀人を再び見出して、喜んだ。併しやがて、アニックが益々元氣になるにつれて、それ程彼のことを思はなくなり、忙しい別居生活に滿足してゐるのが、アメデエには不滿でならなくなつた。

彼女はまだこの大事件についてはアメデエに何にも話さなかつた。彼女は要心深く秘密を守つてゐるのだつた……その秘密を打ち開ければ必らず、二人の間に何かの變化が起らうとするに違ひない。新らしい愛情か……それとも衝突か？それを彼女は豫知してゐた。併しアメデエは本能的に、彼女の內部に深い變化が起つてゐることを感じた。そしてその原因が分らないので苛々してゐた。

一日一日と愛情は强くなつてゆくばかりだのに、彼女がサン・シュルピス廣場の住居を事務所として保存してゐるばかりでなく、毎晩彼のアパルトマンに宿つてゐないことが、彼にはどうしても分らなかつた。

第一、住居を二ヶ所に持つてゐて、小さなものを、たとへば、着物とか、下着とか云ふやうなものを探すにも、絕えず行つたり來たりしなければならないことは、不便であつた。……彼女の住居は彼女の事務所とも、彼のアパルトマンとも決つてはゐなかつた……彼が殊に辛らく思ふのは、せつかく彼女の聲をきいたり、彼女を愛撫したり、彼女の美しい腕の抱擁を樂しみにしたりして外から歸つて來ても彼女が家にゐないことであつた。そして彼女が傍らに眠つてゐない夜は、彼にとつて堪え切れない苦痛になつて來た。

結婚をすれば、二人はもつとしつかりと、もつと完全に一緖にゐることが出來る。併しいくら彼がそれを願つても、彼女はいつも『もつと後で！もう少し待つて！』と答へるばかりだつた。それにしても何故彼女はラスパイユ街に決定的に住むことに同意しないのであらう？ダンヴオア婆さんへの氣兼ねか？それとも近所の蔭口を恐れてか？でもそんなことを氣にする彼女ではないのに！

ある時、たう〳〵アメデエの不滿は爆發した。二人はまだ寢坊をしてゐた。その時アニックは不意に掛布團をはね退けて起き上つた。

『さあ大變！新サロンの招待日に行くことをルウソオとお約束したのに……』

『役人達の行列を見るのが面白いかね？』

『えゝ、それに「戰後」といふ二枚の繪の前に立つたあの人達の顏が見たいのよ。十一時にチユイルリイに行かうと思つたら、私、着換えをしに行く時間しかないわ、入口で待ち合ふことにしませうね？子供達が小舟を浮べてゐる大池の處で……』

彼は不精無精同意した。

『こんな二重生活をしてゐるものだからかう云ふ無駄な努力を拂はなけやならないんだ！若し僕達が結婚してゐたら、どれ程便利だか知れないのに！』

『だつて私、結婚した爲に私達の愛情がこれ以上增すとは思へませんもの……』

『それや勿論さ、だが僕達はもつとづつと落ついてゐられる』

『貴方はこのまゝの生活を幸福にお思ひにならない？』

『だが結婚すればもつと幸福になれるだらう……』

彼女は、彼がまだ不機嫌にぐづ〳〵してゐる寢臺の傍に歸つて行つた。そして彼の兩肩をつかんで笑ひ乍らゆすぶつた。

『ブルジョア！惡いブルジョア……』

彼はぶつ〳〵言つた。

『貴女は眞面目ぢやないよ…よく話さうぢやないか。僕が、結婚と、その社會的價値について全然貴女と同じ考へであることは、貴女も知つてゐる筈だ！僕は何もブルジョアのやうに法律で貴女を束縛しようとするのではない。』

『ならそれでいいぢやありませんか』

『いいとも、それやいいとも、それや分つてゐるさ…そして僕達が、法律上の認可がなくても完全に結合してゐることも認めるし、僕達の幸福は僕達が欲するだけ長く續くことも知つてゐる…』

『それだのに？』

『それだのに、僕達が僕達の愛の深さと同樣に永續性にも確信を持つてゐるのに、貴女が公に僕の妻になることが何故いけないんです？結婚したからと言つてこれ以上愛情が增すものでないことは勿論だが、併し僕達はもつと一緒にゐられる…』

『ほらまた！』

『貴女は未來の社會の生活をもつとよくする爲に働らきたいんでせう？それならまづ僕の生活をもつと簡便にすることから考へて下さい。未來の爲に働らく、それは分つてゐる。だがそのために現在を複雜にしないやうに氣をつけなければいけない。』

『貴方の幸福のためには、私がジャクマン夫人と呼ばれることが必要だと、貴方は思つてゐらつしやるのね？ブルウサ夫人とゼロノフを御覧なさいな。あの人達はあのまゝで幸福なんですよ』

『あの人達のことなんか比較にはならないよ。あの人は未亡人で、その上五十歲にもなつてゐるぢやないか！ミッシエルだつて（彼は肩をすぼめて）第一、藝術家だし、それにロシヤ人だしさ…さうとも、僕には、僕の幸福のためには、僕達が並んで同じ道を、同じ步調で步いてゆくことが必要なんだ。貴女は獨身の靑年のやうな生活を實行してゐるし、またその生活をあらゆるものに受け容れさせてゐる。だがいまの時代では、いまの社會ではまだ、少くとも外見上社會法則に從はないやうな若い娘達は墮落…』

『それは因習ですよ！そのくせ、その墮落娘達が夜更けの街をうろつきまわるのを咎めようともしない因習ですよ！』

『それやさうだ。併し因習といふものは、何んて言つたつて人間が食べるパンだし、呼吸する空氣なんですよ！…貴女自身だつて二十四時間の間にや五十もの因習に從つてゐますよ。貴女はそれに喜んで服從してゐます。そしてそれに氣さへつかないんです！…たとへこのパンが美味しくなくても、もつと健康な空氣が他にあるにしても、貴女だつてこのまゝのパンと空氣とを他の人達と同じやうに食べて呼吸してゐるんです。それでも貴女は病氣にならない！結婚は僕達の間の形式に過ぎず、而も僕達の生活をより以上、並行的にする利益があることが分つてゐるのに、貴女は何故それがいけないと思ふんです？』

彼女は眞面目になつて彼の言ふことをきいてゐた。彼はまたつゞけた。

『若し貴女がほんとに僕を愛してゐるなら、僕の家に來て住み、僕の仕事を助けてくれることを拒む筈がない。僕の名だつて貴女の名として不名譽な名ぢやないと思ふが！』

彼女は尙も冗談にまぎらして、その話を避けようとした。

『ぢや貴方のお母樣に伺つて御覧なさいな。私が自分の名前のまゝでゐる方をお好きではないかつて！』

二人が知り合つてから始めて、彼は怒つた。
『お母樣のことなんか放つときなさい！僕は僕の家の人達の意見なんか、社會の僞善同樣齒牙にかけてやしません。いまは只貴女と僕だけの問題ぢやないか。貴女の社會改造の思想、未來の幸福の思想が、頭の中の理論に過ぎないか、或はそれが……』
彼女もむつとして答へた。
『もう澤山！だけどそれや問題が違ひます。私は結婚したくないんです。何故なら私は貴方と同等でゐたいからです。そして私達の實例で、完全に結合した生活をするためにその結婚といふ形式が、不必要であることを證明したいからです……』
『結合した生活だつて！貴女にはよくそんなことが言へる……それに完全にだつて！貴女は氣むづかしくはないよ！たとへばだね、一昨日の晩だつて三つも會合をすませて、疲れ果てゝ歸つて來たのに、マダムはお留守！朝、自分の處に仕事があるんだといふ口實で。もう一つ例を上げれば、たとへば今朝だつてもう十時になつてゐるのにこの通りサン・シュルピスまで飛んでゆかなければならない……ばかばかしい。それより他仕方がないんだ……若し貴方が本當に僕を愛してゐたら……』
『若し私が貴方を愛してゐたら？』
アニックの顏はやさしくなつた。この最後の言葉だけが彼女の心にふれたのであつた。互に張り合ふ二つの主我主義、相對峙する二つの意見は消え去つて、愛する男の前に、愛する女が向き合つてゐるに過ぎなくなつた。
待つてゐらつしやい。若し只それだけのことなら、どうにかうまくなりますから』と彼女は言つた。
そして冗談らしく儀式張つたおじぎをして言つた。
『若し私が結婚をお斷りするとしても、近いうちに、私の衣裳簞笥を引越しさせることなんかお斷りしませんわ。そしてはつきりと貴方の家の……主婦になることだつて！それに……』
『それに……』
だが、彼に促がされても彼女は默つてしまつた。……そして彼が機嫌を直さずにはゐられない程強く抱擁して、すばやく戸口にかけ出した。
『後でね……今朝、もう時間がないから』
彼等がサロンに行き着いた時は、もう役人達は立ち去つた後で、會場には招待客達が半分ばかり詰つてゐた。その中にはいつも定連で、顏見知りの大將等も來てゐた。畫家達や、その家族達や、職業的或は臨時のモデル達は、自分達の畫の前に塊つて寄り集つてゐた。物見高い人には氣に入つた畫の前に黑山のやうに集つてわいわい言つてゐた。
『何にも見えやしないわ、それにこの暑さつたら』とアニックが言つた。
『見るために招待日なんかに來やしないよ。見られるために來るのさ』とジヤクマンが批評した。
『ほらまた始つた！』
その時ゼロノフの長軀が突然、彼の緋色の奇妙な建築の畫の前に集つて、呆れ返つてゐる群集の中から拔け出て來た。彼はジヤクマンとアニックを見つけて、
『あちらへ行きませう。ばかばかしい批評ばかり聞かされるんで

ね』と上機嫌で言つた。

事實、そこには憤慨した罵聲を他にしては、これ程大膽に新奇な光景に對する寧ろ疑惑の沈默があつた。また一方には眞に感嘆するもの、或は感心したやうな風を裝はふ者、或は危險な批評をすることを恐れてゐる者等もあつた。

『ルウソオの繪を御覽でしたか？」

『いいえまだ。いま來たばかりなので……』

『驚ろくべきものですよ！……まあね、何んといふことだか！……ヴイルフオは通りすがりに嫌惡に堪えないといふ風に顏をそ向けましたよ。作品をも、作者をも見ないやうにね……いまにきつと美術學校の校長は變りますよ』

「戰後」の室に近づくにつれて、雜踏はひどくなつてゐた・……そして喧ましく贊否兩方の批評で湧き返つてゐた。ルウソオの名は間投詞や笑ひ聲の間を流れた。未完成の三幅對は——始めの二枚、メルカンチスとヂナンドルだけが、苛酷な諷刺を示してゐた——まるで爆彈のやうに、この招待日の群衆に驚ろきと敵意とを破裂させてゐた。ルヴソオの友達さへも、非難の面持ちで、ある人々の誹謗と、また他の人々の悲觀的批判との前に沈默してゐた。

群衆は——全くの虚構だが、併し眞實として擴まつた——噂さを喋り歩いた。それはルウソオがこの前の有名な三副對『將軍の群れ』をデンマークのアマタアルに三十萬法でドイツの商人を介して賣つたばかりだ。といふのであつた。このニユウスは忽ち有名、無名の畫家仲間に羨望の渦をまき起した。

『淺墓な！』とゼロノフは呟やいた。

只ルウソオの熱心な弟子達數人が、聲高に同感の意を表してゐるのみだつた。アニツクとジヤクマンは一目見るや、メルカンチスとヂナンドルばかりではなく、未完成の三枚目の大膽な楕圓形の線や生まの色で描かれた略圖にさへも非常な感激を覺えた。

メルカンチスの濃色の部分には豚の腮や、新鮮なバタ色の頭や、サンボクツクな腹が描かれてあり、淡色の部分には貪食鳥の嘴や、好色獸の顏等が描かれてあり、下等な享樂者達があらゆる狂暴を行つてゐる光景が描かれてある。眩ぶしいばかりに明るいレストオランには、酒や、肉や、コロツケや、豐富な果物や花の間に、うすものの下に裸體を透かした女達が卓子に就いてゐた。彼女達は晝を欺くばかりの電燈の光りを受けて、デイアマンや眞珠でキラ〳〵輝いてゐた。その前面には跣足で蓬頭の兵隊の群れが暗闇から出てくる。狂暴な眼と拳だ。年齡も分らないやうな男と女、子供は痩せ衰へて口を開けたなり、互に押し合つてゐる。……淫佚な明るい畫面の上には、血みどろの雲が描かれてあり、その雲の中に焔々と火が燃え立ち、高い煙突が幾本も突つ立つてゐるのが見える。怪物のやうな大砲が、眞黑な煙を吐き出し、そこから畫面全體に、褐色の蝶々のやうに、燒け殘つた紙幣が落ちて來る……

ヂナンドルにもやはり、熱狂的亂舞の中に、戰爭中巴里で行はれたあらゆる破廉恥な行爲が描かれてある。卽ち工場も、病院も、ホテルも、婦人の化粧部屋も悉く開放されてゐる。畫面全體が無數の灯火にかゞやく一大ダンシングに過ぎず、そこでは短かいスカートの女達が、あらゆる人種の、あらゆる國の軍服を着けた男達とごた〳〵にまざり合つて踊つてゐる……右側の玻璃板で區切られた片隅には、死と生が、並び合つて互にその嚴然たる存在を示してゐる。彼等は手を組み合せて、一つは瞳のない眼窠をみ開いて他は盲目の

眼をみはつて、奔流する本能のどよめきを、音樂によつて痙攣の活動のやうに搖り動ごかされるこの肉體と肉體の錯亂を、見つめてゐる……その上部全體は灰色の壁の、門戸を固く閉ざした建物と、ぼやけたラムプの光りだ。これが兵營だ。中央の戸口から裸體の賣春婦の群が蒼白い、家畜の群のやうに現はれ、多くの兵士の群を足下に踏みつけてゐる。

最前列にゐた見物人中のごま鹽頭の婦人は怒つた七面鳥のやうな聲を立て乍ら、羽飾りのついた帽子を振り立てた。それはサン・ヴアランタン夫人で、一緒にゐたシモン・ルルダルも赤くなつて憤慨しながら彼女に同意の溜息を吐いてみせた。

『汚らはしい!』と尖つた聲が叫んだ。

アメデエは戰慄を感じた。彼は聲色でそれがモルヴァル氏であることを知つたのだ。アニックはモルヴァル氏と同時に、ルボオの年とつた情婦をも見つけた。モルヴァル氏は背の低い、髯面の肥つた熊のやうなレイクメイヤアの同意を求めた。

『ねえ君、君の蒐集はルウヴル美術館のものにも匹敵する程のアマタアルだが……』

『あんなことを言ふ!十枚のまやかし畫より一枚の眞の寶ぢやないか!』とゼロノフは呟やいた。

『行かう』とそんなことには頓着しないアメデエが言つた。アニックは丁度空腹を感じてゐたので、うなづいた。

『だけど貴方の養父樣の、ばかばかしい御意見を伺ふのも面白いと思ふけど』

モルヴァル氏はレイクメイヤアの腕を摑んで激しい口調で言つた。

『若しフランスがこのまゝで行くなら、もうおしまひだ。而も恥づべき末路だ!』

『それや貴方の思ひ過ごしかも知れませんよ』と、廉賣大百貨店の經營がうまく行つてゐるレイクメイヤアは樂觀的だ。

『いやいや!これが國家の運命だ。放らつに滅ぼされるといふのが!昔だつて――いつでもさうだが――ロオマがさうだつたぢやないか?……ロオマ人……世界一强い、世界一偉大なロオマ人!それを征服したのはなんだと思ふかね?武器?いいや、それは放らつだつたのだ!放らつは衰亡の母だ』

『勿論ですな』

『タシイトとジュヴエナルはあんまりいい豫言過ぎたのだ……』

『併しあの人達はまた幾人ものルウソオを持つてゐましたよ。そして常に畫で時代を語つてゐたのです。だから彼等の描く風俗は正確だつたのです』

『勿論』

『で、たとへばルウソオのやうに、全生命を打ち込んで藝術に精進してゐるやうな場合でも、その畫が實際に似てゐるといふ點で直ちに非難されなければならないでせうかな?その畫が眞面目なものであれば、その勇氣を稱讃すべきだし、若しその畫が中傷的なものであれば破いてしまへばいいんではありませんか!』

『中傷的であれ、眞面目であれ、同じ危險があるんだ!世間には口に出して言つてはならないこともあるものだ。ともかくも、かくの如き彩色の下に祖國を表現する等といふことは國賊的仕業だよ!』

『それが眞實を描いたものであつても?』

『眞實であればなをさらだ!外國人を君!君は外國人のことを考へ

ないかね！…外國人は吾々に對してどう考へると思ふかね？若し吾々が吾々の缺點をなくすことが出來ないにしても、少くともそれをかくさうぢやないか。ルウソオ氏は、惡いフランス人だよ。』

『多分彼はボオランド系の猶太人なのかも知れませんね』とレイクメイヤアもつり込まれて聲を落して言つた。

『モルヴァ樣の仰有ることはいつも御尤もですわ』とシモンヌ・ルルダルが横合から猫撫で聲を出した。

　彼女はレイクメイヤアの手先で、彼がレヂヨン・ド・ナアル章を受けるために方々の大臣達や大官連に運動してゐた。その代償として彼女はラッペル紙のための補助金と、彼の經營する大百貨店から無料で品物をとることにしてゐた。彼女は勿體らしくサン・ヴアランタン伯爵夫人を紹介した。モルヴアル氏は、彼女の耳飾りと襟卷とをチラとみてから頭を下げた。そして話相手が増えたので一層いい氣になつて喋り出した。

　第一、正確なんてことは問題ではありません。只藝術が問題なんだ…そのことは寧ろルルダル夫人にきいて見給へ。では藝術とは何か？…一つの理想化さ…かくしておいた方がいいものを、同じ發露するにしても、もつと理想化してやることさ、たとへばシモンヌ夫人の美しい裸體畫です。あれには快樂と惡とがいかにも精神的に表現されてゐる…。』

　ルルダル夫人はいかにも謙遜な身振りで

『おゝ！』と言つた。

『さうですとも、さうですとも！全く愉快なそして感動させられる畫です。ところがルウソオの裸體畫は――御覧なさい！――嫌惡を感じさせる程亂暴に描かれてあります。この描き方つたら、君！社會的利益の立場…これが問題だ』

　レイクメイヤアは、自分自身の利益から見れば、モルヴアル氏に逆らはないことだと思つた。その間にシモンヌ・ルルダルが伯爵夫人をはなれて他の友達の處に行つたので彼はモルヴアル氏に囁やいた。

『社會的利益に就て、是非貴方に申上げたいことがあるんですが…若し貴方の、奥樣がおはじめになつた『夜の宿』の御事業に、その分身として『民衆食堂』を附隨させることが出來たら奥樣は何んと仰有るでせう？私と私の友人數名で、その資金を出しますが…私はそれ程いい…』

　彼は横目でチラとモルヴアル氏の骨張つた顔をぬすみ見て、ひそかに北叟笑んだ。『うまいぞ！…』その癖も彼は、自分の蒐集をルヴアルに寄附するといふ約束と共に二萬五千法を友人を通じて商務大臣に贈つたばかりだつた。そしてまた二十萬法を『民衆食堂の爲めに犠牲にする。それでまだ、手に入れるまではおちおち眠むれもしない『この惡魔の勳章』を、若しも射當てることが出來ないとすれば、全くばかばかしい話だが…。

## 文藝戰線叢書

第一篇

同志山本勝治は自殺した！

何の爲に？それは同志山本勝治だけが知つてゐることだ。しかしながら、此の小說集の中には、その一端が書かれてある…………

同志山本勝治は、新聞配達であつた。彼は又、ボクシングの先生だつた。沖仲士であり又、熱心なる農民運動家であり、同時に、アクなきドンヨクなる資本家を憎めるところの一人の革命作家であつたのだ。

同志山本が自殺した日、一九二九年三月十七日は、彼の屬する新聞勞働組合と、岩月監理所（東京朝日新聞）との爭議の丁度三日目であつた。

彼の血に染つた組合旗は勝利の唱にゆれた。そしてその血によつて書かれた小說は「文戰叢書」第一篇として本になつた。我々は此の一卷を、日本の無產階級にさゝげる。そして、同志山本勝治の生きてる心臟と共に進んで貰はう！

# 婦人彙報

### ◇モダン托兒所宿泊所落成

東京市社會局昨年一月から本所區入江町に建築中だつた江東橋宿泊所並に托兒所兒童相談所が落成し、二月十七日から開業、宿泊所は、總建坪四百七十四坪餘、鐵筋コンクリート四階建、工費十五萬六千三百圓で收容人員二百九十五名一日宿泊料十七錢である。托兒所兒童相談所は鐵筋コンクリート二階建、總建坪百七十四坪、工費四萬七千四百九十一圓、何れも非常に明るいモダン風で、簡易食堂が附屬てゐる。

### ◇脚氣の病源は細菌

大森憲太、島薗順次郎博士等によつて、我國民を蝕みつゝある脚氣病源は、白米常食より起るヴィタミンBの缺乏のためであると鮮明されてゐたが、その療法は判然とせず、明治四十一年初めから脚氣調査會が設けられ研究中だつた。所がこの程、千葉醫大の衛生學教授松村泰博士が、脚氣患者の糞便中から脚氣菌を實驗證明し、これを脚氣の病源體と學界に發表した。爾來一昨年春から昨年の夏にかけ臺灣南支那沿海地方、佛領印度支那、南米ブラジルの土民並日本移民その他に至るまで、苦心調査し特に白米食の習慣と脚氣の傳播流行に關する觀察をとげた結果、一層確證を得近く歐米の學界に發表する事になつた。尙脚氣に白米常食者が罹り易いのは、白米食が脚氣菌感染の素因の一つを構成するにあるさうである。

### ◇パンカースト夫人の銅像建つ

英國婦人參政權運動の先驅者パンカースト夫人死去後夫人の銅像建設運動がなされてゐたが、その銅像除幕式が二月六日午後一時半よりヴィクトリア公園に於て、前首相ボールドウィン氏の手によつて行はれた。

### ◇解放運動の血の三月

解放戰線に於て三月は「血の三月」として殊にいろ〳〵の行事が多い。ざつとあげて見ても、

三月一日、「朝鮮獨立萬歲事件」、一九一九年朝鮮最初の民族運動、日本帝國主義を倒せと叫んで京城その他に於て一大デモを行ひ、多數の死傷者を出した。

三月二日、一九一九年、勞農ロシヤに於てコミンテルンの結成された日。

三月五日、勞働運動絞殺法治安維持法の改惡された日、尙革命的代議士山本宣治凶刄に倒れた日

三月八日、國際無產婦人デー、ツアル專制政治の下に飢ゑたるロシヤ婦人が、一九一七年戰場より夫を返せ、食を與へよ、と街に流れ出で革命の口火を切る。

三月十五日、第一次日本共產黨員大檢擧さる。

三月十八日、パリコンミユン紀念デー、フランス革命の折、最初の勞農獨裁政治が一時にても施かれた。

同　國際赤色救援會設立される

### ◇海外に就職探し

資本主義發展の必然的原因を濱口內閣の緊縮政策から、加速度的に失業者が增大し、最近發表によれば、既に三十一萬と云はれてゐる。東京に於ても食に飢ゑた失業者が屢々暴動的に紹介所や市役所に押しかけ、知識勞働者の失業も今や社會のガンになりつゝあるので　東京市では一策を案じ、中米南米諸國の日本人俱樂部や事業主に對し、堀切市長の名で就職依賴狀を發してゐる。たゞ海外に於る就職希望者について、外國との交涉になるので外務省の關係など面倒くさい手續があり、實際に當つて「呼寄狀」を簡單に取り寄せる事が至難なので、社會局職業課では考究中である。

### ◇東京小學校の怪現象

每年東京市內の小學校に入學する學齡兒童は約三萬五千人程あるが、不思議と六學年卒業頃にはいつも約三分の二に減つてゐる。今年も小學校を卒業する兒童は二萬七千七百九人であるが、入學當時は三萬四千五百七十二人あつたので、つまり六ケ年間に六千八百六十三人減つた譯である。この中途退學者の多いのは、東京市の小學校に限られた怪現象であり、その裏には、僅かの金で賣られて行く事實がひそんでゐるらしいので、來學期からこの中途退學者の行先について、調査機關を設け、人身賣買の犧牲者があつた場合には極力救濟する方法をとると。

### ◇東京市計畫の社會事業

東京市社會局では十ケ年計畫で七つの社會事業を計畫し、五年度から組織準備に着手する事になつてゐる。第一は東京市從業員の爲の共濟組合の組織で、現にある市電從業員の共濟組合をも含め、約十五萬人を有する一大共濟組合である。第二は、全市民のための金庫制度の設備で、これは市民全部を會員とし、會員が、一ケ月三十

錢位の負擔で、いざ病氣といふ時には同金庫が醫薬代を提供する制度、第三は、プロレタリヤ階級の金融機關として公設質屋その他があるが、一層簡單に金融をはかるため半官半民の庶民銀行の設立、第四は失業保險制度の完全等であるが他の三つには、健氣な兒童の表彰法も計畫されてゐる。

**◇インド自治派英國と對抗**

多年印度獨立運動に盡瘁のマハトマ・ガンヂ氏は、全印度國民會議の議決に基きいよ〳〵三月二日インド總督アーウイン氏に對し最後の通牒を發した。右最後通牒は、若し此要求が入れられない時は、斷然自動的に對英非軍事反動を起さんとするもので、八日間の期限を附し要求は右の通りである。

一、完全なる禁酒法の實施、二、地租收入の五割減その課税を議會の協贊事項とする事、三、鹽税の廢止、四、軍事費の五割減、五、高級官吏の俸給五割以上の削減、六、外國綿布に對する保護關税實施、七、政治犯人全部の釋放、八、印度人追放者の國內歸還の許可、九、刑法中より煽動的集會に關する條項の削除

**◇小學校の教員減俸**

一時喧ましかつた減俸問題が、昨今漸く鳴りを靜めたが、北海道廳が市町村財政窮乏を名とし、小學校訓導初任給五圓減を決定した。小學校教員減俸については文部省では否決的方針をとつて來たのであるが、北海道廳に於て、その導火を切つたので一般に再燃して行くであらうと言はれてゐる。

**◇無產黨合同再燃**

第一次普選總選擧の素張らしい無產黨進出が豫想されたが、當選率が一層低下し、五人しか當選しなかつた。それは要するに各無產黨が少黨分立してゐるからで、無產黨合同なしには到底支配階級の抗勢に斗爭出來ないとて、東京無產黨の堺利彥氏等が音頭をとり、合同を提唱してゐるが指導理論の固執から、あまり樂觀が許されてゐない。

**◇パリから女流飛行家來朝**

ロシヤ生れの有名な女流飛行家でフランスにゐるルナペルンシユタイン孃はパリ東京間一萬六千キロメートルを女の身で乘り切らうと目下遞信省に日本領土內飛行許可の申請方を問ひ合はせて來た。我航空局では正式願書の提出あり次第航空路を指定して許可する方針だが、聞く所に使用機はフアルマン百九十號機（單葉サルムソン二百三十馬力發動機裝備）でコースはパリから中央アジア經由インドに出て南方空路をえらぶ由因にベ孃はまだ本年二十二才である。

**◇帝都復興と共に飛ぶ首**

陽春三月を以て帝都の興復は完成し既にお祭り騷ぎの準備おさおさ怠りないが、六ケ年餘人柱の如眞實に働いた人々が皮肉にも失業苦に喘いでゐる。現在復興局には二千人位の人員が働いてゐるが完成と共に殘務整理として六百名位殘り、東京市では復興事業に關係した復興事業局と土木局の四千七百名中現在まで殘つてゐる二千人が失業する事になつてゐる。この失業救濟の爲に市では就職斡旋委員會を組織して運動中だが、效果はあまり芳しくない。

**◇博士濫造にお叱り**

最近學位請求者はあらゆる奸手段を弄しても榮冠をかち得やうとし中には恩師の研究のものをそのまゝ提出したり、他人の研究した主要の所を失敬したり、官廳の調査報告を繼ぎ合はせただけのでお茶を濁したゞ情實のみに依る傾向が濃厚になつた。それで文部省では學位の權威を高むる爲々國官廳公私大學に警告を發すると共に學位令の改正を行ひ且博士論文製作の內幕調査中だが博士の粗製濫造は醫學界に最も甚しく、現在醫學博士三千七百七十四人で昨年の如きは四百九十五人を出してゐる。

**◇共產黨示威**

失業の増大化は資本主義のガンと言はれてゐるが三月六日から七日にかけてロンドン、ドイツ、アメリカに於て失業救濟を要求する共產黨の一大示威が決行された。ロンドンに於ける六日午後の共產黨の示威運動は一九二六年の總罷業以來の大騷動で、二十名の先頭を切つた婦人は、襲ひかゝる警官と衝突し騎馬巡査の一隊が群衆に馳け入つたので多數の負傷者を出した。ドイツベルリンに於てはロンドン、パリと呼應し、やはり警官隊と黨員の衝突が隨所に起り、殊に失業者の執拗なる亂鬪と警官隊の一齊射擊で兩方から多數の死傷者が出、ニユーヨークに於てインタナショナルを高唱した群衆が市廳を目がけて行進を開始、漸次暴動化せんとしたが、軍隊及消防夫の出動で間もなく沈靜になつた。だが右の衝突の結果共產黨員の頭株が數名檢擧され、警官隊は群衆の示威を解散せしむべく催涙ガスを使用し共產黨側から多數の負傷者を出した。

## 編輯後記

三月が來た、三月が來た――三月が來たと繰返しつぶやいて遙かなる空へ目をやる。人はみな悲しい、陽光はなごやかに、微風はやはらかくなでるに何となく悲しい。大地は生れ出るものの呻吟に、空はほろびゆくもののなげきに充滿してゐる。だがそれは心が感じるのだ、見る目には樂しいのどかな春よ、玲瓏たる陽春よ、花は赤い、柳はみどりだ。人はみな、心のうづきをかくして笑ふ、私もいま心のなげきは心の奧深くにまかせ、自分自身のたいだな根性と戰かはなければならない、生てゐるうちは敢然と信じた道を歩ゆまう

充實した三月特輯大好評のあとをうけすこしでも見おとりがしてはならないと編輯一同緊張努力した結果は例月とは稍型を破つてゐるつもりである。假令一歩づつでも毎月進歩のあとを示してゐるとすれば數年をまたず、女性は怖るべき進出を示すと信じてゐる。此時にあたつて自らのみを高しとする宣傳は愼しまなければならない。この全女性進出の一大氣運を女性自ら傷つけてはいけない。本誌を支持する愛讀者女人聯盟員諸氏の健やかなる判斷に訴へて女人大衆の團結を力強く、聲高く祝福しよう。(時雨)

もう四月が來るんだとはどうしても思はれない。寒い、實に寒いやつと雨が晴れたと思ふと、朧月夜の代りに凍りついた樣な半月が出る。世間は透通つた樣に晴れて氷の樣な風だ。だのに雜誌だけは春風の四月號。私達はいつでも一足先を行く。又冬が來て日が短くなつたのかしら等と呑氣にかまへてゐて今日は馬鹿な失敗をしてしまつた。白狀するのも惜しいが、夕方の大切な一時間を間違へて學校へ行きそこなつた。うまく一時間サボりましたねと先生に皮肉を云はれたが停車場の大きな時計をみる迄氣が付かなかつたのだから自分でも感心してしまつた。(優子)

太陽の黑點のせいだらうと思ふんだけど二月の末には西南の風がそわそわと街路を走つて、「外套をぬいぢやわないか君、」おぼろ月夜の左內坂沈丁字の匂ひが鼻をひこつかせる。三月になつてから斷然太陽の無い街で、さむざむとみじめな雨が降りつづき、足の小指の霜焼が靴と性が合はなくなつていたい。春空が歸つて來て星がまたたけばピンと凍つた冬の夜、一體ほんとはどこなんだ。一週間目の春空で一時間ぢやない」「まだ五時十五分前」「いやに暗いぢやないの」寒いから太陽まで逆もどりして日が短くなつたのかしら、のんきにかまへて優子さんと二人締切りの日のせはしい中をアテネへ出かけると、停車場の時計が六時すぎ――ウマクサボリマシタネ――先生に皮肉られて、口惜しいなア人の氣も知らないで、優子さんと二人で登つてくる左內坂の歸りはいつもより足が重いや。(みどり)

しめやかな春雨に、草木はぐんぐん伸び、都の森を織らうとしてゐます。やがて櫻もほころび、仄かな香に醉はされる事でせう。寒い風が時々吹き返しても、時節は爭はれないものです。總てが輕快に躍り出す時、皆さん足並揃へて一大飛躍を試みやうではありませんか。根まで沁み通る雨、長閑な陽光、私は何がなし數へられます。あらゆる養分を吸收し消化させねばならない事を痛切に思ひます、懸命に勉強しなくてはと力んでゐます。總ての點に於て私はもつと〳〵「女人藝術」の大きな愛に同化しなければならないと感じさせられます。(美智子)

四月はお花見の月である。花は美しく、櫻の散る風情は見事だ。だが――春風駘蕩は昔の本の事、さ綠の風の代りに新波亂しのぢやり〳〵風が吹きまくる。一週間お天陽樣が顏を出さないと飢餓に瀕する恐ろしく適切な人間が街頭におほれ出れば、一方ではすでに彈丸除けに利用する準備が着々すゝんでゐる。北京の動亂のとき暫壕の中に銃を構へてゐる丈で半數は氣狂ひになつてゐたといふ。この慘忍な戰爭の實際をまざ〳〵聞きながら、私たちのお花見は自ら別のものでなければならない。(素子)


昭和五年三月十五日印刷(毎月一回一日發行)
昭和五年四月一日發行

送料一部壹錢五厘

| | | |
|---|---|---|
| 定價 | 1部 | 40錢 |
| | 6部 | 2.40錢 |
| | 12部 | 4.80錢 |

□誌代の拂込みは成可く振替利用をこふ
□郵便切手代用は一割増の事。

發行兼印刷者――長谷川時雨
編輯者――素川絹子
印刷所――秀英舍
大賣捌――東京堂・北隆館――大東館・東海堂

發行所 東京市牛込區左內町三十一番地 女人藝術社
電話牛込(24)一七八九
振替東京七五八二五

# 血となり肉となり强壮なる體軀を作る

……その總ての有効成分は悉くポリタミンの中に含まれて居ます。

貧血、衰弱、肺結核、

精力の減退、虚弱兒童

神經衰弱、疲勞に

醫學博士三百餘名推奬

# ポリタミン



發賣元

株式會社 武田長兵衛商店

大阪市道修町

29—362(N)


品質日本一
上
ヤマサ醤油
味覺に訴ふ